

ピクニック・アット・ハンギングロック

ジョーン・リンジー

2012.3.9 初版公開
2019.2.25 最終改訂

★本作は、2018 年 12 月、新訳が創元推理文庫で上梓されたため、こちらは旧訳ということになった。新訳には教えられるところがたいへん多いのだが、見解を異にする部分もあるようなので、こちらそのまま公開しておくことにした。ただし、新訳と対照し、原文を見直した結果、こちらの誤訳であることが明らかになった箇所については、気づき次第訂正していくつもりである。

『ピクニック・アット・ハンギングロック』が事実なのか虚構なのかは、読者が自ら決めなければなりません。この運命的なピクニックは一九〇〇年に行われたため、この本の登場人物は皆ずっと以前に死んでいます、それはあまり重要なことではありません。

以下の人物の全員が、一九〇〇年二月十四日に行われた、ヴィクトリア州マセドンにあるハンギングロックへのピクニックにおいて発生した事件の構図に、多かれ少なかれ巻き込まれた。

アップルヤード女史……アップルヤード女学校の女校長

グレタ・マクロウ女史……数学の女教師

マドモワゼル・ディアンヌ・ド・ポワティエ……フランス語とダンスの女教師

ドーラ・ラムリー女史、バック女史……准教員

ミランダ、アーマ・レオポルド、マリオン・クエイド……上級生の寄宿生

イーディス・ホートン……女学校の劣等生

セーラ・ウェイボーン……最年少の寄宿生

ロザマンド、ブランシエ……その他の寄宿生

コック、ミニー、アリス……女学校の寮内職員

エドワード・ホワイトヘッド……女学校の庭師

アイルランド人トム……女学校の雑役夫

ベン・ハシー氏……ウッドエンドのハシー貸馬屋店主

マッケンジー医師……ウッドエンドの家庭医

バンファアー巡査部長……ウッドエンド警察署

バンファアー夫人

ジム……若い警官

ムッシュー・ルイ・モンペリエ……ベンディゴの時計屋

レグ・ラムリー……ドーラ・ラムリーの兄

ジャスパール・コスグローヴ……セーラ・ウェイボーンの後見人

大佐とフィッツヒューバート夫人……マセドン北部、レイク・ヴューの夏の滞在者

マイケル・フィッツヒューバート卿……イギリス出身の彼らの甥

アルバート・克蘭ダル……レイク・ヴューの御者

カトラー氏……レイク・ヴューの庭師

カトラー夫人

スブラック少佐とその娘アンジェラ……マセドンにある政府の別荘への英国からの訪

問者

クーリング医師……マセドン南部

それに、この本の中に姿を見せない多くの人々

本文中の※は原注（二箇所）、＊は翻訳者による注があることを示す。注は、参照する際の便宜を考慮して、できるだけ見開きの左ページ端に置いた。

1

その日はハンギングロックへのピクニックに最適であると、誰もが同意した。きりめく夏の暖かく静かな朝、蟬は朝食の間じゅう食堂の窓の外のビワの木から甲高い声を上げ、蜜蜂は車道を縁取るパンジーの上を飛び回っている。完璧に整備された花壇では頭の重いダリアが燃えるように咲きうなだれ、手入れの行き届いた芝生は昇る太陽の下で蒸気を上げている。庭師はすでに校舎背後の、中はキッチンである翼棟の影がさしている紫陽花^{あじさい}に水をやっていた。ミセス・アップルヤード女学校の寄宿生たちは、起床し、六時から明るく雲のない空を細かく調べ、今は興奮した蝶の群れのよう^{よう}に休日用のモスリン服を身に着けてそわそわと歩き回っていた。その日は、土曜日の、長く待ち焦がれた年一回のピクニックの機会であるというだけでなく、伝統的に手間のかかったカードと贈り物のやり取りによって祝われる二月一四日、聖バレンタイン・デーでもあった。それらは皆どうしようもないほどロマンティックで、差出人の名前は厳格に伏せられていた——恋にやつれた求愛者の無言の貢^{みつ}ぎ物だと言われているが、この期間中に微笑^{ほほえ}みかけられる男性といえはほぼ二人だけ、年配のイギリス

人庭師のホワイトヘッド氏と、アイルランド人馬丁ばていのトムしかいなかったのである。

女校長は、たぶん学校でカードを受け取らなかった唯一の人間であった。ミセス・アップルヤードは、復活祭になるまでずっと学校のマントルピースに散らかり、例年の表彰式と同じくらいメイドに余計なハタキ掛けを課す、聖バレンティンと彼の馬鹿げた挨拶状に難色を示していることがよく知られていた。そしてそのマントルピースときたら！ 長い応接間にある白い大理石製の二つは、校長自身と同じくらいどっしりした胸部カリアティッドの女像柱の何組かに支えられていた。ほかの、彫刻され、ねじ曲げられた木製のものは、たくさんのきらめく小さな鏡で装飾されていた。アップルヤード女学校は、一九〇〇年にはすでに、オーストラリアの叢林そうりんにおける建築上の時代錯誤なのであった。時代と場所に対する絶望的な不適応。不恰好な二階建ての建物は、黄金の発見に引き続いて、エキゾティックな菌類のようにオーストラリア中に建てられた手の込んだ家々の一つであった。樹木がまばらで平坦な、山の麓ふもとにうずくまるマセドンの村から数マイルの土地の、特にこの範圍が適当な建設用地として選定された理由など、もはや誰にもわからないだろう。十エーカーの土地の背後の斜面下に連続する複数の浅い池には、ささやかな小川が曲がりくねって流れ込んでいるのだが、それもイタリア風建造物の背景としてふさわしいという建築意欲への刺激をほとんど提供し

ていない。繊維状樹皮のユーカリのスクリーンを通して時折一瞥^{いちべつ}できる、道路の反対側を東へと隆起しているマセドン山の霧のかかった頂上も、また同じであった。それでも、それは建てられ、時の破壊に耐えるために頑丈なカッスルメーン石が使われた。とうの昔に名前を忘れ去られた最初の所有者は、その巨大で見苦しい家が空き家になり、売りに出される前のわずか一、二年しかそこで生活しなかった。

広々としたグラウンド、野菜と花から成る庭、豚と鳥たちの檻^{おり}、果樹園とテニス用芝生コート。これらは、いまだにそれを管理しているイギリス人庭師ホワイトヘッド氏のおかげで、すばらしい状態にあった。美しい石の厩舎^{きゆうしや}には乗り物が数台あり、すべて手入れが行き届いていた。おぞましいヴィクトリア朝風の調度品は、イタリア直送の大理石のマントルピースと毛足の長いアクスミニスター・カーペットともども、新品同様であった。杉の階段上の石油ランプは古典的な彫像に支えられて高い位置に保たれ、長い応接間にはグラランドピアノがあり、さらに狭い螺旋^{らせん}階段で到達できる四角い塔には、ヴィクトリア女王の誕生日にユニオン・ジャックを掲揚することができた。かなりの量の金銭と、いくつかのオーストラリア名家への紹介状とともに、イギリスから新たに到着したミセス・アップルヤードに対し、ペンディゴ通りからじゅうぶんに離れて建っている低い石垣の背後の大邸宅は、たちまち深い印象をもたらした。

特価品には油断のない茶色の小さな両目は、その驚くべき場所を、若い女性のための、入学条件の厳しい、相応に金のかかる寄宿学校——カレッジならなおさらよい——にとって理想的であると見て取った。ペンディゴの不動産業者が喜んだことには、彼女は、彼女はその場ですぐに、庭師も含め、そのすべてを何から何まで即金割引で買い取って引越してきたのである。

アップルヤード女学校（田舎の無用の長物はすぐにこのように名を付け直され、それは大きな鉄の門の所の堂々たる板の上に金文字で書かれた）の女校長が、それ以前に教育分野でどんな経験を積んでいたのかは、決して明かされることはなかった。それはどうでもよいことだった。その個人的な野心と同じくらい厳格に抑制され秩序づけられた、高く積み重ねられたグレーのポンパドールと豊満な乳房、立派な胸の上に乗ったりと貼り付いた亡夫のカメオ肖像を持ったその威厳のある新参者は、親たちがイギリスの女校長に期待するとおりの姿に見えた。パンチ・アンド・ジュディから証券取引所の融資集めに至るいかなる企業形態においても、それらしく見えるということが勝利に繋がるがよく知られているように、女学校もいちばん最初の日から成功で、一年目の年末までには満足な利益を上げた。これが、この物語が始まる前のほぼ六年間に起こったことのすべてである。

聖バレンティンは好意に公平で、今朝カードを開くの忙しかつたのは若者と美人だけではなかった。ミランダはいつもどおり、ワードローブの抽出ひきだしをレース飾りの付いた愛のしるしで満たしたけれども、父親の大きく愛情のこもった手でクイーンズランドから宛てられた、ベビー・ジョニーによる自家製キューピッドと鉛筆で書かれたキスの列が、大理石のマントルピース上で最高位を保った。蛙かえるのように不器量なイーディス・ホートンも、少なくとも十一枚を計上して悦に入り、小柄なミス・ラムリールさえ、朝食のテーブルに「汝を永遠とわに慕わん」という献辞の付いた気味の悪い鳩を描いたカードを提示したのだった。それはおそらく、先学期に妹を訪問した極度に面白味のない兄からの言葉である。ほかの誰が、ずっと茶色のサージかきと踵かかとの平らな靴を身に着けているような、近眼の准教員を敬慕するものかしらと、うら若き少女たちは結論づけた。

「あの人は先生が好きなのよ」と、いつものように慈悲深くミランダが言った。「玄関のドアで二人がさよならのキスをしているのを見たわ」

*パンチ・アンド・ジュディ……せむしで鉤鼻かぎの道化パンチとその妻ジュディが登場する伝統的な人形劇。人形はグロテスクで内容はブラックだが、イギリスでは現在も屋外や劇場で上演され、人気がある。

「でもねえミランダ——レグ・ラムリーは『クソ面白くもない』ヤツよ！」青黒い巻き毛を彼女らしい仕草で振り広げ、学校の麦わら帽子が何でこんなに似合わないのかしらとぼんやり考えながら、アーマが笑った。十七歳の美しさに輝くその小さな相続人は、容姿に対するうぬぼれも財産家のプライドも持ち合わせてはいないのだった。彼女は美しい人や物を愛していて、目を見張るようなダイヤのブローチを着けるのと変わらないくらい大きな歓びを感じながら、一房の野草を自分のコートにピンで留めた。時々ミランダの穏やかなうりざね顔とまっすぐなコーンイエローの髪を見ることが、彼女に鋭く小さな歓喜の衝撃をもたらした。愛しのミランダは太陽に照らされている庭の外を夢見るように見つめている。「何てすてきな日なんでしょう！ 私、郊外へ出て行くのを待てそうもないわ！」

「みんな聞いて！ ミランダったら、アップルヤード女学校はメルボルの貧民街にあると思われちゃうわよ！」

「森」ミランダが言った。「シダが茂って鳥がいる……私の家みたいな」「それに蜘蛛」マリオンが言った。「誰かがバレンタインにハンギングロックの地図を私に送ってくれたらと願うのみね。そうすればそれをピクニックに持って行けるんだけど」アーマはいつもマリオン・クエイドの風変わりな意見に心打たれていたが、今回は、いった

い誰がピクニックで地図を見たがったりするのかを知りたがった。

「私は見たいわね」マリオンは正直に言った。「私はいつだって自分がどこにいるかを正確に知りたいの」幼少時に割り算の筆算をマスターしたと噂されたマリオン・クエイドは、容赦のない知識の追求に十七年の人生の大半を費やしてきた。ほっそりとした知的な顔立ちと、ずっと待ち続け、探し続けている何かを、いつも嗅ぎつけようとしているかに見える繊細な鼻、それに細くて速い脚のために、彼女がグレーハウンド犬に似てきたのも不思議ではないのであった。

少女たちはバレンタインについての議論を始めた。「誰かがマクロウ先生に、大胆にも小さな数字でいっぱいの方眼紙のカードを送ったのよ」ロザマンドが言った。実際は、そのカードはメイドのミニーによってそのかされたアイルランド人トムのも、面白半分に思いついた表現行為なのであった。上級生の少女たちへの高等数学の調達者である四十五歳は、乾いた承認をもってそれを受け取った。グレッタ・マクロウの目に入る数字は、薔薇や忘れな草よりもずっと歓迎できるものだった。数字の点在する一枚の紙の風景さえ、彼女には秘密の遊び——鉛筆の一筆二筆で整理され、割られ、掛けられ、奇跡的な新しい帰結へと再構成され得る方法を知っている力の感覚——をもたらすものだったのだ。トムのバレンタインは、彼は知らなかったが、成功であった。

ミニーに対する彼の選択は、薔薇の花々の中に埋め込まれた血の流れる心臓で、明らかに死の病の最終段階を表していた。ミニーは、こちらは一輪だけの薔薇が描かれた古いフランスの印刷物を受け取ったマドモワゼルと同じくらい、そのカードに魅せられた。このように聖バレンタインは、愛の種々相をアップルヤード女学校の寄宿者たちに思い出させたのである。

ダンスとフランス語会話を教えていて、寮生のワードローブの面倒も見ているそのマドモワゼル・ド・ポワティエは、歓喜の予感に浮かされて張り切って動いていた。

彼女は自分が出した指示どおり、シンプルなモスリンのドレスを着ていたが、広いリボンベルトとひさしの大きな麦わら帽子を加えることでうまくエレガントに見せていた。上級生の寮生をほんのわずかしか上回っていない年齢のため、長い夏のまる一日、息が詰まる女学校の日常から逃れられるという期待に生徒と同じように魅了された彼女は、最終的な点呼のために正面のベランダに集合しつつある少女たちの間をあらこちら走り回っていた。

「急いで、みんな、急いで。静かに、アーマ」マドモワゼルの軽いカナリア声が響いたため、プチ・アーマは何も悪さはできなくなった。その少女のなまめかしく小さな胸、えくぼ、真っ赤な唇、いたずらっぽい黒い目、それに艶のある黒の巻き毛は、美の飲

びの汲めども尽きぬ泉だった。大きなヨーロッパの美術館の間で育ったそのフランス女性は、時々、薄暗い教室で机から顔を上げると、サクランボとパイナップル——天使と金の甕^{かめ}——を背景に、ヴェルヴェットやサテンの衣服に身を包んだエレガントな若者たちに囲まれた彼女が見えるような気がしたものだ……。「静かに、アーマ……。マクロウ先生がいらつしやいます」暗褐色のコートに包まれたひどく痩せた女性の姿が、ベゴニアに縁取られた離れ小径が続く大地のクローゼット、屋外の^ダニー^ニから姿を現した。その女性教師は、いつもの整然とした、王族のように遠慮のない、ほとんど女王の威厳をもった步調で歩いてきた。彼女が急いでいる姿や、またその鉄縁の眼鏡を外している姿は、誰も見たことがないのだった。

グレタ・マクロウが、マドモワゼルを助手として今日のピクニック任務を引き受けることを約束したのは、純粹に道義心からだった。輝かしい数字者——カレッジでの薄給仕事に甘んじるにはあまりにも輝かしい——である彼女は、どんなに好天であっても、この貴重な休日^を、その魅力的な新しい微積分の論文とともに自分の部屋に籠もって過ごすためなら、五ポンドを支払ってもよいくらいだった。乾いた黄土色の皮膚と、無精な鳥の巣のように頭頂に載った荒い灰色の髪を持つ長身の彼女は、三十年

*ダニー……トイレ小屋。

間住んでいるにもかかわらず、オーストラリアの景観の突飛さにも気づかないままだった。生まれて少女時代を過ごしたスコットランドの霧と山もほとんど意識をしなかったが、このオーストラリアの気候も風俗も果てしないユーカリの木と乾いた黄色い草も、彼女には何の意味も持たなかった。彼女の珍妙な服装に慣れている寮生たちは、それを見てももう面白がることはなかった。そして、今日のピクニックのための彼女の選択——よく知られた教会行きのトーク帽と黒いレースのブーツ、自身がユークリッド三角形のうちの一つの様相を呈している骨っぽい体格を包む暗赤色のペリス、かなり擦り切れた暗赤色の山羊皮手袋——を、論評なしで済ませることにした。

一方、マドモワゼルは、敬服されているファッションの元締めとして、ひっきりなしに試験された後、ターコイズの指輪と白いシルクの手袋に至るまで優秀賞で合格した。「でも」ブランシェは言った。「あのふざけた青リボンのイーデイスを、マドモワゼルがそのまま外出させるのには驚いたわ。イーデイスは向こうの何を見ているのかしら？」詰め物を入れ過ぎた長枕のような輪郭をした不健康そうな顔色の十四歳は、二階の部屋の窓を見つめて数フィート離れた所に立っていた。ミランダは、自分のまっすぐなコーン色の髪を後ろへ放りつつ、下の活気のある光景を落胆して見下ろしている青白い小さく尖った顔に微笑みながら手を振った。「フェアじゃないわね」アーマ

も手を振り、微笑みながら言った。「しよせんはまだ十三歳の子供じゃない。A校長があんなに意地悪だとは思わなかったわ」

ミランダはため息をついた。「かわいそうな小さなセーラー——ピクニックにとても行きたがっていたのに」

昨日《宵の明星号の難破》^{*ヘスベラス}の暗唱で不可を取った子供のセーラー・ウェイボーンは、一人で二階に監禁されるという判決を受けていた。この後彼女は、甘美な夏の午後を、空っぽの教室で嫌いな傑作を暗記しながら過ごすことになるだろう。この学校は、開校してから間もないにもかかわらず、規律と行儀作法とイギリス文学への精通でかなり有名になっていた。

今や、この上なく決断力に溢れた人物が、グレーの絹のタフタを着て、タイル張りの列柱のあるベランダを、帆を一杯に張ったガリオン船のように泳ぎ、うねって進んでいた。なだらかに盛り上がった胸の上で、ガーネットと黄金で縁取られ、頬髭^{ひげ}を生やした紳士のカメラ肖像が、鉄の張り骨と固い灰色キャラコの要塞に包まれた、力強い肺のポンプ運動に合わせて上下していた。「おはよう、皆さん」特別にケンジント

*《宵の明星号の難破》……ロンゲフェローの詩。ゆえに、これはイギリス文学ではなく、アメリカ文学である。

ンから輸入された、優しく声量豊かな声が轟いた。^{とどろ}

「おはようございます、アップルヤード先生」ホールのドアの前に整列させられた半円形の集団が、会釈をしながら声を合わせた。

「マドモワゼル、みんな揃っていますね？ よろしい。さて皆さん、幸いハンギングロックへのピクニック日和になりました。日中は暖かくなりそうなので、車がウッドエンドを過ぎたら皆さんが手袋を脱ぐことができるようマドモワゼルに指示してあります。ロック近くのピクニック・グラウンドで昼食を取ります。ロック自体は極めて危険ですから、麓のスロープであっても、愚かなおてんば娘のように探検に行ったりしないよう、今一度繰り返しておきます。しかしながら、地質学的には驚異で、それについて月曜の朝にエッセイを書くように。また、あの付近はいろいろな種類の毒蛇^{どくへび}や毒蟻^{どくあり}で有名だということも忘れないでください。以上です。楽しい一日を。我が校の名誉となる振る舞いを期待します。マクロウ先生とマドモワゼル、軽く夕食を取りますから八時ごろには戻るように」

マセドン南部のハシー貸馬車屋厩舎から来た屋根付き馬車は、五頭のすばらしい鹿^か毛馬^げに引かれ、すでに御者台のハシー氏とともに女学校の門の所に止まっていた。ハシー氏は、親たちが芝生でシャンパンを飲むためにメルボルンから列車でやって来た

開校日以来、過去の重要な機会にはいつも“女学校”に店長自ら馬車を運転して来ていた。その親切そうで賢そうな青い目と、マセドン山の薔薇園のように一年中美しく咲いている頬によって、彼はその地区でたいへん人気があった。アップルヤード校長でさえ、彼に「ねえあなた」と目下の部下のように呼び掛け、一杯のシェリー酒のために書斎に彼を寛大に招き入れるのを楽しんでいたのだった……。

「待て、セイラー……どうどう、ダッチス……ベルモンテ、今汗まみれにしてやるぞ」五頭のよく訓練された馬たちは、実際は像のように直立していたのだが、ハシー氏のそれは戯れの一環だった。ハシー氏は、言葉選びと大意即妙さにおける鋭敏なセンスを兼ね備えた優秀な御者のようだった。「車輪の上に手袋を置かないでくたせえ、マクロウ先生、汚れちまいます」彼は、この基本的な事実を、自分の店の馬車に乗り込もうとする女性客に教えることを、もうずっと前からやめてしまっていた。最終的に、親友も、敵も、二人の女性教師も、皆円満に着席した。親友同士の上級生三人組、ミランダとアーマとマリオン・クエイドは、ぜひそこにと望まれた御者横の前部ボックス・シートに割り当てられた。その配置には、ハシー氏がとても喜んだ。三人とも美人で活発な少女たちだったから……。

「ありがとう、ハシーさん——行きましょう」ミス・マクロウは、数学に対してでは

ない責任と主導権を突然自覚し、後方からある場所へ向かうことを指図した。

一行は出発した。鮮やかな赤い塵^{ちり}の粒子に揺れる平坦なメルボルン・ベンディゴ通りを滑るように走って行くときには、女学校は木々の間の塔を除いてすで見えなかった。「起きろ、セイラー、この怠けものめが……プリンス、ベルモンテ、さぼるんじゃない……」一、二マイルの間は、風景は、日々女学校で列を作ってする散策でなじみのものだった。貧弱な糸状の樹皮の森が道の両側に立ち並び、時々何もない地面に明るい斑点をさらしている様子を乗客たちはよく知っており、わざわざ外を見ることがなかった。女学校にその実から作るゼリーとジャムを供給する、枝が不規則に広がったマルメロの木のあるコンプトンの漆喰のコテージ。担任教師がそこいつも停止を命じて学校への帰途につく路傍の柳の木立。それはロングマンの《歴史の近道》と同じで、そこで授業は、ジョージ四世の死の箇所でのリピートを永遠に繰り返し、次の期間は前と同じようにエドワード三世で始まるのだ……。今、濃いサマーグリーンの柳は陽気に通過され、乗客の頭が馬車のボタン付防水布をのぞき込み始めるころには、前方への冒険の感覚の方が優勢になっていた。道はわずかに曲がり、焦げ茶色の葉と時々青黒い松の木立の中に、より鮮明な緑が混じる。いつものように南の斜面の上のふわふわした白い雲の房で飾ったマセドン山が垣間見え、そこではロマンチックな避

暑用の別荘が大人の娯楽を彼方に匂わせた。

アップルヤード女学校では、「沈黙は金」であつた。その言葉は廊下に書かれ、しばしば強要された。が、今は、迅速なる馬車の定常運動にも、乗客にセキセイインコのようにぺちやくちやとさえずらせるその顔に吹き付ける暖かく埃^{ほこり}っぽい空気の中にさえも、美味なる自由があつた。

ボックスシートでは、ハシー氏の横に座つた三人の上級生の少女たちが、至福で不合理的な夢や、刺繍や、疣^{いぼ}や、花火や、来たる復活祭休暇について話していた。種々雑多な会話を聞くことで自分の労働日の大半を費やすハシー氏は、目を前方の路上に固定して黙っていた。

「ハシーさん」ミランダが言つた。「今日が聖バレンティン・デーだつてご存じでした?」「そうさねえ、ミランダさん。知つていたとは言えませんな。聖人についてはよくは知りません。そのお方の特別なお役目は何でしょう?」

「あの方は恋人たちの守護聖人だとマドモワゼルが言つてました」アーマが説明した。「あの方は最愛の人です——金糸^{ダイセンセル}とリアル・レースの付いたすてきなカードを人々に贈ります——キャラメルはいかが?」

「運転中は食べんのです。でもありがたい」ハシー氏は、やっと会話の活躍期を迎え

ることになった。彼は先週の土曜日に競馬に行っており、アーマの父親の持ち馬が先頭で入ってくるのを見ていたのだ。「馬の名前と着差は？」マリオン・クエイドは知っていた。彼女は馬には特に興味はなかったが、有益な情報の切れ端を貯め込むのは好きだった。高名な勅選弁護人であった亡父のように。

何事につけ無視されるのが嫌いで、髪のリボンを見せびらかしたくて仕方のないイーディス・ホートンは、ミランダの肩越しに、ハシー氏が大きな鹿毛馬を公爵夫人ダッチスと呼ぶ理由を尋ねようと身を乗り出していた。乗客の中にお気に入りハシー氏の娘がいるハスなんです？」

「イーディスは祖母の名前だからですわ」彼女は上品ぶって言った。「でも、馬には私たちのように祖母の名前を付けたりしませんよね」

「ああ、そりゃあしないね！」ハシー氏は、愚かな子供から自分の怒り肩をそらした。朝はどんどん暑くなった。太陽は、緩くボタンを掛けられたカーテンから漏れて目と髪に染み込み、今や美しい赤塵せきじんでカバーを掛けられた馬車のぴかぴかの黒い屋根に重くのしかかっていた。「こんなのが娯楽だなんて」グレタ・マクロウは陰からつぶやいた。「もうすぐ毒蛇と毒蟻の楽園に行こうとしているんだから……人間ってなん

て愚かなんでしょう！」この女学生全員がぺちゃくちゃしゃべっているのを耳に入れたながら鞆の中の本を開くことも、同じように無駄な行為なのであった。

ハンギングロックへの道は、ウッドエンドの中心街から少し外れた辺りで、鋭角に右に曲がっている。ハシー氏は、ドライブの最終ラップを始める前に、馬を休ませて水をやるため一流ホテルの外に停車した。もう車輦内の熱はうだるようで、義務手袋の剥ぎ取り大バーゲンとなった。「マドモワゼル、帽子も脱いではいけませんか？」インクのように黒い巻き毛が、堅苦しいスクール・セーラー帽のつば下の暖流に流れ出ているアーマが尋ねた。マドモワゼルは微笑んで、反対側に座り、目は閉じているけれども眠りはせずに垂直な姿勢を取って、二つの赤褐色の山羊革手袋を膝の上で組んでいるミス・マクロウを見た。「いいけません。私たちは遠足の途中なのだから、ジプシーの荷車に似せる必要はありません」そう言うと、ミス・マクロウは純粹で混乱のない条理の世界に再び入っていった。

馬蹄ばていのリズミカルな打撃は馬車の閉ざされた空気と組み合わせり、彼女たちの眠気を誘った。まだ十一時で、昼食予定のピクニック・グラウンドに着くための時間はたっぷりある。教師陣は協議し、ハシー氏に道路脇の適当な場所で馬車から降ろしてほしいと頼んだ。古くて白いユーカリの木陰で、ミルクとレモネードをおいしく冷たいま

まに保存した亜鉛で裏打ちされた枝編みのバスケットが取り出され、中身を出されて、帽子がさらなる批判も受けずに脱ぎ去られ、バスケットが順に回された。

「こいつを飲むようになってからずいぶん経ちますよ」ハシー氏は自分のレモネードをちびちび飲みながら言った。「こんなふうに自分の手に重要な日が委ねられるときには、強い酒は絶対に飲まないようにしておるのです」ミランダは立ち上がり、レモネードのマグを頭上高く上げた。「聖バレンタインに！」「聖バレンタイン！」ハシー氏を含む全員がマグを上げ、埃っぽい道のほとりでその愛すべき名前の響きを放った。みんながベドラムのトムかペルシャのシャーに乾杯していたとしても関心を持ちそうになく、自分の頭の中でだけ天体の音楽を聴いていたグレタ・マクロウでさえ、うっかり血色の悪い唇に空のマグを上げたのだった。「さあて」ハシー氏が言った。「あなたの聖者が不服でないなら、ミランダさん、出発した方がよからうかと存じます」

「人間って」ミス・マクロウは、足元のバタックキーのかけらを拾い上げるのをカササギに任せることにした。「全く何の役にも立たない行動のことで頭がいっぱいになるものなのね。気分転換のためにまだ座っていたそうなのは、愚か者だけというわけね！」そして、彼女はしぶしぶ自分の座席によじ登った。

バスケットが詰め直され、乗客たちは誰か置き去りにされていないかを数えられ、

馬車のステップが床板の下に引き上げられ、彼女たちはもう一度道中の一団となった。点在するまっすぐな若木の銀白色の影の間を、馬たちは、車を引く肩と汗をかいている黒い臀部でんぶに打ち寄せる金色の光のさざ波を縫って進んで行った。五組の蹄ひづめは、田舎道の柔らかい未舗装路の上ではほとんど音を立てなかった。真昼の暑さの中、通り過ぎる旅行者もなく、木漏れ日の沈黙を裂く鳥たちのさえずりもなく、若木の灰色の尖った葉が生気なく垂れ下がっていた。暖かい影のさす車内の少女たちの笑い声は、知らず知らずのうちに沈黙していった。彼女たちが再びいっぱい陽光の下に出る時まで。「もうすぐ十二時ですよ」ハシー氏は、時計ではなく太陽を見ながら乗客に言った。「ここまでは順調ですよ、皆さん……あなたがたを八時までには学校に送り届けると、私は校長にきっぱりと誓ってききました」『学校』という単語は、馬車の暑気の中に寒気を送り込み、彼に応える者はいなかった。

グレタ・マクロウは、今回だけは一般的な会話に注意を向けずにはいられなかった。彼女は教員部屋ではめったにそれをしないのだった。「ロックで無駄に長居したとし

　*ベドラムのトムかペルシャのシャー……ベドラムはロンドンのベツレヘム精神病院のこと
で、ベドラムのトムとは、放浪して物乞いをする精神異常者のこと。『リア王』に見える。
シャーとは、ペルシャ語で「王」のこと。

ても、遅刻する理由にはなりません。三角形の二辺の和が三つ目の辺よりも大きいことを、私と同じくらいハシーさんもご存じです。今朝私たちは、三角形の二辺に沿ってドライブしてきました……そうですわね？　ハシーさん？」運転者は、ややぼけっとして相づちを打った。ミス・マクロウは、間違いなく変人だ。「けっこう。それでは——午後は道順を変えて、三つ目の辺で戻ればよいだけですわね。この場合、ウツドエンドで直角にこの道に入っただけで、帰りは斜辺に沿って行きましょう」

実際には、これはハシー氏の実務的知識の手に余ることだった。「カバのことは知りませんがね、マダム、キャメルズ・ハンブラクダのコブのことをお考えなら」彼はそのコブが空に聳そびえるマセドン山脈を鞭むちで指した。「算数かどうかはともかく、我々がやって来たのよりも、花景色のもっと長い道のりになります。先生は舗装道路があるかどうかをお知りになりたいのでしようが——その山の後ろの方は未舗装路のようなものです」

「キャメルズ・ハンブラクダのコブのことなど申し上げてはおりません、ハシーさん。まあでも、ご説明感謝いたします。馬や道のことなどほとんど知らないのに、私はどうも理詰めになる傾向がありますわね。マリオン、あなた、前で私の声を聞くことができるかしら？　私の言うことがわかればよいのだけど？」マリオン・クエイドは、クラスでただ一人ピタゴラスを切り抜けた、お気に入りの生徒だった。難破船の船員の言語のわずかな

単語を理解している未開人が、お気に入りになる、というような意味で。

彼女たちが話している間に、視角は、ハンギングロックを持ち込むことで不意にはっとする景色へと徐々に変わっていった。まっすぐ前方に、灰色の火山性の塊^{かたまり}が分厚い板を形成し、人影のない黄色い平原の要塞のようにそそり立った。ボックスシートの三人の少女は、藍色の影と灰緑色のハナミズキの斑点で時折深く傷付けられている岩壁の縦線や、この遠距離からでさえ巨大で恐ろしい巨礫^{きよれき}の露頭を見ることができた。見たところ、頂上にほとんど生きた植物はないようで、ギザギザの岩石の線がうららかな青空を横切っている。御者は、使い慣れた鞭で驚くべきものを何気なくひらひらと指していた。「あそこです……ほんの一マイル半くらいでさ」

ハシー氏は、説明し慣れた正確な情報でいっぱいだった。「高さは五〇〇フィート以上……火山性……^{モリス}石柱がいくつか……数千歳。失礼、マクロウ先生、数百万と言わべきでしたな」^{*}「山はマホメットに近づき、ハンギングロックはハシー氏に近づく」ひどく変わり者の女性教師は、彼に微笑みかけていた。その内緒の歪んだ笑顔の作り方は、今の言葉よりもさらにわずかなセンスしかないとハシー氏に思わせた。彼と目

*山はマホメットに近づき……マホメットは、奇跡を起こすと言って、山に自分の方へ来いと呼び掛けたが、当然山は動かなかったため、自分から山の方へ歩いていったという。

線が合ったマドモワゼルは、愛すべき当惑した男にウインクするのをかろうじて自制した。本当に、かわいそうなグレタは日に日に変人になっていく！

車は急激に右に曲がった。ペースは速くなり、実用的で穏健な声がボックスシートから響いた。「皆さんは昼食をお取りになりたいでしょう。噂に聞くチキン・パイを用意しています」少女たちは皆、再びおしゃべりを始め、チキン・パイに考えを集中しているのはイーディスだけではなかった。少女たちは、道を曲がるたびに見え隠れするロックの別の風景を見ようと、カーテンの外に首を伸ばした。ロックは、時には前の三人の少女たちが頂上近くの二つの大きな平衡を保った巨礫を認識するのにじゅうぶんなほど近く、時には低かったり高かったりする森の木々の前景のためにほとんど曖昧あいまいになった。

ハンギングロックの麓の、たわんだ木の門を通して入るピクニック・グラウンドと呼ばれる場所は、今は閉ざされている。自宅の門を開いた経験が豊富なミランダは、頼まれもしないのにボックスシートから降り、ハシー氏の称賛の眼差しを受けつつ、歪んだ木の掛け金を実に巧妙に処理していた。彼は、そのほっそりした両手の確実な手際に注目した。動きの鈍った門を引きずる重量を、片方の腰で巧みに後押ししている。馬車の通過に安全な道を確保するため、錆び付いた蝶番ちようつがいをじゅうぶん広く開

くやいなや、オウムの一団が頭上に張り出してゐる木から甲高い声を上げて飛び出した。オウムたちは、マセドン山方向の太陽に照らされた草深い平原を横切り、青と緑で塗り込められた南の方角へと上昇していった。

「来い、セイラー……ダッチス、大丈夫か……、ベルモンテ、何を考えていた？ おやおや、ミランダさんは、こいつらがきれいなオウムを一度も見ることがなかったとお思いだったようですね」そうしてハシー氏は、休日の最高の気分で、マセドン貸馬車屋と自宅の裏庭の狭い門を日々通り抜けているのと同様のリラックスした自信をもって、既知の信頼できる現在から未知の未来へと、五頭の鹿毛馬を導いていった。

2

ピクニック・グラウンドの自然への人工的な改修は、野外炉として役立つ平らな石のいくつかの円と、日本の塔の形をした木造のトイレから成っていた。夏の終わりの小川は長く乾いた草の間を緩やかに流れ、ほとんど見えなくなったり、浅い池として再び現れたりしていた。昼食は、すぐそばの二、三本の広がったユーカリの木によって太陽の熱から陰になった所の、大きく白いテーブルクロスの上にセットされた。チキン・パイ、エンゼルケーキ、ゼリー、それにオーストラリアのピクニックとは切り離すことのできない生ぬるいバナナに加え、コックはハート型の見事な糖衣ケーキを提供してくれていた。トムが親切にもブリキの一片から作った型でカットしたものである。ハシー氏は、樹皮と葉で焚いた炎で二つの巨大な野外用ティーポットを沸かしており、今は日陰に繋いだ馬たちに目配りできる馬車の陰でパイプを楽しんでいる。

ピクニック・グラウンドの、彼女たち以外の唯一の占有者は、小川の反対側の多少離れたブラックウッドの下でキャンプをしている三、四人の一行だけだった。そこでは、大きな鹿毛馬と白いアラブ馬が、屋根なしの軽四輪馬車の傍らで二つの切り藁袋から

昼食を取っていた。「ここって、恐ろしく静かだわ」イーディスは、クリームを盛大に取りながら意見を述べた。「いったいどうしたらこんな田舎に住むことを選べるのかしら、私には想像もできないわね。もちろん、恐ろしく貧しいなら別だけど」

「オーストラリアのほかの誰もがそう感じるなら、あなたはごっそり贅沢ぜいたくなクリームで自分を太らせずに済むでしょうに」マリオンが指摘した。

「向こうのワゴネットの人たちがいなければ、私たちが世界中で唯一の生き物だわ」イーディスは、動物界全体を一挙に軽々と忘れ去って言った。

イーディスにとってはひどくしんとした、日当たりよいスロープと影のさす森は、実際は葉音、鳥のさえずり、歩行音、擦音、見えない翼の軽い羽音などで満ちていたのである。葉と花と草は光の天蓋てんがいの下で照り映え震えている。雲の影はいつしか、水性の甲虫が滑走する池の上に舞う金色の塵に取って代わられた。岩と草の上では、勤勉な蟻たちが、乾いた砂の小型サハラと、種を生じている草のジャングルで、終わりのなき食糧の収集と備蓄作業にいそしんで交差していた。ここで、山のように巨大な人影の間に点在するのは、神の恵みであるパンくず、キャラウェイシード、砂糖漬けジンジャーの断片——見慣れない奇妙なものではあるが、食用の戦利品であると判別はつく——であった。砂糖蟻の大群は、体をほとんど二つ折りにするほどの力を尽くして、

岩を枕にしたブランシェの黄色い頭の数インチ内に位置した地下の食糧室をめざすという危険を冒しつつ、ケーキから落ちた糖衣の一片を引きずるのに苦心していた。トカゲはひどく熱い石の上で日光浴をしている。動きの重い装甲甲虫が一匹、枯葉の中で横転して、仰向けに力なく蹴りながら横たわった。太くて白い地虫と、平らな灰色のワラジムシは、腐った樹皮の層のじめじめした安心感を好んだ。不活発な蛇は、空洞の丸太から小川で水を飲むために這い出す夕暮れを待ちながら、秘密の穴の中でとぐろを巻いていた。その間、藪の隠れた深みでは、鳥たちが昼間の熱が通り過ぎるのを待っていた……。

みぞおちを圧迫しているコルセットとゆったりしたベチコートと綿のストッキングと子山羊革のブーツによって、大地や空気や日光との自然な接触から絶縁され、日陰でくつろいでいる栄養じゅうぶんの眠そうな少女たちは、コルクの岩々とボール紙の木々を背景に任意にポーズを取ったアルバムの中の姿と同様、環境の一部にはなり得なかった。

飢えが満たされ、珍味が最後の一口を味わわれ、カップと皿が池ですすがれると、彼女たちは午後の残りを楽しむことに専念し始めた。馬車が見えなくなる場所まで離れてはならないという厳命下で、二、三人で集団を離れていく者がいる。別の者は

豊富な食糧と陽光で麻醉され、居眠りをし、夢を見ていた。ロザマンドは何かを編み、ブランシェはすでに眠っていた。ニュージーランド出身の勤勉な姉妹が、ミス・マクロウの鉛筆画を描いていた。彼女は、うっかりバナナを食べ始めて悲惨な結果を招いた山羊革手袋を、結局は脱ぎ去っていた。本に鼻のナイフを埋め、鉄棒の眼鏡をかけて倒れた丸太の上に姿勢良く座っていたが、彼女はカリカチュアするには簡単すぎた。マドモワゼルは彼女の横で、顔の周囲にブロンドの髪を落としてつつ、草の上に手足をいっぱい伸ばしてリラックスしていた。アーマは母親のオパールのポケットナイフを借りてきており、クレオパトラの宴にもふさわしいなまめかしい優美さで、熟したアプリコットを剥いていた。「なぜなの、ミランダ」彼女は囁いた。「あんなに優しくてきれいな人が学校の先生だなんて——よりもよって、この世でいちばん退屈な仕事を……。あらハシーさん、こちらにいらして。先生を起こすのは気の毒なようですから」

「眠ってはいませんよ、かわい子——マ・ブ・ティト空想に耽っていただけよ」ひじまくら肘枕をして、夢見るような微笑を浮かべながら女性教師が言った。「何でしょう、ハシーさん？」

「起こしちゃったのなら申し訳ないんですが、先生、五時にならないうちに出るのを確認したいのです。馬の準備ができ次第」

「もちろん、全面的に従います。あなたの準備ができたときはいつでも、お嬢さん方も準備ができていますことでしょう。今何時でしょうか？」

「私が聞こうと思っておったのですよ、先生。私の古い懐中時計は、十二時にぴたりと止まっちゃまったようなんです。一年中の、よりにもよって今日という日に」

マドモワゼルの小さなフランス製時計は、たまたまベンディゴで修理中だった。

「^{*}ムースー・モンペリエですか？ 先生」

「時計屋さんの名前はそうだと思います」

「ゴールデン・スクエアの？ こう言っちゃ何ですが、先生は本当にうまくやりましたな」 かすかだが紛れようのない赤面が、フランス女性の「そうですか？」と言った冷静さが偽りであることを示した。しかしながら、ハシー氏はムースー・モンペリエに囁みついて、骨をくわえた犬のように上下に揺さぶり、どこにもやらないように見えた。「先生、ムースー・モンペリエとその前の代の父親は、オーストラリア中の時計屋の中で最良の人間だと言わせてください。上品な紳士でもあります。あれ以上の男の所になんか行けやしません」

「わかりましたわ。ミランダ——あなた、小さくてかわいいダイヤ付きの時計を持っていたわよね？ 今何時か教えてくれる？」

「すみません、マドモワゼル。最近持たないんです。心臓の上で一日中カチカチいうのを聞くのに耐えられなくて」

「もしあれが私のものだったら」アーマが言った。「肌身離さず持ち歩くところね——お風呂の中でも。そうでしょう、ハシーさん？」

不承不承といった動作で、ミス・マクロウは本を閉じ、平らな暗褐色の胸部の折り返しに骨っぽい二本の指の探索隊を送り込み、鎖の付いた古風な金の引き打ち時計を引き出した。「十二時で止まっているわね。止まったことなかったのに。パパの時計なのだけれど」ハシー氏は、昼食のときからずっと、平原上をピクニック・グラウンドの方に這い寄ってきているハンギングロックの影を、意識して見るという次善の策をとった。「発つ前に、もう一度湯を沸かしてお茶にしますか？ 今から一時間くらいでどうです？」

「一時間も」方眼紙と定規を取り出しながらマリオン・クエイドが言った。「時間があるなら、ロックの麓で測量したいのですが」ロックをもっと近くで見たかったミランダとアーマの二人は、お茶の前に下方のスロープの範囲内に散歩に行く許可を求めた。マドモワゼルは一瞬ためらった後に許可を出した。ミス・マクロウが本の世界

*ムースー……「ムッシュー」が訛なまった。

の向こう側に再び姿を消していたためである。「直線距離でどれくらい離れているの、ミランダ？」

「ほんの二、三〇〇ヤードです」ミランダではなく、マリオン・クエイドが言った。「小川に沿って歩かねばならないから、もう少し長くなるでしょう」

「私も行っていい？」大あくびをして立ち上がりながらイーデイスが尋ねた。「お昼ごはんはパイを食べ過ぎて、起きていられそうにないのよ」ミランダ以外の二人は問いかけるようにミランダを見、イーデイスは付いていくことを許された。

「心配しないでください、マドモワゼル」ミランダは微笑んだ。「ほんのちょっとした間、行って来るだけですから」

女性教師は立ち上がり、四人の少女が小川の方に歩き去っていくのを見つめた。ミランダはわずかに先行して、薄色のスカートを擦る背の高い草の間を滑るように進み、マリオンとアーマは、後ろでよろめきながら歩いているイーデイスを従え、腕を組んでミランダに続いた。流れの方向が変わる藺草の茂みに達したとき、ミランダは立ち止まり、輝く頭を回転してマドモワゼルに落ち着いた顔で微笑み、マドモワゼルは微笑み返して手を振り、曲がり角に少女たちの姿が見えなくなるまでそこに立っていた。

「ああー」彼女は何もない青空に向かって声を上げた。「わかったわ……」

「何がわかったって？」油断のない、実証的な、いつもの人を狼狽ろうばいさせるやり方で、本の上部越しに見つめながらグレッタ・マクロウが突然尋ねた。そのフランス女性は、英語でさえめったに言葉を失うことなどなかったのに、まごついて口ごもった。ミランダがウフィツィ美術館のボッティチェリの天使であるという胸躍らせる発見を、あらゆる人類の中でもミス・マクロウに説明するのだけは完全に不可能だったから……そもそも、夏の午後には、真に重要であることを説明したり、明晰めいせきに考えたりすることさえ不可能なのだ。例えば、愛という問題にしても、ほんの数分前、小さなセーヴル時計の鍵を巧妙に回していたルイの手を考えたとき、彼女はほとんど失神しそうになったくらいなのである。彼女は暖かく香かぐわしい草の上にもう一度横たわり、張り出した枝の影が、ミルクとレモネードを入れたピクニック用バスケットから離れていくのを見ていた。間もなく太陽の強い光にさらされることになり、彼女は氣力を奮い起こしてそれを日陰に運ばなければならない。すでに四人の少女が行ってから、十分間かおそらくそれ以上の時間が経過しているはずだ。時計を調べる必要はない。午後の名状しがたいもの憂さが彼女に告げた。これは、単調な行動に疲れ切っている人々が、彼女が今そうしているように、まどろみ、夢を見ようとしている時間なのだ、と。アップルヤード女学校では、午後遅い授業の生徒たちは、姿勢良く座って学習を続けるこ

とを頻繁に思い出さなければならなかった。片目を開けると、彼女は、小川で勤勉な姉妹がスケッチブックを片づけて、眠りに落ちているのを見ることができた。ロザマンドは自分の刺繍の上で船を漕いでいる。完全に意志の力で、マドモワゼルは自分の管理下の十九人の少女を数え上げた。イーデイスと三人の上級生を除く全員が、視界内の、容易に呼び掛けられる範囲内にいた。目を閉じて、彼女は遮られた夢の続きを見る快楽を自らに許した。

その間にも、四人の少女たちはまだ小川上流の曲がりくねったコースをたどっていた。小川は、ロック麓のワラビとハナミズキがもつれているどこかの隠れた水源から、ピクニック・グラウンドの平原にほとんど見えない細流となって近づいていた。突然、一〇〇ヤード間かそこら、深く透明になり、すべすべした石の上で非常に速い流れとになって、やがて水を含んだ鮮やかな緑の草に囲まれた小さな池の中へと広がっている。そのことが、特にこの地点をワゴネット一行のピクニックのための選地とさせたのは疑いない。大きく赤い顔に傾けたトーピー帽の、髭を生やしたくましい年配の男性が、赤いカマーバンドに巻かれた腹部に両手を重ね、仰向けにぐっすり寝込んで横たわっていた。近くに、精巧なシルクのドレスを着た小柄な女性^{うちわ}が、木と、ワゴネットから持ち出したクッションの山によりかかり、シュロの団扇^{うちわ}で扇ぎながら目を閉じ

て座っていた。イギリスの乗馬ズボンを穿いた金髪の青年——かなり若い男性と言い換えるべきか——は、雑誌に夢中になっていた。一方、同年くらいか、あるいはいくらか年長の、今の青年が華奢で頬がピンク色であるのと比べると、頑丈そうで日焼けしているもう一人は、小川の縁でシャンパングラスをすすぐのに従事していた。彼の御者帽と銀のボタンの付いた濃紺のジャケットはぞんざいに葦の藪に投げられていて、厚い黒髪の塊と、人魚やら何やらの入れ墨が入った力強く赤銅色の両腕が、人目にさらされていた。

気まぐれな小川の果てしない弧と曲がりたたどっている四人の少女は、現在ほぼピクニックの一行と並行していたが、ハンギングロックは森の木の高いスクリーンの背後にじれったく隠れたままだった。「渡れそうな場所を見つけなきゃ」ミランダが目細めながら言った。「でないとな、何も見ないまま引き返すことになるわ」小川は、池に近づくにつれて広くなっていた。マリオン・クエイドは定規を取り出した。「少なくとも四フィート、飛石はなし」

「跳躍に一票、うまくいくよう願うのみ」スカートをまとめながらアーマが言った。「やれそう？ イーディス」ミランダが尋ねた。

「わかんない。足を濡らしたくない」

「あら、どうして？」マリオン・クエイドが尋ねた。

「肺炎になって死んじゃうかも。そうしたらあなたは私をからかえなくなって残念でしょうけど」

透明で流れの速い水は無事に渡られ、よく通る品のない口笛の一吹きで彼女たちの接近を歓迎していた若い御者の明白な称賛を得た。少女たちが声の届く距離から離れてロックの南斜面へと歩き去るやいなや、乗馬ズボンの若者は《イラストレーテッド・ロンドン・ニュース》を投げ落とし、小川の方へぶらついて行った。「グラスを手伝おうか？」

「いや。俺がひとな一舐めしとけば、帰ってからコックに叱られないで済む」

「ああ……そう……食器洗いのことはよくわからないんだ……ねえ、アルバート……僕の言うことで気を悪くしないでくれると助かるんだけど、ついさっきのあれはしてほしくなかったよ」

「何をしたって？ ミスター・マイケル」

「あの子たちが小川を跳び越えようとしたときに口笛を吹いただろう」

「俺が知る限り、ここは自由な国だ。口笛の何が悪い？」

「君はいい奴なんだけど、」もう一人が言った。「ちゃんとした家の女の子は、知らな

い奴から口笛を吹かれるのは好きじゃないよ」

アルバートはにんまりと笑った。「まさかと思うだろうけどな！ 野郎のことになると、娘なんざみんな同じなんだぜ。あの子たちはアップルヤード女学校から来やがったのかな？」

「あのさ、アルバート、僕がオーストラリアに来てから二、三週間しか経っていないんだよ——あの子たちが誰かなんてどうすればわかると？ 実際のところ、君が口笛を吹くのが聞こえて目を上げた一瞬だけしかあの子たちを見ていないんだ」

「それなら、あんたは俺の言うことを信じた方がよさそうだ」アルバートが言った。「俺はずいぶんあちこちさまよってきたからな——もしあの子たちが来たのがクソ女学校か、俺と妹をいいかげんに育てやがったバララト孤児院なら、やっぱり同じだぜ」

マイケルはおずおずと言った。「ごめん、君が孤児だったなんて知らなかったよ」

「完全に孤児ってわけじゃなくて、孤児も同然ってことな。おふくろがシドニーからやって来た野郎と逃げちまってから、おやじは俺たち二人を見捨てやがったのさ。で、俺たちはクソ孤児院に放り込まれたんだ」

「孤児院？」もう一人は繰り返した。彼は、悪魔の島の生活をじかに取材した報告を聞いてしまった気がした。「教えてくれないか——もしよければ、だけど——そうい

う場所ですてられるというのはどんな感じなんだい？」

「シラミだらけさ」アルバートは、グラスすすぎを終えており、大佐の銀のマグを革のケースに手際よく収納していた。

「うわ、ひどいね！」

「まあ、それなりにじゅうぶん清潔ではあったんだぜ。普段はシラミも何もいなかった、えらく貧しいガキが頭にシラミの卵を持ってそこに送られてきて、寮母がクソでかいハサミを持ち出してそいつの頭を刈るときを除けば、な」マイケルは、孤児院の話に心が奪われているようだった。「続けて、もっと教えてよ……その人たちは、妹さんに頻繁に会わせてくれたのかい？」

「ええとな、いいか、ガキのころには窓全部に鉄格子が付いていたんだ。男はある教室に、女は別の教室にいた。そう言や、俺はもうずいぶん長いことあのクソ溜めのことを考えたことがなかったな」

「そんなに大声を出さないでよ。伯母さんが君の罵詈雑言ばりぞうごんを聞いたら、裁定を伯父さんに告げて、君をクビにさせてしまふよ」

「んなこたあしねえって！」もう一人がにっこり笑って言った。「大佐は、俺がちゃんと馬の世話をすることも、大佐のウイスキーを飲んだりしないことも知っている。」

まあ、飲んだこともあるんだけどな。実を言うと、俺はあの酒のひどい臭いが我慢できないのさ。これがあんたの伯父さんのフレンチ・フィズだったら、俺に合ってる。うまいし、胃に優しいしな」アルバートの世俗的な知恵は果てしなかった。マイケルは敬愛の念で満たされていた。

「ねえ、アルバート——ミスター・マイケルから余計なものを間引いてくれないかな。オーストラリアっぽく聞こえないし、とにかく君にとっての僕の名前はマイクってことで。伯母さんが聞いている場所以外では、だけど」

「お好きなように！ マイク？ それがあんたの手紙に書いてある、マイケル・フィッツヒューバート卿きょうを短くしたものなのか？ いやもう。なんて長くて発音しにくいんだ！ 俺なんか、印刷されて書かれたのを見たって、それが自分の名前だってわからねえのに」

自分の先祖代々の名前が貴重な個人財産で、豚革の旅行鞆といっぱい詰まった札入れのように、その名とともに至る所を旅したイギリスの若者にとって、このいくらか瞠目どうもくすべき所見は、消化するのに数分間の沈黙を必要とした。そうしている間に、驚いたことに御者がこう続けた。「俺のおやじは、窮地に陥ると時々名前を変えていたもんさ。孤児院では俺たちの名前を何てサインしたのか忘れちゃったよ。別に気にし

ないね。自分に関しては、クソな名前なんざどれも同じだ」

「君と話すのは好きだよ、アルバート。どういうわけか、君はいつも僕に考えさせる」
「時間があるのなら、考えるのはけっこうなことだ」ジャケットに手を伸ばしながら、もう一人が答えた。「オールド・ン・ローリー星条旗号に馬具を付けた方がよさそうだ。でないと、あんたの伯母ちゃんが騒ぎ出しそうだから。あの人はとっとと出発したがっている」

「わかった。出発する前に、僕はちよつと歩いて脚をほぐしてくるよ」アルバートは、優雅に小川を跳び越え、ロックの方に大股で歩き去る、細身の少年のような姿を見送って立っていた。「脚をほぐすってのはあれか？ ああ、娘たちをもう一度見たがっているのは、賭けてもいいな……。あの黒い巻き毛のちっこい美人をよ」彼は馬たちの所に戻り、インド製の藁籠わらかごにカップと皿を重ね始めた。

マイクが最初の本立を抜けたとき、四人の少女たちはもう見えなくなっていた。彼はロックの垂直な表面を見上げ、彼女たちは引き返す前にどこまで行くつもりなのだろうと考えた。ハンギングロックは、アルバートによると、経験豊富なクライマーにとってさえ手ごわい提案なのだそうだ。もしアルバートが正しく、彼女たちがイギリスにいる自分の妹たちとだいたい同年齢くらいでしかない女学生だとすれば、夏の午後の終わりに、どうやって単独で出かけることを許可されたのか？ 彼は、自分が今

オーストラリアにすることを思い出した。オーストラリア、何であっても起こりかねない場所。イギリスでは、何もかも以前に起こってしまっている。自分たちの先祖によって、何度も何度も繰り返す。彼は倒木に座って、アルバートが木々を通して呼び掛けているのを聞き、ここが彼、マイケル・フィッツヒューバートが住むことになる国であることを知った。彼女の名前は何かといった？ 背の高い、黄色いストレート・ヘアーの、色白の少女は。伯父の私有湖にいる白鳥の一羽が水面を滑っていくかのように行ってしまった、あの子は。

3

小川は、四人の少女のまっすぐ前方にハンギングロックがそそり立つまではほとんど横断されず、短い草の生えたスロープの向こうまではっきりと見えていた。ミランダが最初にその光景を見た。「だめよ、イーデイス！　ちゃんと歩いて！　あそこに登るのよ——空の中へ」マイクは後に、彼女が立ち止まって、後ろを重い足取りで付いて来る小さくて太った娘にどんなふうに肩越しに呼び掛けていたかを思い出した。

その雲に聳える山頂からじかに受ける衝撃は、イーデイスさえ強烈な存在感に圧倒されて唖然としたため、沈黙を誘発した。その壮麗な光景は、まるで天国とアップルヤード女学校の女校長との間での特別な打ち合わせでもあったかのように、彼女たちの調査を待って鮮やかに浮かび上がっていた。急な南側の表面では、金色の光と深紫色の影の遊戯が、直立した長い石板群の複雑な構築法を明らかにしていた。あるものは巨人の墓石のように滑らかで、別のものは風と水、氷と炎という有史以前の建築術によって溝が彫り込まれていた。元は沸騰している地中からの灼熱の噴出物であった巨大な岩々は、今では休止して、森の影に冷やされてその身を丸めていた。

自然の、そのような記念碑的な地形に直面させられると、人間の目は嘆かわしいほど不完全なものだ。眼前に展開している驚異のどれくらい多数または少数の事柄が、今ハンギングロックを驚いてじっと見つめている四組の目によって、実際に見られ、選ばれ、記録されているのだろうか？ マリオン・クエイドは、次の月曜日のエッセイのために地質学的構造を記憶しておく必要がある、垂直面を交差している水平の岩棚の主要な型に、注意を向けているだろうか？ アーマは、オウムの羽の赤いきらめきを目撃し、それを葉の間の炎だと思ったが、そのときイーディスは、何百ものか弱い星のような花々が、自分の重い足取りのブーツに蹂躪じゅうりんされたことに気づいているだろうか？ そして、光り輝く頂上の方に頭を傾けながら、足はシダ越しに道を選んでいるように見えるミランダは、自分が、休日のパントマイムで見物人がぼかんとする以上の状態になってしまっていると感じているだろうか？ 彼女たちは、それぞれが自分の知覚力の私的世界に閉じ込められ、呻うめき声を上げている地上に錨いかりを降ろしたままの大きな融解物質の圧力と張力に気づくことなく、またジトジトする洞窟に逆さまにぶら下がっている賢く小さな蝙蝠こうもりたちしか知らない、軋きしみ、震えてさまよっている風と気流にも気づくことなく、低いスロープの方へと一列縦隊で黙って歩いていくのだった。前方の石の上に銅色の体を引きずる蛇を、誰も見も聞きもしなかった。腐っ

た葉と樹皮の下からの、蜘蛛と地虫とワラジムシのパニック状態の脱出も。ロックのこの辺りには道はない。もし以前はあったとしても、ずっと前に消えてしまっている。たまにウサギかワラビーは入ってきたが、それ以外の生物がこの不毛な中腹に侵入するのは本当に久しぶりのことだった。

マリオンが、最初に沈黙という蜘蛛の巣を破った。「この山は……間違いなく一〇〇万年は経っているわね」

「一〇〇万年。おお、なんて恐ろしい！」イーディスが驚きの声を上げた。「ミランダ！ 聞いた？」十四歳では、一〇〇万年という年月はほとんど常軌を逸しているだろう。静かな無言の歓びによって心を照らされていたミランダは、ただ微笑み返しただけだった。イーディスは固執した。「ミランダ！ 嘘よね？」

「私のパパは、前に鉱山で一〇〇万ドルを儲けたわよ。ブラジルで」アーマが言った。「それでママにルビーの指輪を買ってあげたのよ」

「お金の話じゃないわ」イーディスは正當に述べた。

「イーディスが好むと好まざるとにかかわらず」マリオンは指摘した。「彼女のその太った小さな体は何百万もの細胞でできている」イーディスは、自分の耳を手で覆った。「やめてよ、マリオン！ そんなこと聞きたくない！」

「その上、しょうもないお馬鹿さん、あなたはもう何百万秒も生きている」

イーデイスは、顔面蒼白になっていた。「やめてったら！ めまいがする」

「もう、いじめちゃだめよ、マリオン」いつもは厚顔無恥なイーデイスが、この時ばかりはしよげかえっているのを見ながら、ミランダがなだめた。「かわいそうに、この子、ぐったり疲れているわ」「そうよ」イーデイスが言った。「それに、このいまましいシダが私の脚をちくちく刺すのよ。みんなであの丸太に座って、ここから老いさらばえたロックを見るのじゃだめなの？」

「だって」マリオン・クエイドが言った。「あなたが自分から私たちと一緒に来ると言ったんじゃない。私たち上級生三人は、帰る前にハンギングロックをもっと近くで見たいのよ」

イーデイスは泣き声を出し始めていた。「ひどい場所……こんなにひどいとは思わなかった。知っていたら来なかったのに……」

「いつも馬鹿な子だと思っはいたけれど、今はっきりしたわね」マリオンは、声に出して思案した。彼女が二等辺三角形についての証明を述べたときのように的確に。マリオンの中には、真の悪意があったわけではない——そこには、ただあらゆる部門における、真実への燃えるような望みがあるのみだったのだ。

「気にしないで、イーデイス」アーマが慰めた。「すぐに帰って、聖バレンタインのすてきなケーキをもう少し食べて、楽しく過ごせるから」イーデイスの今の苦悩だけでなく、人類すべての悲嘆への単純な解決策だ。小さな少女であるのに、アーマ・レオポルドは、自分たちが選んだケーキのおかげで誰もが幸福になるのを何にもまして見たがった。彼女が今日の午後、草の上で眠っているマドモワゼルを見下ろしていたときのように、時々それはほとんど狂おしいほどの思慕になった。それは将来、顧問弁護士がだめでも天国には間違いなく受諾される、満ち溢れている心と財布からの途方もない施し物の中に、表現を見いだすことになるだろう。たくさんの見込みのない者たち——世界中のハンセン病患者、落ち目の劇団、宣教師、聖職者、結核の娼婦、聖人君子、苦境に苦しむ者、一文無し——への気前の良い寄付の中に。

「あそこを登る道がどこかにあったような気がする」ミランダが言った。「古風な服を着た人たちがロックにピクニックに来ている絵を、父が私に見せてくれたのを思い出したわ。それが描かれた場所がわかればいいのだけれど」

「その人たちは反対側から近づいたのかもね」鉛筆を出しながらマリオンが言った。

「当時は、きつとマセドン山からドライブしてきたのよ。私が見たいのは、今朝馬車から目に付いた、あの奇妙な平衡を保った巨礫ね」

バランス・ボウル・ターズ

「あまり遠くには行けないわ」ミランダが言った。「遠くには行かないってマドモワゼルに約束したのを忘れないで」

ギザギザの険しい岩山と苔模様の付いた石の細部を加えつつ、眺望は前方に向かつて一歩ごとにより魅惑的になっていった。今はハナミズキのくすんだ銀色の葉の上につややかなアメリカ・シャクナゲ、次はカラクサホウライシダが緑のレースのように震えている二つの岩の間の暗い裂け目。「そうね、せめてこの最初の小さな上り坂の上からどんなふうに見えるのかを確かめましょう」大きなスカートをまとめながらアーマが言った。「一九〇〇年の女性のファッションを発明したのが誰であろうと、そいつには三層のペチコートでワラビやシダの茂みの間を歩かせてやるべきだわね」ワラビの茂みはすぐに、腰の高さの岩棚で終わっている濃くちくちくした藪の帯に変わった。ミランダは藪を最初に抜け、今朝門を開けたときにベン・ハシーが称賛していた未開地エキスパートとしての自信をもって、ほかの者たちを引っ張り上げようとその岩の上にひざまず跪いていた。「五歳のころには」彼女の父親は思い出すのが好きだった。

※古風な服を着た人たちがロックにピクニックに来ている絵……ミランダが思い出した絵は、ウィリアム・フォードによる《ピクニック・アット・ハンギングロック》(1875)である。現在はヴィクトリア国立美術館に展示されている。

「ミランダは牧場監視人のように、馬の上に片脚を引っ掛けていたっけな」「そうねえ」母親が付け加えたものだ。「小さな女王様みたいに、頭をのけぞらせて応接間に入ってきたわ」

気がつくと、彼女たちは岩と巨礫と少数のまっすぐな若木に囲まれた、ほぼ円形の足場の上にいた。アーマは、すぐに岩の一つに銃眼のようなものを発見し、そこから下のピクニック・グラウンドをうっとりとして見下ろしていた。まるで強力な望遠鏡で拡大されたように、小さな喧騒^{けんそう}が木々の集まりの間から立体的な明晰さで際立った。馬の間で忙しいハシー氏と馬車、小さな炎から立ち上る煙、軽いドレスを着て動き回る少女たちと、池のほとりの空色の花のように開いたマドモワゼルのパラソル。

小川に引き返す前に岩陰で数分間の休憩を取るということで、意見が一致した。「一晩中外で月が出るのを見られればいいんだけど」アーマが言った。「あら、そんなに怖い顔をしなくてよ、ミランダってば——だって私たちって、学校の外で楽しめる機会がほとんどないじゃない」

「それに、あの小ネズミ・ラムリーに見張られたり嗅ぎ回られたりしないで済む機会もね」マリオンが言った。

「ブランシェが、ラムリー先生は日曜日にしか歯を磨かないって言ってたわ」イーディ

スが付け加えた。

「ブランシェは、むかつくケチな知ったかぶりよ」マリオンが言った。「あなたもそうだけど」イーディスはマリオンに掻き乱されることなく続けた。「ブランシェが言うには、セーラは詩を書いてるんだって。ダニーの中でよ。ミランダのことばかりを書いた詩をその床の上で見つけたって」

「かわいそうな小さなセーラ」アーマが言った。「あの子がこの世でミランダ以外の誰かを愛しているとは思えない」

「理由がわからないわね」マリオンが言った。

「あの子は孤児なのよ」ミランダが優しく言った。

アーマが言う。「セーラは、パパが子鹿を家に連れて来たときのことを思い出させる。セーラと同じ、大きくて怯^{おび}えたような目をしていた。私が何週間か世話をしたけれど、ママは、束縛して長生きさせるのは無理だと言っていた」

「そうだったの？」全員が尋ねた。

「ええ、死んだわ。ママはいつも『運命^{doomed}ね』って言っていたけれど」

イーディスがオウム返しに言った。「運命^{doomed}? どういう意味? アーマ」

「死ぬ運命^{doomed}ってことよ、もちろん! 『ほかの者が皆逃げ去った、あの燃える甲板に立つ

ていた、トラ……ラ……』の、あの少年みたいにね。あとの部分は忘れたけど」

「おお、なんてひどい！ みんなは私が死ぬ運命だと思う？ 気分が悪いのよ。あの少年も、私みたいに吐き気がしたと思う？」

「もちろん——彼が昼食にチキン・パイを食べ過ぎていたのなら」マリオンが言った。「イーデイス、たまにはおしゃべりをやめてくれるとありがたいんだけど」

イーデイスの太った頬に数行の涙が伝った。なぜだろう、とアーマはいぶかしんだ。なぜ神は、人々の一部をこんなふうに不器量で不愉快に、ほかの一部をミランダのように美しく親切にお創りになったのだろう。愛しのミランダは、冷たい手で子供の熱い額を撫でようと屈んでいる。時々、パパの最高級のフランス・シャンパンや、春の午後の鳩のものの憂げな鳴き声によって生じてくるような、理屈を超えた優しい愛が、彼女の心を溢れんばかりに満たした。イーデイスのたわごとを処理するミランダを、無情な微笑で待っているマリオンをも含む愛。涙が込み上げてきたが、悲しいわけではない。泣きたいなどとは全く思わない。ただ愛したいだけ。彼女は、自分がその影に横になっていた岩の上に立ち上がり、巻き毛を振り広げながら踊り始めた。いや、むしろ、温かく滑らかな石の上を滑り始めた、とても言うべきかもしれない。イーデイスを除く全員が、ストッキングと靴を脱いでいた。彼女は裸足で踊っていた。巻

き毛とリボンを振り乱している、明るくうつろな目をしたバレリーナのように、小さなピンクの爪先が表面をほとんどかすることなく。彼女は、六歳のときに祖母に連れて行かれたコヴェント・ガーデン劇場にいた。舞台袖のファンにキスを投げ、一等席にブーケから抜いた花を放り込む。最後に彼女は、ユーカリの木我真ん中辺りのロイヤル・ボックスに向かって深々とお辞儀をした。イーデイスは巨礫にもたれて、次の小さな坂に進もうとしているミランダとマリオンを指さした。「アーマ、ちょっと見てあの人たち、靴も履かないで、いったいどこに行こうとしているのかしら？」困ったことに、アーマは笑っているだけだった。イーデイスは不機嫌に言った。「気が狂ったに違いないわ」そのような放埒な愚かさは常に、幼いころにウールのルームソックスとガロッシュを与えられるような、イーデイスや彼女の同類たちの理解を超えるものなのだ。精神的援助を求めてアーマの方を向くと、彼女もまた靴とストッキングを捨て腰に吊り下げているのが見え、イーデイスはぞっとした。

ミランダがわずかに先行し、イーデイスが最後尾をとぼとぼ歩くという隊形で、四人の少女全員がハナミズキの間を前進した。三人は、次々と襲いかかってくるくすん

* 『ほかの者が皆逃げ去った……』……イギリスの女流詩人、フェリシア・ヘマンズ (1793-1835) の詩、『カサビアンカ』の冒頭。

だ緑をかき分ける押しの強い肩の上で、ミランダの黄色のストレート・ヘアーが緩やかに揺れているのを見ることができた。茂みがついに、最後の陽光を抱く小さな崖の表面の前でまばらになり始めるまで。こうしてその影たちは、一〇〇万の夏の夕暮れに、ハンギングロックの岩山と頂上に伸びてきたのだらう。

彼女たちがやがて出た半円の棚は、巨礫やもろい石で囲まれ、下の方のものとはほぼ同じ形をしていた。淡い光の中に静止しているゴムのようなシダの茂みは、乾いた灰色の苔の絨毯じゅうたんの上に影を投げかけてはいなかった。かろうじて下の平原が見える。はるか遠くに漠然と。巨礫の間からじっと見下ろしながら、アーマは、漂っている薔薇色の煙か霧を通して、水のきらめきと行ったり来たりしている小さな姿を見ることができた。「下の人たちは、蟻みたいにうじゃうじゃと、いったい何をしているのかしら？」マリオンは、彼女の肩越しに眺めた。「びっくりするほどたくさん人間が、目的を持っていない。もちろん、その人たちが、自分にもわかっていない必要な役割を果たしているってことはあり得るけれど」アーマは、マリオンのレクチャーを聞くような気分ではなかった。蟻と彼らの役割については、それ以上のコメントを差し挟むことなく打ち捨てられた。わずかな時間ではあったが、アーマは平原からやって来るやや奇妙な音に気づいていた。はるか彼方で打ち鳴らされる太鼓のような音に。

ミランダが、彼女たちの中で最初に、前方に立っている石柱モリスを見た。それはあばたのある石が単独に露出したもので、平原に続く断崖の上に載せられた奇怪な卵のようであった。鉛筆とノートをさっと取り出していたマリオンは、シダの中にそれらを放り込み、あくびをした。突然、抵抗できない倦怠感に襲われ、四人の少女全員が、その石柱モリスという避難場所へとなだらかに傾斜している岩の上に身を投げ出した。そして、四人は、ツノトカゲが裂け目から出てきて、マリオンの投げ出した腕のくぼみに恐れることなく横たわるくらいの深い眠りに落ちていった。

ミランダが目覚ますと、青銅色の装甲の奇妙な甲虫の列が、自分の足首を緩やかに横断しているのが見えた。彼女は、彼らが剥がれかけた樹皮の下に安全圏に慌てて引っ込みもうとするのを見つめていた。無色の薄暮の中で、あらゆる細部が際立ち、輪郭をはっきり見せて、分離していた。巨大で乱雑な巣くぼしが生長不良の木の分岐に割り込まされており、そのすべての小枝と羽は、勤勉な嘴とかぎ爪によって複雑に編まれ、織られていた。じゅうぶんに明瞭に見ることさえできるなら、あらゆるものは美しく完璧なのである——ぼろぼろの巣も、オウムガイの殻のように溝ひだが付いたマリオンの破れたモスリンのスカートも、アーマの顔を絶妙な針金状の螺旋で縁取る巻き毛も——頬を赤くして子供っぽく無防備に眠っているイーディスでさえも。彼女は目覚

め、ベそをかきながら赤く泣き腫^はらした目をこすった。「私はどこにいるの？ おお、ミランダ、ひどい気分だわ！」ほかの者たちはもうすっかり目覚めて立っていた。「ミランダ」イーデイスはもう一度言った。「本当に気持ちが悪いのよ！ いつ帰るの？」ミランダは、まるでほとんど見えていないかのように、ひどく奇妙な視線で彼女を見ていた。イーデイスがさらに大声を出して質問を繰り返したとき、彼女は後ろを向いて坂を歩き始め、ほかの二人も少し離れて後ろに続いた。（何よ、ほとんど歩いてないじゃない——厄介な古石じゃなくて、客間のカーペットの上みたいのに、裸足で石の上を滑っていく）イーデイスは思った。「ミランダ！」彼女はもう一度呼んだ。「ミランダ！」息詰まるほどの沈黙の中で、自分の声は別の誰かのもののように感じられた。耳障りで小さなしわがれ声は、はるか彼方の岩壁の中に吸い込まれていった。「戻ってきて、みんな！ 登らないで！ 戻ってよ！」彼女は息苦しくなり、フリルの付いたレースの襟^{えり}を引き裂いた。「ミランダ！」押し殺された叫びが囁きのように口から出た。恐ろしいことに、三人の少女全員が石柱^{モノリス}の背後にたちまち姿を消しつつあった。「ミランダ！ 戻ってきて！」彼女は、坂の方へふらふらと二、三步踏み出し、前方の藪をかき分ける白い袖の最後の動きを見た。

「ミランダ……！」答える声はなかった。恐ろしい沈黙が周囲を支配し、イーデイス

は、今度は完全に大声で叫び始めた。もし彼女の怯えた絶叫が、数フィート離れたワラビの茂みの中にうずくまっているワラビー以外の誰かの耳に届いていたなら、ハンギングロックのピクニックは依然として夏の日のありふれたピクニックであり得たかもしれない。だが、その声は誰の耳にも届かなかった。イーディスが踵^{きびす}を返し、やみくもに藪の中に飛び込み、平地に向かってよろめき叫びながら走り出したとき、ワラビーは不安にかられて飛び出して、どこへともなく跳び去っていった。

4

ピクニックの日の午後四時ごろ、ミセス・アップルヤードは、応接間のソファの上で長くて豪華なうたた寝から目覚めた。しばしばそうであるように、彼女は死んだ夫の夢を見ていたのだった。今回は、何隻も遊覧船と釣り船が繋いであるボーンマスの栈橋を、二人で歩いている夢だった。「帆船まで行こう、君」とアーサーが言った。古風なボックス・マットレス付きの四柱ベッドが波間に揺れていた。「あそこへ泳ごう」とアーサーが言った。そして、彼女の腕を取って海に飛び込んだ。驚いたことに、またうれしいことに、彼女は自分がきれいに泳いでいるのに気づいた。脚も腕も使うことなく、魚のように水を切って。窓の下でホワイトヘッドが芝刈り機を走らせている音が快い夢に終止符を打ったとき、彼女たちはその四柱ベッドに達しており、乗船するところだった。アーサーは、アップルヤード女学校でならどんなに贅沢な生活をしていたことだろう！ 彼がいつも、彼女を財務の天才と呼んでいたことを、彼女は満足げに思い出した。すでに学校はかなりの利益を生んでいる……。数分後、まだ気分はすこぶるよく、この楽しい休日の午後には優しくあろうと固く決心し、彼女は教室

のドアに姿を見せた。「さあて、セーラ。私は、あなたが午後の残りの時間、庭に入ることができるように、詩を勉強したことを期待しています。ミニーがお茶とケーキを持ってきてくれますよ」

女校長が入ってきたとき、機械的に机から立ち上がった瘦せこけて大きな目をした子供は、黒靴下を履いた細長い脚の片方をもう一方の方に不安げに動かしていた。「さあて？ 答えるときはまっすぐに立ちましょうね。肩を後ろに、胸を張って。ずいぶん前屈みになっていますよ。さてそれでは、詩は暗記してあるかしら？」

「無駄です、アップルヤード先生。できません」

「できません、とはどういう意味かしら？ お昼を食べてから、読本を持ってここに一人でいたというのに？」

「やってはみました」手で目をこすりながら子供は言った。「でも、あんまり馬鹿しくて。つまり、もしその詩にセンスがあれば、私はもっとずっときちんと勉強したでしょうに、ということですよ」

「センスですって？ 無知な人ね！ どうやらあなたは、フェリシア・ヘマンズ夫人がイギリスで最もすぐれた詩人の一人だと見なされているのを知らないようね」

セーラは、ヘマンズ夫人の才能が信じられず、顔をしかめた。強情で扱いにくい子

供なのだ。「暗記している詩なら別にあります。すごく長い詩です。《宵の明星号》^{*}よりずっと。それではいけませんか？」

「ふむ……何ていう詩？」

《聖バレンティン頌歌》^{しょうか}「一瞬、小さく尖った顔が明るくなり、かわいらしいと言っ
てもよいほどになった。」

「知らないわね」女校長はじゅうぶんに注意して言った。（彼女の立場においては、人はあまり慎重にはならないものだ。引用の大半は、結局はテニスかシェークスピアのものであったことが判明するからである）「どこで見つけたの、セーラ？——その、ええと、頌歌？」

「見つけたのではありません。私が書いたのです」

「あなたが書いたんですって？ 悪いけど、聞きたくありませんね。奇妙に思われるかもしれないけれど、私はヘマンズ夫人の方がいいの。本を渡して、覚えているところまででいいから暗唱を始めて」

「もし一週間ここに座っていたとしても、そんなつまらないものを覚えることはできないと思います」

「では、もう少しやってみなさい」読本を渡しながら校長が言った。表面的には穏や

かで理性的だったが、この気難しく無口な子供には内心うんざりしていた。「もう行きますよ、セーラ。三十分後にラムリー先生をよこしますが、それまでに完璧にすることを期待します。さもないと、残念ですが、あなたをベッドへ送らなければなりません。ほかの者がピクニックから夕食に戻ってくるまで起きている代わりに」教室のドアが閉まり、鍵が掛けられ、憎むべき存在は部屋からさっそうと出て行った。

教室の後ろの華やかな緑の庭園では、ダリアの花壇が、夕暮れ前の太陽に火を付けられたように真っ赤に燃えていた。ハンギングロックでは、マドモワゼルとミランダが木陰でお茶を注いでいることだろう……。重い頭をインクのしみの付いた机の上に載せて、子供のセーラは、激しい怒りにとらわれてすすり泣いた。「校長は嫌い……校長は嫌い……。おお、バーティ、バーティ、どこにいるの？ イエス様、あなたはどこに？ 聖書のように、本当にあなたが雀が落ちるのを見ているのなら、なぜ降りてきて私を連れて行ってくれないの？ ミランダは、悪人であっても人を嫌っては

*《宵の明星号》……先にも注したが、これはイギリスのヘマンス夫人の作品ではなく、アメ

リカのロングフェローの作品である。作者のミスと考えるべきか。

*聖書のように……マタイ伝第十章二十九節「神の許しがなければ、一羽の雀さえも地に落ちることはない」。つまり、神はこの世の何もかもをちゃんと見ているのだ、ということ。

いけないと言う。でも、私にはどうしようもないの、大好きなミランダ……。校長は嫌い！ 校長は嫌い！」へマンズ夫人が鍵を掛けたドアに投げつけられ、床板の上では机が軋む音が響いていた。

太陽は、劇場のようなピンクとオレンジの輝きの中、学校の塔の背後に沈んでいた。アップルヤード校長は、書斎でトレイに載った夕食をたっぷり食べていた。コールド・チキン、スティルトン・チーズ、チョコレート・ムース。学校での食事はいつでもすばらしいものだった。涙も乾き後悔もしていないセーラは、コールド・マトンの皿とミルクとともにベッドに送られていた。ランプの灯されたキッチンでは、コックと二、三人のメイドが、ピクニックに行つた者たちの差し迫つた帰還に備え、キャップをかぶりエプロンを着けて、拭き掃除された木製のテーブルでカードゲームに興じていた。夜は次第に暗く、厚くなった。今だけはほとんど人けのない高い建物は沈黙に沈み、影で満たされ、ミニーは、種々の配慮からその大理石の腹部に片手を置いたヴィーナスのあるヒマラヤスギの階段にランプを灯し、踊り場の窓を通して薄暗い芝生の上にいる自分と同名の片割れを見つめた。八時を少し過ぎていた。書斎でペイシェンス*をしていたアップルヤード校長は、片方の耳で馬車が砂利の車道をやって来る音に耳をそばだて、ハシー氏に一杯のブランデーのために中に入るよう勧めることを決めた。

……ベンディゴの司教がこの学校で昼食を取って以来、デカンターの中にはその時のブランデーがまだじゅうぶん残っている。

ハシー氏は、数年にわたる経験を通じ、時間厳守で非常に頼りになるということを身をもって示していたので、階段上の振り子時計が八時半を指すと、女校長はカード用テーブルから立ち上がり、キッチン内に権威をもって鳴り響く校長専用呼び鈴のビロードのコードを引いた。顔をやや赤くしたミニーがすぐに応じた。ミセス・アップルヤードは、戸口で敬意を表する距離を保って立っているハウスメイドの曲がったキャップを、非難げに注視した。「トムはまだ近くにいるの、ミニー？」

「わかりません、マダム。コックに聞いてきます」三十分前に彼女に愛され、彼の屋根裏部屋のキャスター付ベッドの上でズボン下の中に手を伸ばされたトムを、最後に見ていたミニーが言った。

「そうね、そうしたらすぐに、彼を見つけて私の所に来させることができるかどうかを確認して」

ミス・ミリガンのもう二、三ラウンドの後、普段ならペイシエンスにおける不正行

*ペイシエンス……トランプの一人用ゲームの総称。米語で言う「ソリティア」。この後に出てくる「ミス・ミリガン」もペイシエンスの一種。

為の放縦さを輕蔑するミセス・アップルヤードだったが、今回は故意に必要となるハー
トのジャックを配ってから、ポーチ前の砂利敷きテラスに出た。そこでは、点火され
た灯油ランプが金属チェーンの先で揺れていた。雲のない紺青色こんじょうの空に対して、学
校のスレート屋根が銀のようにかすかに光っている。二階の部屋では、灯りが一つだ
け、降ろされたブラインドの向こうに点ともっていた。それは勤務時間を終え、ベッドで
本を読んでいるドーラ・ラムリーの部屋だった。

ストックと陽光が照りつけたペチュニアの香りが、風のない大気を圧倒していた。
少なくとも夜は好天だし、ハシー氏は高名なドライバーだった。それでもやはり彼女
は、若いトムが見つかつて、一時間近く馬車が遅れても心配することなど何もないの
だということに、彼のアイルランドの常識をもって同意してさえくれば、と願って
いた。彼女は書齋に戻り、ペイシェンスをもう一ゲーム始めたが、自分の金の時計と
ホールの時計を比較するためにほとんどすぐに立ち上がった。それが九時半を打った
とき、もう一度ミニーを呼び鈴で呼ぶと、トムは馬車置き場で温浴の最中ですが、直
ちに参ります、と通知された。十分間がのろのろと過ぎた。

ついに、およそ半マイル離れた幹線道路を蹄が打つ音がやって来た……今、下水溝
の上の橋を通り過ぎ……彼女は暗い木々の上に動いている灯りを見ることができた。

その車が平らな道で速度を増し、早足で学校の門前を通り過ぎるとき、酔っぱらった声の合唱が聞こえた——それは、ウッドエンドから引き返してくる酔っぱらいを乗せた車であった。同時に、やはりそれを聞いていたトムは、室内用スリッパと清潔なシャツを身に着けて開いたドアに姿を見せた。ミセス・アップルヤードが自分の勢力圏内に好きな人間がいたとするならば、それは確実に陽気な目をしたアイルランド人トムであった。たとえ何を頼まれたとしても、残飯バケツを空にすることからメイドたちのためにハーモニカで一曲演奏することまで、あるいはウッドエンド駅まで美術教師を車で送ることまで、トムにとっては同じことなのであった。「お呼びですか、マダム？ さっき私を待っていたとミニーが言っていましたか？」

ポーチの、笠のない灯りの下で、重い襷^{ひだ}を重ねた頬は獸脂色だった。「トム」突き通すような視線で彼から答えを搾^{しぼ}り取るように、その顔をまるまる直視しながらミセス・アップルヤードが言った。「ハシーさんがこうも恐ろしく遅れるなんて、理解できる？」

「そうなんですか、マダム？」

「彼は今朝、八時までに彼女たちを送り届けると、私に固く約束したのよ。もう十時半。ハンギングロックから馬車で来るのにどれくらいの時間がかかると思う？」

「はあ、ここからかなりの距離がありますから」

「慎重に考えてみて。あなたは道をよく知っているでしょう」

「三時間から三時間半ってところでしょうね、常識的に考えて」

「そのとおりよ。ハシーさんは四時になったらすぐにピクニック・グラランドを出るつもりだった。お茶のすぐ後に」慎重な調子に整えた教師用の声は、突然けたたましいものになった。「そこで私をぼかんと見つけて馬鹿みたいに立っていないでちょうだい！ あなたは何が起こったと思うの？」

ミニーのみならず、多くの女性の心をときめかせるリズムカルなアイルランドのシングソングで、トムは彼女のそばで慰めた。もしその取り乱した顔が、まあこれくらいならキスしてもよからうと思われたなら、不快にも彼のごしごし洗った鼻の近くにあるたんだ頬にさえ、彼はあえてなだめるための軽いキスをしたかもしれない。「もう心配なさららないで、マダム。彼が操っているのは五頭のたいした馬で、彼はベンディゴまででは最高の御者なんですから」

「私は何もわからないとも思うの？ 問題は——彼女たちが事故に遭ったかってことよ」

「事故ですか？ マダム。まさかそんな、考えもしませんでしたよ。こんないい夜だ

し、それに……」

「それならあなたは思っていた以上の大馬鹿です！ 馬のことはわからないけれど、暴れて逃げ出すことだってあるでしょう。聞いているの？ トム。馬は暴れ出すことだってあるの。頼むから、何か言っただろうだい！」トムにとっては、馬を厩舎に入れることと、キッチンで甘い言葉を囁くこととは、一つのことだった。が、実物大の生身と、壁の上に伸びる背後の高く黒い影との二人して彼に詰め寄っている女校長のいるこの表玄関は、それらとは全く別のことなのであった……。『今にも食われるかと思ったよ』後に彼はミニーに言った。「それに、厄介なことに、そのかわいそうな奴が正しいと直感的にわかつちまったのさ」はなはだ大胆な彼は、血のように赤いハートがぶら下がっている重いブレスレットが巻かれた、灰色の絹に包まれた手首の一方に手を置いた。「中に入ってしまったら座りませんか。ミニーがお茶を持ってきますから……」

「聞いて！ あれはなに？ ああ神様、聞こえるわ！」

それは本当だった。やっと来た。本街道を打つ蹄、二つの前照灯、馬車がゆっくりと校門に停車したときの、喜ばしい車輪の軋み音。「どうどう、セイラー……ダッチス、よしよし……」ハシー氏が、ほとんど聞き分けられないしゃがれ声で馬たちに声を掛

*シンングソング……アイルランド風のイントネーション。

けていた。馬車の暗い口から乗客たちは一人ずつバラバラに降りてきて、砂利の車道に扇形に広がっている馬車灯の中に進んだ。泣いている者や眠気でぼんやりしている者、それに全員が無帽で、髪はぼさぼさで、無様な様子だった。トムは、馬車が接近した最初の兆しのために、震える四肢に鞭打って威厳を保つ姿勢を取っていた女校長をポーチに残して、車道にすっ飛んで行っていた。低い階段につまずきながら彼女の方に最初にやって来たのは、光の下で青ざめているフランス女性だった。

「マドモワゼル！ これはいったいどういうことなの？」

「アップルヤード先生——何か恐ろしいことが起こったのです」

「事故なの？ はっきり言いなさい！ 事実が知りたいのよ」

「とても恐ろしいことが……どう話せばいいのか」

「落ち着きなさい。ヒステリーの発作ではどうにもならないわよ……マクロウ先生はどこ？」

「残してきました……ロックに」

「残してきた？ マクロウ先生は気でも違ったの？」

ハシー氏は、異様な目をしてすすり泣いている少女たちを押し分けた。「アップルヤード先生。二人だけでお話したいんですが？……フランスのご婦人が倒れちまい

そうですんで」彼は正しかった。その日の緊張とストレスで疲れ切っていたマドモワゼルは、ホールカーペットの上で気を失った。仮寝のためにキャップとエプロンをだいいぶ前に脱いでいたミニーとコックが、使用人の詰所から階段の下のベーズドアを走り抜けてきた。その階段では、紫の部屋着を着てカールペーパーを頭に付けたミス・ラムリーが、火の付いた蝋燭ろうそくを持って降りてきた。マドモワゼルのために気づけ薬とブランドーを取り出され、その女性教師はトムが手伝って彼女の部屋へ運び去られた。「まあ、かわいそうに」コックが言った。「みんな疲れ切っているようだよ——ピクニックでいったい何があったのかしら？ 早く、ミニー。いちいちマダムに尋ねなくていいから。温かいスープを飲ませてあげて」

「ラムリー先生……生徒たちをすぐにベッドに。ミニーがお手伝いします……。さあ、ハシーさん」

ミセス・アップルヤードの居室のドアは、幅広くまだ見事に直立した疲れた背中の背後で閉じた。「酒を少しいただいてもよろしいですか、マダム、話す前に」

「どうぞ——かなりお疲れのようですね……。では、できるだけ簡潔明瞭に話してください。起こったことを正確に」

「それが何とも、マダム、うまく言えればいいんですが……そうです、それがいちば

ん始末に負えねえところだ……。何があったのか、誰にもわからない。女生徒三人とマクローウ先生が、ロックで姿を消しちまったんですよ」

以下は、二月十五日日曜日の朝、ウッドエンドのパンファー巡査部長が、警察署でベン・ハシーから聴取した話の抜粋である。

私とマクローウ先生の時計が両方ともドライブの間に止まってしまっていて、二人の先生と私が一行の中で正確な時刻がわかる者が誰もいないことを知った後、アップルヤード校長が遅くとも八時までには学校に戻ることを期待していたので、昼食を終えたらできるだけ早くピクニック・グラウンドを発見すべきだということで意見が一致した。この先かなり長いドライブになるので、私が馬に馬具を付けた後、フランス女性がお茶とケーキの時間を設定した。影がロックの上に動いていたことから判断して、たぶん三時半ごろだったと思う。

湯沸かし容器が沸騰するとすぐ、私はお茶の用意ができたと言率の二人の女性に言いに行った。最後に見たときに木の下に座って読書をしていた年配の先生は、そこになかった。それどころか、私は二度と彼女を見ることはなかったのだ。フランス女性はかなり動揺しているようで、マクローウ先生がキャンプの前を歩き去るのに気づいたかどうか私に尋ねたが、私は気づかなかった。彼女は私に言った。「マクローウ先生

がどちらに行ったのかを見た生徒が誰もいません。予定の時間に戻ってこないなんて考えられません——マクロウ先生は、それはもう時間に厳しい方なのです」私は、残りの乗客は全員揃っていて、出発する準備はできているか尋ねた。彼女は言った。「四名を除いて全員います。その子たちは私の許可を得て、ハンギングロックをもっと近くで見るために、小川に沿って短い散策に行きました。イーディス・ホートン以外は上級生で、とても信頼できます」行方不明の三人の生徒は、ボックスシートに座って、ピクニック・グラウンドまで私と一緒に移動してきた。私は、あの子たちをよく知っている。ミランダ嬢（名字は聞いたことがない）、アーマ・レオポルド嬢、それにマリオン・クエイド嬢である。

私はさほど心配はしなかった。出発が遅れて少し困るだけだ。私はあの土地をとてもよく知っている。それで、すぐに生徒たちを組織して、二人ずつペアになって彼女たちを捜してもらうことにした。生徒たちは平地の小川をぐるっと回って、クイー*を叫び、名前を呼んで歩いた。一時間くらい過ぎたころ、ロックのサウス・ウエスタン基点近くの藪から、服をぼろぼろにして泣いたり笑ったりしながら、イーディス・ホートンが飛び出してきた。私は、彼女がヒステリー発作を起こしそうだと思った。

*クイー……オーストラリア先住民が合図に用いる甲高く長い叫び声。

彼女は、あとの三人を「あの上のどこか」に置いてきたと言った。ロックを指さしていたけれども、どの方角なのかさっぱりわからないようだった。我々は、三人がどちらに行っただのか思い出すよう何度も何度も尋ねたが、彼女から聞き出すことができたのは、彼女が恐怖にかられて麓までずっと走って戻ってきたということだけだった。

幸い、私はいつも緊急用のブランデーを携帯容器に入れて持っている。それを彼女に少し飲ませ、私の運転用のコートでくるみ、我々が搜索を続ける間、ロザマンド嬢（上級生の一人）が彼女を連れて行って馬車の中に寝かせた。私は全員を呼び戻して人数を数え、今度はもつとずっと遠くへ行ってみた——南の高地をロックの麓まで。イーディス・ホートンが通った跡を見つけようとしたが、それはすぐに、石の多い地面でほぼ消えていた。拡大鏡なしでは、足跡の何らかの痕跡を見つけることは不可能だった。彼女が広いグラウンドに出て、小川のほとりの我々のキャンプに向かって駆け戻り始めたほんの数ヤードを除いて、藪には乱されたように見える所はなかった。後のために、我々は棒で木の間の空き地に目印を付けておいた。その間、昼食前に我々が到着したときそこに来ていたもう一組のピクニックの一行に聞き込みをしようと、上級生の二人が小川に沿って出発していた。だが、その一行は火を消して立ち去った後だった——たぶん私が馬の世話をしている間に帰ったのだろう。四人の人間とワゴネット。

それはフィッツヒューバート大佐のものだと思うが、実際は誰とも会って話しはしなかった。生徒の何人かが、このワゴネットが、後ろに付いたアラブ種のポニーに乗った若い男とともに、午後の早い時刻に走り去ったのを見たと言っていた。我々は、呼び掛けと搜索を数時間続けたはずだ。三、四人の良識ある人間が、何の足跡も残さずに、あんな比較的狭い範囲からああも素早く姿を消すことがあり得たなんて、信じられない気がする。昨日の午後からずっと狐につままれたような気分だ。

特に長い夏服を着た未熟な少女たちにとっては、ロックでいちばん低くて行きやすい高さでさえ全く油断はできず、万一穴やら絶壁やらに落ちて行方不明になってしまったらと考えると、生徒たちを私の見えない所に行かせるのは怖かった。それに、私が知る限り一つしかない頂上へ通じる草深い道については、スタート地点を隅から隅まで徹底的に調べたところでは、おそらく行方不明者はその道を選ばなかったと思われる。踏まれた草の跡も足跡もその他の痕跡も、どこにも何もなかったからだ。

遅くなるわ暗くなるわで、——我々には沈んでゆく太陽以外に時刻を知る手立てはなかったのだが——我々は、ロックのこちら側にいる人間にいろいろな角度から見えるように、小川に沿っていくつか火を焚いてみた。我々は、時には一人、時には一斉に、できるだけ大声でクイーも続けた。私は二個の湯沸かし容器を持って、馬車の

緊急用のボールで叩いた。

この時点ですでに、フランス女性と私は、この知らせを持ってウッドエンドに帰るべきか、それとも搜索を続けるべきか、決めあぐねていた。我々には、馬車の二つの石油ランプと私の風防付ランプしかなく、一度に二、三ヤード四方を照らすのがやっとだった。その可能性を私は疑い始めてはいたものの、もし行方不明者がマツチも持たずにまだロックのどこかにいるのなら、明るくなるまで洞窟でじっとしているだけの分別がない限り、日が暮れてからが本当に危険な状態になるだろう。フランス女性と生徒の何人かは少しヒステリックになっていたが、無理もない。昼食以来、誰もお茶の一杯も飲まなかった。あまりにも心配で、そんなことを考える余裕もなかったのだ。みんなでレモネードとビスケツトを口に入れ、私はこれ以上の夜の搜索は打ち切って、一行を学校に送り返すことに決めた。

正直言つて、私には自分の行動が正しかったかどうかはわからない。しかし、私はその決定の全責任を負うものである。私は消えた三人の少女をとてよく知っているし、三人全員があり得ないような事故に遭ったのでなければ、オーストラリアの未開地にかなり慣れているミランダ嬢が冷静さを保ち、夜の安全な避難場所を見つけているだろうと考えた。先生については、彼女自身のためにも、一人で協道にそれなかつ

たことを願っている。算数の知識は、未開地ではあまり役に立たない。

帰り道にウッドエンドの警察に寄って、ハンギングロックで起こったことを当直の警官に手短に知らせた後、それ以上は遅れることなくアップルヤード女学校まで行った。言い忘れていたが、私は、小川とロックの麓の間の半分くらいのところの、ピクニック・グラウンドにある公衆トイレ（女性用と男性用）も細かく調べてみた。足跡も最近使った形跡もなかった。

5

アップルヤード女学校の寄宿者にとって、二月十五日の日曜日は悪夢のように不安定な日であった。半分が夢、半分が現実。気性に従って、むやみに打ち上がる希望と、沈んでいく不安との交替。

女校長は、新しい一日に向かってうんざりするほどの時間をかけて白くなっていくベッドルームの壁をじっと見つめて過ごした夜の後、ポンパドールではない場違いな髪型で、いつもの時間に仕事の態勢に入った。彼女の最大の関心事は、学校の壁の向こうでは昨日の出来事の何も、小声で囁かれてさえいないということを保証することだった。昨夜、ハシー氏が立ち去る前に、通常ならいろいろな教会へと寄宿生と教師たちを運ぶ三台のワゴネットの運行が取り消されていた。教会は、晴れた日曜日の朝のゴシップの温床になるというミセス・アップルヤードの判断のためである。幸い、ベン・ハシーは、すでに地方警察が持つ機密報告書を別にすれば、安心して口止めしておける思慮のある人間だった。学校では、追って通知があるまでの間、絶対的な沈黙が約束事となった。昨夜のつらい試練の後、まだ自分の足で立って伝達することが

できる職員と生徒たちにそれが遵法じゆんぽうされたことは、まずまず確実だったと考えられる。ピクニックに行った者の少なくとも半数が、ショックと消耗で部屋に引きこもっていたのだから。だが、生まれつきのニュース吹聴人であるトムとミニーと、ことによるとコックとは（この全員に日曜日の午後の間に非公式の訪問者があった）、あまり誠実でないという疑いがあり、またミス・ドーラ・ラムリーは、日曜日にクリームを届けたトミー・コンプトンと、多少の言葉を交わしたかもしれない。ウッドエンドのマッケンジー医師は、朝食後すぐに来診を求められ、一頭立て二輪軽馬車ギダでやって来た。鋭い金縁眼鏡の一瞥で状況を見て取った無限の知恵を持つ年配の開業医は、月曜日を終日休日にするのと、栄養価の高い軽い食糧と、穏やかな鎮静剤を処方した。マドモワゼルは、偏頭痛を患って部屋に閉じ籠もっていた。老医師は、ベッドの上掛けの上のかわいらしい手を撫で、患者の焼けるような額にオーデコロンを二、三滴垂らし、優しく言った。「時に、お嬢さん。この不幸な事件のために少しでも自分を責めているのなら、そんなのは愚の骨頂だと思いがね？ 結局は空騒ぎだったことが判明して終わる、そんなところだ」

「ああ、先生———そうであることを願っていますわ」

「誰も」老人は言った。「運命のいたずらの責任を取ることはできん」

生涯に一度のちょっとしたヒロインとなったイーディス・ホートンは、叫喚の発作が長引いたおかげで身体的には良好な状態にあると、マッケンジー医師に宣言された——彼女くらいの年齢の少女の、自然に備わったヒステリー解決法である。とはいえ、彼は、彼女をロックから一人で怯えながら走り戻させたものについて、彼女が全く何も覚えていないことで多少心配もしていた。イーディス・ホートンはマッケンジー医師が好きだった——好きでない人がいるのだろうか？——それで、自分の乏しい知性の範囲内でできる限り協力しようとしているのが見て取れた。彼は、家まで馬車を走らせながら判定した。あの子が岩で頭を打った可能性はある——あの険しい場所では容易に起こり得ることだ——それで、軽い脳震盪^{のうしんどう}に苦しんでいた、と。

ミセス・アップルヤードは、ウッドエンドのバンファ―巡査部長との会話の後、書斎で日曜日の大半を一人で過ごした。バンファ―は、日曜日の夕方前には満足な解決が得られると予想した比較的重要度の低い事件の記録を取る目的で、たいして切れる者ではない若い警官を連れてきていた。都会の人間というものは、いつも田舎で迷子になり、教会へ行くためではなくそれを探すため、クリスチャンたちを日曜日の朝のベッドから引き離すものだ。しかし、すでに知られ確認された出来事の要約にとどまるベン・ハシーの話は別にして、三人の行方不明の女学生とその先生に関する事実

通常より曖昧に思われた。バンファアは、土曜日にハンギングロックにピクニックに行った二人の若者——今までのところ、行方不明の少女たちが小川を渡っているところを最後に目撃した人間——に、月曜日に彼女たちがまだ見つかっていなければ、必要となるかもしれないさらなる情報を警察に提供してもらう手配をした。都合がつくならば、バンファアが今朝数分間話したいと思っていたそのほかの唯一の人間は、昼食のキャンプにパニック状態で戻ってくる前、ことによると数時間も実際に三人の行方不明者と一緒にいた少女イーディス・ホートンだった。よって、カシミアの部屋着に合った赤い目をしたイーディスが書斎まで連れてこられたが、はっきり口も利けない全く役立たずな情報源であることを証明しただけに終わった。巡査部長も校長も、一、二回の鼻すりと拗^ずねた拒絶以上に建設的なものを何も聞き出すことができなかった。たぶん、あの若い警官ならもっとうまくやれただろうが、彼には機会が与えられず、イーディスは付き添われてベッドに戻っていった。「気にすることはありません」バンファアは水割りブランデーのグラスを受け取りながら言った。「私の個人的な意見では、マダム、事件は数時間以内にすっかり解決します。踏みならされた道を数ヤード離れただけでどれだけの人間が迷子になるものか、あなたには想像もできないでしょう」「私も、バンファアさん」ミセス・アップルヤードは言った。「あなたに同

意できればと願っています。我が校の生徒代表であるミランダは、この国の未開地で生まれ育ちました……ミス・マクロウについては……」

ミス・マクロウが昼食後にピクニックの団を離れたのを見た者が誰もいないことは、すでに確認されていた。何らかのはっきりしない理由のために、突然彼女が本を読んでいた木の下から立ち上がり、ロックの方へと四人の少女を追うことを決めたに違いないにもかかわらず。「もしかして」警官は言った。「その人は何か個人的な予定を組んでいませんか？ 門外で一人または複数の友人に会うとか？」

「あり得ませんね。ミス・グレッタ・マクロウは、雇用してから数年になりますが、私を知る限り、この世に一人の友人もいなければ、知人さえいません」

すでに上級生の一人、ロザマンドによって、ちょうど彼女が座っていた場所で、彼女の本が山羊革手袋とともに見つかった。ミセス・アップルヤードと警官はともに、数学の女性教師というものがどんなにパンファーマー言うところの「計算に堪能」であろうと、その長所がかなりの鋭敏さであるにもかかわらず、ほかの者同様道に迷うほどの愚か者である可能性もあった、ということで見解が一致した。アルキメデスでさえ、より高度なものを考える場合には道筋を誤ることもある、ということが示唆された。このすべてを、若い警官が、肩で息をし、鉛筆を舐めながら、苦勞して記録し

た。(後に、行きの馬車に乗っていた乗客が短い聴取を受けたとき、マドモワゼルを含む数人の目撃者に、ミス・マクロウが三角形と近道についてかなり荒々しく話している、行きと異なる、全く実用的でないルートで帰宅すべきであることを運転者が提案までされていたことが、思い出されることになるだろう)

ピクニック・グラウンドの切れ目のない搜索と、よじ登って間近に接近して観察できるときに限られたが、その回数だけのハンギングロックの搜索は、すでに地方警察によって発動されていた。前にハシー氏に報告されたように、最も不可解な特徴の一つは、ロック東正面の低いスロープにあるいくつかの茂みに、押しつぶされた若干のシダの蘂と傷つけられた葉が見られたほかには、いかなる痕跡もなかったことである。月曜日に謎が解かれていなければ、先住民搜索者がギプスランドから連れてこられることになっていた。それに——これはフィッツヒューバート大佐にそそのかされたのだが——巡査部長の依頼により、ミス・ラムリーの手でラベルが付けられ手渡された行方不明者たちの何点かの衣料品のための、一頭のブラッドハウンド犬も。何人かの地元住民は、警察が周囲の蘂を慎重に徹底捜査するのにすでに手を貸していたが、その中にはマイケル・フィッツヒューバートとアルバート・克蘭ダルも含まれていた。ニュースは、オーストラリアの未開地であっても、都市部と同じくらい早く伝わる。

そして、ハンギングロックから五十マイル以内で、土曜日の不可解な失踪が、日曜日の夕方までに夕食を取りながら議論されなかった家は、ほとんどなかったのである。世の常のことだが、並はずれた人間の興味については、直接的に、あるいは間接的にさえ何も知らなかった人間が、意見の表明において最も語気が強いのだった。それは、物事を一夜にして確立した事実に変化させる方法を持つことで、よく知られている。

十五日の日曜日が女学校の悪夢だったとすれば、十六日の月曜日は、むしろさらに悪くなった。その日は、タイヤがぺしゃんこになった自転車に乗って、メルボルの新聞社から来た若いレポーターによる午前六時の玄関ドアの呼び鈴で始まった。彼は、キッチンでの朝食でコックに元気を回復してもらう必要がある、ニュースなしでメルボルン・エクスプレスで送り返されねばならなかった。この不幸な若者は、もつとずつとたくさんの歓迎されざる訪問者の最初の人間だった。式典の機会以外にはめったに使われない大きく重いヒマラヤスギのドアは、朝から晩までいろいろな訪問者に対して開閉していた。悪意のない者もいれば、単なる詮索好きもいて、血とスキャンダルの臭いに露骨に惹かれてきたオスとメスのハイエナをわずかに含んでいた。これらの者たちは、誰も校舎内に入ることを許されなかった。マセドンから来た副牧師とその親切な妻——二人ともひどく当惑していたが、トラブルのときに手助けしたいという

正真正銘の願望に満ちていた——でさえ、ポーチでのそっけない「不在です」の応対で、ほかのすべての者同様に退けられた。

食事は、通常の機械的に正確な時刻に用意されたが、昼食の席に着いたいつもは腹ぺこの娘たちは、わずかなロス・マトンとアップルパイ以上のものは摂取しなかった。上級生たちは、ほとんど囁き声も立てないグループを形成した。イーディスとブランシエは、鼻をすすり二人で腕を組みうつむいて、このときばかりはそのままだった。ニュージーランドの姉妹は、地震やその他の恐怖の記憶を小声で話しながら、果てしなく刺繍を続けていた。ミランダがピクニックから帰り、どんなに遅くなってもいつもしてくれる彼女のお休みのキスを土曜日の夜じゅう眠らずに待ちながら横になっていたセーラ・ウェイボーンは、頭が大きなハンマーで打たれたようにがんがんにいたミス・ラムリーが、お茶の時間の前に縁を縫われるべきリネンを提示するまで、小さな幽霊のように部屋から部屋へと落ち着きなく動き回った。そのミス・ラムリーと裁縫の准教員は、校長への連続した伝言とその他のやりのない職務に参与してない間は、「搾取」——全能者からそれより下の者まで、権力を持つすべての者に及ぶ使いやすい言い回し——されるという雇用主との相互合意に対し、不平を言っていた。英文学の授業の重要な課題としてまだ黒板にチョーク書きされていたハンギング

ロックについてのエッセイさえ、その授業のある十六日の月曜日午前十一時三十分になっても二度と言及されなかった。ついに、太陽は真っ赤なダリア花壇の背後に沈み、紫陽花は夕闇にサファイアのように輝き、階段の塑像^{そぞう}は暖かい憂鬱な夜に向けてその青白いたいまつを高く掲げた。こうして、二番目の陰気な一日は終わった。

十七日の火曜日の朝のうちに、土曜日の午後消えた少女たちを見た最後の人間である二人の若者は、地方警察にめいめいの供述を書き取らせた。アルバート・克蘭ダルはウッドエンド警察署で、マイケル・フィッツヒューバート卿はレイク・ヴェーの伯父の書斎で。二人とも、四人の少女が池の近くの小川を横断して、ハンギンググロックスの低い斜面の方向に歩き去った後の行動については、全くわからないと主張した。ただたどしい口調で伏し目がちなマイケルは、アルバートが少女たち失踪のニュースをマナッサの店から馬を飛ばして持ち帰ってきた日曜日の朝以来、記憶が頭の中から薄れているように思われた。バンファア巡査部長は、ハイバックの椅子で固くなっているマイケルと向かい合って、大佐の書き物机に座っていた。

通常の形式的手続が完了された後、「思うのですが」と警官が言った。「少し質問を始めた方がよさそうです。全体像のようなものが得られるかもしれないから」内気で魅力的な微笑と英国風の礼儀正しさを持つ若いフィッツヒューバート氏は、明らか

に無口な性格だった。「さてそれでは、あなたは女の子たちが小川を渡っているのを見かけたとき、誰であるかわかりましたか?」「どうすればわかるのです? 私はだいたい三週間しかオーストラリアにいませんし、どの子とも会ったことはありません」「なるほど。その子たちと何か話しましたか?——彼女たちが対岸に渡る、前でも後でも」

「とんでもない! 言ったでしょう、巡査部長さん、私には誰も、見覚えさえないんです」

正直な返答に、巡査部長は乾いた笑いを浮かべ、心の中で付け加えた。「カラスに石を投げろ! ついでにその顔とその金も全部だ!」彼は尋ねた。「克蘭ダルはどうです? 彼は女の子たちに何か言いましたか?」

「いや。ただじっと見て、口笛を吹いただけです」

「あなたの伯父さんと伯母さんは、その間は何をしていましたか?」

「覚えている範囲では、二人とも居眠りをしていました。昼食にシャンパンを飲んで、それで眠くなったのだと思います」

「シャンパンは、あなたにはどんな影響がありますか?」警官は鉛筆を空中に止めて尋ねた。

「知る限りでは何も。私はいつもあまり飲みませんし、飲むときは普通はワインです、そう、家では」

「では、あなたが小川を渡る彼女たちを見たとき、あなたは完全にシラフで、本を持って木の下に座っていた。今はそこからの続きだと仮定してみましよう。たとえ今は重要と思えなくても、どんな小さな細部でも思い出すようぜひ努力してください。これがあなたの方からの完全な任意供述であることは、もちろんわかっていますね？」

「私は小川を渡る彼女たちを見ていた……」彼はつぶやき、もう一度ほとんど聞き取れない声で続けた。「みんな違うやり方だった」

「どうかはつきり言ってください。違うとはどういうことですか？ ロープで？ 棒

高跳びとか？」

「いや、そんな！ 私はただ、機敏だったか、その——優雅だったか、というようなことを言いたかったんです」

しかし、バンファアは、現段階では優雅さには関心がなかった。若者は続けた。「とにかく、私と彼女たちが声の届く範囲以上に離れるとすぐ、私は立ってアルバートの所に話しに行きました。彼は小川でグラスを洗っていました。我々はちょっと話して——ああ、たぶん十分くらいでした。それから、帰る時刻になる前に少し散歩してく

るよ、と言いました」

「それは何時でしたか？」

「時計は見ませんでした、伯父が四時にならないうちに出発したがっていたのは知っていました。私はハンギングロックの方へ歩き始めました。上り坂を上り始めるまでに、若干のワラビの茂みと藪があり、女の子たちはもう見えませんでした。藪は、軽い夏のドレスで取り組む少女たちには、あまりにも濃すぎるようだったのを覚えています。それで、すぐに下りてくる彼女たちを見ることになるだろうと予想しました。私は倒木に二、三分座っていました。アルバートが呼んだとき、私は直ちに小川に戻り、アラブ種のポニーにまたがって、道中のほとんどを伯父のワゴネットの後ろに付いて、家に向かいました。ほかには何も思い出せません。こんなところでよろしいですか？」

「けっこうです、ありがとう、フィッツヒューバートさん。後ほどまたお手伝いいただくかもしれません」マイケルは心の中で呻いた。短いインタビューというものは、過敏な虫歯に穴をうがつ歯医者ドリルにかなり似ているのであった。「記録させてもらう前に、もう一つだけ確認しておきたいのですが」警官は言った。「あなたは、三人の女の子が小川を渡っているのを見たと言いましたね。間違いありませんか？」

「すみません、そうでした、四人でしたね」

バンファアの鉛筆は再び空中に静止した。「四人いたのを忘れさせた理由は何でしょうね？」

「小さくて太った子を忘れていたのだと思います」

「それなら、その子以外の三人はかなり注意して見たということですね？」

「いいえ、見ていません」(神よ、これは真実です。私は彼女だけを見ていたのですから)「もし年配の女性が一緒にいたとしたら、覚えていますよね？」

マイケルは苛^{いら}だ^だ立った様子で言った。「もちろんですよ。ほかにはいませんでした。四人の少女だけです」

これが続いている間、ウッドエンド警察署のアルバートは、ジム・グラントという者——日曜日の朝、バンファアとともにアップルヤード女学校に出向していた若い警官——に対して供述していた。マイケルと違って、警官がこの上なく罪のない言葉に對してなし得るこじつけ曲解にかなり慣れているアルバートは、むしろ楽しんでいた。彼は、日曜日の鬪鶏のささいな出来事を通じて、若いグラントを正式に知っていた。

「言ったら、ジム」彼は言った。「俺はあの娘たちを一度しか見てねえんだって」
「僕が当直のときに、僕をジムと呼ばないでくれると助かるんだがね」怒りで汗を

かきそりな段階に達しているもう一人が言った。「署内では印象が悪い。さあそれで。君は何人の少女があくその小川を渡っているのを見たんだ?」「オーライ、ミスター・ブラッディ・グラント。四人です」

「悪たれ口もいらん。僕は義務を遂行しているだけだ」

「わかっていると思うが」キャラメルの入った小さな袋を取り出し、へこんだ齒にこれ見よがしにその一つを吸い付けながら、御者は言った。「これは、俺がタダで、無料で、警察にやれるだけの供述だ。俺は好意でやっているだけで、それを忘れないでくれや、グラントさん」

ジムはキャラメルによる和解の申し出に逆らって続けた。「君は、フィッツヒューバート氏がロックの方へ歩き始めた後、何をした?」

「大佐が目を覚まし、帰る時間だと叫び出し、俺はマイケル氏の後を追った。彼は丸太に座っていて、娘どもはもう見えなかった。違っていたら首をくれてやるよ」

「その丸太は池からだいたいどれくらい離れていただろう?」

*三人の女の子が小川を渡っている……この四人を三人と誤る内容に該当するセリフは、小説には見当たらない。映画では、「I simply noticed these three young ladies crossing the creek.」というセリフがあった。

「いいか、ジム、あんたは俺と同じく知っている。クソ警察もそのほかの奴らもみんな正確な位置を知ってるんだ。俺がこの前の日曜にバンファア氏本人に教えたんだからな」

「わかってる、僕は事実確認をしてるだけだ——続けて」

「とにかく、マイケルはあのアラブ・ポニーに乗って、まあ奴の伯父さんが乗せたんだが、それでレイク・ヴェーの家まで帰った」

「あの馬はいい！ 幸せな人がいるものだ！ なあ、アルバート、君、あの貴族様にとりなしてはくれないだろうか。ギズボーンまで乗っていつて見せびらかしたいんだけど、どこの貴族様があれを僕に貸してくれる？ ここから五十マイル四方であのポニーにかなうものはない。いいかい、僕が借りたいのは鞍くらと馬勒ばろくじゃなくて……午後乗馬そのもののさ。大佐だって、僕の乗馬の腕が悪くないことを知っている」

「俺があんたをアラブに乗せてやるためにレイク・ヴェーからここまでやるばるやって来たと思うなら……」アルバートは立ち上がりながら言った。「質問は終わりだな？ 失礼するぜ。バイバイ」

「おっと、待った。もう一つ」もう一人のコートの裾を引いて、ジムは叫んだ。「ワゴネツトと一緒にレイク・ヴェーに向かったというフィッツヒューバート氏のそのポニーに、

彼が乗っていたのはいつだ？ 君は道中ずっと彼を見ていたのか？」

「俺のボケ頭の後ろにゃ目は付いてねえよ。奴は俺たちに自分の砂埃がかからないように後ろに付いたり、道によっては前に出たりもしていた。俺たちが同時にレイク・ヴューの表門に着いたとき以外は、たいして気にも留めなかったよ」

「それは何時ごろだったと思う？」

「七時半ってところだな、間違いねえ。コックが俺の夕飯をオープンに作ってくれていたのを覚えてる」

「ありがとう、ミスター・克蘭ダル」若い警官は、やや形式張ってノートを閉じた。「このインタビューはすべて記録され、後に君の了承を得るため提示される。もう行っているよ」この許可は不要だった。アルバートはすでに、道の反対側のクローバーが生えている所に繋がれたイチゴ色の馬の頭に、馬勒をするりと装着していた。

三日連続で、朝、オーストラリアの大衆は、そのとき報道機関に知られていた「女学校のミステリー」の甘美な詳細を、ベーコン・エッグとともに貪り続けた。新しい情報は発掘されず、手がかりに類するものは何もなく、少女たちとその女性教師が姿を消したと土曜の夜遅くベン・ハシーが報告して以来、状況は何も変わっていない。そのため、さらなるスパイス

が水曜コラム欄に載ったかの貴族様の写真に追加された。マイケル卿の先祖代々の家、ハッディンガム・ホール（テラスでスパニエル犬と遊ぶ姉妹たちのはめ込み写真付き）。その自然な成り行きとして、アーマ・レオポルドの美貌、それに彼女が成年に達すると億万長者になるという評判。だが、バンファアは、はなはだ不満だった。ラッセル・ストリートを拠点とする友人のラグ刑事に相談した後、彼は女学生イーディス・ホートンから具体的な証拠となるものをさらに聞き出そうと決心した。それで、事件当日と同様に晴れ渡ってはいしたが、あの日と違って快い微風のおかげで過ごしやすくなった十八日水曜日の朝八時、イーディス・ホートンとフランス人女性教師をハンギングロックのピクニック・グラウンドに連れて行く目的で、彼は付き添いの若いジムと二人、二輪馬車^{バギー}でアップルヤード女学校に到着した。

この取り決めには何となく浅薄な感じがしたが、ミセス・アップルヤードはほとんど異議を唱えることができなかった。警察は、とバンファアは言った、謎を解明するためにできるだけのことをしていますし、自分とラグ刑事の考えでは、重要証人イーディスの記憶の刺激剤として実際の場面に直面させることが必須なのです。イーディスの限定的な知性と無限の強情さを知っている女校長は、軽い脳震盪の可能性も加え、遠征は時間の浪費であると考えてバンファアにそう言ったが、彼はそっけなく取り合

わなかった。どちらかというところではない風采にもかかわらず、バンファーは職務においてはなかなか抜け目がなく、警察の尋問下の人間が見せる反応の種々相に関しては膨大な経験を積んでいた。彼は彼女に告げた。「あの子に思い出させようとしている我々全員が、彼女をいっそう混乱させていたのかもしれない。シヨッキングな記憶を持つ者が、一度出発した所に戻ってみると、すっかり有益な証人に変わることもあるのです。おわかりですね。今回は気楽にやってみることにします……」そういうわけで、リラックスした雰囲気になるよう考慮して、巡査部長は、おしゃれにかわいらしくシャディ・ハットをかぶったマドモワゼルを横に座らせ、自分もドライブを楽しむことにした。彼は、ウッドエンドのホテルで馬を替える間、マドモワゼルにはブランデーとソーダを、イーデイスと若いジムにはレモネードを振る舞うことさえしてみせた。

今、彼らは、聖バレンタイン・デーの午後に、ピクニック・グラウンドの、イーデイスとはかの三人の少女が池のそばの小川を渡った正確な位置に立っていた。まっすぐ前方のハンギングロックの陽の当たる面に、森の木の枝々がかすかに動く影の模様を落としていた。「青いレースのよう」マドモワゼルは思った。あんなに美しいものが邪悪な道具であり得たのだろうか……。 「さて、イーデイス嬢」警官はじゅうぶんな

距離を取り、満面の笑みに父親のような我慢強さで言った。「先日、あなたがまさしくこの位置から出発したとき、どの方角に向かって歩き出したのですか？」

「言わないわ。前にも言ったとおり、私、どのユーカリも同じに見えるもの」

「イーデイス、愛^シしい子^{ユリ}」マドモワゼルが口を挟んだ。「たぶんあなたは、ちょうどそのときに四人でおしゃべりしていた内容を、巡査部長さんに話せるんじゃないかしら……？ 私はある子たちがきつとおしゃべりをしていたと思うのです、バンファールさん……」

「なるほど」警官は言った。「そうでしょうな。イーデイス嬢、どちらに行きたいかを誰が提案したのです？」

「マリオン・クエイドが私をいじめて……マリオンは時々すごく嫌な人になるわ。彼女は、あの上の尖ったものが一〇〇万歳だって言ってた」

「頂上だね。それであなたたちは頂上に向かって歩いたんですね？」

「そうだと思う。私は足が痛くて、あんまり気にしなかった。歩き続ける代わりに倒れた木に座りたかったんだけど、ほかの人たちがそうさせてくれなかった」

バンファールは、マドモワゼルを希望に満ちて一瞥した。その場にはいくつかの丸太と落ちた枝が散在していたが、少なくとも倒木は具体的な取っ掛かりとなるものだ。

「あなたが丸太について思い出したとなると、イーデイス嬢、たぶん何か別のことも思いつくでしょう？　ここからちょっと見回して、何でもいいから思い出せるものがあるかどうか見てください。切り株、シダ、変な形の石……？」

「いいえ」イーデイスは言った。「ないわ」

「おお、そうですか、いいんですよ」昼食後にアタックを再開しようと決心しながら、警官は言った。「どこでサンドイッチを食べましょうか、マドモワゼル？」

ジムはランチ・ボックスを取りに馬車に送り返され、全員が草の上でくつろいでいるうち、イーデイスが突然自発的に言い出した。「バンファーさん！　一つだけ覚えていた気がするものがあるわ」

「すばらしい。それは何ですか？」

「雲よ。おかしな雲」

「雲？　そいつはいい！　残念なことに、雲には空をあちこち動くという点があるのと以外は、ね」

「よく存じ上げておりますわ」イーデイスは、急に大人っぽく上品ぶって言った。「その雲だけはぞっとするような赤い色をしておりました。顔を上げた枝の間からそれが目に入ったので、覚えているのです……」ゆっくりと、彼女はハムサンドを大きく

齧^{かじ}った……。「ちようど私がマクロウ先生とすれ違った後でした」

バンファアのサンドイッチが草の上に落ちたが、彼は気づかなかった。「マクロウ先生だって？　なんと！　あなたはマクロウ先生を見たなんてこれまで一言も言いませんでしたよ！　ジム、ノートを取れ。気づいているかどうかわかりませんが、イーディス嬢、あなたが言ったことはたいへん重要なことです」

「だから申し上げているのですわ」イーディスは乙に澄まして言った。

「あなたの先生が、あなたと三人の女の子たちに加わったのはいつなんです？　どうか一生懸命考えてください」

「私の先生ではありません」サンドイッチをもう一齧りしながらイーディスは言った。「私が上級数学を取ることをママが望まなかったの。ママは、女の子の場所は家庭にあるのだと言っています」

バンファアは、機嫌を取るような笑いをどうにか作った。

「そりゃあそうですね。たいへんもののわかった方です、あなたの母上は……さあ、どうぞ続けてください、マクロウ先生について。あなたがふと顔を上げたとき、先生はどこにいたのです？　すぐ近く？　ずっと遠く？」

「すごく遠くにいるように見えました」

「一〇〇ヤード？ 五〇ヤード？」

「わかりません。計算はあまり得意じゃないので。言いましたよね、遠くって。小川に戻ろうとして走りながら、木の間から遠くに先生を見ただけです」

「あなたはもちろん、下に向かって走っていたんですね？」

「もちろん」

「そして、マクロウ先生は反対方向、上に向かって歩いていました。それでいいですか？」
彼はうろたえた。その目撃証人が身を振り、くすくす笑い出していたからだ。「ああもう！ あの人はとても変に見えたの」

「なぜ？」 バンファアは尋ねた。「これを書いておけ、ジム。なぜ先生は変に見えたのです？」「言いたくないわ」

「どうか教えて、イーディス」 マドモワゼルがなだめすかした。「あなたはバンファアさんに、とても価値のある援助をしようとしているのよ」

「先生のスカートが」ハンカチの角を口の中に詰め込みながら、イーディスは言った。
「スカートがどうしたの？」

イーディスはまたくすくす笑っていた。「あんまり失礼過ぎて、こんな男女混合の集団の中で大声で言うことなんかできないわ」その鋭く青い目が、あたかも彼女の脳

組織に穴を開けてしまうかのように、バンファアは彼女の方に身を乗り出していた。

「私のことなら気にする必要はありませんよ。私は、あなたのお父さんくらいの歳なんですから！……いいから続けてください」イーディスは、聞き耳を立てているマドモワゼルの小さなピンク色の耳に何やら囁いていた。「巡査部長さん、彼女は、マクロウ先生がスカートを穿いていなかったと言っています——オンリー・レ・パンタロン」

「ズロースのことだ」巡査部長は若いジムに指示した。「さて、ではイーディス嬢。あなたが遠くで坂を上っているのを木々の間から見たその女性が、本当にマクロウ先生だったと、あなたは確信していますか？」

「しています」

「衣服なしで先生であると認めるのは少し難しくありませんでしたか？」

「全然。あんなに特徴のある姿をしているのは、ほかの先生方にはいないもの。アーマ・レオポルドが前に私に、『マクロウはアイロンと合同である！』と言ってたわ」

そして、それがイーディス・ホートンから聞き出せた最後で唯一の事実情報の断片であった。二月十八日の水曜日においても、その後においても。

警察馬車が本街道に出るとすぐ、ミセス・アップルヤードは自分の机に決然と座り、書斎のドアに鍵を掛けた。それは習慣になりつつあった。まっすぐ座って、無口に、

表面上は平静を装って仕事に取りかかったとき、彼女はますます外界から漏れてくる詮索好き連中の不満の聲が高まっているのを意識した。変人、聖職者、千里眼、ジャーナリスト、友人、親類、親たちの声。当然、親たちが最悪だった。切手を貼った返信用封筒が同封された、行方不明の少女たちを特許品の磁石で見つけようという申し出を屑籠くすかごに放り込むようには、彼らの手紙を屑籠に投げ入れることなどできるものではない。良識の中核部分の一つが、ピクニックから安全に、首尾よく戻ってきていた娘を持つ親のためにさえ、詳しい情報と安心させる言葉を手紙に書くことがじゅうぶん理にかなったことである、と彼女に告げた。この手紙は、一度に何時間も彼女を机に縛り付け、悩ませ続けるものであった。興奮しきった母親に向けて軽率な言葉を使ったりすると、現段階では、真実という冷水をホースでかけてすら消せないかもしれない嘘と噂の大火災を、容易に引き起こしかねない。

ミセス・アップルヤードの今朝の業務は、不快で果てしなく危険な、ミランダとアーマ・レオポルドの親、およびマリオン・クエイドの法定後見人に、三人の少女全員と一人の女性教師がハンギングロックから不可解にも姿を消したということを知らせる手紙を書くことであった。幸運にも——あるいは、おそらく不運にも——三通の手紙の一通は、あまり遅れることなく目的地に着くだろう。現在明らかになっている理由

から、女学校の謎について公表された報告には、まだ受取人の誰も接していないと思われる。彼女の思考は、再びピクニックの朝に戻っていった。再び、帽子と手袋をして整然と並ぶ少女たちの列と、それを二人の女性教師が完璧に統制している様子を見た。再び、ポーチで蛇と昆虫の危険性を警告している、自分の短い別れの言葉を聞いた。昆虫！ 一体全体、土曜日の午後になが起ったのだろう？ そして、なぜ、なぜ、なぜそれが、アップルヤード女学校の名声と社会的地位にとってあんなにも貴重な三人の上級生に起こってしまったのか？ マリオン・クエイドは、ほかの二人のように裕福ではないものの、すばらしく優秀な学生であり、学問上での栄冠獲得を期待されていて、それはそれでほかの二人とほとんど等しく重要なのだ。なぜ、消えたのがイーディスや、あの取るに足りないブランシェや、セーラ・ウェイボーンではあり得なかったのか？ いつものように、セーラ・ウェイボーンのような考え方には苛立った。十三歳の子供の、ずっと無言で耐えがたいほどの批判を孕んだあの大きく皿のような目。しかし、セーラの学費は、自宅の住所を決して明かさないうちの後見人から常に迅速に支払われている。亡夫アーサーならそう表現したであろう、思慮深く優雅な「明白なる紳士」。

困難な手紙と闘っている間にはよく彼女の手に立っているアーサーの記憶が、あ

の優雅な後見人を彼女の心から拭い去った。が、こういうことの何もかもが、彼女をどこにも導いてはくれないのだった。呻き声のようなものを漏らしつつ、彼女は細い鉄のペン先が付けられたペンを取って書き始めた。最初は、学校の名簿上で疑いなく最も強い印象を与える親であるレオポルド家宛であった。途方もない金持ちで、最上級の国際社会を飛び回っているが、レオポルド氏は今はインドにいて、ベンガルのある領主からポロ用のポニーを買い付けていた。アーマへの最後の手紙によると、彼女の両親は、象と、輿こしと、絹が刺繍されたテントとともに夢のような遠征の途上で、その時点ではヒマラヤのどこかにいたらしい。少なくとも二週間は住所不定である。手紙は、書き手の得心のいく出来映え——同情と現実的な常識が思慮深くブレンドされている——で、ついに完成した。これが受け取られるときまでに、この最悪な事件全体が満足な解決を見てアーマが学校に戻った場合に備えて、同情の言葉はあまりたくさん入れないでおいた。問題は、先住民搜索者とブラッドハウンド犬にも触れるべきかどうか……。彼女には、「すばらしい出来だよ、君、すばらしい出来だ」というアーマーの聲が聞こえてきそうだった。そして、その目的に照らしてみれば、たしかにそのとおりの出来栄である和我々も確認できるであろう。

席次に従うと、次はミランダの母親と父親宛の番だ。北部クイーンズランド奥地の

広大な牛牧場のオーナーである。完全な大富豪階級ではないが、オーストラリアで最も有名な開拓者の家の一つで、その一員としての堅実な富と安寧な生活^{あんねい}を確立していた。乗り遅れた列車とか学校での麻疹^{はしか}の流行とかのつまらないことで大騒ぎしないことが当てにできる、模範的な両親であった。しかし、誰にも予測できないこの不可解極まりない事態ではどうだろう。ミランダは、五人兄弟のいちばん上の唯一の女の子で、ミセス・アップルヤードはよく知っていたのだが、両親が目の中に入れても痛くないくらいに存在であった。クリスマス休暇の間は一家揃ってセントキルダに滞在していたが、先月グリーンウィングの豪奢^{ごうしゃ}な孤立生活に戻っていた。たまたまミランダがほんの数日前に言っていたのだが、グリーンウィングで手紙が生活用品と一緒に届くのは、時に四、五週間に一回くらいになるのだそうだ。しかし、新聞を抱えた詮索好きは訪問者がやって来て、不用意に秘密を漏らしてしまわないとも限らないと、ペン先を舐めながら女校長は考えた。ミセス・アップルヤードが気を配ったとおり感傷に傾かない文面にはなったが、これはこれまで彼女が生涯を通じて書かなければならなかったうちで最も骨の折れる手紙であった。彼女が封筒の折り返しをゴム糊^{のり}で貼り合わせる間、びっしり文字の詰まったページが、自らを運命のメッセンジャーであると称していた。彼女は肩をすくめた。「私は非現実的になってきているわね」そして、机の後

ろの戸棚から一、二口分のブランデーを取り出した。

マリオン・クエイドの法定後見人は家のおかえ弁護士で、マリオンの学費の支払いを除いてはたいてい背景に引っ込んでいた。運よく、彼は現在ニュージールランドにいて、いくつかの人の近づきにくい湖で釣りをする旅の最中だった。ミセス・アップルヤードの聞き及ぶところでは、彼女の保護者は「よぼよぼの老人」であると、近ごろマリオンが言っていたということだ。弁護士はその噂どおりに生活してほしい、また詳しい情報が手に入るまでは事を荒立ててほしくない、という熱烈な願いとともに、手紙は署名され、封緘^{ふうかん}された。そして最後に、グレタ・マクロウの、ヘブリティーズ諸島の離れ島で犬と聖書とともに一人暮らしをしている八十歳台の父親に宛てた一通。娘が十八歳でオーストラリアに来て以来、一行も手紙を書いてよこさないその老人は、ごたごたを起こすこともなさそうだし、また通信さえもしそうになかった。四通の手紙にはすべて切手が貼られ、今夜の列車に投函するトムのためにホールのテーブルに置かれた。

6

二月十九日木曜日午後、マイケル・フィッツヒューバートとアルバート・克蘭ダ
ルは、フィッツヒューバート大佐の観賞用の私有湖に面している小さくて素朴なポー
ト小屋で、バララト・ビターのボトルを前に、友好的な沈黙のうちに着席した。アル
バートは一、二時間は勤務時間外で、マイクは伯母の例年のガーデン・パーティー列席
中、一時的な休憩を取っていた。湖は深く暗く、もの憂い夏の暑さにもかかわらず氷
のように冷たかった。一方の縁には一面に睡蓮が浮き、そのクリーム色の花の杯に夕
刻前の太陽光線を捕らえていた。睡蓮の葉が繁る一角に、一羽の白鳥が珊瑚色さんごの脚一
本で立ち、時々湖面を伝う同心円の波紋のシャワーを放っていた。反対側では、木生もくせい
シダと青い紫陽花の層が、ベランダ付きの低い家の背後に、急に盛り上がっている自
然林と入り混じっている。客人たちは、その家の、楡にれとオークの木々の下の芝生をぶ
らぶらと歩いていた。トレスル・テールブルの後ろの二人のメイドが、イチゴとクリー
ムを給仕していた。それはかなり洗練された一団で、州知事の夏の住居である近くの
政府の別荘からの客たちを含み、雇われ従者一名とメルボルンからの三人の音楽家と

大量のフランス・シャンパンを伴っていた。以前、シャンパン・バーでの給仕のために、御者にぴったりした黒いジャケットを着せるという話があった。アルバートは、自分は馬の世話をするために雇われているのだ、と返事をした。「俺があんたの伯父さんに言ったように、『私は御者であって、クソ・ウェイターではないのであります』」マイクが笑った。「君は船乗りみたいだよ、人魚やなんかを腕中に入れ墨してるし」

「船乗りがやってくれたのさ、シドニーの。胸にも入れたかったんだが、金は使い果たしていた。残念だったよ。まだ十五だったからな……」

こんなふうに死ぬまでずっと消えない醜いものを肉体に刻まれることに対して、十五歳の少年が喜々として最後のシリリングを支払う世界へといざなわれ、マイクは何か畏怖いふのようなものを抱いて友人を見つめた。彼自身の十五歳のときは、一週間に一シリリングの小遣い銭と、日曜日の朝の「募金」のためにもう一シリリングを持った子供以上のものではなかった……。ピクニックの午後以来、快く、多くを求めない友情が二人の若者の間に育っていた。今の彼らは——アルバートは巻き上げたシャツの袖とモールスキンのズボンを着て手足を解放し、マイケルはボタンホールにカーネーションを挿さした堅苦しいガーデン・パーティ用の服を着用している——、不釣り合いな二人組にしか見えなかった。「マイクはいい奴だ」アルバートは友人のコックに言って

いた。「あいつと俺は仲間さ」彼らは、そのかなり濫用らんようされた語のいちばん良い意味においてそうなのだった。自分のくしゃくしゃな弾丸頭の上に、友人のグレーのシルクハットを試していたアルバートが、ミュージックホールの芸人のように見えたという事実も、またアルバートの油じみたつば広帽子をかぶったマイクが、《ザ・マグネツト》か《ボーイズ・オウン・ペーパー》のページから踏み出してきた浮浪者のように見えたという事実も、何の意味もなかった。出生の偶然が、二十歳時点での彼らの一人をほとんど読み書きもできない人間にし、他方をやっと口が利ける程度にしたように——パブリック・スクールの教育も、決して大人の表現力を約束してはくれないのだ。もしそうだととしても、どちらの若者も、お互い相手の面前では自分の欠点を意識せずに済んでいた。

彼らには互いをわかり合えているという心地よい感覚があり、多くを話すこともなかった。会話の話題は主にローカルな関心事で、このときは次のようなものだった。アルバートがストックホルム・タールを塗っていた雌馬の右後ろ脚のこと。時間を浪費するばかりの薔薇園に対する大佐のひどい入れ込みよう。一エーカーのジャガイモよりもべらぼうな雑草取りが必要だし、とにかくどうすればあの薔薇全部を良好に保てるものなのか？ どちらも政治的に厄介な、さらに言えばほかのどんな類の罪を問

われるようなものも、たいして含んではいなかった。活字で書かれたそれらをもし見せられたとしても、彼らはそれを自分たちのものだと思えたことだろう。友情においてはすべてはより単純になる。どうでもいいような事実が友情の邪魔をすることもない。例えば、マイクの父親は英国貴族院の保守党員であり、一方のアルバートの父親は、最後に聞いたときには遍歴中の羊毛刈りの雑役夫で、しょっちゅう毛刈り小屋のボスと不和になったようなのだが、そんなことも彼らの友情を損なうことはなかった。アルバートにとって、フィッツヒューバート青年は理想的な友であった。馬小屋の前庭のひっくり返ったまぐさ箱に何時間でも黙って座り、もう一人が話す土着の知恵と機知に感銘して聞き惚れている。アルバートの身の毛のよだつような逸話のいくつかは真実で、そのほかはそうではなかった。どちらにしてもたいした違いはない。マイクにとって、その御者のあちこちへと飛び回る会話は、一般的な生活のみならず、オーストラリアという国についても、いくらでも湧き出てくる愉快な教えの源泉なのであった。英国で最も古くて裕福な一門の一員であるマイケル卿は、レイク・ヴェューのキッチンではよく「あのかわいそうなイギリス男」と言われていた。非常に多くの物

*《ザ・マグネット》か《ボーイズ・オウン・ペーパー》……いずれもイギリスで十九世紀からずつと発行され続けた物語雑誌。

事を学ばなければならぬことが明白な者に対して、心からの同情心から出た表現である。「まあでも」賃金が週に二十五シリングが適当と見なされたコックが言った。「彼みたいにはなりたくないわ。荷車一台分の金塊を積まれてもね」その間、マイクは居間で伯父と伯母にこう話していた。「アルバートはとてもいい男ですよ。それにすごく賢い。彼はいろいろなことを知っています。そのほとんどは話せるようなものではないんですが」

「ふむ、そうだろう」大佐はウィンクしながら同意した。「かなり粗野な男だが、克蘭ダル青年は馬鹿ではないし、馬に関しては一流だ」大佐の妻は、まぐさと馬糞の中で呼吸するかのように鼻を鳴らした。「克蘭ダルの話がそのとおりになるなんて、想像もできないわね」

この午後のボート小屋の涼やかな平和の中では、冷えたビールの瓶や、影の模様がゆっくり伸びていく穏やかな湖面のせいで、ためになることやその逆のことなど、貴重でわずかな会話だけが交わされた。その一行がだいぶぼんやりして涼しくなってきたとき、はるか遠くで演奏されている《美しく青きドナウ》が、薔薇園から水上に漂ってきた。称賛されすぎた薔薇は、もはや会話では不十分というわけか。大佐は二、三人の男性を選んで、炭酸割りスコッチのタンブラーを持って枝がしだれた榆の木の下

に退いていた。一方のフィッツヒューバート夫人は、レモネードで可能な限り、残りの者とともにパーティを続けた。

「何だ——もう五時すぎじゃないか」マイケルはテーブルの下で長い脚をしぶしぶ解いていた。「あの人たちが行く前に、スプラック嬢に薔薇園を見せるって伯母さんに約束したんだ」

「スプラック？ あのシャンパン・ボトルみたいな脚の？」

マイクは、面識のないスプラック嬢の脚のことなど、一瞬たりとも考えたことがなかった。

「今日の午後、彼女が政府の別荘の馬車から降りてくるのを見たのさ。ああ、それで思い出した——馬丁が言ってたんだが、警官どもが今日またハンギングロックにブラッドハウンドを出すんだと」

「へえ！」もう一人は再び腰を下ろしながら声を上げた。「何のために？ 何か新しいものでも見つかったのかい？」

「それはねえな！ 俺の意見はこうだ。もしラッセル・ストリートの奴らとアボ公の捜査人とヘボ犬でも見つけることができなけりゃ、俺やあんたが死ぬほど心配したところで何になる？（もうボトルを空けた方がよさそうだな）。今までたくさんの人間

が姿を消してるし、俺に言わせりゃ、完全に終わりってことさ」

マイクは円形の輝く湖をじっと見つめていた。彼はゆっくりと言った。「僕に言わせると、これは終わりなんかじゃない。僕は毎晩、冷や汗をかいて目を覚ますんだ。あの子たちが今この瞬間にも、あの地獄のロックのどこかで、喉の渇きで死にそうになりながらも、まだ生きているんじゃないかって……。君と僕がここに座って冷たいビールを飲んでる間にも」マイケルの妹たちが、普段の早口で元気な話しぶりとは非常に異なる、この低く情熱的な声を聞いたとしても、それが兄の声だとはほとんど認識できなかっただろう。彼は自宅では、打ち明け話があったとしても、その相手は老いたコッカースパニエルに指定されていたのである。

「俺とあんたはそこが違う」とアルバートは言った。「忠告するが、忘れるのは早ければ早いほどいいぜ」

「忘れることはできないし、そのつもりもない」

それまでずっと睡蓮の葉の上に浮いていた白鳥が、そのときまづピンク色の脚の一本を伸ばし、それからもう一本を伸ばして、湖を横切って対岸の方へと羽ばたいていくことを選んだ。それが葦の中に消えるまで、二人の若者は黙ってその飛翔を見つめていた。

「ああ、あいつらは本当にきれいな鳥だ、あの白鳥ってやつは」アルバートが言葉を漏らした。「美しいね」マイクが言った。薔薇園で若い女性が自分を待っていることに不幸にも気づき、彼は丸太造りの椅子の下から長い極細縞の脚をつらそうに解いて、立ち上がり、鼻をかみ、煙草に火を付け、ボート小屋のドアと同じくらい遠ざかってから、立ち止まって再び振り向いた。

「聴けよ」アルバートが言った。「俺は音楽についてはたいして知らねえが、ありゃあ《ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン》じゃねえか？ 知事が出発するんだな」

「もしそれでも構わないよ……君に言わなければならぬことがあるんだけど、どこから始めればいいのかわからないんだ」アルバートは、これほど深刻そうな彼を見たことがなかった。「実を言うと……僕はある計画を考えている」

「今は言わないでおきなよ」煙草に火を付けながらアルバートが言った。「とっとと行った方がいいんじゃないかねえか？ あんたが陳列されないと、あんたの伯母ちゃんが必要に立てるぜ」

「伯母さんなんか困らせておけばいい。重要なのは、言わないでおくことができないってことなんだ。今しかない。でないと全部無駄になってしまう。君が昨日教えてくれた乗馬道があるよね？」アルバートはうなずいた。「山のこっち側の平原まで行ける

やつか？」

「君にはたぶん骨折り損になるとしか思えないだろう。でも、僕はそれでも構わない。僕は自力で、自分のやり方で、ロックを捜索することに決めたんだ。警察もいない。ブラッドハウンド犬もない。僕と君だけだ。まあこれは、君も一緒に来て、こういう場合の要領を僕に教えてくれれば、の話だけど。僕たちはアラブとランサーを連れて、朝早く出発し、厄介な質問を何もされることなく夕食までにここに戻る。さあこれで——僕は胸につかえていたものを吐き出した。どうだい？」

「狂ってるな。馬鹿げてる。あんたは行って、ミス・瓶の脚にあの薔薇を見せて、いつか別のときにその様子を話してくれ」

「ああそうかい、君が思っていることなんかわかっているさ」アルバートが完全に動揺するほどの辛辣さで、もう一人が言った。「ハイ！　ちょい待ち、マイク！　俺が言いたいのはだな、ただ——」

「君は思っている。このアホたれときたら、未開地やその他には初心者なんだぞ、ってね。はん、僕だって百も承知だけれど、そんなことはどうでもいい。ついさっきは計画だなんて言っただけで、あれは嘘だ。本当は、計画どころか、漠然とした感触しかない」アルバートの眉がくわっと上がったが、彼は何も言わなかった。「今まで生

きてきて、なすべき正しいことだとほかの人たちが言うから、僕はそれをやってきた。今回は、自分がそう言うからそれをやってみる——たとえ君やほかの連中が、僕の気が触れたと思うとしても、だ」

「こういうことだ」アルバートは言った。「感触もけっこうだが、あのクソ・ロックは一インチごとに歯ブラシで調べられたんだぜ。一体全体、あんたは何ができると思うんだ？」

「なら僕は一人で行くよ」マイクが言った。

「誰があんたを一人で行かせると言った？ 俺たちは仲間だ、違うか？」

「じゃあ君も来てくれるのかい？」

「決まってるだろうが。まったくアホな奴だな——あう、もうやめよう。あまりたくさんのは持って行かない。俺たち二人分のちょっとした食い物と、馬二頭分の餌以外は何もいらん。いつ行くつもりなんだ？」

「君が仕事を離れられるなら、明日にでも」

明日は金曜日で、アルバートの、ウッドエンドの闘鶏に長いこと身を捧げている休日だった。「ああ、それなら大丈夫だ……どれくらい早く出られる？」

フィッツヒューバート夫人のレースのパラソルが、紫陽花の生け垣の上で、彼らに

向かってふらふら揺れているのを見ることができた。それで、明朝五時半に既舎に集合することがあわただしく合意された。

とうとうレイク・ヴューの芝生には人がいなくなり、テントは解体され、トレスル・テールは来年のために倉庫の中へと持ち去られた。フィッツヒューバート夫人の馬車室の、ピンクの絹の笠が付いたランプが薔薇色の光を発したとき、眠そうなムクドリが、いちばん高い木々でまだおしゃべりをしていた。

外では、長い紫の影たちが、ハンギングロックの、特定の人間以外には知られていないであろう表面を横切って、夏の夕方の、それらの一〇〇万年にわたる図形の跡をまたたどっていた。くたびれた青いサージ地の背中たちが、ターコイズの空でゆっくり暗くなっていく金色の頂上の壮大な光景の上を引き返すと、その警察の一团は待機していた車に乗り込み、ウッドエンド・ホテルのおなじみの慰安に向かって急いだ。バンファーマー巡査部長は、個人的にはロックとその神秘などはもうたくさんという気分ですばらしい天気と気の合う仲間たちがいたにもかかわらず、その日はまるで甲斐のない一日であることが判明した。少女ホートンの時機を逸した証言があったので――それを証言と呼べるならば、だが――、捜査は直ちに強化され、それはブラッドハウ

ンド犬の再起用を含み、犬にはミス・マクロウの下着から一片のキャラコが与えられていた。イーディスが、実は白いキャラコのズロース姿でロックを登っていく数学教師を見て追い越していたということは、疑う理由はなさそうだった。しかし、その漠然とした無言の邂逅は、実証されないままだった。そして、ミス・マクロウが、同じようにその怯えた少女への一瞥を経験したかどうかともまた立証されなかった。岩壁の西端の方の藪とワラビの茂みのわずかな攪乱跡は、この前の日曜日の朝と同じくらい早く記録された。それは、昼食後、ミス・マクロウが一行のほかの者たちを残して立ち去った後に通った道の一部である可能性があると考えられていた。その跡はすぐにはほとんど消えていた。非常に不思議なことに、四人の少女たちが危険な登山を開始したらしい東端では、下生えに、ある別のかすかな擦過傷や打撲傷が見られたのだが、それとほとんど同じ高さの溝のある岩で、その攪乱跡も消失していたのである。ブラッドハウンド犬は一日中、濃く繁ったくすんだ色の藪と陽光の照りつける岩や石を通るそのデリケートな道を嗅ぎ回り、漁り回った。犬は、その週の前半、同じように三人の行方不明の少女の臭いを結局拾えなかったのだが、おそらく、手が埃っぽい巨礫の上に乗り、足が弾力のある苔の上に乗り、といった具合に、最初のとらえどころのない足跡を消し去ってしまったていたボランティア捜索隊の善意の集団に、ひどく妨

害されたのであった。それでもその動物は、木曜日の午後の間に、頂上からかなり離れた平らな岩のほぼ円形の足場の上で、十分間近くも気色ばんでうなりながら立つことにより、若干の空頼みを抱かせはした。頂上では、拡大鏡が、何百年、あるいは何千年にもわたる自然の力の破壊よりも新しい、いかなる乱された痕跡も絶対に存在しないことを明らかにした。馬車の弱い灯りで乏しいメモに目を通しているバンファーは、あの教師の紫の絹のケープの一部あるいは全部が、くぼんだ丸太に詰まって、あるいはことによるともう知るものか！ 何百人もの人間が日曜日以来ずっと藪の辺りを歩き回っていたことを考えてみる。もちろん犬もだ」

そうしている間に、その夜の山の大半の住人と同様、フィッツヒューバート大佐とその甥は、ブラッドハウンド犬の再起用について議論していた。フィッツヒューバート夫人は、歓待の苛酷さに疲れ切って、ベッドに引っ込んでいた。大佐は、ブラッドハウンド犬にひどく失望していた。彼は当初から犬を信じており、手がかりの発見が不首尾に終わったことによって、ほとんど自分の威信が傷ついたと感じた。「たしかに」彼は食卓越しに甥に言った。「私は、この事件が犬やら何やらにとっては手に余る」と考え始めている。あの気の毒な少女たちが消えてから、次の土曜日で一週間にな

る。ポートワインを飲むか？　もう今ごろは、あの地獄の絶壁のどれかの底で、十中八九死に絶えていることだろう」年配の男性が心から心配しているように見えたので、マイクは明日のハンギングロック遠征計画を打ち明けてしまおうかと思った。しかし、伯母が千の異議を唱えることは間違いない。黙って胡桃くるみを弄もてあそんだ後、彼は金曜日に一日アラブ馬を使ってよいか尋ねた。「アルバートの休日ですよね。彼はだいたい長いドライブに僕を連れて行きたいと言っています」

「いいとも。どこに行こうというのかね？」

ささいなことさえ、嘘をつくときはいつも及び腰になるマイクは、キャメルズ・ハンプがどうのとつぶやいた。「すばらしい！　克蘭ダルは、この土地を自分の手の甲のように知っている。彼は君に、ギャロップでも穏やかに行ける路面を選んでくれるよ。明日の午後に「ローズ・ショー委員会」がなければ、私も一緒に行きたいところだ」(助かった、ローズ・ショーに祝福あれ！)「それから、夕食には遅れないように」大佐は付け加えた。「君の伯母さんがどれほど騒ぐか、わかっているね」もちろんわかっていたので、マイクは遅くとも七時にはレイク・ビューに戻ることを固く約束した。

「それで思い出したんだが」伯父が言った。「君と私は、土曜日に政府の別荘で昼食

とテニスをする事になっておる」

「昼食とテニス」自分とアルバートがピクニック・グラウンドの池まで行くのにどれくらいかかるものか、ひそかに推算しながら甥が繰り返した。

「桃をどうかね？　あるいはこの地獄のようなゼリーのシロモノは？　女性たちは家庭のような身近な団体には無頓着だと見える」月の下でロックをさまよっていたマイクは、灯りに照らされた現実の食卓に引き戻された。「夏のたびに同じ物を……君の伯母さんのガーデン・パーティの夜は……このいまましい残飯——コールド・ターキーの食べ残し……ゼリー……ディナーになりました。むしろ夕方の軽食に近い……我々はよくボンバラにキャンプに行ったものだが、私は自分の任務にしていたものだ。使用人を手配して——」

「すみませんが、伯父さん」マイクが立ち上がりながら言った。「僕はコーヒーを待たずに寝るつもりです。朝早く出発する予定ですから」

「わかった——楽しんでおいで。早めの朝食を用意するよう頼んでおくがいい。ギャロップの前のベーコン・エッグに及ぶものはないからな。おやすみ！」

「おやすみなさい」……卵。ポリッジ……アルバートによると、ハンギングロックには真水すらないという。

山の止むことのない風の夜は、絹のベッド掛けの下、まだ真鍮しんちゆうのベッドで眠っている居住者たちが、シダで縁取られた川の音と遅咲きのペチュニアの香りで目を覚ます、静かな風のない夜明けまで続いた。マイクが自分の部屋のフランス窓から抜け出し、彼の伯母のクジャクが早い朝食を取っている、露で重くなったクローケー場を横切ったとき、大佐の湖の睡蓮がちょうど開き始めたところだった。先週土曜日のイヴェント以来初めて、彼はやや浮き浮きした気分だった。このように絶妙な秩序の支配する世界にあつて、ハンギングロックとその不吉な暗示は、そこから押しつけられた悪夢なのであつた。トチノキの並木道では鳥たちが目覚めてさえずり、鶏の庭では雌鳥が鳴いていた。子犬は、新しい日を迎えるすべての隣人への奮起を鼓舞しつつ、うれしそうに吠えていた。細長い煙の螺旋が、使用人がすでに火をおこしているフィッツヒューバート家のキッチンから立ち上っていた。

急に朝食抜きで来てしまったことに気づいたマイケルは、アルバートが何か昼食を用意するのを忘れないでいてくれることを祈った。厩舎に着くと、御者が白いポニー

の腹帯を締めているのが見えた。「グッドモーニング」快い英国発音でマイケルが言った。ボンド街から青ナイル川に至るまで、午前九時前に出会うどんな人間に対してもグッドモーニングを言うのが、上流階級のイギリス人の習慣であった。アルバートの反応は、彼の階級および国にふさわしいものであった。「ハイ！ ユー！ あんたが茶を飲めるような気を回していたならいいんだが？」

「問題ないよ」紅茶を淹^いれる知識が、ケンブリッジの自分の部屋でのアルコールランプと銀の茶漉^{ちやこ}しに限られているマイケルが言った。「ブランデーを満たした携帯容器とマッチを持ってきた。知ってのとおり、僕だって未開地のことが少しはわかってきているからね。ほかに何かある？」

アルバートは、彼に父親のような笑顔を向けた。「俺たちの食糧は、マグや折り畳みナイフと一緒に湯沸かしの中にあるだけだ。それに、清潔な布きれと少々のヨードチンキ。俺たちが一旦捜し始めたら、何を見つけたことになるのかはわからん……おい……そんなにクソ情けねえ顔をするなって。あんたが考えたことなんだからよ……それに二ロットのまぐさ。あんたは鞍にこいつを結ぶ。おう、そこだ、ランサーの。

こいつは起き抜けはちよいと元気がないんだ。な、先輩？ いいか？ 出発だ」

急なチヨクレート色の道の外側では、レイク・ヴェーそばのいくつかの別の世帯

が起き出して、真鍮の湯缶と朝のお茶のトレイの用意で、煙突から煙を上げていた。フィッツヒューバート家とその友人たちは内輪の小さな共同体を形成し、たいへん行き届いていた。コリンズ・ストリートに散在する医者たち、二人の最高裁判所裁判官、英国国教会司教、弁護士たち、テニスをするその子女たち等々。皆良い食事、良い馬、良いワインを楽しんでいた。楽しく快適な人々にとっては、現在のボーア戦争は、ノアの洪水以来最大級の破滅的事件なのであり、近づいているヴィクトリア女王のジュビリーは、芝生の上のシャンパンと花火で祝われるべき世界的一大イヴェントなのであった。

二人の若者は馬に乗り、飾り立てた木の馬小屋の前で、馬丁がポンプの水で自分の体をざぶざぶ洗っているのを追い越した。その馬小屋はマイケルによって「芸術的」であると呼賛され、アルバートによって「風変わりながらくた」であると呼べられた。二輪のカートをおもむろに進めていく無精髭の生えたミルク屋（あの野郎、ミルクを薄めた廉で、先週ウッドエンドで罰金を食らったんだぜ）、格子を設けられたベランダの階段を掃いているハウスメイド、デルフィニウムで縁取られた砂利敷きの六フィートの車道、ツルバラの垣根の後ろで大声で鳴いている鎖で繋がれた見えない犬。道は、まだ露が重い眠れる庭々の間を魅力的にゆるやかにうねり、山の高い方のス

ロープの影を落としていた。汚れないテニス用芝生、果樹園、ラズベリーの茎の列などを真下にして、原始林の帯が走っていた。青々と茂った庭は、マイケルがイングリンドで見たどの庭とも違っていた。それらには心を打つ無邪気さがあった。柳と楓^{かえで}、オークと榆の中に位置する赤い屋根の家々の平凡な建築様式を補っているその庭を、快楽の園と称賛する一種の無頓着な陽気さ。夏の長い間じゅう、ほぼ熱帯のものと云ってよい光を受けて薔薇が輝く肥沃^{ひよぐ}な火山性の土壌は、無数の谷川によって灌漑^{かんがい}され、巧妙に展開されていた——こちらのシダの岩屋とあちらの金魚の池が、ミニチュアの滝の上のティーハウスの、田舎風の橋で繋がれていた。マイクは、椰子^{やし}、デルフィニウム、ラズベリーの茎が並んで生長しているこの奇妙に恵まれた土地に心を奪われていた。伯父が夏の終わりにメルボルンに戻るのを嫌がるのも不思議ではないと思われた。

「お偉方に交じってここで生活するのには大金がかかる」アルバートが言う。「レイク・ヴェューで雇われている使用人を見みてろよ！ 馬小屋の俺。庭師小屋のカトラー夫妻。家の中のコックと女の子二、三人。それに、クソみたいな薔薇園と、一年中ガツガツと大食らいな飛び切りの馬ども四、五頭は言うまでもねえ」マイクは、オーストラリア関連の投資を調査する労を執ることはなかったが、紫色と黄色のパンジーで輝く花

壇の、手入れされたプリヴェットの垣根を検分することにはかなり興味を持っていた。道の外にまで漂ってくるそれらの芳香は、なぜか夜明けの浮遊する色と光への完璧な伴奏のように思われた。

「あの何とかという花の名前は何か？」アルバートが尋ねた。「いい匂いだろう？ ああパンジーか、そうだ。あれは俺の妹が好きな花だったんだ」

「かわいそうに！ 今は、君の妹さん、自分の花園があればいいね」

「俺が知る限りでは、どこかの変わり者のじいさんが数年前にあいつを気に入ったらしいが、俺はそれしか聞いてない。実を言うと、俺はあいつが孤児院を離れた後、一度だけ見かけたことがあった。あいつはいい子なんだが、ちょっと俺に似て——たわごとだと思ったら誰だろうと聞き入れないところがある」

彼らが話している間、アルバートは、片側が森の広がり、もう片側が古い苔で覆われた果樹園に接している狭い道の右側に、ランサーの手綱を引いて寄せていた。その果樹園では、長い草の中のアヒルたちが馬を尻込みさせた。ここでは、村の生活の素朴な風景と音が置き去りにされていた。彼らは森の緑の暗がりに入っていた。「この道で少なくとも五マイルは近道になるのさ。こっちのどこかに、山の向こう側の真下に出られる多少でこぼこした道がある」行程の残りは、さらなる会話も、道を曲が

ることも、落木の間を縫っていくことも、小川を走ることもなく進められた。時折現れる鳥やウサギ以外に遭遇した唯一の生き物は、ランサーが踏み付けそうになるヒリュウシダの茂みから跳び出した小さなワラビーだけだった。アルバートの二個の錫製のマグは、大きな黒馬が後ろ脚で跳ね上げたため、シンバルのような騒々しい音を立て、後方数インチのポニーを動転転倒させそうになった。アルバートは肩越しに笑顔を見せた。「このチキン馬を死ぬほど怖がらせるんだ、ワラビーどもは。大丈夫か？ あんたが落馬しちまうかと思ったよ！」

「僕がカンガルを初めて見たんだったら、落馬に値するところだっただろうね」
「言っておくがな、マイク。あんたはたまにしようもないアホになるかもしれないが、そのポニーは問題なく扱うことができてるぜ」やや皮肉なお世辞だが、それでも評価はしている。

彼らが森を出て、木がさらにまばらな反対側の土地にやって来たとき、朝は熱気で霞んだ空の下でつつがなく進んでいた。彼らは日陰に馬を止め、眼下に広がる平野を見下ろした。まっすぐ前方には、ハンギングロックが、青白い草の海の上に孤立して壮麗に浮き上がっていた。マイクが繰り返し見る悪夢のぞつとするような洞窟よりもさらに不吉な、ギザギザの山頂部と尖った石の群れにいったいに陽を受けて。「調子

が今ひとつって感じだな、マイク。腹pecoでこんな所まで来るのは百害あって一利なしだ。とっとと行って、小川に下りたらすぐに弁当にしようや」

先週の土曜日以来多くのことが起きていたせいで、あの日彼らが昼食を取り、アルバートが小川でグラスをすすいでいたのと同じ場所が、何もかもその状態のままであると気づくのは驚きであった。彼らがピクニックで焚いた火の灰は、まだ野外炉の黒くすすけた輪を埋めており、小川は、音を立てて流れていたあのとき以来、今も同様に滑らかな石の上をさらさらと流れていた。馬たちは繋がれ、あの日と同じブラックウッドの木々の下で餌を与えられた。あの日と同じ日光が葉の間を縫って漏れかかっている昼食が、草の上に敷いた新聞紙の上に置かれた。コールド・ミートのスライス、トマトソース瓶、ミルクなしの甘茶が入った野外用ポット。「食えよ、マイク。腹が減ったって言うてただろ」

今は空腹からはほど遠く、彼は今朝ロックを最初に見たときから、コールド・ラムで満たす力では歯が立たないような、精神の空虚な疼き^{うず}に打ちひしがれていた。生ぬるい影の中で仰向けに横たわりながら、彼は火傷^{やけど}するような茶をマグで次々と飲み干した。アルバートは腹一杯の食事を終え、ブーツの爪先で火の残る灰を踏み消すとすぐ、マイクの時計で十分間経過したら尻を蹴ってくれるよう頼んで、草の上に寝転がっ

た。数秒のうちに彼はぐっすりと寝入り、いびきをかいていた。マイクはその場を離れ、土曜日の午後、四人の少女たちがそれぞれのやり方で渡っていた小川のそばに立った。ここで、巻き毛で小柄な色黒の少女は、水を見下ろして一瞬の間立ち、それから笑って、巻き毛を振り広げながらジャンプした。中くらいの背丈の細身の少女は、瞬時のためらいもなくそれをクリアし、一度も振り返らなかった。ずんぐりと太った少女は、もろい石の上で危うく足を踏み外すところだった。背が高く色白で金髪のミランダは、白鳥のように水面すれすれを渡っていった。三人のほかの少女は、ロックの方へ歩き去りながら、話し合い、笑い合っていたが、ミランダだけはそうせず、片方の頬に落ちた黄色いストレート・ヘアの一房をかき上げるため、対岸に一瞬とどまっていた。そのため、彼は初めて、その真面目な表情をした美しい顔を見たのだった。あの子たちはどこに行こうとしていたのだろうか？ あの子たちは、あの最後の陽気な運命の時間に、どんな不思議な少女らしい秘密を共有したのだろうか？

アルバートは、その短い人生の中で、マイクが決して目を閉じることがなさそうなさまざまな場所で眠ったことがあった。いかかわしい橋の下や、空洞の丸太の中や、空っぽの家や、さらには小さな町の留置場の黴菌だらけの小部屋でさえ。彼は犬のように、深く気まぐれにどこでも眠って、今この状況でさえ、さっぱりした気分で立ち

上がり、髪をくしゃくしゃにしていた。「何とかさんの手がかりはあったか？」彼は鉛筆の使い残りを取り出して知りたがった。「もし俺がちょっとした計画を練ったなら、あんたは付いて来てくれるか？ あんたはどこから始めたい？」

本当にどこから？ 子供のころのマイクは、多少文明化した森の中で妹たちと一緒によくかくれんぼをして、ツツジや窪みのあるオークの暗い避難所にうずくまった一度、見つけてもらえずにずいぶん長いこと待ち続けた後、突然パニックに襲われた彼は、鬼たちを見つけようと走り出た。その鬼たちは、彼が死んだか、あるいは永遠に行方不明になってしまったという恐怖に襲われ、ずっとすすり泣いたり泣きじゃくったりしながら家まで戻ったのである。何らかの理由で、彼は今そのことを何もかも思い出している自分に気づいた。ハンギングロック事件の結末は、たぶんそんなものなのだろう。アルバートにさえ伝えられないその考えは、否定できないと思われた。犬や原住民搜索者や警察の搜索は、一つの見方でしか見ておらず、またおそらく正しい方法でさえない。もしそれがいずれ終わるのなら、この目的のあらゆる搜索に何も関係を持たない、突然の予期せぬ発見で終わることさえあるかもしれない。

それぞれの若者が、アルバートの計画によって与えられたどの範囲を搜索するか、その手はずが整えられた。洞窟や、突き出した岩や、落木や、あるいは行方不明の少

女たちに最小限の保護を与える余地のある何らかのものに、特に留意して捜すという計画である。

ロック南西端の木々の茂みの中の、ある空き地が、十四日金曜日の午後、少女イーデイスが泣きわめき、髪を振り乱しながらこちらに向かつて走ってきたとき居合わせた何人かの証人によって、特定されていた。それゆえ、アルバートは、そのポイントから自分の捜査割り当てを引き受けることを選択し、それに応じて、かつてはワラビとブラックベリーが繁った長い森の道があったと噂されている低いスロープの注意深い検証に、口笛を吹きながら着手した。彼の色褪せた青いシャツが木々の間に消えるほんの少し前、マイケルは歩くのをやめていた。ふと振り返って肩越しに見たアルバートは、気の毒な男の気分が悪くなっているのではないかと思った。雲をつかむようなクソ仕事なんだからな、間違いない……。

実際は、友は暖かい緑の深みから溢れ出ている森の命のざわめきに耳を傾けていた。真昼の静寂の中、神が与えたもうた安息と活動の間のバランス感覚をとりの昔に放棄した人間を除くすべての生き物が、自分たちの標準的なペースを落としていた。

カールした茶色の滑らかな葉が彼の接触を受けてクシャッと音を立て、彼のブーツは蟻と蜘蛛の巧妙な住居を踏みつぶした。連続する樹皮を擦る彼の手が、厚い毛皮の

コートをまとった毛虫たちの、のたうち回る集団を追い払った。もろい石では、眠っているトカゲが目覚まし、ドスンドスンと足音を立てている怪物の接近から安全な場所へと飛び退いていった。上りが急になるにつれ、藪は次第に深くなった。荒い息をし、光る額の上で水気が黄色い飾りとなっている穏和な青年は、足を一步踏み出すたびにくすんだ緑を通じて派手な死と破壊を繰り広げつつ、腰の高さのワラビの茂みを押し分けて進んだ。

彼の後ろ、おそらく五〇ヤードくらい下方に、池があった。まっすぐ前方に、まばらに木の生えた傾斜。このどこか、たぶんまさしくこの地点で、ミランダは、マイク自身が現在そうしているように、ワラビの茂みの斑点の間を通して先導し、ハナミズキの中に飛び込んでいったのだ。ロックの垂直の正面が次第に近づくにつれ、大きな石板と空に聳える長方形が、シダで覆われた低いスロープの屈託ない魅力を拒むようになっていった。今は、朽ちた植物と動物の腐敗物——骨、羽、鳥の糞、脱皮した蛇の抜け殻——の層の上面を、有史以前の岩と巨礫の露出が強引に押し進んでいた。中には、ギザギザの角や突き出した棘のようなもの、嫌らしい隆起やかさぶたのある腫れ物のようなものを伴う岩もある。その他のものは、一〇〇万年の時の経過によって、滑らかに角が取れ、丸くなっている。これらの荘嚴な岩のどれか一つを、ミランダは、

その美しく疲れた頭を載せる枕にしたのかもしれない。

マイクは、何の特定のプランも念頭にないまま、まだよろよろと歩き、登っていたが、後方でかすかな、しかし紛れようのないクイーが聞こえてきて立ち止まった。彼は時間の勘定が全くできなくなっており、ピクニック・グラウンドが木々の間でピンクと黄金の光の斑点に収縮しているのを肩越しに見て驚いた。彼は再び、さっきよりも大きく、強要するような調子になったクイーを聞いた。正午にアルバートと別れてから初めて、四時前に彼と池で落ち合う約束をしていたことを思い出した。すでに五時半になっていた。ポケットの中の豚革のノートブックから、彼は数ページを破き、それらをアメリカ・シヤクナゲの低木の小枝に慎重に刺し通した。それらを静かな夕暮れの大気の中の小さな白旗のように垂れ下がるままにし、小川まで自分の足跡をたどり直した。茶を入れたマグを持って彼を待っているアルバートは、報告すべき成果を何も持っていないかった。彼は、異常なものは何も見えておらず、レイク・ヴェーと自分の夕食の食卓に戻りたくてうずうずしていた。「おや、俺はあんたが消えちまったかと思ひ始めていたところだ。こんなに長い時間、いったいあそこで何をしてんだ？」

「捜してた……また見つけることができるように、低木に手帳を破いた小さな旗を付

けてきた」

「策略家じゃないか？ まあ、茶を飲めよ。とっとと帰ろうぜ。俺は八時の夕食にあんたを家に帰すと、コックに断言してきたんだ」

マイクはゆっくりと言った。「僕は帰らない。今夜は」

「帰らないって？」

「聞こえただろ？」

「何てこった！ 狂っちゃったのか？」

「君は家で、僕が夜はウッドエンドに滞在していると言えばいい。騒ぎにさえならなければ、どんなクソ法螺ぼろでもお好きなように」アルバートは、新しい敬意を抱いて彼を見ていた。ちなみに、それは彼が「言葉」と呼んでいたものをマイクが使うのを初めて聞いた瞬間だったのだ。彼はピンク色から赤々と燃える色の空をちらっと見て、肩をすくめた。「もうすぐ暗くなる。ちょっと考えてくれ。あんたが一人で夜じゅうここに留まって何になるんだ？」

「それが僕の務めだ」

「あんたが捜してるものが何なのかは知らねえが、暗闇の中じゃ見つかりっこねえって。それだけは言ってるやれる」

今やマイクは、激しい信念をもって本気で罵^{のの}っていた。アルバートを、警察を、他人事に鼻を突っ込み続けるゲスな輩^{やから}を、オーストラリア人だからと、どんなクソ物事だろうと何だっけ知^しっているつもりになっているクソどもを――。

「あんたの勝ちだ」アルバートは、馬の方に歩きながら言った。「その鍋の中の、食い物の残りを置いていく。あんたのバッグにはポニーの餌がまだ少し入っている」マイクはきまり悪そうに言った。「ついさっき言った名前の中に、君を入れたことを謝るよ」

「ああ、あんたは間違^{まちが}っちゃいない……もしあんたがそう感じていたなら……。じゃあバイバイだ。俺は行くぜ。いいか、明日発つ前に、火を消すんだ。俺は、週末にハングングロックの山火事との格闘に精力を使い果たすのはごめんだからな」

ランサーはしきりに出発したが、アルバートは山の方の平地に馬をゆっくり駆けさせた。彼は、二本のユーカリの木の間の脇道にどこで出られるかを正確に知^しっており、間もなく見えなくなった。

水平な黄金の平地を横切^{よこ}って、長い影が森の外を這^はい、フェンスの杭^{くい}と横木の細い線と、何頭かの散在する羊と、最後の陽光を受けている静止した銀の羽の風車とを渡^{わた}っていった。ロックの上では、一日中悪臭を放^{はな}つ穴と洞窟の中にしまっておかれた

暗闇が薄暮の中にしみ出して、夜になった。アルバートはもちろん正しい。マイクにも、夜明けが来るまで自分には何もできないことはじゅうぶんわかっていた。この奇妙な土地では何時に太陽は昇るのか？ 彼は樹皮を取ってきて、消えそうな火をもう一度おこし、その気まぐれな光によって嫌々ながら肉とパンを食べた。彼の背後では、ロックが星のない空に向かって見えない圧力をかけていた。数ヤード離れた所で、アラブが小川で水を飲むように、動く白い斑点が行き来した。横たわった瞬間、夜の空気が彼を震えさせたが、大量のワラビがまずまず快適なベッドを作ってくれた。彼はジャケットを脱ぎ、それを折り畳んで身体に掛け、空を見上げて仰向けになった。人生でただ一度だけ、彼は戸外で眠ったことがあった——カンヌを目指し、どこかの丘で道に迷ったケンブリッジの友人たちのグループと、コート・ダジュールで。星とブドウ園と、近くに灯り、それに少女たちのための敷物とその日の小旅行で残されたフルーツとワインがあった。そのときは雄壮な冒険の頂点のように思えたことを思い出して、彼は自分の十八年間でどうにも途方もなく幼かったに違いないと考えた。

やがて彼は、もろい石の上のアラブの蹄の輪が、ハッディンガム・ホールの自分の部屋の雨戸を引いているメイドになるという、半覚醒状態の夢の中へとまどろんでいった。まだ半分だけは目覚めている意識の中で、彼はアニーがまだブラインドを引

き上げないでいてほしいと願ひ、それからオーストラリアの夜の、きっちり引かれた黒いカーテンを自覚した。彼はマッチを手探りし、地面の上の自分の傍らにある時計の表面を、炎がちらつく間だけ見た。まだ十時にしかなくていなかった。もうすっかり覚醒し、身体のうちこちが痛んだため、彼は火の中に折った枝を投げ入れて、小川に映った火花のシャワーの中でめらめらと燃えている枯れ葉の冠を見つめながら横になった。

日光の最初の微光が見えたとき、彼はすでにお茶のポットを沸かしていた。それを、何匹かの砂糖蟻が巣穴に丸ごと引き込もうと努力していた何も塗らないパンと一緒に急いで飲み込むと、彼はポニーに最後のまぐさを与え、出発の準備が整った。何日も経ってから、バンファアがもう一度彼に質問を浴びせかけることになるのだが、そのとき彼は、小川を渡ってロックに向かって歩き始めた当時、自分には何の明確な実行計画もなかったことに気づいたのだった。あるのは、旗を付けた小さな藪に戻って、そこから再び搜索を始めるのだという衝動だけだった。

昨日と同じくらい暖かく風のない、第二の輝かしい朝だった。果てしないように思われた眠れない夜の後で、腰の高さのワラビをかき分けて強引に進むのは、冷やされた体への建設的な救援となった。発育不全のアメリカ・シャクナゲが、今はもう露で

ふやけている紙切れによって、容易に位置を突き止められた。カササギたちが辺りに響き渡る朝の喜びのうなりを上げている前方の木々を通して、一羽のオウムが素早く飛び去っていった。シダと葉のレースのような緑に覆い隠されて、ハンギングロックの恐るべき胸壁はまだ見えなかった。彼が、どうやら底なしらしい裂け目から片方の足を脱出させようと立ち止まった数ヤード先で、小さなワラビーが、一種の自然の競技トラックを連想させるジグザグ・コース上のシダの間から、ぴょんぴょんと跳び出してきた。動物たちには、人間よりもよく知っている特定の何かがあるものだ——例えば、マイクのコッカースパニエルは、猫やその他の敵たちに半マイル離れていても気づく。ワラビーは何を見て、何を知っているのだろうか？ 岩棚から彼を見下ろして立ちながら、どうやら彼に何かを教えようとしているようだ。その穏やかな目の中には恐怖はなかった。岩棚の上に立ち上がるのはかなり容易だが、その小さな生き物が跳躍前進して姿を消した藪の中を追いかけるのはそうはいかない。彼が今自身を見いだした岩棚は、枝の乱れたユーカリの木々で陰になった、石と巨礫と細いシダの茂みで囲まれた溝のある岩の自然の足場に隣接していた。ここで彼は、一瞬だけだったが、自分の重い両脚を休ませることを強いられることになった。それどころか、頭は頭とは思えず、ずきずき疼く肩の上のどこかに繋がれた風船に近かった。健啖^{けんたん}なイギリス

人の、ベーコン・エッグとコーヒーとポリッジの摂取に慣れ、それをよく反復練習している肉体は、その持ち主が空腹に気づいていないにもかかわらず——氷水を数ガロン飲みたいという激しい渴望に悩まされているだけ——、不平を叫んでいた。傾斜した岩が不十分な影を差し出していた。頭を石の上に置くと、彼はたちまち疲れ切った浅い不完全な眠りに陥ったが、突然片方の目の上に刺すような痛みを感じて目を覚ました。血が枕の上にすーっと流れ出た。枕と言ってもそれは、彼の燃えるような頭の下の方と同じくらい固く鋭いものだった。体の残りの部分は、死んだように冷たくなった。彼は震えながら、上掛けを取ろうとして手を伸ばした。

最初、それは、窓の外のオークの木に止まった鳥たちの声だと思われた。彼は目を開いて、長く尖った銀色の葉が重い空気の上で垂れ下がって静止しているユーカリの木々を見た。それは、彼の周囲すべてからやって来るように思われた——低く言葉にならない囁き、時に笑い声の小さな奔出のような一種の震え声を伴う、ほとんど遠くの声のような囁き。だが、この下の海の中で、誰が笑っているというのだろうか……？彼は、時に背後で、時にすぐ前方で、美しい鈴のような音を響かせているオルゴールを探しながら、粘っこく暗い緑の水を強行に前進した。緑を通り抜ける役立たずの両脚を引きずっていたが、もっと素早く動くことができさえすれば、彼はそれに追いつ

いたかもしれない。突然それは止んだ。水は次第に濃く暗くなっていた。彼は自分の口から泡が出ているのを見て、息が詰まり始め、思った。「これが溺死するときの感覚なのだ」そして、額の切り傷から頬に流れている血を、咳で吐き出しながら目覚めた。

すぐ前から彼女の笑い声を聞いたとき、彼は完全に目覚め、よろめきながら歩いていった。「ミランダー！ どこだ？……ミランダー！」応える声はなかった。彼は藪の帯に向かって、全力で走り始めた。棘だらけの灰緑色のハナミズキが、透き通るようなイギリス人の皮膚を引き裂いた。「ミランダー！ 今や巨大な岩と巨礫が高台の道をブロックし、それぞれが悪夢のような障害物となり、大きさと輪郭に応じて、どうにか歩き回られ、よじ登られ、潜り込まれることになった。それらは次第に大きく、異様なものになっていった。彼は叫んだ。「おお、消えてしまった美しい君、君はどこにいますか？」危険な地面からほんの束の間目を上げると、石柱が太陽を背にして黒く見えた。彼がギザギザの突起の上で滑って転ぶとともに、少量の小石が下の割れ目に転がり落ちていった。痛みの槍が彼の足首を突き刺し、彼は再び起き上がって次の巨礫の上に自分を引きずり上げ始めた。彼の頭の中には、一つだけ意識している考えがあった。「進め」。^{*}アジャナクルで血まみれのバリケードを切り開いて進むフィッツヒュー

バート家の祖先も、ほぼ同じように感じていた。実際、家の紋章は、まさにこの語句のラテン語を含むものであった。「進^gめ^o」ⁿ。約五世紀後のマイクも、進み続けた。

アルバートにとって、自分の直接の問題の埒外のことうちがいで心配させられるのは新しい感覚であり、気に入らないことだった。金曜日の晩に山を越えて家に帰りつつ、彼の思考は、小川で一晩中一人で過ごしている友人へと立ち戻り続けた。あの哀れなウスノロは、肩を安定させるための穴を掘るといふ、ワラビのベッドの上で快適に過ごせる方法があることすら知らないだろう。あるいは、マセドンの平原では夏でさえ非常に早く寒くなるのだが、夜中にそうなったとき、一握りの樹皮で火を付ける方法も知らないだろう。間違いなく、マイクの肌の下には何かが入り込んでいる。アルバートにはそれが何かはわからなかったが、それはあったのだ。たぶんマイクの家のようなイギリスのお偉方連中は、みんな気の触れた世界にいるのだ。それとも、行方不明の娘を捜すなどというこんな馬鹿げた振る舞いの中にはすべて、すばらしい何かがあるのだろうか？ アルバート自身は、かつてバララト・レースに行つて、四十倍

*アジャンクール……フランス北部、カレー付近の村。百年戦争中、ヘンリー五世の率いた英軍がフランス軍に勝利した地(1415)。

の配当金で大勝することになる穴馬に、五ポンドの有り金全部をつぎ込むという理由のない衝動を経験している。おそらくマイクは、娘たちの捜索についてそれと同じような気持ちでいるのだろう。自分としては、娘たちのことなどいい加減うんざりなのだ……十中八九はかなり前に死んでいるだろう、そうなれば……。彼は、今夜はコックがお茶を温かくしておいてほしいと思った。ボスに対しては一体全体何を言えばいいのか？　このような厄介な黙考に耽^{ふけ}りつつ、アルバートは手綱を緩め、家へゆっくり馬を走らせた。

彼がレイク・ヴューの門に入ったとき、暗闇が陰気で神秘的な香りとともに道を満たしていた。ランサーの鞍を外し、厩舎の庭でホースの水をかけた後、温められたステーキ・アンド・キドニー・プディングとアプリコットのタルトの気前のよい一盛りによって元気を回復させるべく、彼はキッチンへ向かった。「中に見に行った方がいいわよ」コックがアドバイスした。「ご主人は、あなたがあまりに遅くなったことや何やらでやきもきしているわ——マイケル若様と何をしてきたの？」

「奴なら大丈夫だ。茶を飲み終えたら行ってみるさ」タルトを重ねて取りながら御者は言った。十時を過ぎており、アルバートが大声で咳をして鉛柵の窓をノックしたとき、ボスはベランダのフランス窓を開いたまま、書斎で一人、ペイシェンスに興じていた。

「お入り、克蘭ダル。マイケル氏はいったいどこにいるのかね？」

「彼からのメッセージがあるのです。私は——」

「メッセージ？ 一緒に帰ってきたんじゃないのかね？ まったく、何が狂ってしまったのだ？」

「何もありません」アプリコットのタルトを食べている間にでっちあげ続け、今は年配の男性のとがめるような青い目から逃れることのできる適切な嘘を必死に探しながら、御者が言った。「何もないとはどういうことかね？ 私の甥は、夕食を外で食べる予定だとは言っていないかったが？」レイク・ヴェーでは、当然あるべき通知なしで食事を欠席することは、ほとんど極刑に値するのだった。

「彼はそんなに長い時間外出しているつもりではなかったのです。事実はこちらです。我々は、帰宅の途につくのをちょいと手遅れになるまで放ったらかしになりました。マイケル氏は、マセドン・アームズに泊まって、明日帰ろうと考えたのです」

「マセドン・アームズ？ ウッドエンド警察そばの、あのみすばらしい小さな宿屋にか？ そんな馬鹿な話は聞いたこともない！」

「思うのですが」アルバートは、上手な嘘つきが皆するように、自信を増しながら言った。「彼は、それが結局は迷惑をかけずに済む方法だと考えたのでは？」

大佐は鼻を鳴らした。「コックが三時間もの間、夕食を温め続けていたことを考えてみる」

「ここだけの話ですが」アルバートは言った。「マイケル氏は、今朝日なたで長時間馬に乗り続けた後、少々へばっていました」「おまえたちはどこまで行っただけ？」大佐は尋ねた。「かなり遠くまで。夜ウッドエンドで立ち止まってるんびりするというアイディアを彼に思い付かせたのは、実は私です」

「では、それはおまえのすばらしいアイディアなのだな？ あの子は大丈夫だと考えていいのだな？」

「全く問題ありません」

「夜の間、アラブがちゃんと馬小屋に入れていることを祈ろう——あそこにもし馬小屋があればの話だが——よろしい、もう下がっていいぞ。おやすみ」

「おやすみなさい。明日ランサーはご入り用ですか？」

「イエス。というか、ノーだ。くそつ。甥に会うまでは、土曜日の準備がでкин。我々は政府の別荘でテニスをするようになっておるのだ」

頭が枕に触れた瞬間にたちまち夢のない深い眠りに陥るのが常だというのに、アルバートは、常に手の届かない場所からマイケルの声が助けを呼び続けている不安な夢

の連続のうちに、残りの夜を過ごすことになった。それは、時に湖から小さな窓に吹き込んできたり、時に街路からの呻き声の疾風となったり、時にほとんど彼の傍らで耳の近くに響いてきたりした——「アルバート、どこにいるんだ、アルバート？」

——それで彼は現実に汗をかきながらベッドで身を起こし、すっかり目を覚ました。

太陽が昇り、オレンジ色の光で小さな部屋を満たしたとき、今回ばかりはその光が明白な救いとなり、起床し、ポンプの下に頭を置き、馬を手配するための時間となった。

朝食の後一直線に、誰とも言葉を交わさず——仲良しのコックにさえ——彼は既舎のドアにメモをピンで留め、ランサーに鞍を置き、山のピクニック・グラウンドへと出発した。「すぐ戻る」彼は偽って時間を稼ぐ目的で故意にそう書いておいた。この瞬間、マイクがレイク・ビューまで戻る数マイル以内の地点を、平穩に早足で駆けている可能性があるとすると、家中に騒ぎを引き起こすのは意味がない。理性が、不安の理由など何もないと主張した。マイクは道を知っていたし、それを馬で走る経験も積んでいたが、それでもなお、あらゆる道理に反して付きまとい離れない恐怖が尾を引き続けた。

ゆったりしたキャンターで歩くうち、ランサーは間もなく高い森の木々の間の柔らかな路面に出た。そこでアルバートの経験を積んだ目は、めったに使われない道の赤

く湿っぽい表面に、昨日自分たちが付けた以外の蹄の跡がないことを確認した。至る所で、彼は鞍の上から前方に首を伸ばし、アラブがシダの間から彼に向かって体を揺らしながらやって来て、そのポニーの真っ白なたてがみが目に入ることを期待した。森の木々がまばらになった道の最も高い地点の、自分とマイケルが昨日の朝止まったのと同じ木の下で、彼はランサーを止めた。平原の向こう側ではハンギングロックが、真昼の光と影の強烈なコントラストをなして聳え立っていた。もう今ではよく知っているその壮麗さをほとんど見ることなく、彼の目は、白く動いている斑点を見つけようと、陽炎の揺らめく何もない平野を見渡した。乾燥して滑りやすい草ともろい石の上を下降するのは、ランサーのような足のしっかりした動物にとってさえ緩慢になった。結局、平原にずるずると滑り降りて、四フィート下に水平な地面を感じるやいなや、馬は再び風のようにそこを離れた。ピクニック・グラウンド外縁のまばらな樹木の帯に入ると、大きな馬は急に立ち止まり、そのせいで騎手はもう少しであぶみを踏み外しそうになった。馬は、それと同時に霧笛のむせび泣きのような、林間の空き地に響き渡る長く耳障りないなきを上げていたが、それに対し、もう一頭の、ほんのかすかな声が応答した。数秒のうちに、鞍を付けず、端綱^{はづな}を地面に引きずった白いポニーが、藪の中から彼らの方に走ってきた。アルバートはひどく喜び、鞍に楽な姿勢

で座り直し、小川に戻る道を二頭の馬たちが導くのに任せた。

小川のそばのブラックウツドの日陰は、涼しくて心地よかった。一見して、二人の若者がそこで最後の夜に別れたときと、何もかもがほとんど同じように見えた。マイクがおこした火の灰は暖炉の石を輪のように取り囲み、オウムの羽根がつばに刺さった彼の帽子は前と同じように伸びた枝に下がっていた。近くに、ポニーのすばらしいイギリス製の鞍が、滑らかな切り株の上に置かれていた。「上に袋を投げかけておくくらいでできたろうに」アルバートは、専門的な関心を寄せて思案した。「みんなカササギの糞だらけだ。それに、あのアホタレは何だって帽子をかぶろうと考えなかったんだ？ 二月のオーストラリアの太陽にあんまり慣れていなかったってことなのか……」アルバートのここ数時間の疑念と恐怖は、わけもなく苛立ちに、また怒りにさえ席を譲った。「いまいましいクソボケが！ あいつがクソ・ロックの上のどこかに行つて道に迷っていることは賭けてもいい……。ちくしょう、こんなことに関わるんじゃないかったぜ……」それでもそれに関わっている彼は、藪とワラビの茂みの内外を這うようにしながら、苦勞してロックに続く新しい道を探すのだった。

昨日のアルバート自身のものも含め、足跡の選択肢はどっさりあった。マイケルの乗馬ブーツの細い跡は、緩い土壌の上では容易に拾い上げられた。それらがロックの

石と瓦礫がれきの中で次第に消え始めたら、困難が始まるだろう。ほんの数フィート離れた場所にある別の足跡の列に気づいたとき、彼はわずか五十ヤードほどマイケルの通った跡をたどっただけだった。それらはほとんどほかの列と平行だが、小川に向かつて麓まで下降している。「妙だな……奴は上って、同じ道をまた下ったように見える……あん？ あっちのありゃあ何だ？」

マイクが、下になった片方の脚を折り曲げ、叢くさむらに覆いかぶさるようにして横向きに倒れていた。意識はなく、死んだように青ざめていたが、呼吸はあった。彼は、つまりいてその叢の上にどさりと倒れ込み——おそらく、肋骨か足首を骨折した可能性が高い。額を横切る傷も、顔や腕の擦過傷も、その原因となるものは見当たらなかった。アルバートは、骨折に対してのじゅうぶんな実践的経験を積んでいた。楽な姿勢に動いたりはしない方がよい。しかし、新鮮なワラビの上に頭を載せ、小川から水を汲んできて、青ざめた埃だらけの顔から乾いた血を拭う処置は施した。ブランドーの携帯容器がまだ上着のポケットに入っていた——彼はそれを非常に慎重に取り出して、もう一人の唇の間に二、三滴無理矢理流し込んだ。少年は、あごの下に酒を滴らせながら、目を開かずに呻き声を漏らした。マイクは、蟻と飛び回る蠅に付きまとわれつつ、この地面の上にどれくらいの間横たわっていたのだろう？ 皮膚はアルバートの手の下

で冷たく湿った感じがする。総合的に見て、これ以上時間を無駄にすることなく、すぐに助けを呼びに行くことを彼が決心するほど、この哀れな男は危険な状態に見えた。二頭の馬については、アラブは元気いっぱい、ランサーは安心して数時間日陰でおとなしく繋がれたままの状態にしておける。彼はすぐにポニーに鞍と馬勒を付け、ウッドエンド・ロードへと出て行った。ほんの数百ヤード進んだくらいで、コリー犬を連れた若い羊飼いが、囲いの向こう側で牧場をぶらぶら歩いて行くのが目に入った。アルバートが大声で叫んだ声が聞こえるくらい羊飼いが近づいたとき、彼はちょうどウッドエンドのマッケンジー医師にさよならを言ったところだと叫び返してきた。医師は羊飼いの妻が産んだ息子を取り上げていたのだった。大きなオレンジ色の耳が光を背にぱたぱた動くという状態で、得意な父親は二つの赤い掌てのひらをカップ型にして、砂埃の中にどなった。「キッチンはかりの秤で九ポンド七オンス、見てびっくりの真っ黒髪なんだ」アルバートはすでにアラブの手綱を引いていた。「今どこにいる？」

「ゆりかごの中だろうさ」羊飼いは言った。彼の素朴な心は、健やかな赤ん坊に完全に独占されていた。

「子供じゃねえよ、もう——ドクター！」

「ああ、彼！」羊飼いはにっこり笑って、空っぽの道の曲がり角に向かって曖昧に手

を振った。「彼はギグの中だ。おまえさんのそのポニーならすぐ追いつくさ」この楽しい夏の午後にあつては生きるか死ぬかなどどちらでもよいというコリーが、アラブの右後ろ脚にふざけて噛みつこうとしたため、馬は砂埃の道をものすごい勢いで駆けていった。

マッケンジー医師のギグはすぐに追いつかれ、ピクニック・グラウンドの方へ引き返すことになった。アルバートが離れたときと完全に同じ体勢で、マイケルはまだ横たわっていた。ときぱきとした専門家としての見立ての後、その老人は、ぴかぴかの黒い革靴から包帯と消毒液を取り出して額の傷を処置した。おお、希望と癒しの小さな黒靴たちよ——それらは、ギグやバギーのシートの下で牧場や未舗装の道路をゴトゴトと揺られながら、どれほどの単調な道のりを運ばれていったことだろう。辛抱強い馬は、小さな黒靴を運びつつ、不幸に見舞われた下見張りの小屋から医師が出てくるのを、太陽や月の下でどれほどの時間立って待ち続けたことだろう？「見たところ、深刻なケガはしておらん」マッケンジー医師は叢の上のマイクのそばに跪きながら言った。「足首にひどい痣^{あざ}がある。たぶんロックの上のどこかで転んでできたものだろう。それに軽い日射病。重要なのは、できるだけ早く家のベッドに運んでやることだ」医師のさまざまな用途に使うバギーの上掛け（片面が豹柄で、もう片面は防水

の艶やかな黒地」と二本のまっすぐな若木で工夫した間に合わせの担架で、マイクはギグに巧妙に持ち上げられた。「青年は私に任せて——道路に放り出さないようにうまく運ぶことにかけては、私は三十年の経験を積んでるよ」彼は、羊飼いの妻とともに厄介な九ポンドの子と夜中まで格闘していたため、びっくりするほどしわがれ声で手際が良く、びっくりするほど穏やかだった。

アルバートはポニーに乗り、ランサーの端綱を引いて、そのすばらしい動物をひどくうんざりさせつつ、ギグの前を緩やかに進んでいった。その小さな行列がレイク・ヴェューの通りに入ったのは、真夜中近い時刻だった。ウッドエンドから数時間前にメッセージを急送された大佐は、強風用ランタンを持って門の外をゆっくりと行ったり来たりしていた。彼の妻は、マイクが無事に帰宅の途についたことを確認すると、あえて就寝することにした。昔からこの家族の友人であるマッケンジー医師は、ギグの横に身を乗りだした。「心配ないよ、大佐。足首の捻挫と額の傷についてはな。ひどいショックを受けてはいるが」

玄関ホールでは、メイドが湯の容器と新しいリネンを持ってうろついていた。マイケルは羽布団や湯たんぽとともにベッドに寝かされ、温かいミルクを一口飲んだ後に一瞬だけ取り憑かれたような両目を開いていた。「少年は地獄を経験していたのだ」

医師はそう判断した。彼は声に出して言った。「注意してくれ、大佐。絶対安静、面会謝絶、質問もなしだ——少なくとも、彼が自分から話し始めるまではね」大佐はしどろもどろに言った。「一体全体、何だつてマイクは、一晚中ハンギングロックに自分から残ったりしたのかを知りたいのだが？」怒りの発作と秘められた不安の交替で一日を過ごした後で、彼は爆発地点に近づいていた。「くそつ、克蘭ダル！ マイクはウッドエンドの宿屋に泊まるという昨夜のあのたわごとは何だ？」

「まあまあ、大佐、過ぎてしまったことは仕方がないよ」医師が遮った。「少年はベッドで安全無事で、それが何より大切なことだ。克蘭ダルについては、彼は一刻も浪費することなく助けに行ってくれたわけだし、君はその幸運に感謝することだってできる」

アルバートは、無表情で、食堂の食器棚の脚にブーツの爪先をぶつけていた。「こんな具合だったんです。あなたの甥は、あの少女たちをもう一度捜すため、金曜日にピクニック・グラウンドに行く決心をしたんです。いえ、理由は私にはわかりません、あなた以上にね。帰宅する時刻になっても、彼はまだロックの上をぶらぶら歩き回っていて、家に帰る気はないようでした。私は彼の気を変えさせるために最善を尽くしたんですよ。私の言葉をとんでもない嘘っぱちだと思うなら、別の御者を雇うことで

す」アルバートが、そうなればアラブ馬とコップ馬には優しくおやすみを言い、ランサーには最後のブラシをかけてやってから、誰にも知られていない場所にちょっとした調教をしに行くか、などと考えていた数秒の休止の後、大佐は手を差し出した。それがひどく疲れた老人の震える手であったのを見て、アルバートは憐れみのようなものに苛まれた。^{さいな}「私が言ったことを信じてくれますか？」

「信じるよ、克蘭ダル……。肝をつぶされたがな。チキンを食べるがいい」

「まず馬を見て、それから寝る前に一口齧りますよ」

「ではウイスキーを飲むか？」

「遠慮しておきます。そろそろお暇します^{いとま}んで。おやすみなさい、サー。おやすみなさい、ドク」

「おやすみ、克蘭ダル。今日は手伝ってくれてありがとう」

「克蘭ダルについては、君が正しい。あれはいい子で、ひどく粗野だが、いなくなればかなり寂しく思うだろう」大佐は自分に酒を注ぎながら言った。「こんなふうに一日中知らせを待ってうろうろしているのは腹が立つ。それよりも、いかなるときも最前線であれ、だ。ウイスキーと一緒に飲んでくれるかね？」

「ありがとう、だが帰って部屋着を着るまでは、酒は飲まないよ。妻がいつも夕食を

少し残しておいてくれるんだ」彼は小さな黒鞆を拾い上げ、革の馬車用手袋を装着した。「この近くで、ちょうど体が空きそうな看護婦を知っている。フィッツヒューバート夫人の同意が得られれば、午前中に彼女をよこそうか？ よし。私は一兩日中に来る——ご希望ならもっと早く。その間に、看護婦には必要な指示を全部しておくよ」

フィッツヒューバート大佐は、ギグが影の中に消え去るのを見送りながらホールに立ち、灯りを消した。マイクの部屋の開いたドアの外で常夜灯がかすかに光を放ち、メイドが靴を脱いで椅子でうとうととしていた。彼は寢酒を注いでから、机のカレンダーの日付を変更する毎晩の儀式を執り行うために書斎に入った。二月二十一日土曜日。何てことだ！ 日曜の朝だ！ 二月二十二日日曜日。ハンギングロックでのあの地獄のような事件から、正確に八日間だ。

アルバートは、馬の世話をするにすぐ、メイクされていないキャスター付ベッドに服を着たまま倒れ込み、眠りに落ちた。すっかり目が覚めて、窓の小さな灰色の四角い光を見つめるまで、彼には枕の上に頭を置く暇もほとんどなかったように思われた。昨日の出来事が、もはや昨夜のように肉体の消耗によって混乱に陥らず、ジグソーパズルのピースのように巧妙に収まるべき所に収まった感触があった。鍵となるピースの一つが欠けていることを除いては。それはどれで、図案のどこにぴたりはまる

のか？　まずは土曜日の朝、叢の上に倒れているマイクを見つけたところから始めるのがよさそうだ。転んで足首をケガする前に、あいつはどれくらいさまよっていたんだ？　アメリカ・シャクナゲの茂みに戻って、そこからまたスタートしたのか？　あの馬鹿馬鹿しい小さな紙の旗……！　次の瞬間には、アルバートはベッドから跳び起きて、ブーツを履いていた。

彼がまだ露で重い芝生を横切り、勝手口から暗く閉ざされた家の中にこっそり入ったとき、鳥たちは栗の木で眠っていた。メイドはマイケルの部屋の外で静かにいびきをかいていた。反対側のフィッツヒューバート一家の部屋からは、男と女が眠っているリズムカルな音が発せられていた。薬を飲まれたマイクは、軽く呻きながら仰向けに寝ていた。彼の乗馬ズボンはひどく破れて汚れており、ベッドの端の椅子の背に掛かっていた。アルバートはマツチに火を付け、用心深い手をそのズボンのポケットの中に滑り込ませた。ありがたい、豚革のノートがまだそこにある！　彼はそれを窓の所に持っていくき、その弱い光で、走り書きされた記録をページを繰りつつゆっくりと解読し始めた。それは去年の三月の初めから始まっているようだった。最初は、『カントリー・ライフ』から写されたケンブリッジの住所への、ジステンパー治療の予約メモ——テニス・ラケットの依頼。比類ない商品である駆虫粉末剤を伝えるページの

反対側で、ついに彼は探しているものにぶつかった。鉛筆で書かれた、歪んだ大文字の走り書き。

アルバート 茂みの上 僕の旗

急げ 高い高い場所の輪

急げ 見つけ

ここで文字は次第に消えている。アルバートはそれを何度か読んでからページを切り離し、ノートを乗馬ズボンのポケットに戻した。「茂みの上。僕の旗。急げ」彼は、ロツクの高い場所に重要な手がかりを見つけたことを伝えようとしているマイクが、自分の肩越しに見ているのを感じることができた——それは、小川のそばで気を失おうとしているときに、アルバートへの指示を書き留めようとするほどに重要なものなのだ。「僕の旗」小さな旗のことを考えると、彼はベッドの前に行き、上掛けの上でぐったりとした、青筋の浮いた手を優しく撫でずにはいられなかった。「ひどく粗野な克蘭ダル青年」大佐は自分の御者にそうレッテルを貼ることを常としていたが、ブーツを履いているために不器用な抜き足差し足でマイケルの部屋から出て行くこの瞬間、

克蘭ダル青年に粗野なところはなかった。一刻の猶予もないことを確信し、彼は酔って寝ているメイドに大佐を起こしに行かせた。その結果、日曜の朝の眠りから引きずり出されたマナッサの店の少年が、家庭用自転車の上で半分だけ目覚めつつ、ウッドエンド警察署に知らせに行くことになった。一方、イチゴ色の馬に乗ったアルバート自身は、ロックへの途上に設定された集合場所で警察の一团に加わるために、馬を駆った。バンファア巡査部長も、普段なら警察の援助に来るマッケンジー医師も、体が空いていなかったため、マセドン南部のクーリング医師が若いジム（ノートを携え、バンファアからすべてを書き留めて自分は何もしゃべらないよう厳命されていた）に伴うのに同意していた。二人が乗る馬車には担架と医薬品が装備されていた。

ピクニック・グラウンドの門を通り抜けたとき、太陽は高かった。アルバートは、シャツのポケットにピンで留められた、ノートから破いた貴重なページを持って、馬を早足で歩かせていた。二人の青年は間もなく、土曜日の朝早く、小川から立ち去ったマイケルの足跡を拾っていた。生長不良のアメリカ・シャクナゲの上に、小さな白い紙の旗が、真昼の静寂の中で力なくぶら下がっていた。アルバートは、走り書きされたページをポケットから何度も何度も取り出した。『茂みの上、僕の……』『ああ……』警官は、通常の素人連中への軽蔑心に反して、感心して声を漏らした。「だか

ら彼はそれをそこに置いたんだね？」

「おんや、あんたはこれがここに生えたとも思ってたのか？」

彼らは、傷つけられ乱されたシダを追いつつ、黙々と上り坂をたどっていった。医師は、あまりにもびったりとした黄褐色の日曜日用ブーツで、都会的にゆっくりと歩きつつ、少し遅れて付いてきた。「わからないね」警官は言った。「オーストラリアの新参者が、いったいどうやってこんな所を登ったのやら」

「オーストラリアに一定期間滞在した場合、イギリス人の中には、叢林の中でも平気な人間が存在するんだ」クーリング医師が敗北を認めた。

「あいつには、俺ら三人を合わせた誰よりも、クソ知能とクソ度胸があるんです」

「とは言うものの」足が急速に腫れ上がるのに比例して気分がささくれ立っていく医師が言った。「無駄足に終わるような気がするな。昨日までロックには重要なものは何も転がっていなかったんだから当然だろう。ずっと前から誰もそんなものは見ていない」アルバートは友人の擁護に急いだ。「あんたはマイクを知らないんですよ、ドクター。見つけてもいないのに見つけたなんて書く奴じゃないんです」だが、ジムと違って感心していない医師は、すでに滑らかな岩を選んで座り、ブーツの紐を緩めていた。「もし何か見つかったなら、ジム、ホイッスルを吹いてくれないか。そうすれ

ば私も君らを追うから」

アルバートとジムは、テリア犬のように茂みを嗅ぎ回っていた。「あの藪が折られた箇所が見えるか？ まだ青い。マイクが土曜の朝、茂みに入った場所に違いねえ」そのとおりだった。彼らは、登っていく足跡をたどって再び登り始め、足元の、隠れた岩や穴に大声で悪態をついた。「彼がメモの中で言っている輪というのは何だろう？ ダイヤモンド指輪かな？」

アルバートは鼻を鳴らした。「石の輪だろ、きっと」

しかし、ジムはどちらかと言えばダイヤモンドと考える方を好んだ。「あの女学生たちの一人は莫大な財産の相続人だってことを忘れてないか、アルバート。我々警官は、こういったケースではいろんな角度から物事を見るよう訓練されてるんだ」

「それより自分が進んでいる場所を見た方がいいぜ、ジム青年、でなきゃ崖を越えちまうぞ——あの前の岩は、石柱モリスと呼ばれるものだ」

「知ってるよ」もうい石につまづきながら警官が言った。「ちなみに、あそこのあの二つの大きな巨礫は、平衡バランスを保った巨礫ボウルダーズと呼ばれている」石柱モリスと同じ高さで、どうやらマイクは左に鋭角に進んだようだった。雲一つない空高く、頂上のノユギリ状の尾根が黄金のようにきらめいた。

「きれいだと思わないか？ いい絵ハガキが作れそうだ——おい、あれは何だ？ あっちの地面の上」

ちようどうとうとしていたクーリング医師は、警官用ホイッスルの切迫した鋭い響きで目を覚まし、ブーツを履き、音源に向かって登り始めた。彼の歩みは、アルバートの補助を受けてさえ耐えがたいほど遅かった。そのアルバートは、死体がどうのと支離滅裂なことをしゃべりながら、顔面蒼白で下り坂の道をやって来て、今は藪と恐ろしい岩の間を医師を引きずって歩いていた。彼らが平衡を保った巨礫パラランシング・ボウルダーズに着いたとき、ジムの方は記録と測量に四苦八苦していた——「遅過ぎたようです、先生。かわいそうに」

「おい、黙りやがれ」アルバートがうなった。彼は、茂みに入って嘔吐する代償として、一ポンドを支払ってしまうところだった。カールした髪の毛、小柄で色黒のそれは、二つの巨礫の低い方からまっすぐ下方に傾いている岩棚の上で、一方の腕を頭上に伸ばし、暑い午後眠りに落ちた小さな少女のように、顔を下に向けて横たわっていた。血痕の付いたモスリンの胴部の上空には、小さな蠅が群がって飛んでいた。大いに喧けん伝でんされたその巻き毛は、埃と血が付着してもつれていた。「まだ生きているとしたら奇跡だ」その体の横に跪き、確かな専門家の指をぐったりした手首の上に置きながら

医師が言った。「神に誓って、脈がある……生きている……弱々しいが、間違いない」彼はぎこちなく立ち上がった。「克蘭ダル、君は下に担架を取りに行ってくれ。その間、我々はここに留まって、ジムは記録を付け終え、私は彼女を動かせるようにしておく……。彼女に触れたり動かしたりはしていいだろうな、ジム?」「はい、先生。死体に触れることについては、バンファア氏がうるさいもので」クリーリング医師は厳格に言った。「死体ではないぞ、青年。生きて、呼吸をしている少女だ。おお、神よ!我々が何かをする前に、君のノートをちゃんとチェックしておくことだ」

もみ合った跡も暴力を受けた形跡もなかった。医師が精密検査なしに見立てられた限りでは、少女はどうやら大きなケガはしていないようだった。奇妙だったのは、裸足なのに足は完璧にきれいで、擦過傷も打撲傷も全くなく、ピクニック・グラウンドで最後に目撃されたときには、アーマは白い透かし模様のストッキングと、革紐で結ばれた黒い山羊革の靴を身に着けていたことが後に明らかになったのに、そのいずれの物品も出てくることがなかったことである。

ジム・グラントは、戻り次第バンファアに報告書を差し出すため、ウッドエンド警察署で馬車を降りた。まだ意識不明の少女が、アルバートとクリーリング医師によってレイク・ヴェューの門の所の庭師小屋に運び込まれたのは、日曜日の午後遅くなっ

らだった。庭師の妻カトラー夫人の保護の下、少女はそこでいちばん良い寝室に寝かされた。ラベンダーと台所石鹼の香りがするカトラー夫人の長いキャラコの寝巻を着せられた彼女は、広大なダブルベッドの上、パッチワークの上掛けの下で、目を閉じて横たわっていた。その姿は、カトラー夫人が後に「どう見ても小さな人形のように」と夫に言ったとおりに見えた。「リアル・レースで縁取られた、哀れな子羊！」のすばらしいキャンブリック製ペチコートとズロースとキャミソールは、破れと汚れがひど過ぎたため、その善良な女性が月曜日の朝に胴釜の下にくべて燃やすことを引き受けた。カトラー夫人をひどく驚かせたのは、その子羊が、コルセットなしでロックに横たわっていたそのままでの状態で搬入されたことであつた。男性のいる場所ではコルセットという言葉を絶対に口にしない慎みある女性である彼女は、医者にはそのことをノーコメントのまま通した。医者は、少女が、その馬鹿げた衣服の一点だけをさっ引いて、極めて実用本位な服装で学校のピクニックに行っていたのだと単純に思い込んだ。コルセットについての彼の見解には、多くの女性が不平を言うだろうけれども、このような具合であつたため、失われたコルセットという貴重な手がかりは追求されることもなく、警察に伝達されることもなかった。また、アーマ・レオポルドは服装の好みが難しいことでよく知られており、二月十四日土曜日の朝には長くて軽い骨の

サテンのフランス製コルセットを身に着けていたのを数人のクラスメートに目撃されていたのだが、アップルヤード女学校の同居人たちにもコルセットの消失は伝達されることなく終わったのだった。

肉体は汚^{けが}されておらず、純潔のままだった。注意深い検査の後で、クーリング医師は、少女を苦しめていたのはショックと野ざらし状態であり、それ以上に深刻なものはないと言明した。骨折はなく、ただ顔や手に二、三の小さな切り傷と打撲傷がある。特に手の方は、爪がひどく割れていた。頭の、ある範囲の打撲傷に見合った脳震盪の可能性があり、たいしたことはなさそうだが、彼としては別の専門家の意見が欲しかった。「ううむ、神に感謝せねば！」前の狭い廊下で心配して待っていたフィッツヒューバート大佐が言った。「私と妻の考えでは、レオポルド嬢は回復して動けるようになるまでここにいればよい。カトラー夫人は一流の看護婦だ」

日没時、マッケンジー医師が帰宅途中にマイケルを見るため立ち寄った際、彼はちょうど立ち去ろうとしていたクーリング医師と協議するためにロッジに行った。「賛成だ、クーリング」老人が言った。「奇跡だな。通常のあらゆる教科書基準によれば、患者はとっくに死んでいるはずだった」「ロックのあそこで何が起こったのかを知るためなら首を差し出しますよ」クーリングが言った。「ほかの二人の少女はいいどこ

にいますんでしょね？ それにあの女教師は？」マイケル・フィッツヒューバートとともに、マッケンジー医師がその患者を引き継ぐ手配がなされた。マイケルの看護婦には、割増サービスが必要なときには引き受けてもらえるだろうけれども、「それは必要なさそうだ」とマッケンジー医師が微笑んだ。「君の所のカトラー夫人は知っているよ、大佐。彼女は易々とこの仕事をこなすだろう。楽しんでね。休息。それが肝心だ。できることなら、あの子が意識を回復したとき、心の平和も取り戻せればいいんだがね」

クーリング医師は、じゅうぶん満足して、すでに夕暮れ時に馬車で出て行っていた。「終わりをければすべてよし、ですね、ドクター。お手伝いいただきまして感謝しています。もう少し厄介な結果にだって容易に変化したかもしれないケースですから。きつと我々は、間もなく新聞ですべてを読むことになるでしょう」

しかし、マッケンジー医師はあまり自信が持てなかった。彼は寝室に戻り、枕の上の青白いハート型の顔を見て、考え込んで立っていた。脳の複雑なメカニズムが、特にそれが若く柔軟な場合、苛酷な感情的ショックにどのように反応するのかはわからなかった。ハンギングロックで何かが起こったか否かにかかわらず、彼女は肉体でなければ精神に、とんでもない傷を負わされたに違いないことを直感が告げていた。彼は怪しみ始めていた。これは普通の事件ではない。いったいどれくらい普通でないの

かはまだわからないが。

マイクにとって、時のない昼は時のない夜にいつの間にか溶け込んでいった。彼が未知の名もない何かをずっと探している薄暗い灰色の領域においては、眠っているか目覚めているかはどうでもよいことだった。その何かは、彼が近づいた途端にいつも消えてしまう。時々それがそばをかすめるように通ったとき、彼は目を覚まし、それに触れようとしたが、ベッドの上で毛布を掴^{つか}もうとしている自分に気づいただけだった。足に燃えるような痛みが去来したが、それも頭がはっきりしていくにつれて徐々になくなっていった。時には消毒剤の匂いを、時には庭から漂ってくる花の香りを意識した。目を開けると部屋にはいつも誰かがいて、それは通常は、動くとバリバリと音を立てる白い紙を着ているような知らない若い女性だった。彼が最後に夢のない深い眠りに落ちてから、三日目か四日目だったかもしれない。目が覚めると、部屋は闇の中だった。一点だけ、かすかに光る灯りが点っている。それは、ベッドの足元の真鍮の横棒に止まった白鳥によって発せられている光なのだった。マイケルと白鳥は驚くこともなくお互いを見つめ合い、やがてその美しい生き物はゆっくりと翼を広げ、開いている窓からふわりと飛び去っていった。彼は再び眠り、陽光とパンジーの香りで目を覚ました。短い髭を生やした年配の男がベッドの傍らに立っていた。「あなた

は医者ですね」初めて自分のものだと思き分けられる声でマイクは言った。「僕はどこか悪いのですか？」

「君はかなりひどい転倒をして足首を痛め、少しばかり体を打ったんだよ。だが今日はだいぶ具合が良さそうに見える」

「どれくらいの間こうして？」

「そうだな、ハンギングロックから彼らが君を連れ帰ってから、五、六日経っているね」「ハンギングロック？　ハンギングロックで僕は何をしてたんです？」

「それについては後で話そう」マッケンジー医師は言った。「何も心配することはないよ、君。心配は病人にとって何もよいことはない。さて、足首を見ようか」

足首に包帯を巻かれている間にマイクが言った。「アラブ。僕は落馬したのですか？」そして再び眠りに落ちた。

翌朝、看護婦が朝食を運んできたとき、患者は上半身を起こして、大声ではっきりとアルバートを求めている。

「まあ、ずいぶん早く回復していること！　さあ、熱いうちにお茶をお飲みなさいね」「アルバート・克蘭ダルに会いたいんです」

「ああ、御者さんのことね？　彼は毎朝あなたのお見舞いにやって来ます。とても献

身的ですよ！」

「いつもは何時に来るんですか？」

「朝食の後すぐね。でもあなたはまだ面会謝絶なんですよ、フィッツヒューバートさん。マッケンジー先生の指示です」

「指示なんかどうでもいい。アルバートに会わなきゃならないんです。もし僕の伝言を伝えてくれないのなら、勝手にベッドを抜け出して自分で既舎に行くまでです」

「まあまあ」歯磨きの広告になりそうなプロの微笑で看護婦が言った。「そんなに興奮しないで、でないと私が叱られてしまいます」圧倒的にハンサムな青年の、奇妙に光る目の中の何かが、彼女にこう付け加えさせた。「朝食を食べ終えたら、あなたの伯父さんと呼んできましょう」枕元に召喚されたフィッツヒューバート大佐は、病室にふさわしい悲しげな顔つきで、慎重に爪先歩きでやって来た。そして、患者がすっかり顔色が良くなって、現実には身体を起こしているのを見ると狂喜した。「すばらしい！今朝はほとんど回復しているじゃないか、なあ看護婦さん？それで、会いたがっている客がいると聞いていたのは、いったい何なのかね？」

「客じゃありません。アルバートだけです。アルバートに会いたい」彼の頭は枕に倒れ込んだ。

「過労ですわ——私たちがいるせいです」看護婦が言った。「もし患者がその御者と話をするなら体温が上がるのは確実で、そうなれば私はマッケンジーの叱責を受けることになります」

「この娘はぱっとしないだけでなく、頑固者でもある」大佐はそう判決を下したが、何やら自分の理解力を超えた趨勢になっていることに気づいていた。「心配するな、マイク。克蘭ダルに来るように言ってやろう。面会は十分間だ。何かまずいことがあれば、看護婦さん、私が責任を取る」

ついにアルバートが彼の傍らにやって来た。彼はキャプスタン煙草と新鮮な干し草の匂いを漂わせ、ベッド脇の椅子に落ち着いたが、その様子はまるで、彼の体重の下で方向転換して逃げようとしている前進拒否の子馬の上に乗っているようだった。彼はこれまで一度も病室を公式に訪れてはおらず、厳格に畳まれたシートによって顎の所で切り取られた、魂の抜けたような顔にどう会話を切り出したものか当惑していた。「あのクソ看護婦が……俺が来るのを見かけたら、命からがらって感じで、とっとと逃げちまいやがった」それは最高のキックオフだった。マイクはわずかににやりとさえた。友情の水流が彼らの間に溢れ出た。「そりゃあいいことだよ！」

「煙草を吸ってもいいか？」

「構わないよ。君は長居させてはもらえないだろうね」なじみの快い沈黙が、共同暖炉前の猫のように彼らの間に腰を据えた。二人は同じ気持ちだった。「ねえ」マイクが言った。「僕には知らなきゃならないことがたくさんある。僕の頭は、昨夜まで混乱してうまく回らなかった。伯母さんがここに来て、看護婦に話し始めた——僕が眠っていると思ったんだろう。突然頭が正常な状態になっていった。どうやら僕は、君以外には誰にも話さず、自分の裁量でハンギングロックにまた行ったらしい。そうなのかい？」

「そのとおりだ。娘たちを捜すために……。まあ楽しんでろよ、マイク。あんたはまだそんなに良くなっているようには見えないぜ」

「僕はその子たちの一人を見つけた。そうなのかい？」

「そのとおりだ」アルバートがもう一度言った。「あんたは彼女を見つけて、彼女は生きて元気でこのロッジにいる」

「どの子？」マイケルは、アルバートがかるうじて聴き取れるくらいの小声で尋ねた。美しい顔——彼らがロックから運び降りていたときの担架の上にあってさえ美しかったその顔は、今やアルバートの心の中に常に存在していた。「アーマ・レオポルド。巻き毛の、小柄で色黒の子だ」

部屋があまりにも静かだったため、アルバートは、壁の方に顔を向けて横たわったマイクの重苦しい呼吸を聞くことができた。「だから、あんたは何も心配することはない」アルバートが言った。「早く良くなることだけ考えて……わ、何てこった！ 気を失ってやがる！ あのクソ看護婦はどこに行った……？」十分間はすでに終了し、彼女はボトルとスプーンで何かを処置しながらベッド脇にいた。アルバートは彼女に気づかれないようにフランス窓から抜け出して、沈んだ気持ちで厩舎に向かっていた。

岩の上の少女の肉体——行方不明の女性相続人発見。女学校のミステリーは、警察や記者による公的なものからその辺の私的な会話に至るまで、最高度の突飛な想像力の飛躍に裝飾され、再びトップ記事となった。救出された少女はレイク・ヴェーで依然として意識不明、マイケル・フィッツヒューバート卿も質問を受けるほどには回復していない。そのことがゴシップの炎に燃料を加え、後に真相が判明するであろう惨事についての噂を呼んだ。現場の有望そうな、また見込みのなさそうな場所の警察の搜索は、ほかの三人の犠牲者の運命の手掛かりを発見するというまずあり得そうにない可能性のために呼び戻された、メルボルンからの臨時雇いの人間たち、犬、原住民搜索者を伴って再開された。排水溝、空洞の丸太、暗渠、水飲み場。先週の日曜日に光が動いているのが目撃されていた、放棄された豚小屋。ブラック・フォレストの古い坑道の底では、怯えた男子生徒が何かの胴体を見たと言断した。そのとおり——そこには腐乱した雌牛の死骸が^{めうし}あったのだった。そんなことが続き、答えられない疑問で満たされたノートの上で実直に汗をかいているバンファ―巡査部長は、もし新しい

殺人事件が起こったなら、そちらの方を歓迎してしまいそうになっていた。

アップルヤード女学校において、アーマ救出のニュースは、次の月曜日の朝の祈りの直後、校長によって簡潔に、形式的に発表された。その日の最初の授業の前に、その事実を吸収同化するためのまる一時間を考慮した、慎重に熟考された手順である。

それは一瞬の啞然^{あぜん}とした沈黙の後で、ヒステリックな歓喜や、涙や、ほとんど会話をしないような間柄の人間同士の妄信的な抱擁の爆発を受けることになった。当てもなくぶらつくことが厳格に禁じられた階段の上で、マドモワゼルはブランシェとロザマンドの涙の抱擁に出くわした。——「まあ、あなたたち^{メザンファン}、今は涙の時間ではないですよ」——そういう彼女も、長いこと流されていない自分の涙が目に溢れてくるのを感じていた。台所ではコックとミニーが黒ビールで祝杯をあげ、その間ベーズ張りのドアの反対側ではドーラ・ラムリーが、まるで自分までもがロックで救出されたかのよう^{のどもと}に喉元で安物のレースをひつつかんでいた。ポッティングシェッドで最初の歓喜を味わったトムとホワイトヘッド氏は、すぐに普通の殺人事件に話題を移したが、それが切り裂きジャックへと行き着いたため、庭師は暗鬱^{あんど}な仮定に苛まれつつ自分の芝生に戻らなければならなかった。正午までには、朝の有頂天な安堵^{あんど}からの必然的な反動が大勢を占めることになった。午後の授業は、私語とつぶやきの暗流を集合させた。

教師たちの居室では、アーマ発見の問題にはほとんど触れられることがなかった。あたかも、申し合わせによって醜い現実を曖昧にする架空の薄いヴェールが依然として残され、校長だけが、書斎の閉ざされたドアの背後で、事件のこの新しい転回点の冷血な精査を許されているかのようであった。四人の行方不明者の一人だけしか発見されなかったことで、それに影響された女学校の状況は、実際には悪化していた。

決断力に富む権力者は、たいてい現実的な問題と取り組むことができる。事實は、それがどんなに言語道断なものであっても、ほかの事実によって対処できる。が、報道機関に「情勢」として知られているムードと雰囲気の問題は、比較にならないほど不吉なものなのだ。「情勢」は、参照用に分類整理することができず、適切な解答をファイリング・キャビネットから引っぱり出すこともできない。雰囲気というものは、人間が異常な状態で集まった場所ならどこからでも、何もなくてもどんなものからでも、一夜のうちに発生し得る。一時間ごとに隠れた恐怖の瘴氣しやうきが深まって暗く立ち込めていったヴェルサイユの法廷や、ペントリッジ刑務所や、若い女性のためのより拔きのカレッジなどからでも。

翌朝、不安な眠りから覚めると、女校長は、ステイール製カールピンのハリネズミ状集合体ですでに重くなっている頭に、さらにプレッシャーを感じたかもしれない。

深夜と未明ののろのろと進む時間の間に、彼女は若干の危惧を抱きつつも方針転換を決心した。規律の緩和と日常風景の変化。このために、寮生の居間は急遽ストロベリー・ピンクの気味の悪い色合いの壁紙に張り替えられ、グランドピアノが長い応接間に設置された。ある晩、ローレンス師とその妻が、応接間で見せるための聖地の幻灯画を持ってウッドエンドの牧師館から馬車で来るよう誘われた。そこではホワイトヘッド氏の精選した紫陽花が暖炉の中で層を成し、長いキャップとフリルのエプロンを身に着けたメイドによってコーヒーとサンドイッチとフルーツサラダが配膳された。こうしたすべてが、物質的な繁栄と教育的な満足度において最盛期を迎えている高級な寄宿学校の、完璧な絵を呈示していた。それなのに、小柄なローレンス夫人はなぜか奇妙に意気消沈してしまい、偏頭痛とともに去っていった。上級生たちは《ミカド》のマチネを見るために教師一人とともに列車でベンディゴに送られたが、それも無駄な努力であった。彼女たちはかえって元気を失って戻ってきた。彼女たちが最前列に着いたとき、観衆は注視し、囁き交わした。彼女たちは自分たちが見せ物の一部——女学校のミステリーの出演者——になっていることを感じて、待機していたワゴネットに乗り込むことをありがたいと感じたのだった。

作戦失敗に気づき、女校長は別の、もっと厳しい手段を取ることにした。いつもあ

まりに話し好きな職員引き締め強化と、教師が付き添わない集団の内輪のおしゃべりを禁じる規則の強制。その後は、夏服と見苦しい麦わら帽子を着けた少女たちの日課の二列縦隊は、鎖に繋がれた女囚人の一団が規則によって定められた沈黙を嫌々守っているかのように、ペンディゴの公道に沿って二人ずつうねって進むことになったのだ。

復活祭が近づいていて、それとともに学期は終わる。すでに夏の花々はしおれており、ある朝、家の後ろの小川べりの柳の中に黄金の斑点が現れた。よく手入れされた花壇と芝生など威信のシンボルではない女校長に対し、庭園が秋の喜びを提供することはなかった。小ぎれいさがすべて——鮮やかな花の連続も、公道を通りかかる人から石垣越しに称賛されるためのものだ。彼女の書斎の窓の外側にある小さな木からひらと落ちる葉は、時間の経過の無益な合図にすぎなかった。あのピクニックの日から一か月近くになる。アップルヤード校長は、最近メルボルンに数日間滞在し、そのほとんどをラッセル・ストリートにある警察本部で過ごした。ここで絶えず警戒態勢にある目がとらえる最初のものは、公式掲示板にピンで留められた告知であった。詳細な説明と、ミランダ、マリオン、グレタ・マクロウ三人の極めて出来の悪い写真の上の「行方不明。死亡と推定」の文字。「死亡」という単語は、印刷面からいやらし

くはみ出ていた。そうですね、可能性はあるが、ほとんどあり得ないことです、二時間風通しの悪い部屋に閉じ込められた彼女と同席した主任刑事はそう言った。少女たちは、拐かされ、誘い出され、略奪された——あるいはもっと悪いことが。「失礼ですが」恐怖と部屋の我慢ならない熱気のため、無口に、また汗でべとべとになった女校長は尋ねた。「もっと悪いこととは何でしょう？」彼女たちはやがてシドニーの売春宿で見つかるかもしれません。ちゃんとした家庭の少女たちが跡形もなく姿を消した場合、シドニーではたまにそんなことが起こるのです。メルボルンではめったにありませんがね。アップルヤード校長は身震いするしかなかった。「彼女たちは並はずれて聡明で品行方正な少女たちで、見知らぬ人間からのいかなるなれなれしい接近も許しそうにありません」

「それについて言わせてもらいますと」刑事は穏やかに言った。「あなたのお考えなら、若い娘の大半が酔った船乗りからレイプされることを拒絶できるでしょうな」

「考えたことはありませんでした。そういうことに関する私の知識は、どうしても限定的です」刑事はタバコの染みが付いたずんぐりした指で机の表面を叩いた。こうした完璧な女性たちは悪魔なのだ。彼女たちほど淫乱なことを考えている人間などないことは、賭けてもよかった。彼は大声で、だが温和に言った。「まあ確かに。あの

状況下ではまずあり得ないことです。しかしながら、我々警察は、それが報告された日から、明るみに出た手掛かりが一つもないこうしたケースにおいては、あらゆる可能性を考慮しなくてはなりません。私の記憶が正しければ、二月十四日でしたな」

「そうです。聖バレンタイン・デー」

一瞬、彼は、年配の女性がのぼせ上がっているのかと疑った。彼女の顔は不快な赤まだら色だった。不首尾なインタヴューの終わりを宣言しながら立ち上がり、彼は、彼女が自分の方に卒倒しないではしいと願った。往來のひどい熱気の中によるめき出たアップルヤード校長にとって、インタヴューは終わっていても悪夢は残っていて、それはホテルで睡眠薬を飲んでも一、二杯のブランデーを飲んでも追いつきそうにないのだった。

学校に帰ってみると、一連の面倒事と不穏な出来事が蓄積していた。校長不在の間、ある父親は、表面的には理にかなった口実で、娘を直ちに連れ去ることを連絡してきっていた。難局には意外と鋭敏で実務的でさえあったグレタ・マクロウのサポートがない状態で、マドモワゼルは自分で対応せざるを得ないと思い、ミス・ラムリーがメルボルンに送るミュリエルの荷物箱の梱包こんぽうと発送の準備をするよう求められた。さらに悪いことに、アップルヤード校長が玄関で帽子を脱ぐやいなや、そのフランス人教師

は「復活祭の直後、ムッシュ・ルイ・モンペリエとの結婚が近いため」の辞表を提出したのである。女校長は、見れば女性を鑑定できたが、マドモワゼル・ド・ポワティエは疑いなく校内の財産たる職員で、なかなか余人をもって代え難い存在なのであった。ミス・マクロウのポジションにはすでに、出っ歯およびバックという不幸な名前を持ったぶっきらぼうな若い卒業生が補充されていた。寮生たちは、彼女に対してすぐに嫌悪を表明した。グレタ・マクロウは、特定の個人を指さない小言を言ったりはしたけれど、決して違反者個人個人に噛みついたりはしなかったのである。

今夜、アップルヤード校長の机上には書簡の山が積まれていた。疲れ切っていたが、寝る前に目を通さなければならない。ありがたい、クイーンズランドの消印が付いたものはない！ 最初に開封されたのは、南部オーストラリアの母親からの、「緊急の家庭の事情のために」娘をアデレード夜行急行ですぐに家に帰してほしいという要求だった。その少女の一家は裕福で、大いに尊敬を集める市民であった。この人たちは郊外の大邸宅で乙に澄まして、どんないいかげんな話を聞いたものやら？ 家庭の事情！ は！ 彼女は食器棚からブランデーのボトルを取ってきた。もう二通を開封した後で、レオポルド氏の電報が手紙の山の底にあることに気づいた。ベンガルのどこかの僻地^{へきち}から数日前に送信されており、その威圧的な言葉遣いは、普段の氏の工

夫を凝らした書法とは似ても似つかぬものであった。「私の娘はアップルヤード女学校には絶対に戻らない。手紙に続く」こんなふう^{めまい}に最も裕福で最も称賛に値する生徒を失うのは、彼女の肉体に吐き気がするほどの眩暈を感じさせた。この新しい破局には、危険で果てしないものが含まれている。ほんの数週間前に、女校長は司教の妻にこう言っていたのだ。「アーマ・レオポルドはとても魅力的な子です。二十一歳になったら五十万ポンドを手中にするのです。それでわかりました……彼女の母親はロスチャイルドだったのですよ」肉屋と食料雑貨商からの二枚の莫大な額の請求書が、その日の悲痛な勘定票を完成した。

もう遅かったが、彼女は、女学校の元帳^{もとちょう}を取り出す衝動に駆られた。何人かの寮生の授業料が未払いだった。このような状況下では、ミランダの両親とマリオン・クエイドの法定後見人からの次学期の授業料の迅速な前払いはほとんど期待できないということを常識が告げていたにもかかわらず、彼女はレオポルドの巨額の割増料金——ダンス、絵画、メルボルンでの毎月のマチネなど、これらはすべて女学校にかなりの利益を示すものだった——を含んだ小切手を当てにしていた。きれいに野線の引かれたページ上に、もう一つの名前が目についた。セーラ・ウェイボーン。セーラのどうにもつかみどころのない後見人は、この数か月というものの、彼の通常の授業料支払い

の手続き、すなわち財布から現金で取り出される金額ともども、校長の書斎のドアに姿を見せていなかった。現時点では、セーラの割増分は全額未納であった。いつも贅沢な服を着て、書斎にオーデコロンとモロッコ革の強い芳香を残していくコスグローヴ氏に、遅延に対する弁解の余地はないのであった。

このごろの、庭で本の上にぐったりしている子供のセーラの、まさにその光景は、骨で張りを付けた網襟あみえりの下の校長の首に、激昂げつこうの赤らみを這い上らせるにじゅうぶんだった。どうしたものか、その小さく尖った顔が、女学校のすべての収容者が多かれ少なかれ苦しんでいた無名の疾患のシンボルに見える。もしそれが弱々しく丸い子供らしい顔であったならば、とてもちっぽけで青白いそれが、隠れた芯の強さ——自分が持っているのと同じくらいの鋼鉄の意志——を持っていることから生じる敵意の代わりに、憐れみを返してやろうという気持ちで喚起したかもしれない。女校長は時折、聖書の授業をするためにオリンポスから降臨することがあったのだが、教室でセーラの前屈みの頭を見かけると、口に出すものはばかりされるような罵倒ばとう衝動の酸味が込み上げて、発声をしばしの間詰まらせることがあった。ところが、その不快な子供は、表面上は従順で、礼儀正しく勤勉なままだった。ただ、ばかに大きなその両目の中に、人目に付かないような苦痛を浮かべるだけであつた。真夜中をとうに過ぎていた。彼

女は立ち上がり、抽出の中に元帳を戻し、のろのろと階段を昇った。

翌朝、セーラ・ウェイボーンがミセス・ヴァランジュの美術の授業のために画材を準備していたとき、彼女は女校長の机に呼び出された。

「あなたを呼んだのはね、セーラ、あなたに説明しなければならぬ重大な案件があるからなのよ。まっすぐ立って、私が言わなければならないことをじゅうぶん注意して聞いてちょうだい」

「はい、アップルヤード先生」

「ここ数か月、あなたの保護者が教育費を滞納していることに気づいているかしら？ 私はいつもの銀行宛に彼に手紙を書いたのだけれど、私の手紙はそのたびに配達不能郵便物課から戻ってきてしまったの」

「おお」子供は表情を変えずに言った。

「あなたがコスグローヴさんから最後に手紙をもらったのはいつ？ できるだけ慎重に考えてみて」

「よく覚えています。クリスマスです——休暇中に私が学校にいられるかどうかを尋ねてきました」

「そうだったわね。迷惑この上なかったわ」

「そうだったのですか？　なぜあの人そんな長い間手紙をくれないのか不思議です。本とクレヨンが欲しいのに」

「クレヨン？　それで思い出したのだけれど、あなたはこの不幸な件について私の助けにならないようだから、私はあなたの図画の授業を中止するようヴァランジュ先生に言わなければならぬわ——今朝からね。あなたのロッカーに入っている画材は学校の備品で、ラムリー先生に返さねばならないということ覚えておくように。あなたのストッキングの、それは穴かしら？　あなたは本や色鉛筆で遊ぶよりも、繕いのを学ぶことに時間を費やす方がふさわしいようね」

ちょうどドアに到達したとき、セーラは呼び戻された。「言い忘れていたわ。もし復活祭までにあなたの保護者から連絡がなかったら、あなたの教育について別の方法を講じなければならぬわ」

大きな両目の後ろで初めて表情が揺らいだ。「どんな方法ですか？」

「いづれ決めなければならないでしょうね。施設は一つではないし」

「おお、嫌。嫌です。それだけは。戻りたくない」

「事実に向き合うことを学ばなければだめよ、セーラ。結局のところ、あなたは十三歳なんですからね。下がってよろしい」

右の会話が書齋で行われていた間、メルボルンから来た美術教師ミセス・ヴァランジュは、敏捷なトムびんしょうによってウッドエンド駅の外の軽装二輪馬車ドツグカートの中に引っぱり上げられていた。その小さな女性性は、溺れた水夫のようにトムにしがみつき、いつものようにスケッチブックや傘や膨らんだスૂツケースなどによって押しつぶされそうになっていた。スૂツケースの中身はいつも同じ。上級生用のキケロの頭部の石膏像。これはメルボルン列車の振動でそのかぎ鼻が欠けてしまう用心のため、綿ネルのナイトガウンで包まれていた。下級生用の石膏の足。ミシャレ紙のロール。そして自分用のウールのポンポンが付いた楽な室内履きとコニャックの携帯容器（フランス産ブランドーの好みについてはかつて議論され、ミセス・ヴァランジュとミセス・アップルヤードが同じ考えであったほとんど唯一のテーマであった）。

「ところで、トム」彼らがユーカーリの木陰の公道に進路を向けたとき、話し好きで、いつも愛想のよい美術教師が話し始めた。「あなたのかわいい人はどう？」

「実を言いますとね、マダム、私とミニーは二人とも、復活祭に校長に通知するつもりなんです。これ以上ここにいるのはどうにも気が進まなくて。私の言いたいことがおわかりになるのなら、ですが」

「わかりますとも、トム、残念だわ。私はみんなに忘れた方がいいと言っているのだ

けれど、あの事件からずっと、町で人々がどんなにひどいことを言っているか、あなたには想像もできないでしょう」

「そのとおりなんですが、マダム」トムは同意した。「ミニーと私は、ミランダさんやほかのかわいそうな子たちのことを、嫌でも死ぬまで忘れることはないと思います」

ドッグカートが校門の中に入ったとき、彼の乗客は、前の芝生にお気に入りの生徒セーラ・ウェイボーンがいるのを見かけ、元気よく傘を振った。「おはよう、セーラ——けっこうよ、トム、スૂツケースは自分で運びますから——ここにいらっしやい、あなた——きれいな新しいパステル・ボックスをメルボルンから持ってきたのよ。ちよつと高くて心配だけれど、あなたの勘定書に入れても大丈夫でしょう……。あら、あなた、今朝は憂鬱そうね」

セーラの憂鬱なニュースへのミセス・ヴァランジュの反応は、彼女らしいものだった。「あなたの美術の授業を続けるな、ですって？ 馬鹿馬鹿しい！ あなたが才能のかけらを持ったただ一人の生徒であることを思えば、私はあなたの授業料のこともなんか全然気にしません。アップルヤード校長の所に直行して、そう言ってやるわ——授業を始めるまで十分間あるから」

書斎の閉じられたドアの後ろで現在行われている会見を、詳細に記録しても無駄で

ある。これを最初で最後として、二人の女性の手袋を脱いで面と向かって立った。双方が二、三の機械的な丁寧言葉を交わした後、戦いは始まり、温和な心を持った小柄なミセス・ヴァランジュは、危険なほどに振り回している傘によって強調された威勢のよい告発で食ってかかり、普段の公的平静さから振り落とされたミセス・アップルヤードは、いっそう巨大に膨らみ、紫色になっていった。ついに書斎のドアがバタンと閉じられる音が聞こえ、専門的な手続きだの何だのといった点では打ち負かされたものの、精神的には勝利者となったその美術教師は、胸を波打たせて玄関ホールに立っていた。トムが召喚され、傘とまだ寝間着で包まれているキケロの入ったスーツケースを握り締めたミセス・ヴァランジュは、ドッグカートに引っ張り上げられ、これを最後に駅へと追ひ払われた。

自分の乗客が一本の色チヨークで紙の切れ端に走り書きをしていた、普段はない短い沈黙の後で、トムは、一枚のハーフ・クラウンとセーラ・ウェイボーン宛の封筒を、ミセス・アップルヤードに知られずできるだけ早く渡すようにとの指令とともに手渡された。トムはその願いを聞き入れることをこの上なくうれしいと思った。彼はセーラに対して好感を抱いており、小柄なミセス・ヴァランジュに対しても同じだった。それで、翌朝、朝食後の三十分間、寮生たちが庭に集まったときに彼女に手紙を渡そ

うと固く決意した。ところが、彼は思いがけず校長のための使いで外へ出され、手紙は忘れられてしまった。

数週間後、彼は抽出の奥でしわくちゃになったそれを偶然見つけ、ミニーが蠟燭の灯りで彼に音読してやった。二人ともそのために夜半まで起きていた。だが、ミニーがかなり賢明に指摘したように、体を壊すほど悩んでみたところで何になるだろう？あの状況下では、手紙が渡されなかったことはほとんどトムの過失ではなかった。「親愛なるあなたへ」彼女は書いていた。「ミセス・Aは、私に何もかも話しました——何という馬鹿騒ぎ！これは、もしあなたの後見人が聖金曜日までに訪ねて来なければ、東メルボルン——住所を同封しました——の私の家に来て、好きなだけ私と一緒にいてほしいということをおあなたに告げるための手紙です。知らせてくれれば、列車で落ち合うよう手配します。美術の授業のことは心配しないで、余分な時間があるときはいつでもデッサンをお続けなさい。レオナルド・ダ・ヴィンチのようにね。愛を込めて。あなたの友人、ヘンリエッタ・ヴァランジュ」

ミセス・ヴァランジュのドラマティックな学校からの退場は、ここ数日の緊迫感と緊張感をいっそう強くした。いらだたしい沈黙の規則と、教師の立ち会いなく二、三人で会話することの禁止令にもかかわらず、ある「場面」が書斎で発生し、子供のセー

ラがなぜか非難されたということが、紙切れの回覧やその他の情報伝達道具によって日暮れ前には伝わっていた。いつもどおり、セーラは誰とも会話をしなかった。博物学など全然得意ではないイーディスに指摘されたように、「牡蠣^{かき}のように這い回っている」。「もしハンサムで若い図画教師が来ないなら」ブランシェが言った。「私は美術をあきらめるわ。自分の爪に付いたカラー・チョークにうんざりしているしね」ドーラ・ラムリーがせわしなくやって来た。「皆さん、身支度のベルが聞こえませんか？ たか？ 早く上へ行きなさい。それと、廊下で話した廉^{かじ}でそれぞれ減点です」

数分後、まだその場をうろついていたミス・ラムリーは、塔に通じている螺旋階段の小さなドアの後ろで縮こまっているセーラ・ウェイボーンに出くわした。女教師は彼女が泣いていたのだと思ったが、暗過ぎて顔をはっきり見ることができなかった。

二人が釣りランプの光の下で踊り場に出てきたとき、その子供は半分餓死状態の迷い子猫のように見えた。「何かあったの、セーラ？ 具合が悪そうね？」

「大丈夫です。どうぞ行ってください」

「ティータイムの直前に暗がりの冷たい石の上に座っている人なんていけませんよ、頭の弱い人でない限り」ミス・ラムリーは言った。

「お茶はいりません。何も欲しくない」女教師は鼻であしらった。「うらやましいこ

と！私も同じことが言えればね」彼女は思った。「鼻をすすって泣いているこのいやらしい子供。身の毛もよだつこの建物……」そして、今夜兄に勤め口の世話を頼む手紙を書く決心をした。「寄宿学校はだめ。本当に——私はもうこれ以上耐えられない、レグ……」お茶のベルが下の空の部屋に鳴り渡ったとき、彼女は叫び声を上げないようにするのがやっとだった。長く暗い客間で跳ね回っているネズミたちもそれを聞いていて、覆い隠されたソファと椅子の下に素早く逃げ込んでいた。「ベルが聞こえたかしら、セーラ？ そんなふうに全身に蜘蛛の巣を貼り付けていたのでは下へは行けませんよ。お腹が空いてないのなら、寝た方がいいわね」

それは、セーラが以前ミランダと共有した部屋だった——その建物の中で最も多く希望が集まった部屋で、庭を見渡せる長い窓があり、薔薇模様のカーテンが付いていた。アップルヤード校長の特別な命令のため、ピクニックの日以来何も変えられていない。ミランダの柔らかいきれいなドレスは、その子供がいつも目をそらす杉のカップボードの中にきれいに整列して依然として掛かっていた。ミランダのテニス・ラケットは、その持ち主が夏の晩のマリオンとのゲーム後、紅潮してうれしそうに二階へ駆け上ったときのままの様子で、依然として壁に立てかけられていた。マントルピース上の銀の楕円形フレームに入った大切なミランダの写真、ミランダのバレンタイン・カード

が依然として詰め込まれた^{たんす}筆筒の抽出、彼女がいつもミランダの小さなクリスタルの花瓶に花を生けた鏡台。彼女はよく眠ったふりをして、ミランダが蠟燭の光に輝く髪をブラッシングしているのを見ながら横たわっていたものだった。

「セーラ、まだ起きているんでしょう？　いたずらな子猫ちゃんね」鏡の暗い^{よど}澱みの中に微笑む。そして、ミランダは時々、セーラだけが知っている特別な調子はずれの声で、自分の家族についての短いおかしな歌を歌うのだった。お気に入りの馬、弟のオウム。「いつか、セーラ、あなたは私と一緒に牧場に帰って、私の優しく楽しい家族をその目で確かめてね。いいでしょう、子猫ちゃん？」おお、ミランダ、ミランダ……大好きなミランダ、どこにいるの？

眠れない沈黙の建物に、とうとう夜のとばりが下りた。南の翼棟^{よくどう}では、トムとミニーがお互いの腕をしっかりと抱き締めて、際限なく愛を囁き合っていた。ミセス・アップルヤードは髪のカールピンの中で寝返りを打った。ドーラ・ラムリーはペーパージンターをしゃぶり、熱っぽい頭の中で兄への長たらしい手紙を書いていた。ニュージーランドの姉妹は、今にも起こりそうな地震に緊張し、怖がって、付き合いで同じベッドに潜り込み、並んで横たわっていた。マドモワゼルの部屋ではまだ灯りが灯っていて、一本だけの蠟燭の光で読むとよく効くラシーヌの私服も、今のところ睡眠剤

としての効能を発揮してはいなかった。子供のセーラも完全に覚醒状態で、恐ろしい暗闇をじっと見つめていた。

やがてポッサムが、おぼろげな月光に照らされた屋根のスレートの上に飛び跳ねながらやって来た。彼らは甲高い声やくぐもった声を上げながら、青白い空に対して黒ずんだ塔のずんぐりした根元の辺りを不快に行き来した。

ピクニック以来事件を概観している読者なら、その外周でいかに多くの個人が、広がっていく構図にどういうわけか巻き込まれつつあることに気づくことだろう。ミセス・ヴァランジュ、レグ・ラムリー、ムッシュ・ルイ・モンペリエ、ミニー、そしてトム——この者たち全員の生活がすでに、時には激しく、混乱していた。無数の小さな生き物——蜘蛛、ネズミ、甲虫——の生活もまたそうであった。彼らの隠れ家への急行と恐怖の退却は、それぞれの小ささに比例していたが。聖バレンティン・デーの朝、アップルヤード女学校において、最初の光線がダリアを燃え上がらせ、早起きした寮生たちがカードと好意の無邪気な交換を始めた瞬間から、事件の構図は前触れなしに形成され始めていた。三月十三日金曜日夜の現在まで、それは依然として広がっていた。依然として深く強く四方八方に散開し、また依然として不完全であった。マセドン山の下の方では、それはずっと派手な色合いではあったが拡散を続け、レイク・ヴェューの住民がいる上の方では、喜びと悲しみ、光と影といった一般的図式の中のどこに割り当てられたのかにも気づかず、無意識に全体の複雑なタペストリーの中に彼

らの私的な生活の個人的な糸を編み込み、織り交ぜながら、人々はいつもとどおりのそれぞれの営みに取りかかるのだった。

病人は二人とも、現在は快方に向かっていた。マイクは朝食にベーコンエッグを食べ、アーマは、バンファ―巡査部長による軽い質問を受けられる程度には回復しているとマッケンジー医師に宣言されていた。バンファ―は、その少女がロックで体験したことを、これまでのところ何も覚えていなかったという助言を受けていた。マッケンジー医師の所見も、シドニーとメルボルンから来た二人の高名な専門医のそれも、彼女は何も思い出さないだろうということだった。どうやら、脳のデリケートなメカニズムの一部が、取り返しのつかない損傷を受けているように思われた。「時計のようなものだ」医師は説明した。「ある一連の異常な条件下で止まってしまい、特定の時点を二度と越えようとしない時計だよ。私はそういうのを家に一つ持っていたんだ。それは午後の三時以降には決して進もうとしなかった」だが、バンファ―は、ロッジにアーマを訪ね、自分自身の言葉で「試してみる」ことに決めた。

インタヴューは、ベッド脇の椅子に着いたその警官と、よく削られた鉛筆と準備万端のノートとともに、午前十時に開始された。正午まで、彼は一杯のお茶を持って深く腰掛け続け、全く何も産み出さなかった不首尾な二時間に対する感謝の念を表した。

彼は非常に若く美しい人間に時折悲しげに微笑みかけられるという歓びを味わいはしたが、公式という意味では少なくとも何も出なかった。「では、私はこのへんで。レオポルド嬢、もし何か心に浮かぶようなことがありましたら、すぐに私に連絡してくださいね。そうすれば、私はアヒルの尾が二振りする間にここに飛んできますから」彼は帰るために立ち上がり、必ずしも公務上のものというわけではない不承不承さでノートの空白ページの周囲に輪ゴムを戻し、背の高い灰色の馬にまたがり、お氣に入りのプラム・パイでさえ晴らすことができないくらいに憂鬱な気分で、午後一時のディナーに向かってゆっくりと車道を走っていった。

次の土曜日の午後、マセドンのロコミは、ロッジに別の訪問者が到着したことを報告した。ライラック色のシルクを身にまとった絵に描いたような美人で、マナッサの店でレイク・ヴェューへの道順を尋ねた、黒い口ひげの外国紳士が運転する二頭立てのバギーに乗ってやって来た。カトラ夫人が、女学校のミステリーのヒロイン——イギリスから来たフィッツヒューバート大佐の、若くハンサムな甥おいによってハンギングロックで救出された——の面倒を見ていることは、山の誰もが知っていた。事件のその最新の展開は、マセドン上部の村にもう一度ゴシップと推測を供給するに足るほど好奇心を刺激するものだった。その甥が六〇フィートの崖を登攀とうはんして前歯を全部折っ

たとか、彼がその少女に狂ったように恋しているとか、その美しく小柄な相続人がメルボルンに二ダースのシフォン製の寝間着を注文して、ロジでは三本の真珠紐をまとって寝ているとか、そんな噂が立っていた。

実際のところは、その相続人の手に負えそうにないモロッコ製革靴かばんの山は、カトラール夫人の玄関にまだ閉じられた状態で置かれていた。色褪あせた日本の着物にくるまれて、こんなにも美しく垢あかぬ抜けて見える子が、この子以外にいるかしら？ マドモワゼルは愛情を感じつつ思った。ベネチアン・ブラインドが緑色の庭の光に対して下ろされ、そこから漏れる光がらんとした小部屋の漆喰しつくいの壁とパッチワーク・キルト付きの巨大なダブルベッドの上にさざ波を立たせていて、見かけは海の洞窟に浮かんでいるようだった。柔らかな夏の大気が水のように優しく肌を愛撫し、心を癒した。最初の熱烈な挨拶が交わされた後、彼女たちは悲しみを分け合う無言の悦楽へと身を委ねながら、少しだけ泣き、長く優しく抱き合った。言うべきことはあまりにも多く、かつて言われようとし、言うことのできたことはあまりにも少なかった。ロックの影が、彼女たちの心の上にはほとんど物理的な重さを伴って横たわった。あの出来事は言葉を超え、ほとんど感情も超えていた。向こう側の庭の、今そこにある平和に向けて、元気づけるようなクリック音を立ててブラインドを上げながら、先にマドモワゼルが、夏

の午後の静かな現実に戻ってきた。窓にしだれている榆がおしゃべりな鳩たちとともにざわめいていた。

「あなたをよく見せて、愛シエしい子」深紅のリボンによって緩く縛られた扇状の巻き毛で縁取られた青白く小さな顔は、カトラー夫人のキャラコの枕とほぼ同じほど白かった。「ひどい顔色ね——でもすごくかわいいわ——あなたが唇にゼラニウムの花びらを擦り付けたのを、私がどんなに叱ったか覚えてる？ でも見て！ すてきなニュースを持ってきたのよ！」差し出されたディアンヌの手のアンティークなフランス製の指輪がパッチワーク・キルトの上で百万の虹をきらめかせ、アーマのえくぼが星のように現れた。「愛するマドモワゼル！ すごくうれしい！ ルイはすてきな人だわ！」
「まあ！ 私の秘密、もうわかってしまったの？」

「推測したんじゃないわ、ねえディアンヌ——知ってたの。私って、頭で思い、心で知るんですって。ミランダがよく言ってたわ」

「ああ、ミランダ」女教師はため息を漏らした。「まだたった十八歳で、あんなに賢かったのに……」ミランダが輝く髪とともに芝生の上をやって来る姿が心に浮かんため、二人は再び黙り込んだ。そのとき、そのエレガントなフランス女性のことがすぐに気に入ったカトラー夫人が、イチゴクリームのトレイを持って現れた。「親愛なるカト

ラーさん！　この方がいなければ私に何ができたでしょう？　それにフィッツヒューバート家の方々——皆さん、すごく親切なの！」

「それと、ハンサムな甥っ子さん？」　マドモワゼルは知りたがった。「彼も親切なの？　おお、何というプロフィール！　新聞に載っているわね」

アーマは、甥については何も言えなかった。彼の部屋に行くにはまだ体が弱り過ぎていて、報告することができなかったのだ。「あなたは忘れてるわ、ディアンヌ。私はマイケル・フィッツヒューバートをたった一度しか見ていないの。あのピクニックの日、すごく遠くから」

「女って、一瞬で必要なことを何もかも見て取ることができるのよ」　マドモワゼルが言った。「そう！　私、^{ディアン}ルイの後頭部を初めて見たとき、こんな独り言を言ったわ。『ディアンヌ、この男はあなたのもの』ってね」

このとき、マイクはその長い脚を彼の伯母の馬車用膝掛けでくるんで、芝生のデッキチェアにもたれていた。傾斜した芝生の向こうで、開いたスズランが点在する湖が午後の光を反射して、磨かれた白目のように横たわっていた。もつれた水草を探しながら睡蓮の葉の間にパントを進めるアルバートとカトラー氏の、元気いっぱいのかげり声とブーブー不満を言う声が、そちらから聞こえてきた。彼がいつもマセドンの夏に

関連づける明るい青空の中では、小さな羊毛のような白い雲が、松の植林地の黒い釘の群れを横切って流れていた。寝込んで以来初めて、彼は自分の周囲に愉悅感のかすかな萌芽を意識した。

「ああ、いいわね、マイケル！ ついに外に出られたのね！」パラソルとクッションと刺繍品でつぶされそうになったフィッツヒューバート夫人が、ベランダに姿を見せていた。「明日、あなたが元気になるお客さんが来るわ。政府の別荘のアンジェラ・スプラック嬢を覚えていたかしら？」しかし、甥はスプラック家の令嬢と二人だけで会うことなるかもしれないという見通しには全く熱意を示さなかった。^{*}ナインピン用のピンの脚と、ハッディンガム・ホルのダイニングルームで作り笑いを浮かべているレノルズ作の肖像画を連想させたピンクと白の顔以外、彼はその少女のことを何も覚えていなかった。

^{*}パント……平底の小舟。浅瀬で使用する。手漕ぎボートやゴンドラと違ってオールは使わず、棹で水底を突いて動かす。棹の持ち手は船尾に立って舟をコントロールする。

^{*}ナインピン……ボーリングの前身で、「ケーゲル」とも。モーツァルトの『ケーゲルシュタット・トリオ』の「ケーゲル」がこれのこと（ケーゲルシュタットで「ケーゲル場」の意）。そのピンは、今のボーリングピンと似たようなものである。スプラック嬢は、脚がシャンパン・ボトルやナインピンに例えられることから、どうやらふくらはぎが太いタイプらしい。

「なぜそんなにあのかわいそうなアンジェラに批判的なのか、見当も付かないわね」
「僕は批判したいなんて思っています。スプラック嬢は——どう言ったらいいのか——あんまりイギリス人過ぎるというか、そう見えるのも完全に僕のせいですけれど」
「イギリス人過ぎるなどというたわけた話は、いったい何なのかね？」スパニエルたちとともに低木の植え込みの中から現れた大佐が尋ねた。「人はいったいどうイギリス人過ぎることができるといふのかね？」

しかし、マイクは国際的水準の議論を持ち込むことには力不足だと感じた。政府の別荘からのその訪問者は、次の日の午後何と処理された。スプラック嬢はマイクの想像どおりだった——州の舞踏会で必ずワルツを踊るように彼の母親に懇願されるような種類の女性。「くそ、アンジー」大通りを走りつつ、総督のドッグカートの中で、少佐は不平を言った。「おまえは大馬鹿娘だ。あの若者がイギリスじゅうで最高の結婚相手の一人だということがわからないのか？ 伝統ある良き家柄。すぐに爵位を継ぐ……たくさんの富」

「彼が私と話したいと思わないなら、私にはどうすることもできないわ」その惨めな少女は鼻を鳴らした。「どんな具合か、今日の午後、パパ自身の目で確認できたでしょう。彼が私を嫌っているのは間違いないし、それで終わってこと」

「強情なマヌケめが！ おまえには社会的判断力のかけらもないのか？ レイク・ヴューのロッジで目を覚ました小さな美人が、マイケル卿を手に入れようとするだろうことに疑問の余地はないんだぞ」

マイケルは、その青ざめた脚がドッグカートによじ登るのをうやうやしく補助するとすぐに、ディナー前に湖までぶらついていくことにした。完全に退屈な客であるスプラック家の滞在は、あまりに長過ぎた。すでに空には夕焼け雲が点在し、薄れていく光の中の湖は静かで美しかった。彼の耳が、湖の方角から聞こえてくる水の跳ね音をとらえたとき、彼はほんの少し前に去っていくドッグカートに背を向けてから、芝生を横切ってややふらつきながら歩いていくところだった。オークの木の下に、白いドレスを着た一人の少女が、鳥たちの浴槽としての機能を果たしているシャコ貝の傍らに立っていた。その顔はそらされたが、彼はすぐに金髪の傾けられた頭の姿勢によって彼女を見分け、自分の不安な夢の中ではいつもそうなるように、到達する前に彼女が行ってしまうのではないかという吐き気を催すほどの恐怖を感じながら、彼女の方へ走り出した。彼が彼女のモスリンの衣服に触れられそうな距離に入ると、それは蛇口から出るきらめく水の噴射に引き寄せられた白鳥の、かすかに揺れる翼になった。マイクが二、三フィート離れた草の上に沈んだとき、白鳥は貝の上をほぼ垂直に

飛び立って、通った跡に虹色の滴の雨をまき散らしながら湖の反対側の柳の向こうへと飛び去っていった。

マイクは、自分が選ぶ方角を取る自分の両脚が、毎日、より強く、より確実なものになっていると感じていた。「思うのだけれど」伯母は言った。「マイケルはレオポルド嬢のお見舞いくらいはするべきでしょうね。何と言っても、マイケル、あなたはあの子の命を救ったわけだし。これは単に礼儀の問題ね」

「しかも、べらぼうにかわいい女の子だぞ」大佐が言った。「おまえくらい歳のだったらな、ボーイ、私はフィズのボトルとブーケを持ってとくに彼女のドアをノックしていたぞ!」

マイクは、訪ねることについては彼らが正しいとわかっていた。これ以上訪問を遅らせることはできない。それで、アルバートが次の午後を提案するメモを持って送り出され、レオポルド嬢は、喜んでお会いします、お茶にいらしてくださいだされば幸いです、という返事を、カトラ―夫人のいちばん上等なピンクの便箋びんせんに、太いのたっぷった字で書いたのだった。

前夜のうちに穏やかで筋の通った決定をすること——昼間それを実行することと

は、全くの別物だった。引きずる足取りで、マイケルはロッジに近づいた。知らない少女の所へ、いったい何を話しに行くというのか？ カトラー夫人は玄関でにこにこ笑っていた。「少しでも新鮮な空気が吸えるように、アーマ嬢は庭に行かせました。哀れな子羊ですよ」小さな格子垣の東屋に、白いクローシェ編みのクロスと、訪問者用のベルベットのハート型クッション付きデッキェアが備えられたティー・テーブルがあった。その子羊は、なぜか妹のバレンタイン・カードをその若者に思い出させた深紅のツルバラの天蓋の下で、モスリンとレースと緋色のリボンの泡立ちの中に姿勢正しく座っていた。

マイクは、アーマ・レオポルドが「絶世の美女」であるときんざん聞かされていたにもかかわらず、彼の顔に向けられたその甘やかで真剣な顔が極めて美しいという現実、自分が不意をつかれたことを自覚した。彼女は、彼が予想していたのよりも若く見えた——ほとんど子供のようだ。だが、それは彼女が微笑むまでのことで、彼女は目を見張るようなエメラルドのブレスレットで装飾された片手を、ゆったりした大人の気品をもって差し出した。「会いに来てくださってありがとうございます。こんな外の庭でお茶をすることを許していただけます？ マロングラッセは好き？——フランス産の本物ですよ——私は大好き。デッキェアっていいは壊れてしまう

のだけれど、カトラー夫人がこれは大丈夫だと言っています」会話で積極的な役割を担うのを強いられないことを喜びつつ——彼の限られた経験によれば、絶世の美女というものは驚くほど無口なものだった——、マイクはたるんだキャンバスチェアに体を沈め、自分は庭でのお茶が何よりも好きなのだと正直に言った。それは彼に家のこととを思い出させた。アーマは再び微笑んだが、今度はじきに国際的に有名になることになるべくぼが見えた。「パパはすてきな人だけれど、屋外で食事するのは嫌がるの。『野蛮だ』って」マイケルは「僕の父親もそうだよ」と笑い返し、より快適な位置にもぞもぞ動き、勧められてもいないのにもう一つマロングラッセを取った。「僕たちは、ピクニックに関しては何でも好きで……うわ、しまった……僕は何てへまで大馬鹿なんだ……僕がいちばん話したくなかったのがピクニックのことなのに——ああ、ちくしょう、またやっちゃった」

「まあ、どうか——そんなに悲しそうにしないで。それについて話すかどうかには関係なく、私の心の中にはいつもその恐ろしいものがあるわ……いつもいつもよ」

「僕の心の中にもだ」マイクが非常に低く言った。ハンギングロックが暗い美しさをきらめかせつつ彼らの間に聳え立った。「本当はうれしいの」ついにアーマが言った。「たった今、あなたがピクニックについて触れてくれて。あなたがロックでしてくれ

たことに對するお礼が言いやすくなったから……」

「何もしてないんだ、全く何も」若者は自分の申し分のないイギリス製ブーツに向かつてつぶやいた。「もっと言えば、本当は僕の友達のアルバートなんだよ」

「でもマイケル、私は知らないわ——マッケンジー先生は私に新聞を見せてくれないの——そのアルバートって誰？」マイケルは、アルバートがヒーローを、また陰の立て役者を演じたロックでの救出劇の描写を始め、最後にこう言った。「僕の伯父の御者だ。すごい奴なんだよ！」

「その人にはいつ会えるかしら？ 私のことを恩知らずの人でなしだと思っているに違いないわ」マイケルは笑った。「アルバートはそんな風には思わないよ」アルバートは、それはもう謙虚で、勇敢で、賢くて……。「ああ、君は彼と知り合うべきだ……」アーマはしかし、友人の称賛にひどく熱心で紅潮した、向かい合った若者の顔だけしか意識してはいなかった。カトラー夫人がティー・トレイを持ってロッジから出てきたとき、彼女は知らないアルバートの話題には少し飽きてきており、会話はチョコレート・ケーキへと移っていった。「六歳のころ」マイケルが言った。「僕、妹のバースデイ・ケーキを一度に全部食べちゃったことがあったよ」「カトラーさん、今の聞いた？ ミスター・マイケルがそれを全部貪り^{むさほ}尽くす前に、私に一切れ切ってくださいる方がよさそ

うね」楽しげな笑い声が響いた。それは、彼ら健康を損なった若者たちが必要として
いることであつた。

その晩、伯母の食卓から逃れられるとすぐ、マイケルは灯油ランプと冷えたビールの
ボトル二本を持って厩舎に立ち寄つた。御者は、黒い剛毛が群がり生えている力強
い胸の向こうから、揺らめく炎が光のさざ波を送り出している蝋燭の灯りで、『ホー
クレット』誌のレース情報を読みながら裸でベッドに横たわっていた。小さな窓の下
の壊れたロッキング・チェアを指さした筋骨たくましい腕のあらゆる動きに合わせ、
ドラゴンと人魚がのたうち、身をくねらせた。

「日が暮れてさえここはクソ暑いが、俺はもう慣れっこさ。上着を脱げよ。その棚の
上にマグが一組ある」そのマグが満たされ、すぐに蝋燭に引き寄せられた種々雑多な
昆虫に水泳プールを供給した。「立てるようになったあんたとまた会えて、本当によ
かつたぜ、マイク」なじみの快い沈黙が支配し、やがてそれはアルバートによって破
られた。「あんたが何とか嬢と、今日芝生で一緒にいたのをずっと見てたぜ」

「そうだ！ それで思い出した！ 彼女は明日パントに乗せてほしがっているんだよ」
「ボート小屋の前にそいつを繋いで、テーブルの上に舟棹ふなざおを置いていってやる。浅瀬
の睡蓮の根っこに気を付けるんだ」

「わかった、気を付ける。泥の中に気の毒な女の子を放り出したくはないからね」アルバートは歯を見せて笑った。「もしそれがミス・瓶の脚だったら、ずぶ濡れになってもへっちゃらだと思うぜ。ああいう無口な奴らはな、マイク、最悪なんだ……」彼はウインクして、ビールをぐいっと飲んだ。「ところで」マイクが笑いながら言った。「アーマ・レオポルドが、君にかなり会いたがっているんだけど」

「はあ、あの子が、俺に会いたいわって？ うお、この冷えたビールは体に染みるわ」
「僕が今日君のことを話すまで、彼女は誰がロックで自分を見つけてくれたのか知らなかったんだ。明日の午後、ボート小屋で落ち合うってのはどうかな？」

「冗談じゃねえよ！」もう一度マグを傾けてから、彼は《トゥー・リトル・ガールズ・イン・ブルー》を口笛で吹き始めた。彼が息継ぎのために止まるとすぐ、マイクは言った。「それなら、君はいつなら都合がいいんだい？」しかし、アルバートは、もっと吹きやすい調に移調して、自分で作ったでこぼこした裝飾音を付けて最初から再開した。ついに呼吸を使い果たして止まったとき、マイクは繰り返した。「で？ いつ？」
「あり得ねえってば。そんなことから俺は除外してくれ、マイク」

「それじゃあ、僕は彼女にいったい何て言えばいいんだい？」

「自分で考えなよ」彼はまたも口笛を吹き始めた。マイクはもはや本気で苛立ち、ビー

ルを残したまま床板の跳ね上げ戸を開き、下の飼料部屋の暗闇へと梯子を下りていった。アルバートの奴、腹が立つ！ 一体全体、彼は何を考えているんだ？

次の日、アーマは、ボート小屋の丸太の腰掛けに座ってマイクを待っていた。そのとき、砂利の上で車輪を擦^すっている音が聞こえ、顔を上げると、湖周囲の小道に沿って手押し車を転がしている、色褪せた青いシャツを着た肩幅の広い若者が見えた。彼があまりにも素早く動いていたため、彼女が立ち上がってボート小屋のドアから呼び掛けたとき、彼はすでに低木の植え込みまでの半分の距離まで行っており、声の届かない場所にいたか、あるいは、そのくらいまで行っていた可能性があった。彼女がもう一度、今度はかなりけたたましい声で呼んだので、彼は立ち止まり、振り向いて、ゆっくりと引き返した。ついに彼は彼女に向き合って立ち、そのぼさぼさでふさふさした毛髪の下の四角い赤煉瓦色をした農民のような顔や、見たところ彼女の頭上にある何か興味深い見えない物体に焦点を合わせているような深く座った目などが、じゅうぶんに見えるくらい近くまで来た。「私を呼んだんですか、お嬢さん？」

「叫んだんですよ、アルバート！ あなたがアルバート・克蘭ダルでしょう？」

「そうですが」彼は、彼女を見ずに言った。

「私のことはご存じですよね？」

「ええ」彼は言った。「よく知っています。私にご用ですか、何か？」日焼けした両腕が手押し車のハンドルに横たえられ、藍色の人魚たちが縮まって、飛び立つ準備ができていた。

「ロックの上で私を助けてくれたことへのお礼をしたかっただけです」

「ああ、そのこと……」

「握手をしていただけませんか？ あなたが私の命を救ってくださったんですよね」その奇妙な生き物は、乗り慣らされていない子馬のように、手押し車の柄の間を後方へと引っ込んだ。彼は空へ向けた視線を、嫌々ながらといった感じで彼女の視線の高さに合わせた。「実を言いますとですね、ドクとジム青年があなたを担架に乗せてからは、一度も考えたことがなかったんで」彼は、彼女の生命というよりは、なくなった傘か茶色の紙の小包でも渡したかのような雰囲気だった。「それについてちゃ、ミスター・マイケルが言っていることを聞くべきです！」赤煉瓦色の容貌が、笑顔に近いくらい引き伸ばされた。「まあ、たいした奴、とでも言いましょうか！」

「彼は、あなたのことを確かにそう言っていたわ、アルバート」

「俺のことを？ はあ、アホくせえ。おっとすみませんね、この言葉遣い、お嬢さん——俺はあなたのように上流階級の人と話すことがめったにないもんでね。んじゃ、

仕事に戻りたいんで。バイバイ」力強い手首の断固とした素早い動きで、人魚たちがサッと動き出した。彼はもうそこにはおらず、気がつくとアーマはほぼ完全に打ち捨てられていた。

ちょうど三時だった。何百万人もの個人にとって、この自転する地球上で、時間の普通の基準では計ることのできない単独の瞬間というものがある。カレンダーや鳴っている時計とは永遠に関係のない永遠の断片。アルバート・クランダルにとって、湖でのこの短い会話は、彼はかなり長い人生の間じゅう、記憶の中で否応なく拡大され、とある夏の午後の記憶の全容を占めることになるだろう。アーマが言っていたことと彼が答えたことの内容については、たいして重要ではなかった。実際のところは、自分の目が周到に避けていた輝く黒い目、その目を持つあの目もくらむようなまぶしい生き物を見ただけで、彼はほとんど会話の力を奪われていたのであった。十分後の今、低木の湿気の中に引き籠もり、彼は空の手押し車にへたり込んで手と顔の汗を拭いた。彼には、精神と肉体の平静を回復するための長い時間があった。もう二度とアーマ・レオポルドと話すことはない、それは絶対に確実なことだとわかっていたから。

スイス製時計が木の三の数字を指したのと寸分違わぬタイミングでマイクが家から出て、アーマがボートハウスのドア——いつも小さな木製の女性がある場所——に姿

を見せたとき、アルバートは月桂樹の生け垣の隙間を通して姿を消していた。彼女は、マイクが少し片脚を引きずって、まだらになった草の上を自分に向かって急ぐのを見ながら、そこに立っていた。「私、とうとうあなたのアルバートに会ったのよ」マイクの誠実そうな顔が、アルバートについて話すときいつもそうであったように輝いた。「それで？　僕が言ったとおりだっただろう？」もう、マイケルったら！　あんな不器用な赤煉瓦色の若者が、そのような崇拜すうはいの念を起こさせることを不審に思いながら、アーマは待機しているパントに足を踏み入れた。

暖かく日当たりのよい天候が続き、静かな湖上に散歩に出て、谷川のオルゴールの音に慰撫いぶされることが日常的に行われていた。フィッツヒューバート夫妻は、贅沢な緑の閑居で季節が消えていくのを見ながら、長い籐椅子とういすに横たわっていた。レイク・ヴェューの庭の空気は、この夏、不思議なほど穏やかだった。彼らは、客間の窓の下でニオイアラセイトウのベッドで蜜蜂が羽音を響かせているのや、たまにアーマの明るい笑い声が湖から流れ出てくるのを聞くことができた。オークと栗の木々の向こうでは、険しいチョコレート色の道を、ハシー氏のワゴネットの一台が、軋み音を立てて芝生の鳩たちを四散させながら通過していった。白いクジャクは眠っており、二頭のスパニエル犬は一日中日陰でまどろんでいた。

マイケルとアーマは一緒に、大佐の薔薇園、菜園、ほかの地面から一段低いクローケーの芝生、低木林を隅々まで探検し、全部が頑丈なシダで組まれた背もたれのまっすぐなガーデン・チェアに座って、子供のゲーム——「*ハルマ」とか「蛇と梯子」とか——に興じるには理想的な気持ちのいい小さな東屋で、曲がりくねった散歩を終えていた。会話に多くのことは必要なく、その状況はマイクにはよく合っている。フィッツヒューバート夫人が、丸木橋の上で手を繋いでいる彼らに出くわし、溜め息をつく。「なんて幸せそうなのかしら！　まあまあ若いこと！」そして彼女は夫に尋ねる。「あの二人ったら、いったいどうすればああ一日中話す事柄が見つかるのかしらね？」

時々アーマは、昔学校でよくそうしていたように、子供が尻（だて）を上げるのを楽しむがごとく、明るい空気中に言葉をどんどん放り出すことへの純然たる歓びのために、ペチャクチャとおしゃべりをしている自分に気づく。マイクは、彼女の横にいる間はずっと、答えることも、あるいは聞くことさえも必要ない。彼は、頭の向きを変えるたびに濃い髪の一房を片方の目の上に振り落としつつ、横木にもたれたり、プールにある石の蛙のぱかっと開いた口に無数の小石を繰り出したりしている。

もう午後遅くなり、小さな湖は、傾いた影と葦の中に浮いているわずかな黄色い葉の下で冷たくなった。「ねえマイク——私、夏がもうすぐ終わりで、これ以上湖で

舟に乗れないなんて、考えたくないわ」

「ちようどいいよ」睡蓮の葉の間を縫ってパントを注意深く巧妙に進めながら、マイクが言った。彼はにやりと笑った。「実は、この古いパントは、もう一度持ち出すには安全とは言えないんでね」

「おお、マイク！……じゃあこれで終わりなのね」

「ああ、そうだね——こいつが持ちこたえている間はとても楽しかったけれどね」

「ミランダがよく言っていたわ。物事はみんな始まって終わる、しかるべき時間と場所だって……」

マイクは、舟棹にひどく重そうにもたれていたに違いない。アーマは、パントがぎこちなくガクンとつんのめるように揺れたとき、腐りかけた床板の下で水がごぼごぼ音を立てているのを聞くことができた。「ごめん……水がはねた？ この面倒な睡蓮の根が……」

栈橋^{さんばし}では、睡蓮の花がすでに閉じ、薄暮の中で目立たなくなっていた。白鳥が前方の葦の間から優雅に飛び立った。水上を羽ばたいて対岸の柳の中に見えなくなるま

* 「ハルマ」とか「蛇と梯子」とか……「ハルマ」は、十六×十六目の盤上で二〜四人で行うチェッカーに似たゲーム。「蛇と梯子」は、すぐろく的一种で、蛇と梯子の絵のついた盤を用いる。

で、二人はそれを見つめてしばしの間立っていた。アーマが後に、マイケル・フィッツヒューバートのことを非常にはっきりと思い出すのは、こんな様子だろう。ブローニュの森やハイド・パークの木の下で、彼は全く唐突に彼女の心に浮かんでくることになる。金髪の一房が片目の上に掛かりつつ、顔が白鳥の飛翔を追って半回転していく、そんな姿で。

その夜、山の霧は松林から流れ落ちてきて、朝まで居座っていた。ロッジでは、アーマの部屋の窓から湖が見えなくなり、カトラー氏は早い冬の到来を予想して、温室を見るために席を立った。マナッサの店では、朝刊を買いに時々訪れる客が、薄れつつある関心をもって尋ねた。「女学校のミステリーに何か進展はあったかい？」何もなかった——少なくとも、マナッサの店先でわざわざでもニュースに分類できそうなことは何も。ロックの事件は収束し、処理され、もう忘れた方がいいと、地元民に広く認識された。

最後の湖上での舟遊び。最後の軽い手の握り……。目に見えず、記録もされず、ピクニックの構図は次第に暗く、また広がり続けていくのだった。

朝食のテーブルに着いたフィッツヒューバート夫人は、霧で覆われた庭を見渡し、ベルベットとレースに囲まれたトゥーラックへの移動の準備として、チンツを片づけ始めるようメイドに命じることにした。

「このハムは完全に煮込み過ぎだ」大佐が言った。「一体全体、マイクはどうしてしまったのだ？」

「部屋でコーヒーを頼んでいたわ。あの二人が申し分なくお似合いだって、あなたも認めるべきだわね」

「まったく、骨までぼろぼろだぞ！ 誰のことを言っとる？」

「マイケルとアーマに決まってるでしょう」

「どこがお似合いなんだ？ 種の繁殖か？」

「下品なことおっしゃらないで。昨日二人が湖へ行くのを見たわ……あなたには感情はないの？」

「私の感情と煮込み過ぎのハムとの間に、いったいどんな関係があるの？」

「もう、ハムはいいから！ わからないのかしら、私たちの小さな相続人の女の子が、今日のランチに来ようとしているってこと！」

フィッツヒューバート家の人々にとって、巨大なトレーで食堂に運ばれてくる美味なる食事の時間に几帳面に現われることは、彼らの有閑の、あるいは定型のない日々を定義し、整えるのに役立つ神聖な儀式なのだった。ホールにあるインド製銅鑪どらの中間使いによる打撃と同時に、フィッツヒューバート一族の胃の中にある一種の料理計時器が、その時刻を体の内部で宣言した。「昼食の後、短い仮眠を取る……。我々は四時十五分にベランダでお茶にする……。五時にドッグカートを回すようアルバートに言っておけ」

レイク・ヴェーの昼食会は一時きっかりであった。甥に、時間を守らないと訪問者が大罪に問われると警告されたアーマは、ポーチで深紅のサッシュのしわを伸ばし、小さなダイヤモンドの時計をちらりと見た。奇妙に非現実的に見えるヴァージニア・クリーパーのマントに覆われた別荘の、やたらとあちこちに張り出した正面フアサードから漏れる暑苦しい黄色い光に達するまでに、霧はようやく晴れていた。マイクがどこにも見えないので、彼女は脇のベランダがいたうの、いくぶん近づきやすい入り口に向かって進んだ。ベルが、縁付き帽子、縁なし帽子、外套がいたう、テニスラケット、傘、*フライヴェール、トーピー

帽、ステッキなどの寄せ集めの上で、悲しげなアメリカヘラジカの頭部が全体を統括している黒いタイル張りの廊下から、小間使いを呼び出した。湖を見晴らす客間では、銀の花瓶に生けた薔薇ラ・フランスの香りが強く漂い、空気さえピンク色になったように思われた。フィッツヒューバート夫人が、昨日のピンクのサテン・クッションが並べられた小さなピンクのソファから、来客を迎えるために立ち上がった。「男性陣はじきに来ますよ。夫は今ここに来ます。薔薇園から長靴じゅうに土をくつつけたまま、まっすぐホールに向かつて歩いているところよ」

マッターホルンの日没やタージ・マハルの月光を見たことのあるアーマは、これまで自分が見た中でフィッツヒューバート大佐の庭園が最も美しいものだ、正直に、声を大にして主張した。

「土ってね、良いカーペットに付いたのを落とすのがすごく大変なの」フィッツヒューバート夫人は言った。「自分で所有したら驚くわよ、お嬢さん」少女は確かに美人で、一見質素なフロックを自信を持って身に着けていた。真っ赤なリボンを付けたレグホン・ハットは、おそらくパリ製だ。「ママが二枚持っていて——一枚目はフランス製でした」

*フライヴェール……馬の顔の虫除けなどのためのマスクのこと。

「オービュッソン？」フィッツヒューバート夫人が訊いた。

まあ、何てこと！　マイクさえ来ていれば！「私は結婚相手の男の話をしたいのに——カーペットじゃなくて」フィッツヒューバート夫人は楽しんではいなかった。「本当に良いカーペットは、ダイヤモンドの次に最善の投資対象だって、インドでうちの大佐がよく言っていたわ」

「男の人の趣味は、その人が選ぶ宝飾品でほとんど判断できると、ママが言っていた。パパはエメラルドについてはとうな専門家です」年長の女性の整って小さく色褪せた口から言葉がこぼれた。「まあ、そうなの？」ほかに言うべき言葉が皆無となり、二人の女性は希望を抱いてドアの方を見た。年老いてよだれを垂らした二頭のスパニエル犬を従えた大佐の入室のため、それは開いた。

「伏せだ！　伏せ！　このお嬢さんの白ユリのような手は舐めちゃいかんぞ。はっ！　はっ！　犬はお好きかな、レオポルド嬢？　私の甥は、このけだものどもは太り過ぎだと抜かしおる——マイケルはどこだ？」フィッツヒューバート夫人の目は、まるでその甥がひよっとするとカーテンの飾り板の掛け布の中か、シャンデリアから垂れ下がったヘッドの中に隠されているかのように、天井を掃いた。「あの子ならランチは一時だと重々承知しているわ」

「昨夜、松林まで散歩に行くとか何とか言っていたな——だが、それはレオポルド嬢が昼食会に来るこの初めての機会に遅刻していい理由にはならん」大佐は、どんよりした憂鬱な視線を訪問者に向けて、細い手首のエメラルドを反射的に記憶に銘記しながら言った。「あなたは、私たち二人みたいな時代遅れの老人の相手を一人でするのを我慢しなければならんというわけだ。申し訳ないが、ほかに客がいないのでな。カルカタ・クラブでは常に、八人というのが小さな昼食パーティでの完全な数字だと考えられていた」

「幸いにも、そのクラブのおぞましいインディアン・チキンを昼食にはしてませんかね」彼の妻が言った。「昨夜スプラック少佐が、政府の別荘からご親切にイワナを送ってくれたのよ」大佐は自分の時計を見た。「あの厄介な若造を待つわけにはいかん。魚が台無しになる。焼きイワナがお好きならいいのだが、レオポルド嬢？」アーマは、協力的に焼きイワナは好きだと言い、どんなソースが適切かということまで知っていた。大佐は、もしこの小さな女子相続人が射止められたなら、ウスノロのボケ・マイクも幸福になるだろうと思った。いったい何だってマイクは現れないのだ？

イワナのデリケートな香りの共有された評価が、長く悠長な食事の間じゅう三人の会話に保たれ続けることは、ほとんど期待できなかった。現在、テーブルからマイク

の場所は除かれていた。ホストの、薔薇の生長と我が恵み深い女王陛下に対するボーア人の無法な忘恩ぶりについての長談義にもかかわらず、落着かない沈黙が舌肉のムースにつきまとった。二人の女性は、英国王室のやけくそな活発さや、果物の瓶詰め法——アーマに対しては最も退屈な奥義——や、話題を埋める最後の手段として音楽などについて話し合った。フィッツヒューバート夫人の妹はピアノを弾き、アーマはギターに「色の付いた飾りリボンを付けて、あの神聖なジプシーの歌」を弾いたという。コーヒーが運ばれてくるとすぐ、ホストは葉巻に火を付けて、彫刻されたインド製テーブルの背後のピンクのソファに女性たちを取り残した。フランス窓の向こうに、アーマは薄黒い空の下にどんよりと広がる湖を見ることができた。客間は気持ち悪いほど暖かくなっており、フィッツヒューバート夫人の小さくしわのある顔は、《不思議の国のアリス》のチェシャ猫の顔さながらにピンク色の空気を出入りしていた。なぜ、おお、なぜマイクは昼食会に出損なったの？ 今、フィッツヒューバート夫人は、カトラール夫人がどんなコックかって尋ねているのかしら？ 「すてきなカトラール夫人！ あの人には天使のように料理をします！ 私、彼女の神々しいチョコレートケーキのレシピを持っていますわ」

「私は寄宿学校でマヨネーズの作り方を習ったのを覚えているわ——木のスプーンで

一滴ずつ……」アーマは、マイクが霧の中を幽霊のようにさまよっている松林から降りてきた。客間は空転していた。

ついにマントルピースの上の時計が退出に妥当な時刻を宣言し、アーマはそのため
に立ち上がった。「少しお疲れのようね」フィッツヒューバート夫人が言った。「ミル
クをたくさん飲まなきゃだめよ」少女は、十七歳にしては美しい物腰となかなかの雰
囲気を持っていた。マイケルは二十歳——どんぴしゃりだ。彼女は玄関のドアまで訪
問者に付き添い——社交的承認の確実な合図である——、ここで取り上げられるには
複雑すぎる理由から、アーマがトゥーラックの自分たちの家を訪ねてくれるよう希望
した。「復活祭の後、うちの甥のための舞踏会が催される予定があることを、あの子、
あなたに伝えているかしら。あの子はオーストラリアではほとんど若い知り合いがい
ないのよ、かわいそうに！」

息が詰まるような客間の暖気の後で、湿った松の香りがする庭の空気は幸いにも涼
しかった。突風が、ヴァージニア・クリーパーに長い振動を走らせ、家の前の砂利の
上にその深紅の葉をまき散らし、円形の花壇の整った接ぎ木スタンダードの薔薇ローズの頭を曲げた。そ
れから再び静寂と、湖上にこだまする塔時計の間の長い打撃。朝の霧深い不透明さは
今はなくなっている。曇天に積もっているくすんだサフラン色の雲。固いとげとげで

山頂を取り囲む松林の鉄の冠。森の反対側のずっと下方には、蜂蜜色の光の波の中で絶えず揺らめいている見えない平地と、そこからひとときわ抜きん出ているハンギングロックの黒い実体。マッケンジー医師は正しかった。「ロックのことを考えてはいけないよ。ロックは悪夢で、悪夢は過去のものだからね」その老人の助言に従って、現在に集中しなければ。白クジャクが芝生に尾を広げ、太った灰色の鳩が小さなピンク色の脚でよちよち歩いているこのレイク・ビューは、とても美しい。塔時計がもう一度鳴り、蜜蜂が薄れていく光の中で巣に帰っていく。雨粒がレグホン・ハットにぽたぽたと落ちてきた。カトラー夫人が傘を持ってロッジから出てきていた。「ミスター・マイケルは、嵐が近づいていると言っていたわ。私のうおのめにも、何だか痛みが走っているし」

「マイケル？ 彼に会ったのですか？」

「ちょっと前にね。あなたへの手紙を持って立ち寄ったのよ、お嬢さん。すばらしい礼儀を身に付けた若者というのは、まさに彼のことを言うのね——まあ、なんてかわいい帽子！」そのレグホンはカトラー夫人の光るリノリウム床の上に投げ捨てられた。「構わないで——二度とかぶらないから——手紙を、お願い」残念なことに、彼女の最上寢室のドアが、カトラー夫人が一日中楽しみにしていた心地よい雑談を閉ざした。

それでも、帽子は間もなく回収され、リボンには丁寧アイロンが掛けられて、教会のカトラ―夫人の信仰深い頭の上に、この先一年間にわたって姿を見せ続けることになった。

アーマの部屋では、ベネチアン・ブラインドが昼間の暑さを遮断していた。稲妻が窓ガラスをジグザグに走ったとき、彼女はちょうど窓を押し上げ、マイクの手紙を開こうとしていた。青い光の閃きひらめの中で、しだれた榆が一枚の葉も動かすことなく突出していた。突然、妙に生暖かい強風がどこから起こり、榆は震え、揺れ始め、カーテンが部屋の内側に向かって膨らんだ。雷のドラムロールに合わせて嵐が襲いかかり、いっばいに膨らんだ雲はマセドンの住民が山の上で記憶している中でも最強の雨となつて炸裂し、それが数分以内に馬車道から砂利を洗い流し、山の小川を増水させた。レイク・ヴェーのプールでは、濁った水が石の蛙の頭の上に渦を巻きながら降ってきた。湖の外縁では、係留具から引き裂かれた小舟が睡蓮の葉の上で荒々しく揺れていた。疾風に追い立てられ、半ば風に溺れている鳥たちは、揺れる木々から地面に落ち、一羽の死んだ鳩が、機械仕掛けのおもちゃのように窓の外を帆走して通り過ぎていった。ついに、風雨は初期の猛威を失った。青白い太陽が顔を出した。水浸しの芝生と破壊された花壇は、劇場で見るような輝きを帯びていた。嵐は終わり、アーマはまだ

窓の所について、固い四角形の封筒を開いた。

形式的に宛名が書かれ、きれいに整った習字帳のbだのeだののような輪形部と、ケンブリッジ大学で古典籍に短時間遭遇している間に苦しんで習得した、ばらばらと降る釘のような垂直線部から成る、奇妙に子供っぽい筆跡がなければ、それは招待券か請求書と言っても通用するくらいに没個性的だった。ケンブリッジでもそこでなくとも、マイクにとってペンを取るという行為は、頭を混乱させ、言おうとしていることを忘れさせる以外の何ものでもなかった。それに対し、直感で綴り、自分の句読法を直情的なダッシュやエクスクラメーション・マークだけに限定したアーマは、最も簡潔なメモの中でも完全に彼女自身であった。その手紙は、今朝松林にあまりに長時間留まりすぎたことと、遅くなりすぎてイワナに間に合わなくなるまで時計を見忘れていたことに対する謝罪で始まった（「君が相手だからなおさら」）。焦燥感を高まらせつつ、彼女はページをめくった。「僕は今朝、すぐに銀行家を訪ねてほしいという家からの手紙を受け取った。うんざりだけど、そうなんだ。目下荷造りに専念しているところで、明日の早い列車で出発しなければならぬだろう。君が目覚めるずっと前に！ 数日のうちにやって来る冬にレイク・ビューが閉ざされている間は、僕はそこには戻らないと決めた。残念ながらそれは、僕が君にさよならを言えないことを意

味する。不運だけれど、わかってくれると信じている。だから、もし僕らがオーストラリアで二度と会うことがなくても、君がとても仲良くしてくれたことには感謝しているよ、親愛なるアーマ。最後の数週間は君を抜きにしては語れないだろう。

マイクより愛を込めて

追伸。言い忘れていたけれど、僕はオーストラリアをかなり長期間にわたってじっくり見て回るつもりだよ。北クイーンズランドを手始めにね。君はそこを少しは知っているかい？」

紙の上で考えを述べることの困難さに気づいた人間にしては、この書き手は自分の意思を非常に上手に伝えていた。

出来事の年代記においては、我々は必然的に日中の有形の行動に関心を持つものだが、歴史は、人間の精神が真夜中と夜明けの間の沈黙の時間にいちばん遠くまで歩き回るということを示唆している。それらの暗く実りの多い時間は、記録されることがまれであった。その秘密の開花時間は、平和と戦争、愛と憎しみ、戴冠あるいは王座の剥奪を生んだ。例えば、一九〇〇年三月のこの夜、小太りのインド女帝がバルモラル城でフランネルの寝間着を着てベッドで計画していたこと、彼女を微笑ませ、その

*インド女帝……ヴィクトリア女王の称号の一つ。

小さく頑固そうな口をすぼめさせたその計画とは何なのか？ そんなことを誰が知っているだろう？

こんな具合に、このページのプロットに現れる無名の個々人も、静止と静寂の中で苦しみ、夢を見るのである。ミセス・アップルヤードの重々しいカーテンで覆われた寝室では、ベッドに入ったその女性の食用肉の脂肪のような灰色をした仮面は、目の目に見えない邪悪な蒸気によって、誇張ではなくむくんで染みが付けられている。ドア数枚離れた場所では、子供のセーラの小さく尖った顔が、ミランダの夢によって睡眠中でさえ明るくなっている。その夢は、愛と欲びでいっぱいに満たされていたため、彼女は翌日の間じゅうそれを持ち歩くことになる。教室で、不注意のために数え切れないほどの減点を食らっている間も、またミス・ラムリーにそそのかされ、「猫背」矯正のために半時間、夢でいっぱい頭をうなだれながら体育館の矯正板に革紐で縛られている間も。レイク・ヴェーでは、塔時計の五時を打つ音がコックを目覚めさせ、彼女はマイケル氏の早い朝食にオートミールを出すためにあくびをしながら起き上がる。マイクは、銀行業務と荷造りと今朝のメルボルン・エクスプレスの座席を手に入れる夢を生み出すことにそのほとんどが占められた、落ち着かない夜を過ごして目を覚ます。一度、彼は、アーマが揺れる列車の廊下を自分の方へ急いでやって来る夢を

見る。「ここよ、マイク、私のそばに席があるわ」そして、自分の傘で彼女を押しつけるのだ。

ロッジで落ち込んでいるアーマも、時計が五時を打つのを聞いた。半分だけ覚めた目で、明けてゆく新しい一日の色彩と輪郭をゆっくり獲得していく庭を凝視しながらハンギングロックでは、最初の灰色の光が東面の岩盤と峰々をくり抜いている——もしかして日没なのかしら……。今はピクニックの午後で、四人の少女たちが池に近づいている。彼女はもう一度、小川の輝きと、ブラックウッドの木の下のワゴネットと、新聞を読みながら草の上に座っている金髪の若者を見る。彼を見るやいなや、彼女は横を向いてしまい、二度と彼を見ることはない。「なぜ？　なぜ？……」「なぜ？」と芝生のクジャクが甲高く鳴いている。私にはわかっていたからだ、そのときでさえ……。いつでもわかっていた、マイクは、私の最愛の人だということが。

12

三月十九日木曜日午後二時、アップルヤード女学校は寒く静かで、ロースト・マトンとキャベツの匂いが漂っていた。寮生たちの午餐がちょうど終わり、メイドたちは自由時間であった。午後の授業はまだ始まっていなかった。ドーラ・ラムリーは果てしなくペーパーミント・キャンデーをしゃぶりながらベッドに横たわり、マドモワゼルは正面に車道を見渡す窓辺に座って、今朝の郵便物の中の、アーマからの手紙を読み返していた。

レイク・ヴューのロτζジから

親愛なるディアンヌ

取り急ぎ——C夫人と私はティッシュ・ペーパーにどつぷり漬かっていて——ペンが見つかりません。C夫人が、服の畳み方を見せたいのに、あのきれいなフランス女性がなぜここにいないのかと言っていますか？ すばらしいニュースがあります——私の大好きな両親が、今週インドからやって来るのです。メンジーズ・ホテルのスイー

トで両親を待つために、私はメルボルンに行きます!! すべて、長い長いお話の終わりのような感じです。今突然、そのお話の最後の章が来て、もう何も読めないのです。だから、親愛なるディアンヌ、たぶん木曜日の午後、駅へ行く途中で、私は学校に立ち寄るつもりです——あなたにさよならを言う最後のチャンス——愛する女の子たちにも——まだ学校にいるみんなのことを考えると心が痛みます——もちろん、ミニーやトムのこと。でも、もし避けられることなら、A校長はごめんです! ああ、言うのも嫌なのですが、あの人と話すのは考えるのも苦痛なのです! ディアンヌ、私、あなたの結婚祝いを買うチャンスがなかったの——マナッサの店には、ブーツとお気に入りのジャムとブリキの湯沸かし容器くらいしかないし——だから、どうか私のエメラルドのブレスレットを私の愛とともに受け取ってください——ブラジルの私の祖母がくれたもので、緑のオウムの話と一緒にあなたに話したものです——覚えてる? とにかく、祖母はもう死んでいるので、知られたり嫌がられたりすることはありません。C夫人は、あなたが好きだと言っていた青いシフォンのことを知りましたが、います。もう行かなきゃ。

*ティッシュ・ペーパー……包装用に使われた薄紙で、現在のティッシュ・ペーパー(英語の facial tissue)とは異なる。

追伸——着いたらあなたの部屋へ直行します——あるいは、もしあなたが授業中ならその教室へ。A校長が許してくれてもくれなくてもね。

アーマより愛を込めて

いくつかの窓でいくつかの頭がハシーの馬車が通りをやって来るのを目撃したが、マドモワゼルの頭はその最初であった。そこから、深紅のクロークと、あちこちの方向になびいている深紅の羽根飾りの付いた小さなトク帽を身に着けたアーマが降りてきた。階下の机に着いていた校長も彼女を見ており、マドモワゼルを驚かせたのは——そのような秩序の喪失は女学校では未知のものだった——、階段を半分ほど降りていたその女教師の前方にある玄関のドアに校長自身が姿を見せ、形式的な挨拶の冷たい波動に巻き込んで書斎の中へとその訪問者を押し流していったことであった。

二階の踊り場では、彫像のうちの一つだけが、どんよりした午後に弱い光を投じること許されていた。そのとき、ドーラ・ラムリーが影の中から抜け出てきた。「マドモワゼル！ 準備はできたのですか？ 体育館の授業に遅れてしまいます」

「いまいましい体育館！ 今降りていきます」

「あの子たちは、このところ新鮮な空気の中に出ることをめったに許されません——

運動が必要だということに異存はないですわね？」

「運動！　バーとダンベルを使ったあの馬鹿げた拷問ごうもんのことをおっしゃっているのですか？　あの歳の若い女の子なら、腰に若い男性の腕を添えてもらって、明るい夏のドレスを着て木々の下を散策すべきです」

ドーラ・ラムリーは、あまりに深いショックを受けたため返答できなかった。

アップルヤード校長にしてみれば、アーマ・レオポルドの訪問は最悪のタイミングであった。つい今朝方、女校長は、シドニーに着いてすぐに書かれたレオポルド氏からの極めて不穏な手紙を受け取っていたのである。それは、ピクニックに至る出来事ことの、新しい、より徹底した調査を苛酷に要求するものであった。「奇跡的に助かった私の娘のためのみならず、自分の子供の運命をまだ何も知らされていない不幸な親たちのためにも」。そこには、レオポルド氏の費用でスコットランド・ヤードからトップ・ランクの刑事が派遣されるという記述と、ぼかしてはあったが無視できない恐ろしい言葉がさらに綴られていた。

書斎は、どういうわけか記憶していたのよりもかなり小さくて、アーマは驚いた。その他の点では、何も変わったことはなかった。記憶していると通りの蜜蠟みつろうと新鮮なインクの匂いがあり、マントルピースの上の黒い大理石の時計は、相変わらず大きな

音で時を刻んでいた。アップルヤード校長が自分の机に着き、訪問者が完全に惰性でおぼろの会釈をしたとき、無限とも思われる沈黙があった。絹張りの胸の上のカメオのブローチは、昔なじみの断固としたリズムで上下していた。

「お座りなさい、アーマ。完全に健康を取り戻したそうね」

「ありがとうございます、アップルヤード先生。もうすっかり良くなりました」

「それで、あなたはまだハンギングロックで経験したことを何も思い出せないの？」

「はい、何も。つい昨日、マッケンジー先生がもう一度私におっしゃいました。上の斜面に向かって歩き始めてから後のことは、何も思い出せないかもしれないと」

「残念ね。とても。関係者全員のためにもね」

「それをおっしゃらないでください、わかっていますので。アップルヤード先生」

「間もなくヨーロッパへ発とうとしているとか？」

「できれば数日中に。両親が、一時的にオーストラリアから離れるのがよいと考えているのです」

「そう。率直に言うかね、アーマ、私は残念に思っているのよ。あなたのご両親が、あなたが外国での純然たる社交生活に乗り出す前に、アップルヤード女学校での教育を修了することを決めなかったことを」

「私は十七歳です、アップルヤード先生。世界のことをいくらでも学ぶにはじゅうぶんな年齢です」

「あなたはもう私の管理下にないので言わせてもらうけれど、あなたの先生方は、あなたがあまり勤勉でないと、しょっちゅう私に不平を言っていたわ。あなたのように将来を期待される少女であっても、字は正しく綴^{つづ}れなければね」その言葉が口から出るが早い、彼女は戦略上の大失敗をしでかしたことを悟った。裕福なレオポルド家の反感をこれ以上買わないようにすることが、何よりも必要なのだ。お金は力である。お金は強く、安全である。静寂さえ代価を支払われねばならない。少女は、驚くほど顔を白くしていた。「綴り？ 綴りが、ピクニックの日に起こったことが何であれ、それから私たちを救えたのでしょうか？」手袋をした小さな手が、机の上を激しく叩いた。「言わせてください、アップルヤード先生。私がこの女学校で学んだ多少なりとも重要なことは、みんなミランダに教わったのです」

「残念なこと」女校長は言った。「ミランダのあの称賛に値する自制心を、いくらかでもあなたが身に付けられなかったことはね」彼女は苦勞して体のあらゆる神経と筋肉を収縮させ、どうにか完璧な丁重さで椅子から立ち上がり、アーマが、メルボルンへ行く前に自分が使っていた部屋で今夜を過ごしたいと思っているかどうかを尋ねた。

「ご好意だけはいただいておきます。ハシーさんが下の車道で待っていますので。でも、私、出る前に女の子たちとマドモワゼルに会いたいのですが」

「いいですとも！ マドモワゼルとラムリー先生は、体育館で授業中です。今回だけは、規則を緩めてもいいと思うわ。規律は乱れるけれど、入ってさよならを言ってもよいでしょう。マドモワゼルには、私が許可したとお伝えなさい」

冷淡な握手が、女校長の随意の命令と懲戒を待ってアーマが何度も立った部屋——はるかな昔、女生徒として——を、これで最後と立ち去るときに交わされた。彼女は、閉じられたドアの後ろの女性をもう恐れてはいなかった。その女性は、抑えられない震えに襲われた手で、机の下のコニャックのボトルに手を伸ばした。

緑のベーズ張りドアの後ろの暗い領域で待ち伏せていたミニーが、両腕を開いて彼女の方へ走り寄ってきた。

「アーマさん。トムが、あなたがそこにいるって教えてくれたの。あなたをよく見せて……まあ！ 本当に大人っぽくなって！」

アーマは首を曲げ、安っぽい匂いのする温かく柔らかい首にキスした。「いとしミニー。会えてとてもうれしいわ」

「ねえ、あなた、復活祭の後、もう戻ってこないと聞いているけれど、本当なの？」

「ええ本当よ。今日は、あなた方みんなにさよならを言うために立ち寄っただけなの」
メイドは溜め息をついた。「責められないわね、あなたのことも。私たちみんな、あなたがいなくなるのを残念に思っているわ。最近、ここがどんなふうになっているか、あなたには見当も付かないでしょう」

「あなたの言うことは信じるわ」アーマは、真鍮の花瓶に生けられたホワイトヘッド氏の遅咲きの真つ赤なダリアが照らし損なっている薄暗い玄関で、彼女をちらりと見ながら言った。ミニーは囁き声まで声量を落とした。「規則と規制なんてもんじゃないのよ！ 寮生は授業時間以外は口を開くこともほとんどない！ まあ、私とトムは数日中に抜け出すんだけどね、ありがたいことに」

「おお、ミニー、とてもうれしいわ——結婚するのね？」

「復活祭の月曜日にね。マドモワゼルと同じ日よ。聖バレンティンが私たち両方のためにうまくやってくれたのだと思うって言ったら、彼女、すごく真剣に言うのよ。『ミニー、あなたが正しいのかも』だって。聖バレンティンは恋人たちの守護聖人だものね」
寮生に「恐怖の部屋」としてよく知られている体育館は、西翼の長く狭い部屋だった。採光は、家庭の目的（おそらく余った食料か、不必要な家具の貯蔵）が何かをご存じの天の神に向けて、最初の所有者によって設計された格子の付いた天窓の列だ

けであつた。今は、その露出した石灰塗料が塗られた壁際に、女性の健康および美容促進用のさまざまな器具が並べられ、さらに天井から吊り下げられた縄梯子と、一組の吊り輪と平行棒があつた。片隅には、革バンドが取り付けられたパッド入りの水平な板が立ててあり、それは絶えず猫背の問題を抱えている子供のセーラが、その上で今日の午後の体育館での時間を過ごすことになるものだった。一組の鉄のダンベルは、トムしかそれを持ち上げるだけの筋肉を持つてはいなかったのだが、それが有しているか弱い女性の頭蓋骨の上でバランスを取るための重量と、山のように積まれた重い体操用棍棒は、自然の基本法の無視という權威の横柄さを示すものであつた。

部屋の片端の、床の高さから数フィート上げられた演壇の上で、ミス・ラムリーとマドモワゼルがすでに勤務に就いていた。前者は小さな不品行の見張りに従事し、後者は《ハーレフの男たち》行進曲を弾きながらアップライトピアノの前に座っていた。ワン、トゥー、ワン、トゥー。黒いサージのブルマー、黒いコットンのストッキング、白いゴム底の靴を身に着けた少女たちの三つの列が、軍歌に合わせてだるそうに沈んだり浮かんだりしていた。マドモワゼルにとって、体育館の授業は循環する苦行であつた。やがて五分間の休憩時間になったとき、彼女は、アーマ・レオポルドがこの建物に実際にいて、間もなくさよならを言うために体育館に来ることを発表する歓びを味

わうことになるだろう。ワン、トゥー、ワン、トゥー、ワン、トゥー……。彼女は夢想し、ピアノを弾きながら思った。彼女たちはすでに女学校の秘密の情報網を通じて知っている可能性がある。ワン、トゥー、ワン、トゥー……。「ファニー」彼女は一瞬キーから両手を離して言った。「ひどく乱れていますよ。音楽に合わせるよう注意して、さあ!」「減点、ファニー」ミス・ラムリーが小さな帳面に走り書きをしながらつぶやいた。だらけた腕と脚の身体運動は、左右に滑っていく十四組の目の表情と食い違っていた。ワン——トゥー、ワン——トゥー。閉じた木の檻に入れられたノルマンディー兎の目のような、油断なく狡猾な目。ワン、トゥー、ワン、トゥー、ワン、トゥー、ワン、トゥー……。一本調子の打鍵音は非人間的で、ほとんど耐えがたいものだった。

まるで外にいた人間が入りたくなかったかのように、非常にゆっくりと体育館のドアが開いた。《ハーレフの男たち》に従って回っていた部屋の中のすべての頭は、バーの中央で停止した。マドモワゼルはピアノのそばに微笑んで立ち上がり、深紅の外套に身を包んだ晴れやかで小さな姿をしたアーマ・レオポルドは入り口に立っていた。

「入って、アーマ!」
ヴォワラ ゴム・セテユヌ・ボンヌ・シユルプリーズ メザンファン
 なんてうれしい驚きでしょう! 皆さん、十分間、好きに話して結構です。さあ、授業は終わりです!」部屋の中央へ二、三步進んでいたアーマは、

ためらいがちに立ち止まり、微笑み返した。

微笑みへの返答はなく、興奮した挨拶の騒音もなかった。静寂の中、列は、おがくずの敷き詰められた床の上で、ゴム底足の引きずり歩きへと崩壊した。がっかりして、女性教師は上を向いた顔たちを見下ろした。どれ一つとして、深紅の外套の少女を見てはいなかった。十四組の目が、漆喰の壁を通り抜けた向こう側の、彼女の背後の何かに固定された。それは、夢遊病者のどんよりした内面凝視そのものである。おお、愛する主よ、この不幸な子供たちには、私には見えないものが見えているのでしょうか？ そのとおり、彼女たちの前には共通のヴィジョンが展開し、マドモワゼルは張りつめた薄いヴェールに、言葉によって穴を穿つ^{うが}勇氣が出ないでいる。

彼女たちは、非常に美しい透明さへと次第に薄れていく体育館の壁と、ハンギングロック上の鮮やかな空に溶け込んでいく花のように開いた天井を見ている。ロックの影が、きらきらした平原を横切って水のように輝きながら流れていき、彼女たちはピクニックの最中で、ユーカリの木の下の温かく乾いた草の上に座っている。昼食は小川のそばに広げられる。彼女たちは、ピクニック用バスケットと、もう一人のマドモワゼル——シャディ・ハットをかぶって楽しそうな——がハート型のケーキを切るためのナイフをミランダに渡しているのを見る。彼女たちは、片手にサンドイッチ、片

手に鉛筆を持ったマリオン・クエイドと、暗赤色のペリースを着て木に寄り掛かったミス・マクロウが食べるのを忘れているのを見る。彼女たちは、ミランダが聖バレンティンを祝して乾杯の音頭を取るのを聞く。カササギと水音。白いモスリンを着たもう一人のアーマは、巻き毛を振り落とし、小川でカップをすすいでいるミランダに笑いかけている……。無帽で輝く黄色い髪を持つミランダ。ピクニックは、ミランダがいなければつまらなかった……。いつもまばゆい光の中を行き来するミランダ。虹のように……。おお、ミランダ、マリオン、どこへ行ってしまったの……。？ ロックの影は、より暗く、長くなった。彼女たちは根が生えたように地面に座り、動くことができない。岩と巨礫が散在するその恐ろしい形は、平原を横切って、彼女たちの方へ重々しくやって来る生きている怪物だ。そうして、今近くで、彼女たちは、行方不明の少女たちが汚らしい洞窟の中で腐敗して横たわっている、その割れ目と穴を見ることが出来る。一人の下級生が、死んだ人々の体が這い回る虫でいっぱいになるのを聖書がどう書いているかを思い出し、おがくずの床の上で激しく嘔吐する。誰かが木の椅子をひっくり返し、イーデイスが大声で絶叫する。ヒステリーのハイエナの叫びを識別したマドモワゼルは、狂ったように鳴る心臓とともに演壇の端へと静かに歩く。「イーデイス！ その恐ろしい騒音を止めなさい！ ブランシェ！ ジュリアナ！ 静か

にしなさい！ みんな静かに！」遅過ぎる。その職権を与えられた軽い声は、灰色の規律の重量下で長いこと蓄積されたくすぶる激情と同じように耳を貸してはもらえず、隠れた恐怖が急激に燃え上がる。

ピアノの蓋の上に小さな真鍮の銅鑼があり、通常は静粛と整列のために打たれているものだった。マドモワゼルは今、細い腕にあらん限りの力を込めてそれを打ち鳴らした。准教諭はピアノ椅子の後ろに退却していた。「無駄だわ、マドモワゼル。銅鑼だろうが何だろうが、注意を向けそうにありません。どうにも手に負えない」

「あの子たちに見られないように横のドアからこの部屋を出られるか試して、校長を呼んできてください。これは一大事ですわ」

准教諭は冷笑する。「怖いからね？」

「そうよ、ラムリー先生。私はすごく怖い」

アーマは、笑ったりすすり泣いたりしている少女たちに取り囲まれて立っていた。ぐいぐい押し寄せてくる頭と肩の海の上で、緋色のふさふさした羽の束が、傷ついた鳥のように上がった下がりながら震えていた。喧騒が高まるとともに、不吉な声が甲高く響いた。何年も後、モンペリエ夫人が孫たちにオーストラリアの教室でのパニック奇譚きたんを話していたとき——五十年前も前よ、あなたたちメザンファン、でも私はまだその

夢を見続けている――、その光景は悪夢の様相を呈していた。祖母が、小さな少女のころにとても怖がったフランス革命の残酷で邪悪な古い印刷物の一枚と、その体育館の光景とを混同していたことは疑いない。彼女はそれらを、狂った黒いブルマー、体育館の拷問道具、激情によって顔を歪めたヒステリー状態の女学生、流れる頭髮と鉤爪づめのような手、として思い出すのだった。「刻一刻、私は思ったわ。この子たちは理性を失い、彼女をバラバラに引き裂くだろうって。復讐、無分別で残酷な復讐。それはあの子たちが求めていたもの……私には今でもありありと思い浮かぶ。何の罪もないのに、そんなにもたくさんの苦しみの原因とされた、美しく小さな生き物への復讐……」それは、今、一九〇〇年の楽しい三月の午後、フランス人女性教師ディアンヌ・ド・ポワティエが直面させられた、見るも恐ろしく、何とかして独力で切り抜けなければならぬ現実なのであった。何か彼女に頭を高く保って落ち着いて歩くよう警告を与えたとき、彼女は幅広の絹のスカートをまとめると壇上から助走を付けて跳躍し、動き回る集団へと急いだ。

その間、弱々しく当惑しきったアーマは窒息しそうになっていた。全女性の芳香を嘆かわしく思い、六フィート離れた教室にいるミス・ラムリーの、ペパーミント臭でいっぱいなのその存在を鼻で知ることができると豪語していた好みの難しいアーマは、

不可解にも自分に憎しみを込めて近づき広がった怒りの顔に取り囲まれている。ファニーの小さなし鼻は、かなり焦点がずれて、逆立った毛を露わにしたテリアのようにくんくんいつている。金が詰められた歯の上でぽかんと開いた洞窟のような口——それはジュリアナに違いない——に、よだれを垂らした舌の湿った先端。それらの温かく酸っぱい息が彼女の頬の上を行き来した。火照った肉体が彼女の敏感な胸に押し付けられた。彼女は恐怖に駆られて大声で叫び、それらを押しつけようと空しい努力をした。現実離れた丸顔が背景のどこから浮かび上がった。「イーディス。あなた!」

「そうよ、かわいい人。私よ」暴動の首謀者という新しい配役を演じ、イーディスはずんぐりした人差し指を気取って振りながら、我を忘れていた。「さあ早く、アーマ——教えてよ。私たちはじゅうぶん長いこと待っていた」せがむ声とつぶやきが聞こえてきた。「イーディスの言うとおりでわ。教えてよ、アーマ……教えて」

「私が何を教えられるっていうの? みんな、気が変になっちゃったの?」

「ハンギングロック」イーディスは集団を押しつけて前へ出た。「そこでミランダとマリオン・クエイドに何があったかを教えてほしいのよ」めったに発言しない、寡黙な方のニュージークランドの姉妹が、大声で付け加えた。「このネズミの巣の誰も、何にも教えてくれない!」ほかの声が参加した。「ミランダ! マリオン・クエイド!

どこにいるの？」

「言えないわ。私は知らない」

固まった集団の間にくさびのように自分の細い体を割り込ませる力に突如として駆られ、マドモワゼルはアーマの腕を抱えて彼女のそばに立った。彼女は、自分の高く小さなフランス人の声で叫んだ。「馬鹿な子たちね！ 脳みそはないの？ 心はどうしたの？ かわいそうなアーマは、知らないものをどうやって伝えられるっていうの？」「ちゃんと知っているのに言おうとしないのよ」ブランシェのかわいらしい少女顔は、乱れた巻き毛の下で怒りで赤くなった。「アーマは大人の秘密を持つのが好き。いつだってそうだった」

イーデイスの大きな頭が中国の首振り人形のようにうなずいていた。「じゃあ、彼女が言わないのなら私が言うわ。聞いて、みんな！ あの人たちは死んだのよ……死んじゃった。ミランダとマリオンとマクロウ先生。三人ともハンギングロックの蝙蝠だらけの薄汚い古い洞窟の中で、完全に死に絶えているんだわ」

「イーデイス・ホートン！ 嘘つきの馬鹿娘」マドモワゼルの手はイーデイスの頬を激しく打擲した。ちようちやく「おお神よ」そのフランス女性は声に出して祈っていた。この一連の騒動に参加していなかったロザマンドもまた祈っていた。聖バレンタインに、であ

る。聖バレンティンしか聖者を知らなかったのだから無理もないのだが、彼女は彼に對して祈るのだった。ミランダは聖バレンティンが好きだった。ミランダはあらゆるものに対する愛の支配力を信じていた。「聖バレンティン。私はあなたへの正しい祈り方を知りません……愛する聖バレンティン、みんながアーマをそっとしておき、ミランダのためにもお互いを愛し合わせてくださいますように」

珍しいことだが確かに、善良なる聖バレンティン——伝統的にはロマンティックな愛の、かなり真剣な言動に関わってきた——は、このような無邪気な火急の祈りを捧げられることがあるのだ。この聖人がそれに対するスピーディーで実用的な答えを持っているはずだと信じることは、結局のところ正当であるように思われる。口を開き、すばらしくたくましく男らしいアイルランド人トムを装った、天国から来た微笑みのメッセンジャーが、体育館のドアに立っていたのだから。ウッドエンドの歯科医訪問から帰ったばかりの、優しく親切で歯のないトムは、かわいそうな若い人間たちが珍しくちょっとしたおふざけをしているのを見て、顎が痛んでいるにもかかわらず大喜びした。トムは、マドモワゼルにうやうやしく笑いかけ、ペン・ハシーのメッセーヂをアーマ嬢に伝えることができるように、その浮かれ騒ぎ（それが何であつても）のペースが緩む適当な幕間^{まくあい}を待っていた。

トムの到着は、注意が散漫になる一瞬と頭の回転運動をもたらし、おかげでアーマは抜け出すことができた。跪いていたロザマンドは立ち上がり、イーディスは自分の燃える頬に手を押し当てた。メッセンジャーはハシー氏の挨拶を伝達した。もしレオポルド嬢がメルボルン急行に間に合うことを望むなら、今すぐこちらに戻るのがベストです。個人的な追伸として、「それから、私と厨房の全員より、お嬢さんの幸福を祈っております」これと同じくらい簡潔に素早く、すべては終わりを告げた。少女たちは以前の規律正しい態度で、アーマに自分たちの間を通過させるために後ろに下がって、マドモワゼルは彼女の頬に軽くキスをした。「あなたのパラソルは玄関に吊り下げてあるわ、かわいい子——さようなら。私たちはまた会えるでしょう」（ああ、でも、会うことはない……二度と会えない、私の小鳩）。

体育館のドアに向かって昔なじみの優美さで歩いている彼女を見ながら、おぎなりの告別の言葉がつぶやかれた。ここで、予期しない、また永遠に解明できない悲しみへの無限の同情心に満たされた彼女は、振り向いて、手袋をした小さな手を振り、弱々しく微笑んだ。こうしてアーマ・レオポルドは、アップルヤード女学校から離れ、彼女たちの生活から消え去った。

マドモワゼルは時計を見ていた。「今日の午後は遅くなっていました、皆さん」

いつも光が乏しい体育館は、急速に暗くなった。「すぐに部屋に帰って、今夜の夕食のためにこの見苦しいブルマーから何かかわいいものに替えてください」

「ピンクを着てもいいの？」イーディスが知リたがった。女教師は鋭い目で彼女を見た。「着たいものを着てよろしい」ロザマンドが一人だけ居残った。「お部屋の整理を手伝いましょうか、マドモワゼル?」「ありがとう、でもいいわ、ロザマンド。偏頭痛がするし、少しの間一人になりたいのよ」ドアが人けのなくなった部屋を閉ざした。ドーラ・ラムリーが校長を連れて戻ってこなかったことを、彼女はたった今思い出した。狭い戸棚の中で、鍵穴に片目をくっつけてうずくまった姿勢から、威厳をもって現れるのは容易なことではない。本当に、かなり大変だわ! 安全な避難所から踏み出すのは今が賢明だと思ったドーラ・ラムリーは、自分の耳がほとんど信じられなかった。「ほら! 勇敢で小さなヒキガエルが穴から出てきたわ!」唾液の滴がドーラ・ラムリーの乾いた唇を湿らせた。「失礼な、マドモワゼル!」几帳面に楽譜を片づけながら、ディアンヌは軽蔑を込めた一瞥をその准教員に投げた。「そんな気がしたのよ! あなたは校長に私の伝言を伝えようとしなかったわね?」

「遅過ぎたのよ! 誰かに見られていただろうし……。終わるまでここに留まる方がいいと思ったの」

「戸棚の中で？ おお、賢い小さなヒキガエル！」

「はて、なぜダメなのかしら？ あの子たちはみっともない恥さらしを演じていた。私にできることは何もなかった」

「あなたは何かした方が身のためだわ。この恐ろしい部屋の中に秩序を戻すのを手伝って。明日の朝、使用人たちに何となく普通でないと気づいてほしくないから」

「問題は、マドモワゼル、アップルヤード校長に何を伝えるのかということよ？」

「何も」

「何も？」

「聞こえたでしょう！ そのとおり、何も伝えないわ」

「驚いた人ね！ もし私の思いどおりにすれば、あの子たちは鞭打たれることになるのだけれど」

「あなたにすばらしくぴったりのフランス語があるわ、ドーラ・ラムリー。残念なこ

とに、きちんとした人たちは使わない言葉だけれどね」血色の悪い頬が紅潮した。「よ

くそんなことを私に言えるわね！ よくもまあ！ 私はこの恥ずべき出来事を個人的にアップルヤード校長に知らせます。今夜にでも」

ディアンヌ・ド・ポワティエは床から体操用棍棒を拾い上げた。「これが見える？

私の手首は並はずれて強いのも、ラムリー先生。この部屋を出る前に、今日の午後ここで起こったことを一言も漏らさないと約束しなければ……。これで思いっきりあなたを叩くわよ、本気で。誰もフランス人教師を疑わないでしょうね。わかる?」

「無垢な少女たちに対して権威を持つのは、あなたみたいな人にはふさわしくないわ」
「賛成ね。もっとずっと面白いことを期待しながら育ったんだけど。これも人生^{セ・ラ・ザイ}で、約束する?」

閉じたドアに必死に目を向けるドーラ・ラムリーは、必要となる突進が、自分の扁平^{ぺいせき}足と波打っている胸には酷であると判定した。

そのフランス女性手持ちぶさに体操用棍棒を回していた。「私は完全に本気よ、ラムリー先生。理由をあなたに教えるつもりはないけれど」

「約束する」もう一人が喘ぎながら言い、マドモワゼルが棍棒が積んである山のとっぺんに持っていたものを静かに戻すと、今度は震えて、大理石のように蒼白^{そうはく}になった。「まあ! あの変な音は何?」

今はほとんど暗闇となった部屋の奥の隅から、孤独で耳障りな叫びが聞こえてきた。ミス・ラムリーは、ひどく不愉快な午後のストレスのため、子供のセーラを水平な板の上に嚴重に拘束した革バンドを解くのを忘れていたのだった。

今述べられた事件が結局のところミセス・アップルヤードに知らされたかどうかは、推測できるだけである。ドーラ・ラムリーがマドモワゼルとした黙秘の約束を破ったということは、あのような状況下ではありそうにない。その日の夕食は、女校長が時々好んでしたように司会をし、寮生たちは特に空腹ではなかったにしても、静かで行儀が良かった。ちょっとしたとりとめのない会話が楽しまれ、ディアンヌ・ド・ポワティエが見て判断できた限りでは、セーラ・ウェイボーンの偏頭痛での欠席と、ミス・ラムリーに右の頬が神経痛気味だと不平を言っているイーディス・ホートンを別にして、特に変わったところはない。イーディスは、体育館のすきま風の中に座っていたからに違いないと言っている。「体育館にはかなりすきま風が入りますからね」と、マドモワゼルはテーブルの一方の端から口を出した。

反対側の端でラムのカツレツを憂鬱そうに攻めている女校長は、人食い鮫をバラバラにすることに従事している専門家のようだった。実際、彼女にはフライにするべきはるかに重要な魚があった。カツレツは、まだ彼女の机の上にあって返事を書いてい

ない、レオポルド氏からとミランダの父親からの二通の手紙に関する内心の葛藤の、外面上の象徴にすぎない。しかしながら、彼女は、会話のボールを転がし続けることが士気のためには必要だと感じており、無理をして右手に座っているロザマンドに問いかけた。アーマ・レオポルドは、オリエントとピー・アンド・オーのどちらの航路でイギリスを旅しているのかしら。

「知りません、アップルヤード先生。アーマは今日の午後、ほとんど話す暇がないくらいにしかいなかったの」

「妹と私は、アーマの顔色が少し悪く、疲れているようだと思いました」ニュージールランド・ペアの、よりはっきり話す方がしゃべり始めた。

「そうだったの？ アーマは、自分は完全に回復したと私に請け合ったのよ」校長の重い鎖のブレスレットに付いた金の南京錠が、皿に当たってがちやがちやと音を立てた。彼女はその音で自分自身びくっとした。また、テーブルの反対側の端にいるフランス人女性教師が、何となく奇妙な感じで自分を見ているような気がした。そのフランス女性の手首に輝くエメラルドに注目すると、それがあまりにも大きくて、こんな宝石が現実にあるものなのだろうかと疑わしくなった。その宝石の光景は、彼女の思考を、ブラジルにダイヤモンド鉱山を所有していると言われたレオポルド家に連れ戻

した。彼女はカツレッツに憎々しげに突っかかり、必要ならば徹夜をしても、金曜朝の早便に両方の手紙をトムに投函させようと決心した。

すぐに食事は終わり、ライスプディングと煮込みプラムを型どおり神に感謝し、女校長はテーブルを立てて書斎に引込み、ドアをロックし、座り、ペンを手にし、不快な仕事に就いた。これほど危険で、無数の枝葉の事柄のためにもつれた状況に直面した女性たちがいたとしたら、その大多数はずっと前に最も単純な解決法を取っていたことだろう。例えば、イギリスでの緊急の仕事を言い訳にして、遺憾ながらこれを最後に女学校を閉校する、といったことは、まだ可能だっただろう。事業がうまくいっているうちに、それがもたらすであろうもののために売却することだってできた。ビジネスでは、そのことは何と呼ばれるか？「信用」^{グッドウイル}。彼女は齒ぎしりした。そんなものはもうほとんど残っていない！すでに女学校は幽霊が出ると噂され、その他もろもろの悪意あるたわごとが飛び交っていた。彼女は一日の大半を密室にした書斎に座っていたかもしれないが、目や耳まで閉ざしてしまふほどのくのぼりではなかった。つい昨日、コックがミニーに何気なく言っていた。「連中」が、暗くなってから女学校のグラウンドに奇妙な光が動き回っているのを見た村で言っている、と。

*オリエントとピー・アンド・オー……どちらも船舶会社。

過去において幾度か、ミセス・アップルヤードとその夫アーサーは、互いに手を取り合っていたいへんな薄氷を踏んだことがあった。しかし、以前にはこのような公私ともに災難が充満した状況に直面したことなどなかった。剣を取って真っ昼間に敵の枢軸に突っ込むのは、肉体的な勇氣の問題である。だが、暗闇で見えない敵の首を絞めるのは、全く異なる資質を要求する。今夜、彼女の全存在が断固とした行動を切に求めた。そう、でもどんな行動を？　ハンギングロックの呪わしいミステリーが未解決のままである限り、アーサーでさえ作戦計画を案出することはできなかっただろう。

手紙のどちらかに落ち着いて取りかかる前に、彼女は、その日二度目だったが、最下段の抽出から元帳を取り出し、それを綿密に調査した。現在の計算では、復活祭後に新学期が始まったとき、先の二十名の生徒中およそ九名だけが戻ることを期待できそうだった。彼女はもう一度、名簿を指で追った。抹消される最後はホートン、イーデイス。その我慢ならないほど愚かな母親が、今日、一人娘のための「別の計画」を知らせる手紙をよこしたばかりだった。数か月前なら、そのニュースは単に歓迎されるばかりで、劣等生はさっさと取り替えられたことだろう。そのイーデイスを除くと、わずかに九人の名前だけが残り、そこにはセーラ・ウェイボーンが含まれていた。机の後ろの食器棚にはコニャックのボトルがあった。彼女はそれを開け、グラスに半分注

いだ。燃えるような蒸留酒の細い流れが、事実に基づくクリアな思考の連続を誘発した。彼女はもう一度机に座り、ペンを持つその女性の背後の性格も鉄の意志も、何も明かさないうような非人間的なカッププレート書体で、二、三のメモを取った。ついに手紙は切手を貼られ、封印され、女校長が疲労した肉体を階上に引きずっていったのは三時近くなってからだった。

その翌日は何事もなく経過した。バンファ―巡査部長からの郵便物の中に、自分には新しく報告すべきものは何もないが、ラッセル・ストリートの連中が、来週の都合のよい時間にミセス・アップルヤードに会いたがっている、という記述があった。また、何人かの親たちが説明されるべきだと提案していた、ピクニックの日より前の、学校の規律の問題に関する一、二の事柄……。天候は穏やかで晴れていて、ホワイトヘッド氏はずっと据え置きになっていた休日を要求し、その日はブーツを脱いで『園芸ニュース』を読んで過ごした。トムはひどく痛む顎をミニーのフランネル・ペチコートの布切れで包帯して職務に精を出し、セーラ・ウェイボーンはマドモワゼルからの特別指令で、ベッドで一日の大半を過ごした。その他の点では、何もかもが通常どおりであった。

土曜日は、通常はささやかな家庭生活や家事と親しむ一日だった。寮生は繕い物

をしたり、家に手紙を書いたり——彼女たちの書状は机上のアルコールランプを用いて本部で厳密に検閲された——、晴天の下でクローケーやテニスをしたり、グラウンドの周辺を当てもなくぶらついたりした。トムがダリア花壇のそばでミス・バックとの雑談という災難に遭遇していたとき、正面玄関にハシーの馬車が到着して男を解放した。降ろされる旅行鞆はない——ただ彼の年齢と同じくらいのみずばらしい若者と、その者自身が運んでいる小さくてみずばらしい鞆があるだけだった。その若者は、さらなる指示があるまで、正面の窓から見えない場所で待つよう運転手に指示をした。外見は取るに足らないが、トムはすぐにそれがミス・ラムリーの、生意気な青二才である兄だと認識した。レグ・ラムリーが妹を女学校に訪ねたのは、この数か月で初めてのことだった。一体全体何だって彼は今日を選んだのかしら？ 女校長はそう思い、彼がドアベルを鳴らす準備として手袋を急いで着け、よれよれの外套のしわを伸ばすのを見ていた。三分以内で歓迎できない訪問者を追い払うことができること——必要なら完璧に愛想良く——をひそかに誇っていたミセス・アップルヤードは、初めて会ったときの握手で、レグを執拗^{しつよう}で長尻の人間であると認知していた。要するに、妹のドーラと同じで、馬鹿で無作法なのである。しかし、彼はここにいた。いや、もっと正確に言えば、ワラガル町区の職場の住所が書かれたあまりきれいでない名刺がここに

あった。「ラムリーさんをお通しして、アリス、それから私はとても忙しいと伝えてちょうだい」

湿っぽくて、もったいぶっていて、頭の弱いレグ・ラムリーは、ギプスランドの商店の店員で、「女性の教育」から「地方消防団の無能力」まで、太陽の下のあらゆる問題に視野と見解を有していた。机の上をいらいらした指で叩きながら女校長は考えた、今日彼が持ち出すのは、それらのうちのどれなのか？ また、何が彼を突然ワラガルからはるばるやって来させたのか？「おはようございます、ラムリーさん。今日いらっしゃるおつもりでしたなら、手紙で伝えていただきましたかったですね。私、今日の午後はとても忙しくなりました、あなたの妹さんもそうなのです。帽子がうるさいようでしたら、その椅子の上に置いてください——それから傘もね」

権威ある垂直位から最後通牒^{つうちよう}を突き付けることを心に描きながら、昨夜の半分を眠らずに横になっていたレグは、膝の間に傘を挟んでしぶしぶ椅子に腰掛けた。「言わせていただきますと、今日訪問するつもりはなかったのです、マダム、昨日の午後遅く、妹のドーラから電報を受け取るまではね。その電報のせいではないぶん気が動転してしまいました」

「そうなのですか？ 理由をうかがってもよろしいですか？」

「アップルヤード女学校は、もはや私の妹が雇用されるのにふさわしくない場所だという私の見解が、裏付けられたからです」

「単なる私見の問題には興味はありません。その異様なお言葉に理由はあるのでしょうか？」

「ええ、ありますよ。たくさんあります。実は——」彼はてかてかになったポケットを手探りしていた。「ここに手紙があります——あなたがいなかった場合に備えてね。お読みしましょうか？」

「けっこうです」彼女は振り向いて時計を見上げた。「おっしゃりたいことをできるだけ簡潔にお伝えいただけるのなら」

「そうですね、何はさておき、女学校についての世評がすべてです。私の見解では、この——えー、これらの——えー、ハンギングロックでの不幸な事件以来ずっと、あまりにもたくさんさんの世評が立ちました」

女校長はとげとげしく言った。「いつ何時、新聞にあなたの妹さんのことが書かれたのか、私には思い出せませんが……？」

「そう、たぶん妹のことはなかった……。でも、人々が何と言っているか、あなたはご存じのはずです。最近、新聞を開けば必ずこの事件に関する何かしらを読まされ

ることになる。私としては、ドーラのような品行方正な若い女性が、どんなものであれ犯罪やその種の物事に関係するのは好ましいことではないと思うのです」（もし若いラムリーの心を、詩人のそのように目に見えるようにすることができたなら、その上には『世間体』と刻まれていることだろう。キッチナー卿のような恐ろしく重要な人物でない限り、レグの見解においては、世評はかつてほとんど品行方正なものなかったのである）

「言い方に気を付けてください、ラムリーさん。犯罪ではありません。それを言うならミステリーでしょう。全く違ったものです」

「わかりました、では——ミステリーね。私はそれも好みませんがね、アップルヤードさん。妹もです」

「私の弁護士たちは、すぐに解決すると確信しています。あなたとあなたのワラガルのお友達がどんな考えを選択なさろうとも。おっしゃらなければならぬことはそれ

*キッチナー卿……ホレイショ・ハーバート・キッチナー（1850-1916）は、英国の陸軍元帥・

政治家。第二次ボア戦争の総司令官。この物語の後、第一次世界大戦の初めに、「英国は君を必要としている」という標語付きポスターでキッチナー・アーミーという多数の応募兵を集めた。

で全部ですか？」

「あとはドーラが、あなたとの雇用契約を終えたいと私に伝えてきたということだけです。今日、土曜日、三月二十一日からね。実は、私は外に彼女を連れ帰るための馬車を待たせているのです。もしあなたが、兄がここにいと彼女に伝えて、荷物をまとめて出て行かせてくださるのでしたら、重い鞆は後で送ることができます」

その若者が後に列車の中で妹に言ったように、この重大な局面に当たって、彼は、ミセス・アップルヤードの網カラードの首に奇妙な色の斑点が徐々に増大していくのに気がついた。彼女の両目は、今のような様相でなくても彼はそれまで見たことがなかったのだが、二個のビー玉のようにくるくる回り、彼女の頭から飛び出しそうに見えた。次の瞬間、老いた少女は激しい言葉で食ってかかった。「ひゅう、ドーラ、君に校長の声を聞いてほしかったよ！ いいあんばいに、僕は情勢を完全に支配していて、つべこべ言い返そうとはしなかったんだ」

公平な証人なら、そんなことを言っている訪問者自身の方が蠅のように青ざめた珍しい顔色になり、見てわかるくらい震えていたことを認めたことだろう。

「あなたの妹は、はやり眼の大馬鹿なのよ、ラムリーさん。私の方から復活祭前に通知することになったはずだわ、あなたの干渉なんかなくてもね。幸運にも、あなたは

面倒事から私を救ってくださった。彼女はその異常な行動により、契約違反で給料を失うということを、もちろんご理解いただけるわね？」

「それについてはよくわかりません。でも、後ほど調停できるでしょう。ついでながら、彼女は書面の推薦状を欲しがるだろうと思うのですが」

「たぶんそうね！ 私からどんな推薦状を書いたとして、それが一粒の真実を含んでいたとしても、勤め口なんか見つからないでしょうけれど！」彼女の手は、机から跳び上がりそうになるくらいの力で吸い取り紙入れを打ち付け、ラムリー氏もまた跳び上がりそうになった。「私は誠実な女なんですよ、ラムリーさん。もしあなたが知らないのですしたら、もうすっかり言わせていただきますが、妹さんは気難しくて、無知で、のろまで、この家を出て行くのは早ければ早いほど良いのです」彼女は、手元の呼び鈴の紐を引き、机から立ち上がった。「玄関でお待ちいただければ、メイドの一人が妹さんをお連れします。そうしたら、すぐに荷物をまとめ始めるよう伝えてあげなさい。急げばメルボルン・エクスプレスに間に合いますよ」

「でも、アップルヤードさん！ 最後まで聞いてください！ このことについての私の見解をお知りになりたいでしょう？ 私が言いたいのは、本当にたくさんの人間がいると——」というわけか、彼の背後に書斎のドアがあった。無帽で、激しい怒り

の抑圧で震えているレグは、玄関にぼつんと立っていた。ここで彼は、挫かれた雄弁術と傷付けられた自尊心の苦痛のうちに、面目を保ったまま書斎から帽子を奪還する手段をあれこれ考えながら、背もたれの高いマホガニーの椅子の上で何とか時間を過ごさねばならなかった。

ドーラ・ラムリーは、自分の乏しい衣類とわずかな個人所有物——日本の扇、誕生日記念の本、母親のガーネットの指輪——を、枝編みの衣類バスケットや数個の鞆や褐色の紙小包に詰め込むことに一時間以内で成功して、ハシーの馬車に乗った兄の隣に座っていた。馬車が、たくさんの見えない目の視線に晒された車道を滑るように走っていたことは付け加える必要もないだろう。好奇心には、表現の特有の手段がある。上がった眉やうなずきや頭を横に振る動作や肩をすくめることにより、言葉は援助される。二十一日の土曜日の晩、アップルヤード女学校での好奇心は熱を帯びていた。静粛の制限措置が出ていたにもかかわらず、非常に敏感になった耳なら、階段と踊り場の絶え間ないブヨのようなざわめきに気づいたことだろう。女性の好奇心の無言の騒音が引き起こされたわけだが、それはまだ満たされてはいなかった。ミス・ラムリーとその兄が、午後遅く、一緒に馬車で去っていくのを見られてからずっと、その所有物を急いで梱包したボックス・シート上の異様な詰め合わせは、極めて熱狂的

な推測を生じさせていた。准教諭は本当に女学校をこれを最後に去ろうとしていたのか？ もしそうなら、なぜあんなにも慌てていたのか？ 華々しい別れの機会を失ったのはミス・ラムリーらしくないということで、一般的な見解は一致した。メイドは、兄が到着してすぐ言ったことと、どれくらいの間玄関で立ち往生させられていたかを繰り返して話すよう嘆願された。また、兄が馬車とともに下で待っているとアリスから通知されたとき、ミス・ラムリーは何と言ったかも。すべてが非常に不可思議で、事情が違っていれば退屈な日の喜劇的息抜きとしてそれなりの機能を果たすことであった。ドーラ・ラムリーとその箸^{はし}にも棒にもかからない兄は、ずっと以前から奇怪な人物として分類されていたのだから。

その家でミス・ラムリーの出発に関心を示さない唯一の人間は、セーラ・ウェイボーンであった。彼女は、一冊の本を持って敷地内をほつき歩きつつ午後を過ごしていた。その子供の蒼白さが増していることに衝撃を受けたマドモワゼルは、「尻尾を掴^{つか}んで牛を押さえ（＝勇気を出して危険を冒して）」「マッケンジー医師のところに行るようミセス・アップルヤードに頼み込む決心をした。体育館での一件以来ずっと、ディアンヌは奇妙な新しい力に気づいていた。彼女は今や、天の非個人的な憤怒によって無力にさせられたミセス・アップルヤード個人の憤怒を、もう恐れてはいなかった。

水曜日まで五日間しかない。その日から復活祭休暇で女学校は解散になる。その後、彼女がルイの腕の中にいるころには、アップルヤード女学校は悪夢に毛が生えたようなものになっていることだろう。夕食のテーブルの向こう側にちらりと目をやったロザマンドは、アイリッシュ・シチューの皿の上で彼女が微笑むのが見え、彼女が考えていることを正確に読み取った。女学校での生活は、人を惹きつける存在であるマドモワゼルなしには我慢できなかっただろう。彼女は思った。「何だって私はこんな所にいるの？　こんな馬鹿な子供ばかりに囲まれて」そして、復活祭をもって永遠に帰宅させてくれるよう両親に頼むことを決めたのだった。

セーラ・ウェイボーンのみならず、ミセス・アップルヤードもまたマッケンジー医師の世話を必要としていた。彼女は、この二、三週でひどく体重が落ちており、絹のスカートは彼女の大きな腰の辺りでずり落ちそうになっていた。たるんだ頬は、時にはこけて青ざめ、時にはブランシェがイーディスに囁いたように「太陽に長時間晒されたままの魚みたいに」「膨張して」暗赤色のまだらになった。二人の少女は、女校長が玄関からゆっくり階段を昇っているのを見て、アフロディーテの陰でくすくす笑った。最初の踊り場までの途中、レースの縁が付いた布と日本の瀬戸物が上手に並べられたトレイを持って、後ろからミニーが階段を上がってくるのが女校長の目に

入った。彼女はとげとげしく尋ねた。「この家には病人がいるの？」

コックやアリスと違って、ミニーはミセス・アップルヤードに恐れをなさなかった。「これはセーラ嬢の夕食です、マダム——マドモワゼルが、土曜の夜にはお嬢さんたちに宿題がなく、あの子の気分が悪そうなのを見て、何かそっと差し入れてやるように私に言ったのです」

書斎のちょうど上の広大な寝室に早いところ引っ込もうとしていたミセス・アップルヤードがその少女を呼び戻したとき、彼女はセーラの部屋のドアにちょうど達していた。「ちょっと話があるので、それまで灯りを消さないようにセーラ嬢に言っていただけかしら」

セーラは、ベッドで上半身を起こしていた。ガス灯はとても暗くされており、彼女の重い髪は解かれ、小さな肩に落ち掛かっている。ミニーは思った。熱で赤くなった顔と暗く輝く目のおかげで、ほとんどかわいいと言ってもいい。「ほら、お嬢さん、マドモワゼルのスペシャル・オーダーのおいしいゆで卵を持ってきたわよ。ゼリーとクリームはマダムのディナー・トレーから失敬したものなの」細い腕がベッドの上掛けから飛び出した。「それを下げて。手を付けるつもりはないわ」

「まあ、それじゃあ、セーラさん、赤ちゃんみたいよ！ 十三歳の大きな女の子——

なんでしょう？」

「知らない。私の後見人でさえ正確には知らないの。時々自分は数百歳なんじゃないかって感じることもあるわ」

「学校を卒業して、男の子たちがみんなあなたの後を追うようになれば、そんなふうには感じなくなるわよ——お嬢さん——あなたに必要なのはほんのちょっとのお楽しみだけね」

「お楽しみ！」その子供は繰り返した。「お楽しみ！ここに來て。ベッドのそばに來てよ、学校ではミランダ以外誰も知らないことを教えるから。彼女が絶対絶対言わないって約束してくれたことよ。ミニー！私は孤兒院で育ったの。お楽しみ！私は今でさえ時々それを夢に見る、眠れないときに。ある日、私はみんなに言った。スパンコールの服を着て、きれいな白い馬に乗ったサーカスの女騎手になったら楽しいだろうなって。寮母は、私が逃げるつもりだと思って、私の頭を剃った。その腕の中で、私は彼女に噛みついてやった」

「まあまあ、お嬢さん。叫ばないで」優しい心を持ったミニーは、ひどく当惑した。「ねえ見て、考えが変わったときのために、洗面台のここにトレイを置いていくわ。あら、それで思い出した！マダムが会いに來るから、それまで灯りを消さないようにって。

本当に、ゼリーをちょっとだけ食べてみない？」

「いらないうってば！ お腹なんか空いてない！」彼女は壁に顔を向けた。

メルボルン列車の二等個室の中で、レグとドーラ・ラムリーは休むことなく話し続けていた。妹は時々、途中の駅が深まる暮色の中に飛び去っていくときに「ひど過ぎる！ おお、そんなことしてない！ まさか！ よくもまあ！」という不意の発声とともに怒りの涙をぽんぽんと叩いて拭った。兄はすでに、全期間就労分の給料を引き出す算段を練っていた。レグの見解によれば、これは火急の問題なのだ。「ええとね、ドーラ、おそらくあの年寄り少女は今日明日にも破産するだろう——つまり、そうなりつつあるのさ」

列車がスペンサー・ストリート駅に到着したときには、ドーラは兄を伴ってワラガルに戻ることに取り決められていた。その老齡の叔母の荒廃したコテージで三人で生活を営む。「僕の考えでは、ドーラ、君の待遇はずっと悪くなるだろう。でも結局は、リディア叔母さんは永遠には生きられないからね」この注釈に元気づけられつつ、彼らは列車を降り、きちんとした市街のきちんとした小さなホテルに向かう市街電車に乗り込んだ。ドーラは、夜のために後翼棟の二つの安いシングル・ルームを前もって

予約までしていた、意志の強い有能な兄への称賛の念で満たされた。夜食にちょうど間に合い、コールド・マトンと濃いお茶を飲み込んだ後、兄妹は疲れ果ててベッドに退いた。早朝三時ごろ、木の階段の上の、風になびくカーテンに近過ぎる場所で、火が付いたままになっていた石油ランプが床に落ちた。炎は、みすばらしい壁紙と泡のできた塗装面を舐め尽くし始めた。立ち上る煙が、階段の窓から街路へと、誰にも見られずに流れ出た。数分以内に、後翼棟全体が燃え盛る炎に包まれた。

レグ・ラムリーの最期は、完璧にきちんとしてはいたのだが、世間の注目というひどくけげばしい炎が伴ったがために、その死んだ若者は、燃えているホテルからの華麗なる復活というほとんど不死鳥のような特質を獲得することになった。彼が取るに足りない十五年の間、働き、主張し、熱弁を振るったワラガル・ストアは、ラムリー家の葬儀に際して半日休業となった。葬儀では、とうとう見解を表明できなくなった故人に感謝されたかもしれない、されなかったかもしれない公の弔辞があった。

前の章で、我々はハンギングロックで始まった、文字どおりそれ自身を焼き尽くす構図の一部分を、五週間後、市街のホテルで目撃した。しかし、火災の週末の間、もう一つのものが、山霧に覆われて凍結した静止状態にあるレイク・ヴェューに徐々に近づいていた。マイクが町に一週間近く滞在し、フィッツヒューバート家が冬を過ごすためにトゥーラックに戻ったとき、弁護士の手紙を置き忘れたためにマイクはマセドン山で二晩を過ごすことを余儀なくされた。アルバートは二十一日土曜日の晩に、馬とともにマセドン駅で彼に会った——実は、マイクの列車はメルボルンへ向かうラム

リーたちの列車を数インチ以内の近さで通過したのだった。ドッグカートが今は葉のない栗の並木道を通り過ぎている間、ほとんど気づかないほどかすかなみぞれが降り始めていた。「今年は冬が来るのが本当に早いぜ」アルバートは、襟を立てながら言った。「冬にずらかるだけの余裕がある金持ちども全部がそうしても、不思議はねえな」いつも明々と灯りが点いていた家の正面には、燃えているわずかな灯りがあるだけだった。「コックは休暇で残っているが、女中どもはあの一家と一緒にトゥーラックに行っちゃまったよ。あんたの使っていた部屋は準備万端、火もあるからな」彼はにやりと笑った。「山火事の起こし方は知ってるよな？」たった一つの灯りが玄関で薄暗く燃えており、居間の開いたドアを通して布で覆われたソファと椅子がちらりと見えた。「あんまり騒がしくないだろう？ デイナーも落ち着いて食べられるし、既舎の俺の所にも楽に来られるぜ。大佐が発する日に俺にくれたグログのボトルもあるからよ」しかし、マイクは疲れて打ちしおれており、明日になったら行くと約束した。

所有者たちの日々の存在がなくなったレイク・ヴェーの家は、活気がなく死んだようだった。それは彼の伯父と伯母にとつての快適な休日の背景としてのみ存在し、それ自身の個性を持つてはいないのだった。マイケルは、火の近くでトレイ上の厚切り肉を食べながら、レイク・ヴェーとハッディンガム・ホールとの違いをぼんやりと意

識した。後者には蔦で覆われた壁があり、それはこれから何百年も存在し、そのノルマン様式の塔の存続のために時には戦って死ぬこともあったフィッツヒューバート家の、この先の世代の生活を見下ろし続けることになるのだろう。

翌朝、弁護士の手紙が、マイクが予期していたとおりの場所から出てきた——普段は使っていない部屋にある書き物テーブルの、小さな抽出の奥に詰め込まれていたのだ。日曜日で、アルバートは遠くの農場での馬に関する怪しげな約束が入ったため、一日の大半をその土地の周辺を当てもなくさまようことで過ごした。正午ごろに濃霧は晴れ、青白い空を背景とした松林のくっきりとした景色が見えた。太陽が変わりやすい淡黄色に覆われた昼食の後、彼はロッジまで散歩し、カトラー家の人々に両手を広げて出迎えられ、快適なキッチンで熱いスコーンとお茶を振る舞われた。「それで、アーマさんはどうしていますか？ まあ、私たちがここであの子をどんなに恋しく思っているか、あなたには想像もできないでしょうね」マイクは、町にいた間彼女には会っていなかったが、彼女が木曜日にイギリスに向けて船で出発したことは聞いていると白状した。それを聞くと、カトラー夫人は心の底から落胆した表情を見せた。自然と日々親しく接して生活している者は、たいいてい自然のリズムというものを知っており、カトラー氏もそういった人間の一人であったが、その氏が、訪問者が去

るとすぐに穏やかにこう言った。「あの二人の間には何かあるといつも思っていたんだがねえ。残念なことだ!」

妻がため息をついた。「マイケルさんが、私の哀れな子羊のことをあんなに無関心そうに話したのは、我が耳を疑いましたよ」

たそがれ時、マイクは湖に行っていた。そこでは、葦の乾いた音と、小さな入り江（夏にパントを繋ぐ日陰の停泊地）に浸ったり出たりしている葉のない柳の流れる枝が、彼を落ち着かない憂鬱で満たした。白鳥たちの姿はなく、睡蓮の深緑の浮葉が黒い陰気な水面に点在していた。夏の間、オークの木の下の子ヤコ貝の所では白鳥が水を飲む姿が見られたものだったが、そのオークも葉が落ちて、空に対して無防備になっていた。遠くの丸太橋の下に森の小川が流れ落ちる音が聞こえる。その水音の音楽が、だからだと続く長い一日の静止と静寂をいっそう強調しているかのように思われた。夕食を終えるとすぐ、彼は、脇の通路にいつも掛かっている強風用ランタンを持って、霧のようなみぞれの中を厩舎へと向かった。アルバートの部屋の窓には灯りがあり、訪問者を迎え入れるために跳ね上げ戸がブーツで開かれ支えられた。テーブルの上にはウイスキー・ボトルと二つのグラスが並べられた。「悪いが、ここでは火をおこせねえんだ——煙突がねえからな——だが、グロッグが寒さを締め出してくれるし、コッ

クがサンドイッチを急いで作ってくれたよ。好きにやってくれ」マイクは、ここには歓迎の空気があると感じていた。それは快適さと言ってもよいもので、伯母の居間では感じたことのないものだった。「もし君が結婚していたら」彼は壊れたロッキング・チェアに腰を落ち着けながら言った。「婦人雑誌が主夫と^{ホーム・メイカー}呼んでゐる者になつていただろうね」

「そんなことになったら、ちょっとした快適さが欲しいね——そういうことを言いたいのならな」

「それだけじゃなくて……」言いたいことが非常にたくさんあるかのように、それは複雑になり過ぎて言い出すことが困難だった。「僕はいつか君が自分で所有する場所で君に会いたいと思うよ」

「へえ、あんたはそう思うのか？ 俺はすぐにどこかへ出たくてむずむずしてくると思うぜ、マイク、定住してガキどもを育てるための金があったとしてもな。あんたの方は、お偉方連中との町での暮らしはどうなんだ？」

「全然ダメさ。伯母さんは、いつもやっているぞつとするようなパーティーをまた一つ開くこと以外は何も考えることができないんだ——それって、僕のためのパーティーなんだよ。僕が一、二週間のうちに北部へ——たぶんクイーンズランドだけど——行こ

うとしていることは、まだあの人たちには言っていないんだ」

「今まであんまり見たことのない場所だな——ブリスベン波止場とトゥウンバ留置場以外は——ああ、そこに入ったのは一晩だけな。前に言っただろ。そのころ俺はえらくタフな奴らと一緒にだったって」

マイクは、赤煉瓦色の顔を愛情を込めて一瞥した。それは、何年も洋服屋に請求書を書き続けさせるばかりで、獄中で一夜を過ごしたことなどないケンブリッジの友人たちのたくさんの顔よりも、明滅する蠟燭の火影の中でより誠実に見えた。「休暇を取って、僕と一緒に北部へ行かないか？」

「何だって？ 本気か？」

「もちろん本気だよ」

「どこまで行くつもりなんだよ？」

「見てみたい大きな牛牧場があるんだ——地区の境界線近く、その奥側に。そこはグーナウインギと呼ばれている」

アルバートは考え込みながら言った。「そういうでかい牧場の一つでなら、俺は簡単に仕事にありつけるかもしれねえ。でもよ、いずれにしてもさ、マイク、レイク・ヴェューにふさわしい奴を見つけないうちは、俺はあんたの伯父さんと馬どもを見捨て

ることなんかできやしねえよ。いろいろ考えてみても、あのクソじじい殿は俺にすぐ良くしてくれたからな」

「それはわかってるよ」マイクは言った。「とにかく、受け継ぐのにいい奴を見逃さないように目を凝らし始めておいてよ。僕は計画ができたらずくに君に手紙を書くから」金銭についてはあまり触れられなかった。この段階では、クイーンズランドまでの鉄道運賃の提示など、完璧な意思疎通の尊さとは不釣り合いであっただろう。風通しの悪い小さな部屋は、ウイスキーと二本の蝋燭の灯りのおかげでほぼ居心地がよいと言ってよかった。マイクは自分でもう一杯取り、柔らかな光が静脈に行き渡るのを感じた。「子供のころはいつも、ウイスキーは歯痛の治療法の一種だと思ってたよ。子守が^{ナニ}よく瓶の中に脱脂綿を浸していたものさ。最近、眠れないとき、強いウイスキーがかなり役に立つとわかった」

「まだあのクソ・ロックのことを考えているのか？」

「どうしようもないんだ。それは夜になるとやって来る。夢になってね」

「夢って言えばよ！」アルバートは言った。「俺は昨夜かわいい娘を見たぜ。とんでもなくリアルな夢だった」

「話してみてよ。オーストラリアに来てからというものの、僕は悪夢のエキスパートな

んだよ」

「悪夢ってわけじゃねえんだ……。ああ、くそ！ うまく説明できねえ」

「続けて。ほら！ 僕のは、時々それが本当に夢だったかどうかともわからなくなるくらいリアルだよ」

「俺は死んだようにクソ深い眠りに落ちていた。土曜日は忙しくて大変な一日だったからな。ベッドに潜り込んだときにはほとんど真夜中だったはずだ。ええとな、全く突然に、俺は今みたいにすっかり目が覚めたのさ。部屋の中にパンジーのような匂いが立ち込めていて、それが漂ってくる方を見ようとして目を開いた。俺はパンジーがあんなに匂うなんて知らなかった。けっこうお上品な香りのはずだが、間違いねえくだらなくねえか？」

「いや」マイクは言った。その目は友人の顔に固定されていた。「続けて」

「そんでな、目を開くと、外はえらく暗いの、昼間みてえに明るくなっていたんだ。今あんたに言うまでは、別におかしいとも思わなかったよ」彼は一休みし、キャプスタン煙草に火を点けた。「そんなふうなんだ。ガス灯を全開にしたようだった。そうしたら、ベッドの端のそこにその子が立っていた——あんたが座っているちょうどその場所だ」

「誰が？ それは誰だった？」

「おいおい、マイク！ クソな夢なんぞにそう躍起になることもなからうが……」彼はテーブルの反対側にボトルを押した。「俺の妹だったのさ。覚えてると思うが——アホくさいパンジーのことであんたに話したあいつさ。あいつは、寝間着みたいなものを着ているようだった。これも別に変だとは思わなかったな——今この時まで。あと、あいつは俺が最後に見たときと同じくらいに見えたよ……。ああ、六、七年前だな、たぶん。もうよく覚えてねえが」

「彼女は何か言っていたのかい——それともそこに立っていただけ？」

「ほとんどそこで微笑みながら俺を見下ろしているだけだったな。『私がわからない？ パーティ』とあいつは言う。で、俺が言う。『いや、わかってるよ。当然だろうが』『お、パーティ！』あいつが言う。『人魚が入ったかわいそうな腕、口を大きく開けて寝転がる姿、欠けた歯。私はどこだって兄さんがわかると思うわ！』俺はあいつをもっとよく見ようとして起き上がった。あいつはこう、あれになっていくんだが……えいくそ、人がすっかり霧みてえになっちまうのを何て言うんだっけか？」

トラフス・アレント
「透き通る」マイクが言った。

「そう、それだ。どうしてわかった？ 俺は大声で言った。『おい！ おまえ！ ま

だ行くんじゃねえ』だが、あいつはもうほとんど声だけになっていた。俺はその声を聞くことができた。今あんたの言うことを聞いているのと変わらねえくらいはつきりとだ。あいつが言う。『さよなら、パーティー。私、あなたに会いにずっとずっと遠くから来たの。もう行かなきゃ』俺はさよならを叫んだが、もうあいつは行っちゃった後だった。その壁をすり抜けて向こう側にな……俺は気が変になったと思うか？」

気が変になった！　もしがっしりした肩に非常に固くねじ止めされたアルバートの弾丸頭が、輝かしく常識ある正気の状態だと信頼できなかったなら、何が信頼できるだろう？　もしアルバートの気が変であつたら、何も信じる気になだれない。望むことも決してない。あるいは祈ることだって。子守^{ナニ}が村の教会の日曜学校に引きずっていつて以来、マイクがずっと信じるよう言われてきた神に祈ることなど、何の価値もない。そして、赤や青のガラス窓には神ご自身がおわした——雲の上に座り、下々の者すべてに干渉する、ハッディンガムの伯爵である彼の祖父に似た恐ろしい老人が。悪人を罰し、公園の巣から落ちた雀の世話をし、さまざまな王宮の王室から目を離さず、救い——また気まぐれに難破を与える——「海^{*}の危険にさらされている彼らを」……ハンギングロックで行方をくらました女学生たちは、見いだされ救われるのか、あるいは死を与えられるのか。これらすべてと、さらに多くのものが、消化しきれな

い——もとより伝えることも不可能な——心象の混乱状態にあるマイクの哀れな頭に浮かんで消えた。彼は、今はにっこりと笑いを浮かべ、さっきの言葉を繰り返している友人を見つめて座っていた。「気が変になった！ おまえもああいう夢を見りゃあわかるだろうぜ！」マイクはあくびをしながら立ち上がった。「気が変になったにせよそうじゃないにせよ、君は僕には必要だよ、アルバート。僕はもう一杯飲んで寝ようと思う。おやすみ」

翌朝マイクが朝食の席に着いたとき、霧は晴れ、太陽は昇ってしばらく経っていたが、日光は山の日陰側の庭にはまだ達していなかった。食堂の窓から、彼は、まだ濃い影の中にある冷たい灰色の石板のような小さな湖を、これが最後と眺めた。夏の美しさを奪われたマセドン山は、湿ったケンブリッジの野原と同じくらい寒々としていると言えそうだ。手提げ鞆を持ち上げると体が震え、彼はオーバーを着て既舎に歩いた。メルボルン行きの列車に彼を送るアルバートは、煉瓦をホースの水で洗いながら歯笛を吹き、ドッグカートにはトビーが準備を整えて待機していた。

その馬はしきりに出発したが、たてがみをこざっぱりと刈った小さな頭を動揺させ、輝く馬銜はみを鳴らしていた。「ゆっくりやれよ、マイク。こん畜生は鉄のような口

* 「海の危険に……」……賛美歌四〇七番の一節。「波路行く友を」(安く守りませ)。

を持っているが、俺はあんたが乗る間にこいつを待たせることくらいはできるからよ」
彼らが街道の中の並木道に出たとき、アルバートはマナッサの店の少年を見かけ、
手綱をぐっと引いて元氣な馬を止めた。少年は姉の自転車でよろよろと走り、寒さ
でまだらになった手に朝の手紙を持っていた。「これはコックの咳止めドロップだよ、
克蘭ダルさん、持っていてくれる？　ちょっと待って——あなた宛の手紙が来て
るから」

「冗談だろ？　俺に手紙を書く奴なんかいやしねえよ」

「僕、ちゃんと読めてるよね？　あなたの名前はミスター・A・克蘭ダル、でしょ？」
「どれ、こっちによこせ。生意氣言うな。ったく、あり得ねえぜ。いったい誰が出し
やがったんだ？」その答えが期待できなかったか、あるいは自分も答えてやることが
できなかったため、少年はむっとした顔で道の脇をよろよろと走っていき、ドライヴ
はマセドン駅の外に停車するまで沈黙の中で進められることになった。列車が到着す
るまでにはたっぷり十分ほどの余裕があり、アルバートが駅長と懇意にしていたため、
二人は寒い外から事務所の中に入って暖を取るよう誘われた。

「手紙を開いてみない？」マイクが尋ねた。「僕のことには気にしないでよ」

「実を言うとな、俺はこの手の飾り書きを判読するのはあんまり得意じゃねえんだ。

印刷の方がいいぜ。あんた、読んで聞かせてくれるか？」

「そんな、プライベートなことが書いてあるかもしれないじゃないか」アルバートはにやりとした。「それはねえな、警官どもが俺を追っているんじゃない限り。遠慮するなって」トゥウンバ留置場にも、また自分のプライベートな書簡を開封して声に出して読むことにも、何の屈託もないアルバートという人間には、引き続き驚かされ、刺激された。家でブルー細工のテーブルの上に執事が順序立てて並べた家族の手紙は、ほとんどプライバシーの神権を有していたのだ。まるで銀行強盗でもするような気持ちで、マイケルは手紙を取り、開いて読み始めた。「これはゴールフェイス・ホテルで書かれたものだ……」

「知らねえ所だな。どこにあるんだ？」「少なくともこれはそこで書かれ、後でフリーマントルから投函されたらしいね」「要点だけ頼むわ——何について書いてあるのかだけ教えてくれ。家に帰ったらもう一度それをよく考えてみるからよ」

それはアーマ・レオポルドの父親からの手紙で、ハンギングロックでの自分の娘の発見と救助に関わってくれたことについて、アルバート・克蘭ダル氏に感謝する内容であった。「私は、あなたが青年で、未婚であるということしか知りません。私どもの永遠の感謝のしるしとして、同封した小切手をあなたに受け取っていただけるな

らば、それは妻と私にとってこの上ない喜びとなります。あなたは現在、御者として個人的に雇われているということを弁護士から聞いています……もしあなたが将来、今の仕事を変更したいと思われたならば、どうか遠慮なく下記、私の銀行家の住所までご連絡ください……」「こりやあすごい！」それ以上のコメントは、もしあったとしても、駅に入ってきた列車の轟音ごうおんによってかき消された。それとともに、マイクはアルバートの凍りついたようになっていて、その手紙を押し込んでから、旅行鞆を持ち上げていちばん近くのコンパートメントに飛び込んだ。同時に、列車はプラットホームから出て行った。五分後、アルバートは、一〇〇〇ポンドの小切手をじっと見つめて、駅長室の火の前に依然として立っていた。

町のホテルはまだ開いてなかったが、ドノヴァンズ鉄道ホテルのドノヴァン氏はしつこいノックでやがて起こされ、パジャマ姿のままシャッターの下りた閉店中のバーの通用口に應對に出た。「何だっていうんだ……ああ、アルバートじゃないか！ ちくしょうめ、ここはあと一時間は開かないんだぞ」

「開いてるか閉まってるかなんかどうでもいい。ダブルのブランデーだ。できるだけ早く。このクソ馬がここに立ち続けたくなさそうなんぞでな」朝食前に強い酒をむしうに欲しがる人間の注文に慣れている人のよいドノヴァン氏は、バーを開け、質問す

ることもなくボトルとグラスを差し出した。

このときまでに、アルバートは、カッスルメーン・ワンダーに第十ラウンドでノックアウトされた記念すべき機会と、ほとんど同じ身心の状態に陥っていた。大通りを家までの距離の半分くらい進んだとき、道の反対側で、アイルランド人トムがフード付きバギーを運転して女学校から出てくるのが目に留まった。アルバートは、トムやほかの誰かに話しかける気分ではなく、挨拶に鞭を挙げたにとどまった。ところが、トムは道路の端に車を停めてしきりに急を要するよううなずきを送ってくるので、アルバートは不承不承馬の手綱を引いた。トムは、バギーから飛び降りるとすぐに、忍耐強い茶色の雌馬の首に手綱を投げ、ドッグカートに向かって道を横断した。「アルバート・克蘭ダル！ あの日曜日にロックで警官たちと一緒にになって以来、君を見かけなかった。今朝の新聞は見たかい？」

「いや、まだだ。俺はそんなに新聞に興味はねえ——レースの記事は別だがよ」

「ならニュースは聞いていないんだな？」

「何だよ！ ほかの二人の娘が見つかったとか言うんじゃねえだろうな？」

「ああ、いや、そんなことじゃない。かわいそうな子たちだけだな！ まあこの一面を見てみろよ——『シティ・ホテルで火災。兄妹焼死』。ああもう！ おしまいだよ。

僕がミニーに言ったように、最近、あれかと思えば次はこれ、面倒事が次々と起るんだ」アルバートは、二人がワラガルに行く途中だったことと、ミス・ドーラ・ラムリーの前の住所が宿泊者名簿に「アップルヤード女学校^{きづけ}気付、ベンディゴ通り、ウツドエンド」と記載されていたことを明らかにしたパラグラフを、大急ぎでちらりと見た。アルバートは、ベッドで生きたまま焼かれるほどのひどい不運に見舞われた者を心底気の毒に思ったが、そのとき彼は、別のもっと重要なことを考えていた。「じゃあ、もう行くぞ。トビーは長時間突っ立ってるのが好きじゃないんでな」しかし、トムはさらなる会話のためにドッグカートの車輪のそばにいつまでもいたがった。「そいつはちょっといい馬じゃないか、アルバート」

「元気な奴だよ」もう一人が言った。「手に気を付けろ——こいつはドッグカートを引いているときに尻尾に触られるのが好きじゃねえんだ」

「別にそいつのせいじゃないさ。そこにいる女学校の馬にもそんなのがいる。ところで、山の上で夫婦ものを求人しているところに心当たりはないか？　僕とミニーは復活祭の月曜日に結婚する。その後で仕事を探す予定なんだ」

レオポルド氏の手紙の衝撃にまだいくらか呆然としているその御者は、もう一度それを読むために屋根裏部屋の私生活に早く戻りたくて手綱をかき集めていたが、その

ときの仕事という単語には何やら思い当たるものがあつた。トムはとりとめもなく話し続けていた。「ミニーの叔母さんは、ポイント・ロンズデールに所有しているちよつとしたパブのことで僕らに手を貸したがつている——僕らがハネムーンに行く場所は言つたっけ？ でも僕は馬たちと一緒にいいし、ミニーは——ミニーのことは知らないんだっけ——こう言っちゃ何だけど、家の妖精みたいにかわいいんだ——銀食器を持つたあんな娘は見たことがない！」

「あんたのことは気にかけておくからよ、トム。たぶん復活祭の後で何かわかると思うが、まあ何とも言えねえな。バイバイ」そう言って彼は出発し、アップパー・マセドン・ロードに入る曲がり角を音を立てて曲がつていった。

こうして、トムがバギーに向かって道を横断するのよりも短時間のうちに、トム自身とミニーの想像をはるかに超えた将来の至福の家庭生活が決定された。ハンギングロックの構図における別の一区分は、完成に近づいていた。今回の場合は、意外な未来の歓喜で装飾された見事な紋様を伴っていた。その歓喜の中にはレイク・ヴェーの厩舎の後ろに建てられるであろう快適なコテージが含まれており、それは後にアイルランド人トムに生き写しの陽気な目をした幼児たちで満たされることになる。その子たちの一人は、後にコールフィールドの競走馬用厩舎の馬丁となり、コールフィール

ド杯において二十七頭中二位に入ったことで自分と両親のために不朽の名声を博すことになった。我々は、どのポイントにおいても、トムとミニーの将来にもはや関わることはできない。結局、彼らは女学校のミステリーの構図のほんの小さな糸にすぎないのだ。間もなく、彼らが幸運にも巻き込まれなかった、新しい予知できない展開がもたらされることになる。

アルバートは、トビーの馬具を取り外すとすぐにロッキング・チェアに座り、鉄道の駅から家までの全行程の間、彼の右の尻ポケットの中に焼き付いていたレオポルド氏の封筒を取り出した。苦勞して内容を数回判読した後、彼はそれを丸暗記していた。住所も何もかも——必要な事実情報の安全な保管のための、読書障害連盟に与えられた恩恵である。季節に従って種をまき収穫する文盲の農民は、ノートに日付を書き留める必要はない。だから、トビーのたてがみを最後に切ったのはいつだったか、その雌馬にウッドエンドで蹄鉄ていそを打ったのはいつだったか、常に正確な日付を覚えていたアルバートには、手紙をこれ以上参照する必要はなかった。彼は、レオポルド氏の小切手をベッド下のジャム缶の中に注意深く入れ、蠟燭の燃えかすで手紙を燃やした後、もう一度じっくり考えるために腰を下ろした。ちょうど自分が今朝、いくつかの何気ない単語によってトムとミニーの運命を事実上決定したように、アーマの父親の気前

のよい心のはずみの瞬間が、アルバートの人生の全行程を変更した。そのような個人の運命の大変動が、通常は朝食をゆで卵にするか落とし卵にするかの選択のような日常の普通の出来事に偽装されているということは、おそらく我々の神経質な心の平衡状態にとってはかえって都合がよいのである。お茶の後、ロッキング・チェアに腰を下ろしたその若い御者は、月曜の晩にはすでに引き返せない長い運命の旅に乗り出しているという感覚を持ててはいなかった。

アルバートは、短い休暇があれば、と感じた。彼はいつもクイーンズランドを見てみたかったし、今は間違いなくチャンスではないか？ それは容易に下された決定で、少なくとも三通の手紙を今夜中に書かなければならないのに比べれば、煩わしさはずっと少なかった。手紙書きには、コックから便箋と三枚の封筒を借用する作業と、古い紫のインクが濃く付着したペンを発掘する作業が伴った。こうした小さな障害はあったものの、彼には三人の手紙の相手それぞれに対して言いたいことがはっきりと頭にあった。アルバート・克蘭ダルよりも読みやすい字を書き、ずっと正しい綴りを書ける連中が、必ずしもそのようにできるとは限らない。たとえそうであっても、一通目の手紙に実際に取りかかる前にペン先はきれいに舐められ、それは次のように滑らかに始まった。「拝啓、レオポルド様——今朝（三月二十三日）手紙と同封され

ていた小切手を受け取ったとき、びっくり仰天してしまいました」その後、書き手は、時々もらうチップとクリスマスの大佐からの一ポンド金貨を別にすれば、今日の豪華な贈り物をもらうまでプレゼントというものをもらった記憶がなかったということに思い当たった。一度だけ、孤児院で、ある善意の老女が聖書をくれたことを除いては。一〇〇〇ポンドの小切手に対し、心からの「ありがとう」以上の何かを言う必要があるように思われたので（そう、それは間違いなくジャム缶の中にある）、彼は五シリングと聖書をどうやって交換したかをレオポルド氏に伝えることにした。その金は、いつか自分でポニーを買うことを望んでのものだった。「さて、私はほんの子供でしたし、十二歳になったときから生活費を稼がなければならなかったので、そういうのは当然手に入れられませんでしたから、今、ちょっと血筋のいい奴——十四ハンドくらいの——を探し回ることでも始めようかと思っています。今あなたの寛大さに感謝しているものから現金で三十ポンドを使わせてもらえるなら、この辺には本当に良い馬たちがいます。お金の残りは、ベストな使い道を思いつくまで銀行でじっとしていればよからうかと存じます。さて、レオポルド様、あなたの寛大なる贈り物に私はまだドギマギしていますが、真夜中近いのもう終わりにしようと思います。もう一度、大きな感謝と、あなたとあなたの家族の皆様の末永いご繁栄をお祈りして。

敬具

アルバート・克蘭ダル」

追伸で付け加えるべきことがまだあり、それは作文するのと記述するのに手紙の残りの部分全部とほとんど同じくらいの問題がかった。「私がロックでお嬢さんのためにしたことは何もありません。この辺りの誰に聞いても同じことを言うでしょう。それは私の友人なのです。フィッツヒューバート卿という名の若者がお嬢さんの命を救ったのです。私ではありません。アルバート・克蘭ダル」

二通目の手紙はフィッツヒューバート大佐宛で、はるかに容易に書くことができた。双方に都合のよい日に御者を辞することと、女学校からトムを馬たちに対する真に良い世話人として推薦すること、そして最後はこのように締めくくられた。「あなたは私にとって、いつも本当に良い主人でした。変わらぬ感謝しています。もし春が来る前にランサーの新しい鞍をお望みでしたら、こんな湿気の多い気候でもうまく乾燥させてある私の部屋の釘に掛かっていますので。敬具。アルバート・克蘭ダル」

* ハンド……馬の肩までの高さを測るときの単位。一ハンドは四インチだから、十四ハンドなら五六インチ、四フィート八インチで、だいたい一四二センチメートルくらいになる。一四七センチ以下はポニー。

マイク宛の最後の手紙は、かなぐり捨ててするような綴りで異常なスピードで書きなぐられた。マイクの奴は、自分がクソみたいなペンなんぞ持たないことをちゃんと知っている。「親愛なるマイク。それにしても、この小切手は全くすばらしいもんだ」残りの部分は、たぶん最後のセンチンスを除き、特に興味を引かれることはない。「そう、俺はあんたが言う日ならいつでも街で会えるからよ、バーク・ストリートの郵便局ホテルは知ってるか？ ビールを飲んで、Qランドに出発する日を決めるってのはどうだ？ 俺はあんたの伯父さんにレイク・ヴューでの仕事を辞めると手紙に書いたし、あんたが指定した日にそちらに行くのは万事オーケーだ。アルバート」

三月二十二日日曜日の午前中、アップルヤード女学校は、寮生たちがウッドエンドの教会通いのために着飾るときの、いつもの騒がしい準備の様相を呈していた。このごろは外界からの無用な接触から慎重に遮断されていたため、その家は長く退屈な日曜日の間じゅう、規則があってもなくてもその場所にいる全員の噂の種になったであろうショッキングなニュースも知らないままだった。日曜版大衆紙はなく、夕食は、ラムリーのホテルの黒焦げになった材木が青白い秋の日光の中でくすぶって横たわっている間に消費された。バンファ―巡査部長は、カイントンで釣りをするために日曜日一日休暇を取っており、月曜の朝食で焼かれることになる黒魚を一匹だけ、喜んで真夜中に持ち帰った。が、その食事は、メルボルの新聞社からの情報依頼書を持った若いジムの到来で無惨にも中断された。無名の小さな女教師の劇的な死は、ジャーナリストの心の中でほとんど消滅しかけていた女学校のミステリーに直ちに結びついたのである。

その日曜日、女学校では職員が人手不足だったので、マドモワゼルとミス・バック

は二人とも働いていた。ミニーは非番だったが、その場所は前日の午後突然ミス・ラムリーが立ち去ったのに伴って乱雑になっていたため、人のよいそのメイドは勤務を続けていた。食器室の銀食器に磨きをかけながら、彼女は狭い窓越しに、二人の女性教師が手袋と帽子を身に着けた少女たちを待機している複数のワゴネットに導いているのと、それから間もなくアリスとコックを伴ったトムがバギーに乗っているのを見た。ベーズ張りドアを通して玄関ホールに入ってきたミニーは、女校長が片手に小さなバスケットのように見えるものを持って、ほとんど走るように階段を下りてくるのを見て驚いた。メイドを見て彼女は階段の手すりにしがみついて立ち止まったが、ミニーは、彼女が眩暈を起こしたのかと思った。校長は彼女に手招きした。「ミニー！あなた、たしか今日の日曜は非番ではなくて？」

「いいんです、マダム」ミニーは言った。「今朝はみんな忙しくて——昨日の後ですから」「ちょっと書斎に来てくれるかしら？　アリスは勤務？」

「いいえ、マダム。トムが彼女とコックをバギーで教会に送りました。彼女に何かご用ですか？」

「とんでもない。疲れているようね、ミニー。どうして休まないの？」（木曜日以来、口の中の歯を一本なくしているのに同情の言葉も掛けられていない気の毒なトムもい

るんですけど)「食事の用意が先です。それに誰か来るかもしれないから」

「そのとおりよ。今朝、そのうちコスグロヴ氏が来るかもしれないとあなたに言おうと思っていたの。セーラ嬢の後見人ね。到着したら私は窓越しに見られるから、そうすれば簡単に自分で取り次ぎに出られるわ」

「はあ、マダム、それはどうかと」ミニーは、愉快で小さな痛みが胃を走り抜けるのを感じつつ、ためらいながら言った。

「あなたはとても信頼できる子ね、ミニー。結婚式の日には五ポンド手に入るでしょう。さあ、言われたとおりにして、行きなさい。私はコスグロヴ氏が来る前に、ビジネス・レターに専念しなければ」

「ああ、もう、トム」その夜、ミニーは言った。「あのおばさんは、何だか恐ろしく見えるわ——チョークみたいに白くて、蒸気エンジンみたいな息をして。五ポンドくれるですって! びっくりして卒倒するかと思ったわよ」

「驚いたな——驚きは終わらない」トムは、彼女の腰に腕を回し、音を立ててキスをして言った。彼は正しかった。それは終わらなかったのだ。

マドモワゼルは、教会から戻るとすぐ帽子とヴェールを取り去り、少量の無色フェースパウダーとリップクリームを塗って書斎のドアに姿を見せた。時刻は一時近かった。

このごろの例に漏れず、ドアには鍵が掛けられていた。「お入りなさい、マドモワゼル。どうかしたの？」

「昼食^{デジユネ}の前に少しお話してもよろしいですか、マダム？ セーラ・ウェイボーンのことなのですが？」その女性教師は、セーラが校長のお氣に入りからはほど遠いことに気づいていたが、嫌な臭いを吸ったようにしわを寄せたその年長の女性の表情に対する心構えはできていなかった。「セーラ・ウェイボーンがどうしたって？」小石のような目が警戒色を帯びた——ほとんど、彼女は私がこれから何を言おうとしているのかを、恐れているかのようでした、と後にディアンヌは結論づけた。「言っておいた方がいいよね、マドモワゼル。あなたは、私とあなたのどちらの時間も浪費しているわ。セーラ・ウェイボーンは今朝後見人と一緒にここを出たのよ」

女性教師は感情を抑えきれずに叫んだ。「おお、そんな！ そんなはずは！ 昨日私が出たとき、あの哀れな子供は旅行などできる状態ではありませんでした。実際、マダム、私が話したかったのは、セーラの健康状態のことなんです」

「あの子は今朝はとても健康そうだったわよ」

「ああ、かわい^{ボザル・アンフアン}いそうな子……」

校長の目が鋭くなった。「トラブル・メーカーなのよ。いちばん最初から」「でも、

孤児なんですよ」マドモワゼルは果敢に言った。「ああした孤独な者たちにしてやるべきは、許してやることですわ」

「実際、私が次の学期もここであの子を受け入れたかどうかは疑問だわね。でもまあ、それはさておき。コスグローヴ氏は、その場であの子を連れて行くと行って聞かなかったのよ。不都合なことだったけれど、それについては選択の余地はなかったわ」

「驚きました」マドモワゼルは言った。「コスグローヴさんは完璧な礼儀を身に付けた魅力的な方ですのに」

「男なんてね、マドモワゼル、こうした物事ではよく無分別になるものなのよ。あなたもすぐに自分でそれを思い知ることになるようにね」そのユーモアのない薄笑いは、相変わらず警戒している目にそぐわなかった。

「セーラのことは」ディアンヌは立ち上がりながら言った。「私が不在だったために荷造りを手伝ってやれなかったことが心残りです」

「あの子が特に欲しかった二、三の物を、小さな蓋付きバスケットに詰めるのを、私がこの手で手伝ったわ。コスグローヴ氏は早く出発したくて階段下で待っていた——辻馬車か予約馬車を頼んでいたのね」

「教会からの帰り道ですれ違ったかもしれない。それを見かけて、手を振ってさよ

ならを言えたらよかったのにと、心の底から思います」

「感傷的ね、マドモワゼル——フランス人らしくないわ。それでもね、言ったとおり——あの子は行ってしまったの」女性教師はまだドアから動かなかった。彼女は、休息と湯たんぽとわずかな女性らしい人間性が必要で、痛んでうずいている老化した肉体を、衣擦れの音を立てている日曜日のタフタが覆い隠しているその女性のことを、もはや恐れてはいなかった。

「何かほかに言いたいことがあるの、マドモワゼル？」

午後になると毎日長椅子に二時間横たわっていた上品で小柄な祖母のことを思い出しながら、大胆不敵なディアンヌはこう尋ねた。マダム、ご自身のためにも、名医マッケンジーに何かしら処方してもらうことをお考えになったらいかがですか？ 難儀なことが多すぎましたし……この秋口には……。

「ありがとう……。でも大丈夫よ。私はいつも死んだように眠っているわ。今何時？ 昨夜時計を巻くのを忘れていたわ」

「一時十分前ですわ、マダム」

「昼食には行きません。私の食器は用意しないくいていいと言っておいて」
「セーラの分も」マドモワゼルは不可解にもこう言った。

「セーラの分も。頬紅を付けたの、マドモワゼル？」

「パウダーですわ、アップルヤード先生。この方が似合うようなので」

生意気なおてんば娘が部屋から出て行くやいなや、女校長は立ち上がり、机の後ろの戸棚に屈み込んだ。手がひどく震えていて、その小さな戸を開けることもできないくらいだった。彼女はそれを黒い山羊革スリッパの丸い爪先で荒々しく蹴った。戸はパッと開き、小さな蓋付きバスケットが床の上に転がり落ちた。

女校長は、その日の残りの時間も自室に残り、早めに床に就いた。翌朝、ラムリーの悲劇のぞつとするような記事で満たされた新聞を自分の手でミセス・アップルヤードに配達することは、アイルランド人トムの憂鬱な欲び——最悪の事態を真っ先に知ることに慰めを見い出す、ある一定の心の温かい人間たちがいるということだ——であった。そのニュースが司令部で、（よこしなさい！）という有無を言わせぬ冷たい無言の命令のうちに受け取られたことは、いくらかトムを失望させた。これに対して、キッチン地域では、恐れおののいた頭の上へのエプロンの劇的な投擲^{とうてき}が行われ、そんなことがミス・ラムリーとその兄がまさにこの家のこの場所にいたわずか二日後に起こるなんて信じられない、という鋭い叫び声が上がっていた。ともかくもそれらは、その恐ろしい事件を強調し、強烈にし、炎をより近く、よりリアルなものにしたので

あった。

火曜日は特に何事もなく過ぎた。ロザマンドは、告別の共同電報が午後の間にアーマに届けられるよう手配していた。その日のその時間帯に、メイド、秘書、馬丁各一名と半ダースのポロ用ポニーを伴って、レオポルド一家はロンドンへ向かって出航した。ドーラ・ラムリーの狭量なしつけ教育が緩和されるとともに、自由の感覚を歓迎する雰囲気が生まれていた。少なくとも寮生たちにとっては、水曜日の復活祭休暇大規模外出の準備に興奮したことで、あの茶色のサージを着た小柄な姿の幽霊のような存在の痕跡は、跡形もなく消え去ったのであった。非常に多くの囁き声と話し合いの声と、時折の笑い声さえもがかつてのアップルヤード女学校では聞かれていたものだが、そのころからだいぶ時間が経っていた。幸福な雰囲氣に加えて、何日かの小春日和が庭を輝かせ、ホワイトヘッド氏は、まだ青と紫の重い頭が西翼の窓の下に咲いている紫陽花の花壇の上で、散水器の栓を開く必要があった。新聞の天気予報は、復活祭当日は穏やかな晴天だが、復活祭の月曜日には徐々に変化するだろうと告げていた。結婚を控えた二人の女性は、それぞれの嫁入り道具のことで意見を交換し合い、うれしくて無分別になっているディアンヌがエメラルドのブレスレットの話を打ち明けると、メイドは驚いて目を見開いた。「ほかに宝石は持ってないのよ」女性教師は

彼女に言った。「私たちのはずごく質素な式になるわ。お金はほんの少ししかないし、フランスにいるのを除けば親戚もないから」ミニーはくすくす笑った。「叔母が披露宴を開いてくれるんですけど、教会の中に新郎新婦が入る余地がなくなるくらい、両家の親戚を大勢招待しているんじゃないかって、トムは思っているんです」

ミス・バックは、それまでの短い在職期間に、初歩のユークリッドと算数の教授以外は役立たずであるということが証明されていたため、マドモワゼルは、知らず知らずその日の大半を種々雑多な小さな家事に従事していた。誰も彼も——コックやホワイトヘッド氏さえ——頼み事をしてそのフランス人女性教師に助けを求めるのだった。

午前中、下働きメイドのアリスがバケツと箒ほうきで武装して踊り場に姿を見せたとき、マドモワゼルはピンの小箱を取りに階上へ走っていた。「ミニーが私に大きなダブルベッドの部屋を掃除するように言うのだけれど、服と物がたくさん散らかっていて、どこから手を付けたらいいのかわからないんです」「手伝ってあげるわよ」マドモワゼルが言った。「オーストラリアの女学生はかなりだらしないってことがわかったわ——最近、あの子たちの服を畳んだり荷造りしたり、そんなことばかりしていたのよ」「アーマさんみたいな人はほかにいませんでしたね!」アリスは称賛して言った。「ああ! 全部の靴の中に金の背の付いたブラシがあって、どのペチコートにもブローチ

がピンで留めてありました。もしそれがセーラさんだったら、マダムは猛烈に叱りつけたでしょうね！　つまりは相続人だからってことなんですよね」ミランダが使っていた部屋は、以前は二つの高窓から入る庭の光と空気で満たされていたものだが、彼女たちがドアを開けたときはほとんど暗闇で、セーラのベッドの上の細い窓以外はすべてベネチアン・ブラインドが下ろされていて、そのセーラのベッドはまだ整えられておらず、彼女が最後に眠ったときにしわになったままの状態だった。「ちょっと氣味が悪くないですか？」箒を投げ落とし、仕事に取りかかりながら、大柄で野暮ったい娘が言った。ブラインドが氣が滅入るような乱雑な現場に音を立てた。椅子の背に掛かったセーラの部屋着、洗面台の上の寝室用スリッパ。「驚きました！　あの子はあまりたくさん物を持っていったようには見えません」彼女はベッドカバーを引きながら言った。「ここに寝間着のケースとスポンジ入れがあるわ」マドモワゼルが言った。「中にまだスポンジが入っている。マダムは、小さなバスケットに旅行に必要な物をほんの少しだけ詰めたと言っていた。セーラ嬢が休日が終わって戻るまでに、ワードローブの中に全部片づけるのがよさそうね」「みんなは、後見人が大金を儲けたんだって言っています」アリスが厚かましく言った。「そんな人が新しい部屋着をあなたに買ったって損も何もないですね——あちらのベッドに新しいシーツを敷きましよ

うか？ ミランダ嬢のですよね？ すてきな娘さんというのは、まさにあの子のことを言うんですよね！ 本当の上流階級の子ですが、偉ぶらない人でした。ミニーや私と一緒にちょっと笑い合ったりもして」

軽率な口を利く人間は我慢ならない。「いいえ。ベッドのリネンは全部取り去って、上掛けをきれいにしようだい。こうして」ミランダはもうこの家で眠ることはないだらう……。

「なぜセーラお嬢さんがファー・カラーの付いたこのすてきな青いコートを日曜の朝に持って出なかったのか、私にはさっぱりわかりません。十三歳の子供では、服のことになるとたいしたセンスは持っていないってことなんですかね」

「セーラ嬢は急いで出発したのよ。あの子が旅行で着るものの何を選ぼうが、あなたには何の関係もないわ、アリス。どうぞ掃除に取りかかってちょうだい——すぐに昼食になるはずよ」彼女は大理石のマントルピースの上の止まった時計を上目遣いでちらりと見た。そこではミランダの写真が小さな銀のフレームから穏やかに微笑んで見下ろしていた。大多数の写真と異なり、それには異様な生命と現実の感触があった。アリスは機嫌を損ねて黙って埃を払い続け、マドモワゼルはミランダの肖像を物思いに沈んで見上げながら立っていた。「アリス」彼女は突然言った。「日曜の朝にセーラ

嬢に朝食を運んだのはあなたなの？」

「そうです。ミニーは休みで寝ていたので」

「あの子、卵を食べていればいいのだけれど——果物はどうかしら？ 土曜日は一日中偏頭痛で、何も食べていなかったのよ」その病気の子供の朝食についてのミニーからの指示を完全に忘れていて、実際は日曜の朝に何も持っていかなかったアリスは、単にうなずいただけだったが、それは露骨な嘘よりともかくも大罪が軽くなるように思われた。いずれにしても彼女は、寮生たちとその馬鹿げた行為には嫌気がさし、うんざりしていた。二台のベッドの背後の埃払いを終えると同時に、彼女は復活祭の後でウエイトレスの仕事に就こうと決心した。

ディアンヌ・ド・ポワティエは、火曜日の夜はことのほか眠れなかった。復活祭の月は、すでに大きく光り輝き、西翼の一部を見晴らす開いた窓に部分的に引かれたカーテンの間に、銀色の光線を投げていた。ミニーの部屋には燃えている灯りがあり、それ以外の建物全体——より正確には彼女が見ることができた範囲——は、闇に沈んでいた。敷居に身を乗り出すと、急勾配こうばいのスレート屋根が月の下で輝き、その向こうには小さな塔が空を背景に黒くうずくまっているのを見ることができた。月が、実は何百万マイルも下の地球上の人類の思考や行動にさえ何らかの影響を及ぼしてきたというのは、

本当なのだろうか？ 彼女は、敏感な肌の上に流れる銀の光の潮流を感じることができた。心だけでなく、彼女の全存在が、奇妙にどどんと覚醒していった。彼女はもう一度ベッドに横たわったが、枕の近くに空中飛翔している蚊のかすかな羽音が、ハーブのように静寂の中でぶーんと鳴った。そんな夜では、眠るのは不可能だった。目を閉じるとすぐに、彼女は子供のセーラのことを考え始めた。彼女も月の下ですっかり目を覚ましていたのだろうか？ 後見人は、礼儀正しく魅力的な身なりの背後にどんな人格を隠していたのだろうか？ 彼はあの子を休日どこに連れて行ったのか？ あの孤独で愛されない子供の未来はどうなる？ ミランダは、かつてセーラを微笑ませた女学校で唯一の人間だった。今はもうミランダはいない……ミランダ……楕円形のフレームの中でマントルピースから微笑んで見下ろしているミランダは、セーラのいちばん大切な所有物だった。「すごいでしょう、マドモワゼル！ ミランダは、私の誕生日にこれをくれたんです！」

「それに色を塗りましょうよ、セーラ——あなた、絵は上手なんだから」マドモワゼルは提案した。「ミランダの髪はあんなにきれいな色だし——熟したコーンのよう」
「ミランダがそれを好むとは思えません、マドモワゼル。アーマ・レオポルドはミランダの髪をカールさせたがりでしたが——この写真のために——、ミランダは『スト

レート・ヘアー以外はあり得ないわ。家ではいつもそうしているし。巻き毛になんかしたら、ベビー・ジョニーが自分の姉を認識できなくなっちゃうわよ』と言っている。また別の日、バララト公園でのこと。今は何もかも、なんてはつきり思い出せるのだろう。「セーラ——あなたのポケット。ヒキガエルみたいに膨らんでいるわね!」

「おお、違います、マドモワゼル! ヒキガエルではありません!」

「ではそれは何? すごく見苦しいわ」

「ミランダです、マドモワゼル。ああ、笑わないで。お願い! もしブランシェやイーディスに見つかったら、ずっとからかわれてしまいます。私はこれをどこにでも——教会にまで——持ち歩いているんです。小さな楕円形のフレームを入れるのにぴったりなんです。でも、ミランダには言わないって約束してください」小さく尖った顔が紅潮し、厳粛になった。「なぜいけないの?」ディアンヌは笑って言った。「面白いわ、それ——私をポケットに入れて教会に連れて行ってくれた人なんかいなかったもの」

「なぜかという」とその子供は真剣に言った。「ミランダは許してくれないと思うからです。彼女は、自分はこのにあまり長くはいないだろうし、私は彼女のほかにたくさんの人を愛することを学ぶべきだと言うのです」

日曜の朝、マントルピースから肖像をいつもどおり持っていくことを彼女に忘れさ

せるような何かが起こったのだろうか？ あんなに小さな物だ。運ぶのは簡単……。
「急いで出発したのよ」って、アリス。昼間あなたに言っただけだよ……。セーラ嬢は急いでいて、部屋着を忘れた。部屋着。スポンジ入れ。興奮した子供と、小さな蓋付きバスケットに少量の物を詰めるのを手伝った厳格で家庭的でない大人^{校長}にならあつさり忘れられることもあるだろう。でも肖像は違う。あり得ない、肖像を忘れて置いていくなんて絶対じゃない。あの子はもしか、深刻な病気だったのでは？ マダムがそれを許可するのを拒否するほどの病気？ 秘密厳守を誓わされた後見人は、あの子を病院に連れて行ったのだろうか？ 夜の一陣の風が部屋の中にレースのカーテンを吹き込んだ……。寒い、恐ろしく寒い。そして、怖い。肩に部屋着を掛け、蠟燭に火を点けて、彼女はバンファ―巡査部長に手紙を書くために化粧台に座った。

二十五日水曜日の午後までに、ハシーの辻馬車の最後の一台が寮生の最後の一人を乗せて、車道を運んでいった。静かな部屋部屋は紙の吹きだまり、落ちたピン、リボンと紐の切れ端であふれていた。食堂では火が消され、ガラスの花瓶に挿したカーネーションはしおれかかっていた。階段から振り子時計の音があまりに大きく聞こえるようになったため、ミセス・アップルヤードは、書斎の壁を通して永遠に続くチクタクという音を聞くことができそうだと想像した。一分ごと、一時間ごと。もう死んでい

る肉体の鼓動のように。夕暮れ時、ミニーが、銀の盆に手紙を乗せて入ってきた。「今日は遅くなりました、マダム。トムが復活祭列車のせいだと言っています。カーテンをお引きしましょうか？」

「任せるわ」

「ラムリー先生宛のものがありません——お取りになりますか？」

女校長は手を差し出した。「ワラガルのお兄さんの住所を調べなければならぬそうね」まったく、ラムリー家以外の誰が住所を残さずに死んだりするだろう？ ドーラ・ラムリーは、手紙ではいつだってでたらめなやり方をしていた。今回もそうだ。校長は、この世ででたらめでないもの、本当に意図されたとおりの輪郭をしっかりと描いているものは、どれだけ少ないことか、などと考えながら、柔らかな薄明かりの庭を遮る重いカーテンを見つめながら座っていた。一時間ごとに事前に組織し、監督し、計画したとしても、でたらめはなくなならない。真に完璧なものは皆無で、秘密にできるものもなく、安全なものもない。ドーラ・ラムリーや子供のセーラのような人間などいなくなるがいい。弱者ども……あの連中をしっかりと制御下に置いたとしても、ちょっと顔を背けた隙に指の間から身をくねらせて抜け出してしまう……。彼女は機械的に手紙の山を拾い上げ、いつも自分自身の手で行うと主張していたとおり、今回も自分

でそれらを分類し始めた。職員宛のものが二、三通——薄紫のインクで書かれたルイ・モンペリエからマドモワゼル宛のもの、クイーンズクリフからミニーに宛てられた色付きハガキ。郵便ではなく手渡しされた汚い封筒に入れられた馬鹿げたパン屋の請求書。小切手はなかった。復活祭後、直ちに彼女はメルボルンへ行き、いくつか株を売る必要があるだろう。同時にラッセル・ストリートに行く可能性もある。もし積極的な行動が必要とされるなら、それは今かもしれない。今夜のディナーは一人で食べ、プライバシーを確保しなかったけれども、彼女は暖炉のそばのベルを引いた。「アリス、マドモワゼルやミス・バックと一緒に下で食事を取ることにします。コックに伝えて、デザートの後で三人分のコーヒース砂糖とクリームをトレイに乗せてよこしてくれるよう頼んでおいて」現段階では詳細は決まっていなかったが、それでもよい——首にベルベットのリボン・タイと特別なブローチを着けて、特に入念に身繕いをしよう。マドモワゼルならそんな些細なことにも気づき、安心するだろう。隙っ歯を見せて笑い、度の強い眼鏡をかけたミス・バックは、もしかすると疑り深いタイプかもしれない。賢いと思われる若い女性たちについては予想ができない。気づきすぎるウスノロやノロマもいれば、何も気づかない者もいる。おお、アーサーの手引きがあれば！ グレタ・マクロウの冷静な鑑定でもいい。ここ何週間もの間で初めて、彼女はその数学教師の

ことを考え、化粧台の上に、櫛とブラシとカールピンがその光沢のある表面で跳ね上がるほどの強さで握り拳を打ち落とした。彼女がここ数年頼るようになっていた男性的な知性を持ったあの女性が、世間知らずの女学生のようにハンギングロックで誘拐され、消息不明となり、レイプされ、冷酷に殺されたなどということは、想像もできなかった。彼女はロックを決して見なかったが、最近その存在は彼女とともにあった——壁のような、陰気な黒い塊。

その晩の夕食で、それほど寛大な校長を二人の若い女性は見ることがなかった。とにかくよくしゃべる。ミス・バックがベルでミニーを呼ぶことを求められたとき、女性教師たちはすでにてんでこ舞いのその日の活動の後で、あくびを噛み殺していた。「食料貯蔵室のデカンターにブランデーが少しあると思うんだけど？ 覚えているでしょう、ミニー？——ベンディゴの司教が昼食に來た日を」デカンターと三つのグラスが運ばれてきた。彼女たちはそれを上品に一口飲み、さらにマドモワゼルとムッシュ・モンペリエの健康と幸運に対する乾杯までがなされた。十一時、ディアンヌはくたびれ切って蠟燭を階上に運びながら、自分がかつて過ごした中で最長の夜だと思つた。

ミセス・アップルヤードの部屋のドアが少しずつ、音もなく開いたとき、階上の時

計がちょうど十二時三十分を打ち、老女は常夜灯を持って踊り場に出た。カールピンの森に屈服した頭と、フランネルの部屋着の下に揺れる胸とたるんだ腹を持った老女。誰も——アーサーさえも——このような姿の彼女は見たことがなかった。女校長は一日十八時間、鋼と鯨くじらのひげの戦闘服を着て世界に直面するのが習慣だったのだ。

階段のいちばん上にある窓から、閉ざされたヒマラヤスギのドアの列に月光が降り注いでいた。マドモワゼルは廊下の端の部屋で眠り、ミス・バックは塔の裏の小さな部屋で眠っていた。常夜灯を持ったその女性は、下の影から上に届くチクタク、チクタクという音を聞きながら立っていた。頭上の鉛板葺えんばんぶききの屋根をポッサムが疾走し、その音で彼女は跳び上がったが、その動作があまりに激しかったため、小さなランプがほとんど手から落ちそうになった。その弱々しい光によって、完璧に整った状態の大きな二人用寝室が目の前に出現した。清潔で、更紗さらさがちで、ラベンダーのかすかな香りが漂っていた。ブラインドはすべて同じ高さに下ろされていて、月明かりの空と木々の暗いてっぺんが見える全く同じ四角形を見せていた。二台のベッドは、それぞれピンクの絹の羽布団がきちんと折られていて、染み一つなかった。化粧台の上にはピンクと金色の二つの高い花瓶が並べられ、かつて彼女がそこにメモを見つけ、すぐ

*鋼と鯨のひげ……コルセットの形状を維持するために使われた。

にそれを破いたハート型の針山もある。彼女はもう一度、二台のベッドの小さな方の子供に屈み込む自分を見た。目、もうほとんど顔はない——ただあの巨大な黒い目だけが、彼女自身の目に焼き付いている。彼女はもう一度、叫びを聞いた。「嫌、嫌！それは嫌！孤児院は嫌！」女校長は、寝間着の下にウールのスパンサーを着ておけばよかったと思って震えた。彼女はナイト・テーブルに常夜灯を置き、左の方にミランダの服がまだ掛かっている戸棚を開いて、念入りに棚を調べ始めた。右にはセーラのファー・カラーの付いた青いコートと小さなビーバー・ハット。靴。テニスラケット。今度は整理だんす。ストックキング。ハンカチ。この馬鹿馬鹿しいカード……数ダースもある。バレンタインのものだ。休暇が終わり次第、彼女はミランダの物を取り除くことになるだろう。次は化粧台。洗面台。ミランダが色の付いたウールを保存した小さなクルミのテーブル。最後にマントルピース。そこには何も重要な物はない——ただ銀のフレームに入ったミランダの写真があるだけだった。ドアを閉じたとき、ブラインドの下には最初の曙光が見えていた。彼女は常夜灯を消し、四柱式寝台に体を投げ出した。何も見つからず、何も推論できず、何も決まらなかった。無活動を強いられた恐ろしい日が待ち受けている。時計は五時を打っていた。睡眠は考えられなかった。彼女は起き、髪からカラーを取り外し始めた。

木曜日は季節はずれの暖かさで、聖金曜日に休暇を取っているホワイトヘッド氏は、今日は庭でできる限り多くのことをしようと決心した。山の頂上はいつものようにふわふわした白い霧で覆われているが、この様子だともう雨は降らないだろう。彼は、家の後ろの紫陽花の花壇に水をやる必要があると思った。若い女性がいなかった場所は、家禽^{かきん}の平和な鳴き声と遠くの豚のブーブーという声、それに時折道路を通り過ぎていく車輪のガラガラいう音を別にすれば、奇妙に静かだった。トムは手紙のためにバギーでウッドエンドに入っていた。コックは、いつもの腹ぺこ女学生相手の食料補充に代わって、料理を調達すべきはわずか一握りの大人になっていた。活力の衰えただだっ広いキッチンで壮大な清掃に取りかかっていた。アリスは裏階段をのしごしこすりつつ、この仕事もこれが最後になればいいと願った。ミス・バックは、早い時刻の列車に乗るために馬車で出発していた。ミニーは、自分の寝室で十分間、先月中に熱中し始めた熟したバナナの房を掴んでがつがつと貪り、快適さという点ではかなりきつ過ぎる模様服のウエストバンドをうれしそうに緩めていた。

ティッシュ・ペーパーの吹雪の中のディアンヌ・ド・ポワティエは、自分の小さな、しかし優雅なワードローブを荷造りしていた。シンプルなサテンのウェディングドレスを見ただけで、彼女は胸をときめかせた。数時間以内に、ルイは、復活祭の月曜日

までフィアンセのために部屋を予約したあまり大きくないベンディゴの下宿まで、彼女をエスコートすることになるだろう。彼女は、もの寂しい部屋に束縛された数年間の後に解放されようとしている鳥のような気がした。その部屋ではしょっちゅう寂しさに泣きながら寝入ったものだった。彼女は、「月の光で、※オ・クレル・ド・ラ・リュネ我が友ビエロ」とそつと歌い始めた。ほろ苦い小さな歌が、開いた窓から、ミセス・アップルヤードがホワイトヘッド氏と、車道の新しい縁取り花の議論をしている芝生の上へと流れていった。「もし春にきれいな眺めをお望みなら、復活祭が終わったら始めなければ」サルビアは？ 重宝な花よ、とマダムは提案した。庭師はいいかげんに同意した。「若い娘さんには、たいていお気に入りのお花があります。おかしなことに、私はクリスマス・リリーを見ると、必ずミランダさんのことを思ってしまうんです。『ホワイトヘッドさん』あの子は言ったものです。『ユリはいつも私に天使のことを思わせるのよ』ってね。ああ、あの子はたぶん、今は自分がそれになってしまったんですよねえ、かわいそうに」彼はため息をついた。「パンジーはどうかしら？」女校長は、無理矢理パンジーのことを考えるようにし、その花が正門からの眺めを良くしてくれると言った。「そういえば小さなセーラさんは——あの子はパンジーが大好きでねえ。部屋に飾るのに少しだけ、私のところにしょっちゅうもらいに来るんですよ。寒いのですか、マダム？

シヨールをお持ちでしょうか？」

「三月は肌寒く感じるものよ、ホワイトヘッド。屋内に戻る前に、まだ何か話し合っておきたいことはある？」

「旗のことだけです、マダム」

「あら、何の旗？ 大事なこと？」彼女の足は、砂利をいらいらと叩いた。「今日しなければいけないことがたくさんあるのよ」

「ええとですね」地方紙の熱心な読み手である庭師は言った。「こういったものです。マセドン・スタンダード紙は、復活祭の月曜日に翻る旗を地区のみんなが掲げるように求めています。メルボルンから市長がシャイア・ホールに昼食に来るようです」

朝食後のダブルのブランデーが、彼女の頭をすっきりさせていた。彼女は一瞬で、アップルヤード女学校は何もかも大丈夫であると詮索好きな連中に合図するユニオン・ジャックが、塔ではためいている情景を見た。彼女は愛想よく言った。「ぜひ旗

*「月の光で……」……リュリ作詞作曲と言われる、フランスでは誰でも知っている歌。また、

日本の小学校でリコーダーの初歩の教材として昔からよく使われてきたため、日本人にも知っている人はかなり多い。「♪ソソソラシーラー、ソシララソー」と、左手の運指だけで吹けるあれである。なお、Pierrot は「ピエロ」のほか「雀」の意味もある。

を揚げてください。階段の下にあります——去年の女王の誕生日の後、そこにしまったのを覚えているでしょう」

「そのとおりです。私が畳んで片づけました」トムが郵便袋を持って彼らのそばに来た。「マダム宛のは一通だけです。ここでお渡ししますか？ それとも中に運んでおきましようか？」「いただくわ」彼女はそれだけ言って背を向けると、彼らを残してその場を離れた。「あの人は変な人だな。というのも」庭師は言った。「賭けてもいいんだが、どっちが何かってことを教えてやらないと、パンジーと菊の区別もつかないみたいなんだ」それから彼は、車道沿いにはすべてベゴニアを植え付けることを決心した。手紙には、上品で正確だが見たことのない筆跡で、ミセス・アップルヤードの宛名が書かれていた。メルボルンの高級ホテルから二日前に出されたもので、次のような内容であった。

拝啓、アップルヤード様

当方、北西オーストラリアにある私有鉱山の利益を調査しておりまして、そこには可能な通信手段がないために、同封したセーラ・ウェイボーンの季節ごとの授業料の小切手を、今日まで発送できなかったことを遺憾に思います。この手紙の目的は、復

活祭の土曜日（二十八日）の朝、当方が女学校にセーラを訪問するつもりであることをお知らせすることにあります。この予定があなたのご都合に合うことを期待しております。聖金曜日は丸一日仕事がありますし、彼女がホテルで一人でいるのは好ましいことではありません。ホテルはすばらしいのですけれどもね。もし私の被後見人が新しい衣服や本や画材などを必要としているならば、休日の何日間か、セーラをシドニーに連れて行こうと思っているのですが、そこで一緒に買物ができるようにリストを作っておいていただければと存じます。そういえば早いもので、セーラはもうすぐ十四歳になるはずですから、思うに、パーティ・ドレスのような洗練されたものがあれば重宝するのではないのでしょうか？ とにかく、私たちの会合について、あなたのご意見をうかがいたく存じます。

どうぞよろしくお願いいたします。また、土曜日までセーラの面倒を見ていただくことにつきまして（もちろん、費用は私持ちです）、あなたにご迷惑がかからなければと今一度お祈り申し上げます。

敬具

ジャスパール・B・コスグロヴ

16

バンファー巡査部長はさまざまな衝撃と驚愕に慣れていた。にもかかわらず、机での執務中に手渡されたばかりの「親展」と記されたその手紙は、彼にこんな言葉を使わせることになった。「後味が悪いな」

アップルヤード女学校

三月二十四日火曜日

拝啓、ムツシュー・バンファー

宛名が間違っていたらお許しください。オーストラリアの警察の方に手紙を書いた経験がないもので。今——もう真夜中です——あなたに手紙を書く理由を英語で説明するのは、たいへん困難だということを思い知らされています。私が女性であることを除いては。たぶん男性なら、もつとはつきりした証拠が出てくるのを待つことでしょ。しかし、私は行動しなければならないと感じています。心のままに、ぐずぐずせずに。あなたには確たる理由がないと感じられるかもしれませんが。

直近の日曜日の朝（三月二十二日）正午ごろ、ミサから学校に戻ると、マダム・アツプルヤードがセーラ・ウェイボーンのことを私に知らせたのです。セーラは十三歳ほどの少女で、ここではないちばん年少の生徒になります。彼女は、学校の人間のほとんどが教会に行った直後に、後見人に連れて行かれたとのことでした。私はひどく驚いてしまいました。というのは、ムツシュー・コスグロヴ（その子の後見人です）は、すばらしい作法を身に付けた方で、マダムも全く警戒していなかったからです。彼がそんな無作法なやり方で行動したことなど、私が知る限りではありませんでした。これを書きながらも、あなたには私の不安の理由がほとんど理解できないだろうということはわかっています。実は、ムツシュー、私は、あの不幸な子が謎の失踪を遂げたのではないかと恐れているのです。ムツシュー・コスグロヴの訪問中、マダム以外にここにいたのは二人だけでしたが、私はその二人にいくつか質問をしました——とても慎重に。二人とも正直で善良な女性です。その二人、フアン・ド・シャンブルメイドのミニー、それとコックは、ムツシュー・コスグロヴが到着したのも、また子供のセーラが一緒だったかどうかに関係なく、彼が出て行ったのも見ていないということでした。しかしながらこれについては説明が付くだろうということは私にもわかっています。私が恐れている理由は別にあり、それらははるかに重要で、また英語であなたに伝えるのがずっと

困難な事柄だと感じています。もう遅いですし、この家は暗闇に包まれています。今朝私は、普段セーラが使っている寢室で一時間過ごしました。最初はミランダが使っていた部屋です。ここで使用人が部屋を整理するのを手伝っている間、私は非常に注意深く、後ほど説明しようと思っているある物を観察していました。今朝その空っぽの部屋を出てから、シヨッキングな考えが非常に恐ろしい鮮明さで徐々に私の中に生じてきましたが、私には時間がなく、辞書なしでここにそれを書き留めるだけの英語力もあります。私は明後日（木曜日）に学校を去りますし、復活祭の月曜日にベンディゴで結婚式を挙げることになっています。私の新しい名前と住所を同封しておきますので、もしこの件で手紙をお書きになりたい場合はそちらにお願いします。それまで、ムツシュー・バンファア、私は真剣に悩んでおりますし、もしあなたができるだけ早く学校に来て質問していただければ、この上なくありがたく思います。もちろん、私がこの手紙を書いたことは、マダムやほかの誰にも漏らさないようにお願いします。木曜日の朝にこれが届いていることを祈っております。あいにく、マダムは郵便袋に入っているものを自分で全部点検するので、私にはこれをもっと早くに投函する方法がありません。ですから、ポストに入れるのを任せられる人にこれを渡すのを待たなければならぬのです。私は疲労困憊ひろうこんぱいしています。それで、夜明け前に少し睡

眠を取ろうと思います。あなたの助けがないと私には何もできません。お手数でしょうが、お許しください。

おやすみなさい、ムッシュー……ディアンヌ・ド・ポワティエ
メイドのミニーが今日、マダム・Aが日曜の朝、正門を自分で開けると言い張っていたことを教えてくれました。恐ろしい疑惑のせいで、これも気がかりです。

D. de P.

バンファアは、イーディス・ホートンを連れてピクニック・グラウンドへドライブした日からずっと、そのフランス人教師に高い評価を与えていた。理由もなく落ち着きを失うようなタイプの若い女性ではない。彼は膨らんでいく不安とともに、手紙を再読した。バンファアのこざいな羽目板の邸宅は、近隣の裏通りにある警察署に近く、間もなく彼は自分の家のベランダに現れてモーニング・ティーを所望し、妻を驚かせた。「今ここで、キッチンで飲むよ——時間に少し余裕があつて、たまたま門を通りかかったんでね」ケトルが沸いている間、彼は何気なく尋ねた。「今日の午後、どこかのティーパーティーに行くかい？」バンファア夫人は鼻であしらった。「私はいいいっからお茶のために外出するようになったのかしら？ 私の子午後の予定を知りた

いのなら、復活祭のために家じゅうを掃除するつもりよ」

「訊いてみただけさ」夫は穏やかに言った。「君が最後に懇親会——牧師館の——に行ったとき、僕の好きなシュークリームを持って帰ってくれたからね。ついでにたくさんさんのゴシップも」

「私がゴシップ好きな人間じゃないって知っているでしょうに。何を調べたいの？」

彼はにやりとした。「鋭い女房だねえ、君は？ 君の女友達が、女学校のアップルヤード校長について何か話すのを聞いたことがあるかい？」バンファアの経験では、一人の警官が捜査するのに数週間もかかることを、普通の主婦が直感で知ってしまうように見えるそのやり方には、驚くべきものがあるのだ。「そうねえ。ああ、あの老婦人は、かっとなるとちょっと乱暴になるって聞いたわ」

「かっとなるって？」

「聞いたことを言っているだけよ。村で偶然彼女に会っても、私に対しては人当たりがいいけれど」

「実際にかっとなつているところを見たことがある人を知っているかい？」

「私が考えている間に飲んでしまいなさいな……女学校がジャムを買っているコンプトン一家は知ってるわよね？ マルメロの木のあるコテージの。とにかく、その奥

さんが、勘定でミスをするのが怖いって言っていたのよ。一度、ご主人がいないうちに、彼女が自分で引き継がなければならなくなって、それが一ポンド合わなかったら、アッブルヤード校長に呼び出されてこっぴどく叱られたそうよ。コンプトン夫人は、あの老婦人が卒中を起こすかと思ったんですって」

「何かほかには？」

「あとは、女学校で働いているアリスという名前の女の子が、校長がちょっと飲んでゐるってことを果物屋の奥さんに話したことくらいね。そのアリスは、酔っているとかなんな彼女は見たことがなかったけれど、この町でどう言われているかはあなたも知ってのとおり！ 特に女学校のミステリーがあつてからはね」

「知ってるなんてもんじゃないさ！」二杯目を飲みながら、彼は、フランス人教師が来週結婚すると知らせることで、彼女についての情報のかけらを引き出そうとした。

「まあ、そうなの！ あなたも知ってるように（フルートを吹く男を覚えてゐるでしょう？）、私はフランス人なんかあんまり好きじゃないけれど、その人は一度だけ顔を近くでよく見て、かなりきれいなお嬢さんだと思ったと言わなければならないわね」

「それはどこで？」

「銀行よ。そのマドモワゼルは、小切手を換金してゐてね。テッドが——赤毛の窓口

係なんだけど——多過ぎる現金を渡してしまった。彼女は通りの中ほどこまで行ってからそれに気づいて、戻しに来た。そのときテッドが私に言ったので覚えてるわ。『いやあ驚きましたよ、ミセス・バンファア、これこそ正直というものです！ 私は自分のポケットからそのお金を補填しなければならぬところでした』」

「さて、お茶をありがとう——僕はもう行くよ」バンファアは椅子を後ろに引きながら言った。「今夜はいつ帰れるかわからない。かなり遅くなると思う」夕食のためのすばらしいランプステーキが一切れあったが、バンファア夫人は結婚して十五年になるので、遅くなる理由を尋ねるほど愚かではなかった。

復活祭は晴天になるだろうとの見込みは、木曜日じゅう続いていた。十二時までには暑いと言えるほどになり、風通しの悪いオフィスの個室でメモを取っているバンファアはジャケットを脱いだ。ホワイトヘッド氏もダリアの土を耕す作業のためにコートを脱いでいた。早い夕食を食べ終わるとすぐ、その庭師は物置小屋に入り、花壇が乾き過ぎてしまう前に紫陽花に水をやろうと、やって来る冬のためにすでに巻き取られたホースを引き伸ばした。トムは手を貸すかどうかを尋ね、それが不要なら後でミニーを散歩に連れて行くつもりだった。庭師は、手伝いはいらぬ、明日の聖金曜日は一日不在になるからこの場所を極力良い状態に整備するが、もし明日も今日の

ようにまた日差しが強くなるようなら、トムが紫陽花に少し水をやってくれないか？
と言った。トムは約束し、ミニーの腕を取って連れ出したため、次の数時間の間に続いて起こる出来事への関与から、幸いにも免除されることになった。

紫陽花の花壇は、幅八フィート、その長さのほとんどが家の後部に沿って走っており、ホワイトヘッド氏のとても大切なものだった。この夏、その頭状花のいくつかは、少なくとも地上から六フィートの高さに咲いた。ホースをいちばん近くのガーデン・タップに固定したとき、彼は紫陽花の方向から漂ってくるらしい不快な臭気に気づいた。蛇口をひねる前に、彼は、調査した方がよさそうだ、さもないと悪臭はキッチンのだアからかなり近いし、コックが騒ぎ立てるだろうから、と考えた。彼はこの数日、秋の剪定で忙しすぎて、密集して生長している紫陽花の茂みを惚れ惚れと眺めるためにしばしばしたような摘芯ができず、その暗く光沢のある葉はまだ濃い青の花の房を冠に頂いていた。そのとき、塔の真下の壁から数フィート離れた後列の最も高く見事な一本がひどくつぶされて折れ、美しい青い頭花が茎にだらりと垂れているのが目に入り、彼は閉口した。ポッサムだ！あの忌まわしい生き物はいつも鉛板葺き屋根の上を遊び回っている。去年、トムは塔の中にまでポッサムの巣があるのを発見した。トムなら、直ちに死んだポッサムを探しに重いブーツで茂みの中に突っ込んで

いったらう。しかし、その庭師はベストを脱ぎ、折れた茎をきれいに剪定するためにズボンのポケットから植木ばさみを取り出し、根元の若木を荒らさないように手と膝で茂みの間を注意深く這い歩き始めた。ダメージを受けた低木の数フィート内に達したとき、彼はそのそばの地面の上にある白い何かを見た。かつて寝間着を着た少女だったものが、乾いた血で染まっていた。片方の脚はもつれた体の下に曲がり、もう片方は紫陽花の低い分岐の中に割り込んでいた。裸足だった。たとえ彼が勇気を奮い起こしてもっと近くでそれを見ることができたとしても、頭は潰れて見分けがつかないほどだった。それでも、彼にはそれがセーラ・ウェイボーンであるとわかった。女学校にはこんなに小さく、こんなに細い手足の少女はほかにいなかったからである。

彼は、どうにか花壇のそばの小道まで這って出て、激しく嘔吐した。死体は葉の厚いスクリーンでこの場から完全に隠されていた。彼もトムもメイドたちも、この数日の間に何十回もそこを通ったはずである。彼は洗濯場に入り、手と顔にぎぶぎぶと水を掛けた。部屋にはウイスキーが一瓶あった。彼はベッドの端に座り、荒々しく跳ね回りそうな胃袋を落ち着けるために少しだけ飲んでから、家を回って通用口に直行し、ミセス・アップルヤードの書斎に向かって玄関ホールを横切った。

以下は、三月二十七日聖金曜日の朝、バンファ―巡査部長に対してなされた、アッ
プルヤード女学校の庭師、エドワード・ホワイトヘッドの陳述からの引用である。

この一部始終が私にとって恐ろしい衝撃であり、マダムが最近経験しなければなら
なかったことの後に、さらに彼女に伝えなければならない恐ろしい出来事であった。
私がノックしたとき、彼女は部屋を行ったり来たりしていたに違いないと思う。それ
でも彼女は返答をしなかったので、私は中に入った。彼女は私を見て、ほとんど跳び
上がりそうになった。彼女はひどい様子に見えた――彼女であることを考慮しても。
というのは、キッチンの我々全員が、彼女は病気のように見えると言っていたからだ。
彼女は私に座るよう言わなかったが、私の脚は立っていられないほどひどく震えてい
たので、椅子に座った。死体を見つけたことについて自分が何と言ったか、よく覚え
ていない。最初、彼女は私が言っている言葉が聞こえていないかのように、凝視して
そこに立っていた。それから彼女は、すべてをもう一度、非常にゆっくり言うように
命じ、私はそうした。言い終えてから、彼女は尋ねた。「それは誰なの？」私は言っ
た。「セーラ・ウェイボーンです」彼女は、死んだのはその子だと確信しているかど
うかを尋ねた。私は言った。「はい、絶対に確かです」私は彼女に理由を言わなかった。

彼女は、人間よりもむしろ野生動物に近いような、噛み殺した叫び声のようなものを発した。^{*}百歳まで生きたとしても、私はその叫び声を忘れることはないだろう。

彼女はボトルを持ち出して強いブランデーを自分で注いだが、私は断った。私は、そのときその家にいた我々以外の唯一の人間であるコックを呼んでくるかどうか尋ねた。彼女は言った。「だめよ、とんでもないわ！ あなた、馬は操れる？」私は、あまり得意ではないが、馬車にポニーを繋ぐことくらいはできると言った。彼女は言った。「その後で私を警察に連れていくこともできるわよね。お願いだから急いで、それと誰に会っても口を開かないでちょうだい」約十分後、彼女は私道に出て、正面玄関で馬車を待っていた。紺のコートを着て、直立した羽の付いた茶色の帽子をかぶっていたが、私はそれを彼女がメルボルンに行ったときに身に着けているのを見たことがあった。彼女は黒革のハンドバッグと黒い手袋を持っていた。私がその手袋のことを覚えてるのは、人がこんなときになぜ手袋のことを考えるのだろうか、と思ったためだ。我々はポニーで行ったのと変わらないくらいの速さでウッドエンドに馬車を走らせたが、その道中では二人とも全くしゃべらなかった。警察署から一〇〇ヤード以内の地点まで来たとき、私はハシー貸馬車屋の向かいに車を止めるように言われた。彼女は外に出て、ハシーの辻馬車を待つ乗客のいる腰掛けの方へ行った。私は彼

女がつまずいて倒れるかと思った。私は彼女に、署に私と一緒に行きたいのか、それとも外で待ちたいのかを尋ねた。彼女は、そこに数分間座ってから一人で署に行くつもりだと言った。彼女は、あなたは後でたくさんの質問に答えることになるだろうから、まっすぐ家に帰れと言った。彼女はひどく顔色が悪いようだし、私は通りのそんな場所に彼女を置き去りにしたくはなかった。しかしながら、いつもそうであるように、彼女は必要なことは正確に知っているように見えたので、私は指示に従うのが最良だと考えた。とりわけ、その日の午後に見たもののせいで、私は猛烈に胃がむかむかしていたということもあった。私が行く前、ミセス・アップルヤードは、警官に会った後でハシーの店から学校まで辻馬車で帰ると言った。私が家に帰るためにポニーをリターンさせたとき、彼女はまだ背筋を伸ばして身じろぎもせずに腰掛けに座っていた。そして、それが私が見た彼女を見た最後であった。

署名……エドワード・ホワイトヘッド

一九〇〇年三月二十七日金曜日、ウッドエンド

以下は、上記と同じ日にバンファー巡査部長に対して行われたハシー貸馬車屋のベ
※百歳まで生きたとしても……エドワード・ホワイトヘッドは、実際に九十五歳まで生きた。

ン・ハシーによる陳述である。

我々は、復活祭の休日のため、聖金曜日の前の木曜日はひどく忙しかった。私が貸馬車屋の事務所に座って辻馬車の注文をチェックしていたとき、ミセス・アップルヤードが入ってきて、すぐに一台借りたいと言った。私はハンギングロックへのピクニックの日以来彼女をほとんど見ていなかったのも、その外見の変化にはショックを受けた。私はどれくらい遠くに行きたいのかを尋ねた——彼女は、十マイルくらいだと思う、ハンギングロック・ロードの道中に住む友人からついさっき悪い知らせが入ったのだが、その家は見ればわかるだろう、と言った。御者全員が列車の出迎えの仕事などで出払っていたため、私は彼女に、調教したばかりの、私以外の誰にも任せられそうにない非常に元気な雌馬を馬具で繋いでいる間、もし待っていていられるなら、私が自分で送りましょう、と言った。彼女はひどく動揺しているのが見て取れた。特に彼女のような感情を見せない人間にしては。待っている間、私の椅子に座ってお茶を飲んでいてはどうかと尋ねたが、彼女は私に付いてきて、私がその雌馬をバギーに繋いでいる間じゅう私のそばに立っていた。そして、我々は三時十分前に出発した。御者たちのために事務室のメモにそのことを書いておかねばならなかったので、私はその時刻を

正確に覚えている。我々が黙って二、三マイルほど進んだ後、私は、よく晴れた日で
すね、と言った。彼女は、気づきませんでした、と言った。遠くの木々の上に浮かび
上がるハンギングロックが最初に見える道の曲がり角に来るまで、我々はほかには何
も話さなかった。私は彼女にロックを指し示し、ピクニックの日以来たくさんの人間
にたくさんの厄介事をもたらしたロックについて、何かしらしゃべった。彼女は私と
交差して右に上体を曲げ、握り拳をそれに向かって振り動かした。私は、あの顔のあ
のような表情を見ずに済んでいればよかったのに、と思う。その形相に私はぎよつと
してしまい、彼女は、道路に向いた門はあるが小道はない小さな農場の近くで止める
ように言ったのだが、私は気の毒だとも思わなかった。私は、この場所で本当に合っ
ていますか？ と言った。「はい」彼女が言う。「ここです。待つ必要はありません。
友達が後で送ってくれるでしょうから」小牧場の向こうに倒壊寸前といった感じのコ
テージがあり、男と赤ん坊を抱いた女が外に立っていた。「わかりました」私は言った。
「この馬はまだ立っているのに慣れていませんし、あなたが何とかなりそうなら私は
行きます。あなたが思うほど事態が悪くならないことを祈っています」我々は出足よ

*男と赤ん坊を抱いた女……以前アルバートがマイクを発見した後に会話した男だろう。赤ん
坊はその日にマッケンジー医師が取り上げた。第8章参照。

くスタートし、振り返って見ることはしなかった。

署名……ベン・ハシー

一九〇〇年三月二十七日金曜日、ウッドエンド、貸馬車屋

後に法廷で、門の所で一頭立てのバギーから降りてくるロングコートを着た女性を見ていたことを証言したその羊飼いと妻は、ピクニック・グラウンドの方角に道に沿って歩いてゆく彼女を立てて見ていた。徒歩でその道を通る客はほとんどいなかった。その女性は速く歩いているらしく、すぐに見えなくなった。

ベン・ハシーがバギーからハンギングロックを指し示したとき、ミセス・アップルヤードはその午後に初めてそれを見たというのに、メルボルン・プレスの地図や絵や写真で描かれたのと同じくらい、その一般的側面やピクニック・グラウンドのさまざまな要素にこの上なく精通していた。見かけは無限の道のほぼ水平な直線コースの後、ベン・ハシーが五頭立ての馬車で通り抜けたたわんだ木の門があった。静かなたまりに午後の最後の光を宿した小川があった。左の方、少し前方に、かつてレイク・ヴェーからのピクニックの一行がワゴネットのそばに陣取り、後にたくさんの写真が撮られた場所があった。右の方には、ロックの垂直な壁にすでに濃い影が差し、麓の茂みに

じめじめした森の腐敗した呼気が滲み出ていた。彼女の手袋をした手は、門の留め金をいじくり回した。アーサーがよく言っていた。「ねえ君、君はすばらしい頭脳を持っているけれど、手の方は器用ではないね」彼女は門を開けっ放しにして、小川の方の小道に沿って歩き始めた。

リノリウムとアスファルトとアクスミニスター・カーペットの生涯の後で、重たい体と扁平足を有したその女性は、今ついに弾力のある地面を歩くことになった。五十七年前、煤で汚れた煉瓦が続く郊外で生まれた彼女は、揺れるトウモロコシ畑に突き出た、箒の柄を軸にした動かない案山子のほか、自然というものを知らなかった。彼女はベンディゴ・ロードの小さな森のすぐそばに住んでいたのに、短く固い草を足の下に感じたことがなかった。ストリンギーパークの木々の、まっすぐで長い毛の樹皮を持つ幹の間を歩いたこともない。ワットルとユーカリの香りをちやうど女学校の玄関ホールに運び込む、春の歓喜の突風を味わうために一休みしたこともない。夏の山火事の細かい灰を満載した一陣の北風の香りを、不安な気持ちで嗅いだこともない。地面がロックに向かって上昇し始めたときに、腰の高さのワラビの中へと右折し、登りを開始する必要があることを彼女は知っていた。山羊革のボタンアップ・ブーツの中の大きく柔らかい足が、荒い地面を感知した。落ちた丸太に数分間座り、手袋を外す。

喉の固いレースの下の首を、汗が滴り落ちるのが感じられた。やがて彼女は、のこぎり状の峰々の背後の、かすかにピンクの縞が入った空を見上げながら、再び歩き出した。彼女は初めて、暑い午後ロックに登ることの意味がわかってきた。ずっとずっと昔に、行方不明の少女たちがフルスカートの夏服と薄い靴で登ったときのように。ワラビとハナミズキの間をよろめき、汗をかきながら登りつつ、彼女は今、同情心もなく彼女たちのことを考えた。死んでいる。二人とも。次に塔の下に横たわるセーラのこと。やがて石柱が視界に入り、彼女は写真の記憶から直ちにそれを認識した。重いコートの下で鼓動を打つ心臓とともに、一歩踏み出すたびに足の下から石が転げ落ちる最後の数ヤードをその方向に向かってよじ登るのが、彼女にできる精一杯のことだった。右に崖に突き出した狭い石棚があるが、見る勇気が出なかった。左の方には、さらに高い地面の上に石を積んだ山……その一つに大きな黒い蜘蛛がいて、脚を広げて日向で眠っていた。彼女は常に蜘蛛を嫌っていたので、それを叩くものを探して見回すと、寝間着を着て、腐敗した肉の仮面から動かない片目でじっと見つめているセーラ・ウェイボーンが見えた。

金色の峰々のはるか上空を舞っている鷺は、彼女が崖に向かって走り、跳躍するとともに、叫び声を上げたのを聞いた。蜘蛛は安全な場所へと急いで避難したが、不器

用な肉体の方は谷底に向かって岩から岩へと弾みながら転落していった。最後にその茶色の帽子をかぶった頭が、突き出した険しい岩に刺し貫かれるまで。

*ずっとずっと昔に……ハンギングロックのピクニックからは、実際にはまだ六週間しか経過していない。

17

以下は、一九一三年二月十四日のメルボルン新聞からの引用である。

今日聖バレンタイン・デーは、通常はプレゼントのやりとりや恋愛を連想するものだが、ベンディゴ通りのアップルヤード女学校から、約二十名の女学生と二人の女性教師がハンギングロックへのピクニックに出かけたあの運命の土曜日から、ちょうど十三年になる。女性教師の一人と少女の三人が午後の間に姿を消した。これまでにそのうちの一人だけが見つかった。ハンギングロックは、マセドン山の下部の平地にあり、石柱^{モノリス}や、最近（一九一二）まで未踏であった底なしという評判の穴や洞窟を含んでいるユニークな岩層ゆえに、地質学者なら特に興味を引かれる壮観な火山性の隆起である。当時、行方不明者たちは、頂上近くの危険な岩の絶壁を登ろうとしたのだと考えられた。おそらく彼女たちはそこで命を落としたのだと。しかし、遺体が回収されていなかったため、事故なのか自殺なのか、あるいは徹底した冷酷な殺人だったのかは立証されていない。

警察および一般人による比較的狭いその範囲の徹底的な搜索によつても、二月二十一日土曜日の朝までそのミステリーを解く手掛かりは得られなかった。マセドン山で休暇を過ごしていたイギリスの若者マイケル・フィッツヒューバート卿（現在は北クイーンズランドの私有農場に定住している）が、行方不明の少女の一人、二つの巨礫の下に意識不明で横たわっていたアーマ・レオポルドを発見した。その不運な少女は、彼女とその仲間たちがもつと上に登り始めた後に起こったことを記憶から奪い去った頭部の傷を除き、後に回復した。搜索は、悲劇の数か月のうちに起こったアツプルヤード女学校の女校長の不可解な死のために、たいへんな困難の中、数年間にわたつて続けられた。女学校自体は、次の夏の間に山火事で全焼した。一九〇三年、ハンギングロックでキャンプしていた二人のウサギ捕獲人が、ピクニックの日に行方不明の女性教師が着用していたペチコートの一部であると警察が推定したフリル付きキャラコの小片を発見した。

やや謎のある人物が、この異様な物語に一時的に登場する。イーディス・ホートンと呼ばれる少女で、アツプルヤード女学校の十四歳の寮生である。彼女は、ロック上方の短い距離の間だけほかの三人の少女たちに同行していた。この少女は、日暮れ時にヒステリー状態で下の小川のほかのピクニック参加者の所まで戻ってきた。彼女は、

そのときもその後もずっと、その間に起こったことを全く何も思い出すことができなかった。数年にわたって質問が繰り返されたにもかかわらず、ホートン嬢は何も情報を提供することはなく、メルボルンで最近死亡した。

ラト・マルグリー伯爵夫人（元アーマ・レオポルド）は、現在はヨーロッパに住んでいる。伯爵夫人は、折に触れて、心霊現象研究協会を含むこの事件に関心を有するさまざまな団体のインタビューを承諾したが、最初に意識を回復した後思い出すことができたこと以上のことを思い出すことはなかった。従って、この女学校のミステリーは、^{*}メアリー・セレスト号のよく知られたケース同様、おそらく永遠に未解決のままであるように思われる。

（完）

*メアリー・セレスト号……一八七二年十一月にニューヨークを出航し、十二月にポルトガル沖を漂流しているのを発見された。乗組員十名は行方不明。

解説

本作は、オーストラリアの女流作家ジョン・リンジー（1896—1984）が、67年に発表した中編小説（英語）である。75年にピーター・ウィアー監督によって映画化され、それをきっかけに世界的に広く知られるようになった。映画は、日本国内ではだいたい遅れて86年春に劇場公開され、その後ビデオやDVDも発売された。

この小説は、最初は18章立てで書かれたが、出版社の判断により、著者の了解を得て最終章が削除された形で刊行された。最終章は、削除されるときに、3章にその一部がひそかに挿入された。後に作者から18章の草稿を託されたジョン・テイラーは、作者の死後、87年にそれを刊行することになるのだが（『ハンギングロックの秘密』アンガス&ロバートソン出版社）、彼がリンジー女史からその榮譽を授けられたのは、3章に収まりが悪い不自然な道具立てが含まれていることを指摘したおかげだったという（54ページの「漂っている薔薇色の煙か霧」と「はるか彼方で打ち鳴らされる太鼓のような」奇妙な音）。

最終章を含まない形で刊行されたにもかかわらず（むしろ「その甲斐^{かい}あって」と言

うべきか)、本作はすぐに多くの読者の支持を得て、72年には映画化権の争奪戦が繰り広げられた。その点では出版社の判断は正しかったと言ってよいのだが、実は18章には、行方不明になった少女たちが本当はどうなっていたのかが書かれていたのである。この章がないということは、物語は最後まで謎を残したまま終わってしまうことになるわけだ。テイラーが18章の存在を明らかにしてそれを刊行するまでは、少女たちの行方について世界中でさまざまな憶測が乱れ飛び、80年にはオーストラリアの別の女流作家による謎解き本が刊行されたほどであった(イヴォンヌ・ルソー著《ハンギングロックの殺人》スクライブ出版社……この本の概要は国内封切時の映画パンフレットに紹介されている)。すでに最終章が刊行された現在となつては、かつて飛び交ったさまざまな憶測も、謎解き本に含まれる一見信憑性しんぴようせいが高いように思われる複数の仮説も、すべて「はずれ」であったことが判明しているが、これには無理からぬところもある。それほど18章に書かれた作者自身の謎解きの内容は、大多数の読者にとって意外なものだったのである。

18章は17章までが発表されてから二十年後の87年に初めて出版されたため、本サイトのような非商業目的の場であっても無断で翻訳を掲載するわけにはいかない(「十年留保」が有効なのは、70年までに出版され、その後十年間、日本国内で日本語に翻

訳されなかった作品に限られる)。そこで、ここでは18章の梗概^{こうがい}だけを掲げておくことにする。

18章は3章の時点まで遡^{さかのぼ}り、イーデイスが走り去った後のミランダたちの行動が語られる。ただし、18章のいくつかの部分は、この章が省かれて出版される際に3章に多少書き換えられて挿入されたため、18章には現行の3章と重なる部分がかなりある。18章がカットされる際に3章がどう書き換えられたかは、『ハンギングロックの秘密』所収のイヴォンヌ・ルソーの解説に詳しいが、かいつまんで書くと、オリジナルでは53ページの「イーデイスはぞっとした」の所で彼女が叫んで逃げ出して、そこで3章は終わったらしい。56ページに、「三人の少女全員が石柱^{モノリス}の背後にたちまち姿を消しつつあった」と書いてあるのに、その直後に「前方の藪をかき分ける白い袖の最後の動きを見た」とあるのは矛盾のようであるが、これはたぶん、オリジナルでは後者であったものを前者のように書き換えた際、うっかり後者も残してしまったために生じたと考えられる。そういうわけで、18章は石柱^{モノリス}のある円形の岩棚に「三人の」少女が到着したところ（54ページ）から始まるが、そこでは現行3章と違って、すでにイーデイスは逃げ去って不在であることを念頭に置いて読んでほしい。

【18章梗概】 イーデイスが走り去った後も登り続けたミランダ、マリオン、アーマ

の三人は、先ほどの岩棚と似たような岩棚に出る。そこには石柱モノリスがあり、マリオン

とミランダは石柱から奇妙な螺旋形の吸引力が働いているのを感じるが、アーマに

はそれがわからない。石柱モノリスを通り過ぎるとすぐ、三人は抵抗できない眠気に襲わ

れ、その場で深い眠りに落ちる。マリオンの腕にはトカゲが、ミランダの頭には甲

虫がやって来るが、それにも気づかないほどの深い眠りであった。やがてミランダ

が目覚めると、何かが茂みを通して彼女たちの方へ動いてくる音がする。茂みから

飛び出してきたそれは、肌着姿の、痩せこけた道化のような女性だった（注…これ

は明らかにグレタ・マクロウなのだが、本人は自分の名前も少女たちの名前もわからず、ミ

ランダたちもなぜか彼女がマクロウ先生だと気づかない）。彼女は「通して！」と言いな

がらミランダの膝に倒れ込み、気を失う。マリオンとアーマも目を覚まし、ミラン

ダは彼女のコルセットを外してやる。マリオンは、自分たちも窮屈なコルセットを

外すことを提案し、三人はそうする。ミランダは四つのコルセットを崖から投げ

が、マリオンは、ミランダのすぐ横に立っていたのにどこに落ちたのかがわからな

いと言う。そこで先の道化女が目を覚まし、コルセットは落ちてはいない、それは

時間に吸い付いているのだ、と教える。ミランダたちが右を向くと、四つのコルセッ

トが空中に浮かんでいて、枝で打つてもびくともしない（注…このあたりから超現実的な出来事が次々と起こる、というか、まるで夢の中の出来事のようになっていく）。アーマは道化女に、以前どこかで会ったような気がする、と言う。マリオンが道化女に、日が暮れる前に進むべきかどうか尋ねると、彼女は、ここには影がないのだから光も変化しないのだ、と答える。アーマにはそれが理解できないが、ミランダは晴れやかな顔で、私たちは光の中に着いたのだ、とアーマに言う。道化女は、マリオンの脳とミランダの心が自分にはすっかり見え、マリオンには知性があり、ミランダは理解力に溢れている、と評価する。道化女は眩暈に襲われ、それが治まると、前方の空中に透明な穴があるのを見る。彼女は、その穴を見つめるうち、それまで生きてきて生じた疑問すべてに答えが与えられたように感じ、安らかな気持ちになる。やがてその穴は消えてゆく。先ほど目覚めたときに砂利を這っていたブラウンスネークが、二つの平衡を保った巨礫の低い方の下にいるのをミランダが見つけ、触れてみると、その蛇は巨礫の下に潜り込んだ辺りに逃げ込む。ミランダとマリオンが蔓と砂利を引きはがすと、洞窟がトンネルのような穴があった。道化女が、自分が最初にその穴に入るから、岩を叩いて合図したらマリオンが続き、さらにミランダが続けばよい、と提案する。道化女の腕は蟹のハサミに変形し、彼女はゆっく

りと頭から穴に入っていく。間もなく岩を叩く音が聞こえ、合図を待ちきれないと言っていたマリオンも穴に入る。ミランダが「次は私の番」と言うと、アーマは泣きながら「家へ帰ろう」と訴える。しかし、ミランダは星のように輝く目をして穴の中に姿を消してしまう。後にはアーマだけが残される。彼女は座ってすすり泣き、ミランダの合図を待ち続けるが、やがて巨礫の低い方がゆっくり前に傾き、正確に穴を覆って陥没する。アーマは岩の上に突っ伏して、柔らかく白い素手で巨礫を掻きむしり、叩くのだった……。

……この梗概を読んで、がっかりする人や狐につままれたような気分になる人もいらっしゃるかと思われるが、それはつまり、「17章までを読む限り（あるいは映画を見た限り）リアリズムのミステリー小説だと思っていたのに、何だって最後の最後でオカルトっぽいファンタジー小説になってしまうのか？」という疑問や違和感が込み上げてくるからに違いない。最初の編集者もおそらくそう感じたからこそ、18章をカットするという提案を作者に持ちかけたのだと思われる。

18章によって、アーマが発見されたときにコルセットがなかった理由と爪が割れていた理由、またほかの三人が見つからなかった理由（彼女たちが入った穴は巨礫で覆

われた）等は明らかになるが、マクロウが肌着姿でロックを登った理由、イーディス、アーマ、マイケルらがロックの上で経験したこと、記憶を一樣に失った理由、アーマの足が裸足^{はだし}だったのに完璧にきれいだった理由、マイケルが走り書きに書いていた「輪」とは何だったのか、等ははつきりしない。さらにルソーが言うように、アーマの靴とストッキング、およびマクロウの外^{がい}套^{とう}はどうしたのか、発見されたアーマに付着していた血はマイケルのものだったのか、ピクニック・グラウンドで正午に一斉に時計が止まったのはなぜだったのか、等もわからないままだ。

この18章の外見上の異様さについては、ルソーが一つの解釈を呈示してくれているので、詳しくは《ハンギングロックの秘密》所収の彼女の解説に当たってもらいたいが、そこにはウспенスキーの六次元論やそれを援用したプリーストリーの『人間と時間』、その他オカルティズム、精神分析、アボリジニ等の思想が縦横無尽に引用されていて、短い解説なのにひどく読みにくいと感ぜられることだろう。正直、ルソーの解釈は訳者も隅々まで理解できたとはとても言えないのだが、わかった部分の要点を最後に簡単に箇条書きにしておきたい。結局、アーマ以外の三人は、12章の体育館の場面で少女たちが見た幻影のとおり、今は巨礫の下になった洞窟の中で死んで腐敗している、と考えるほかはない。

・四人は「風景のドリーミング」に入り込んだ(注…説明しにくいが、ドリーミングとは、オーストラリアの時間を超越した伝説、あるいは現在進行形の神話のようなもので、単なる夢ではない)。

・そのドリーミングの時空は「薔薇色の雲」によって境界線を引かれる領域で、次の「光」の領域へのステップとなっている。

・アーマだけが終始「光」の領域に進むことから疎外されているようなのは、彼女がミランダのような理解力も、マクロウやマリオンのような知性も持たないかららしい。彼女は、ただマリオンやミランダの友人であるというだけの理由から、最後まで彼女たちと行動を共にしたにすぎない。また、彼女がコルセットを捨てる提案に従ったのは、ただ高価なものもぞんざいに扱う性質のためである。